

---

# Star Ocean3 After Story

壬代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Star Ocean 3 After Story

### 【Nコード】

N2798T

### 【作者名】

壬代

### 【あらすじ】

クリムゾンブレイド補佐として、クレアの恋人として公私共に順調な生活を送っていたフェイトの元に、エリクールにはないはずのエリミネートライフが発見されたという報告が入る。その一件から次々に聖王国シーハーツが抱える闇が明らかになっていく。

スターオーシャン3、本編後のアフターストーリー。クレアと恋人関係になったフェイトがエリクールで紡ぐもう一つの物語。

公式、設定のみ、完全オリジナルキャラクターを交え、エリクール全土を舞台にした物語です。

## 人物紹介（前書き）

ざっくり登場人物紹介。ネタバレなしで随時追加します。

## 人物紹介

□聖王国シーハーツ

・五柱

フェイト・ラインゴッド…主人公。軍部担当。破壊の紋章をもつ。  
クレアの恋人。

マリア・トレイター…政界担当。改変の紋章をもつ。元反銀河連  
邦組織クオークのリーダー。フェイトの姉。

ソフィア・エステイド…施術担当。繋ぐ紋章をもつ。士官学校  
で施術講師をしている。

セレン・ウォン…開発担当。元抗魔師団の師団長。不治の病をか  
かえている。クレアの幼馴染。

・光牙師団「光」

クレア・ラーズバード…師団長。クリムゾンブレイドの片翼。シ  
ーハーツ軍総司令官。

ヴァン・ノックス…一級構成員。実父にグラオ・ノックスをもつ。  
アルベルの弟。クレアの右腕。

セフィリア・S・フラン…最年少一級構成員。クレアを尊敬している。

・封魔師団「闇」

ネル・ゼルファー…師団長。クリムゾンブレイドの片翼。クレアの幼馴染。

アストール・ウルフリッヒ…一級構成員。

タイネーブ…二級構成員。ネル直属の部下。ファリンの相棒。

ファリン…二級構成員。ネル直属の部下。タイネーブの相棒。

・連鎖師団「土」

ネイビス・ティモール…師団長。アゼルの幼馴染。

・抗魔師団「炎」

ルージュ・ルイーズ…師団長。クレア、ネル、ヴァンとは幼馴染。

・幽静師団「水」

アゼル・クロイツ…師団長。ネイビスの幼馴染。

・虚空師団「風」

シレーネ・リシャス…師団長。クレセントのになると暴走癖がある。

クレセント・ラ・シャロム…二級構成員。ペターニ領主の一人娘。

・その他

シーハート27世…シーハーツ女王。アペリスの聖女。

ラッセル…執政官。

エレナ・フライヤ…施術開発部部長。

ユティ・ウォン…セレンの妹。医師見習い。

## 雨の音

ザアアアア……。

大粒の雨が少女と少年を容赦なく濡らす。

全てを洗い落としてしまうかのように強く、そして長い雨。

金髪の少年は瞳に焦りと不安の色を浮かべ、地面に倒れる銀髪の少女の白い喉に刃を突き付けている。そのまま振り下ろせば、その脆い喉は容易く突き抜けるだろう。

しかし、少女は動かない。ただ、曇りの無い瞳で真っ直ぐに少年を見つめている。

少年の刃を持つ両手がカタカタと震えて出したとき、少女の唇が微かに動いた。

「――」

少年の眼から雫が零れ、少女の頬に落ちる。

少女は優しい笑みを浮かべ、泣き崩れる少年を抱きしめた。

「だいじょうぶ」

雨の音さえ掻き消すような澄んだ声。

それは、少年が知るどんなものよりも優しく、そして暖かな響きだった。

※

眼が覚めると、そこには見知ったいつもの天井。

この夢を見るのは何度目だろうか。もう数え切れないほど見てきた気がする。

「あれから……8年も経つのか」

起き上がり、何も無い天井を見上げる。まだ、先ほどの声が耳に残っていた。

優しい、何よりも優しい声が耳の中で木霊する。眼を閉じれば、銀髪の少女が瞼の裏に鮮明に映し出されていた。

「ごめん、クレア……」

微かな呟きは、虚空に吸い込まれていった。



## 安息の日々

その日、ゲート大陸にある聖王国シーハーツの首都シランドでは、その厳かな都に相応しくない空気に包まれていた。

季節はもう冬に入るというのに、まるで夏のような熱気。

その中心にいるのが、上半身裸の中年と蒼髪の好青年。

ちぐはぐな組み合わせだが、二人ともこの界限では知らぬ者のほうが珍しいほどの有名人だ。

街中の歩く人々が一度は立ち止まり、何も見なかったように立ち去っていく。そして二度とその場所を通ろうとはしない。

通りにある店は既に鎧戸が下ろされ、早々に店じまいをしている。誰もが彼らに巻き込まれる事を恐れていた。

彼ら――元クリムゾンブレイドの片割れアドレー・ラーズバードと、国の英雄フェイト・ラインゴッドに。

「いい加減観念せんかい！！」

「だから、結婚なんてまだ早いってば！！」

アドレーが怒鳴る度に、その巨軀から稲妻に似た施力の塊が放たれ、飛び火したそれらが周囲のものを破壊する。フェイトは時折自分に向かってくるそれを剣でいなしながらも反論を続けた。

既にアドレーとフェイトの周囲の外観は台無しになっている。

喧嘩ならモーゼル砂丘にでも行ってやってくれ、誰もがそう思ったがそれを口に出せる強者はいなかった。

口では収まらなくなった喧嘩が更にヒートアップしていく。

「もういい加減にしてくれ、よっ！」

フェイトの強烈な横蹴りが炸裂する。アドレーは手元も見ずに刀の柄で受け止めた。元クリムゾンブレイドは伊達ではないらしい。「ええい！　とにかく結婚せんか！　それとも何か、お主はクレアとの結婚が嫌だと申すのか！？」

「そ、そんな事言っただろ！　大体これは僕らだけの問題じゃないんだ。クレアの意見だって聞かないと」

「かーっ！　お主がそんなのだからクレアが他の男に靡くんじゃ！　！」

素通りしようとした人々が足を止める。フェイトも眼を丸くして、手にしていた剣を落としそうになった。

「そ、それどういう事だよ！？」

「あやつもなかなかの男だからのお。ワシもあやつなら認めてもよいと思っておる」

髭に手を当て、ニヤリと笑うアドレーの眼が妖しく光る。

「だから、何の話だよ！？」

フェイトは自分でも焦っていくのが分かった。

クレアに限ってそんなことあるはずがないと信じてはいる。しかし、付き合い始めてから分かったことだが、彼女は男に対してあまりにも免疫が無い。仕事ならいざ知らず、プライベートではネル以上なのだ。

「あやつとクレアは光牙師団に入った頃からの仲じゃなからな。もしや、という可能性もあるじゃろ」

「そ、そんなわけ……」

「ないと言えるかのお？　お主が最後にクレアと過ごしたのは何時じゃ？」

「い、一週間前……だけど」

フェイトの答えにアドレーはやれやれと首を振る。

「ほれ、全然ではないか。あやつは光牙師団員じゃからな。毎日顔を合わせておろう」

「うっ」

「先程も一緒におったしの。万が一ということも……」

「ありません」

「ぐはあっ!!」

澄んだソプラノが聞こえたかと思うと、アドレーの巨体が綺麗な孤を描き空中を舞った。

あまりの唐突な出来事にフェイトは呆然と立ち尽くしている。

軽く十メートルは飛んだだろう、アドレーが地面に落ちる音で漸くフェイトは正気に戻った。そしてそこに居るであろう人物に向けて、フェイトは引きつった笑いを浮かべながら声をかけた。

「や、やあ、クレア」

銀髪の女神はにこりと笑顔を浮かべ、フェイトに向けて手を翳す。銀色の紋章がクレアの手に集束し、輝きを増していく。

やばい。

フェイトがそう思ったときには時遅く、アドレーのそれとは比べ物にならないほどの稲妻が頭上から降り注いだ。

※

「……全く、あなたもあなたよ。お父様の言う事なんかにはいちいち反応して」

「面目ない」

あれから小一時間。眼を覚ましたフェイトはクレアの自室にて説教を受けていた。

本来ならフェイトよりアドレーに非があるはずなのだが、説教と聞いて騒ぎ出した為、早々にクレアの容赦ない蹴りによって沈めら

れた。

手加減なしの一撃が利いたのか、先程から床にめり込んだままピクリとも動かない。

「あの後始末は一体誰がつけてくれるんでしょうね？」

「責任もって僕とアドレーがやるよ」

「よろしい」

正直アドレーが破壊したものよりクレアの一撃の方が被害は大きかったのだが、フェイトは敢えて黙っていた。

クレアはフェイトの答えに満足そうに頷く。

が、それも束の間。すぐにまた呆れ返ったような顔になった。

「それにしてもあんなこと信じるなんて、ほんとに単純なんだから」

「返す言葉も無いよ」

「まあまあ、それもフェイト様がクレア様のことをそれだけ大切に想っているということですよ。クレア様だって実は嬉しいでしょう？」

「ヴァン、それは私をからかっているのかしら？」

「とんでもありません。そんな恐れ多い」

常人ならたじろぐクレアの睨みを流し、穏やかな笑みを湛える男性は、ヴァン・ノックス。クレア率いる光牙師団『光』の一級構成員である。

肩にかかるくらいの金色の髪に真紅の瞳。左側の横髪を軽く縛っている。穏やかではあるが視線は鋭く、その眼光は常に何かを考えているようだった。

「嘘をつきなさい。絶対からかっているじゃない」

「それは被害妄想ですよ」

「上司に対して、言うわね」

表情こそ余裕を装っているが、クレアの口調は悔しそうだった。フェイトにはそれが珍しくて、小さく吹き出してしまう。

「クレア相手によくやるなあ、ヴァンも」

「聞こえてるわよ、フェイト」

「あだっ！ い、いはいよ！」

クレアの手がすつと伸びてフェイトの頬を容赦なく引っ張る。地味だが、物凄く痛い。

フェイトが両手を挙げて降参のポーズを取ると、クレアは最後に一度ぎゅつと引っ張ってから手を離れた。

「あいたた」

「余計なこと言うからよ」

「ああ、真っ赤。大丈夫ですか？」

そう言いながら、ヴァンはフェイトの赤く染まった頬に手を近づける。

「あ、冷たい」

「冷やさないと後々痛みますからね」

ヴァンの手からはひんやりとした冷気が放たれていた。

氷の刃にならない程度に施力を調節し、冷気だけを作り出しているらしいが、詳しい原理はフェイトには分からない。

「こういうことはクレア様がやって差し上げればいいんですけどね。何分素直じゃないもので」

「ヴァン！」

クレアが怒鳴る。先程までのポーカーフェイスは跡形も無く消え去っていた。

ヴァンは次々と繰り出されるクレアの言葉の槍を穏やかな笑みで交わしていく。

「……あのクレアにまるで動じないなんて」

フェイトは半分感心して、もう半分は羨ましそうに呟く。フェイトはクレアに口で張り合える人物など、女王以外いないとさえ思っていた。

そういえば以前、クレアとヴァンの口喧嘩を耳にした時は、フェイトが全く知らない難解な単語が飛び交っていた。正直聞いてるだけでも頭痛がした。この二人の語彙力は半端ない。

更にヴァンは、政治、武術においても非常に優秀な人物だった。

こと剣術、体術に関してだけを言えばフェイトですら本気を出さなければならい程の腕前なのである。

ついでに言えば人柄も良く、クレアとの相性も文句無し。

という風に変優秀な人材のわけだが、シーハーツの人々の少数は彼のことを疑念の眼差しで見ていた。

その理由はよく分からないが、おそらくヴァンの出生に関係しているのではないかとフェイトは考えている。

以前、シーハーツ六師団である抗魔師団『炎』の部隊長ルー・ジュ・ルーズから聞いた話では、ヴァンの父はグラオ・ノックス。元アイリグリフ三軍の一つ『疾風』の団長だったという。

つまり、ヴァンはアルベルの弟にあたる。しかし、今はラッセルの養子になっているなど、とにかく謎が多いのだ。

もしかしたら父親の母国に寝返るかもしれない。そんな不安がヴァンへの疑念を持たせたのだろうか。

そしてこれはフェイト自身が気になっていることだが、母親の存在が全く持って不明なのである。

ヴァンがラッセルの養子になったのは一歳にも満たない頃であるというから、ヴァンが覚えているはずもない。

アルベルも物心ついた時には母親はいなかったと言うし、父親に聞いても応えてくれなかったらしい。

育ての親であるラッセルは何か知っているらしいが、彼も一切口を開こうとはしなかった。

クレアやネルに聞いてみても、知らないと答えるだけだった。クレアの方はラッセルほどではなくとも思い当たる節はあるようであったが。

ただ、分かるのは、ヴァンが施術を使えることからしてシーハーツ人であったということ。

アルベルは確か今年で二十五歳。二十五年も前ならアーリグリフとシーハーツはまだ友好関係にあったわけなのだから、おかしい話ではない。

ヴァンが母親の母国のシーハーツの軍人になる理由もある。

だが、きつとそんな簡単な話ではないとフェイトは思っている。それだけの話ならラッセルやクレアが隠す理由がない。

しかし、フェイトは気になりつつも、敢えて調べようとはしなかった。ヴァンからしてみれば気持ちのいい話ではないだろうし、事情も知らない異国人の自分が首を突っ込んでいい話ではない。

そして何より、クレアが止めるのだ。クレアに言われてはフェイトもこれ以上追求することは出来ない。

それにフェイトはヴァンと信頼していた。ヴァンのクレアを慕う気持ちは決して嘘ではない。ヴァンに負けないくらいクレアを想っているフェイトだからこそ、その気持ちが痛いほどよく分かっていた。

「ああ、もういいわ。なんだか私一人ムキになって馬鹿みたいじゃない」

「ははっ、スッキリしました？」

「今の一言がなければしてたかもしれないわ」

クレアは笑顔で指を鳴らす。

また始まるか、とフェイトは思ったが、いい加減クレアも疲れたらしい。ふう、と息を吐いて椅子からベットへと移動した。

「それよりも、ヴァン。非番の日くらい敬語は止めてって言ってるじゃない」

「そうだよ、僕も様付けなんてされちゃ気が重い」

「ですが、一応立場というものがありますから」

「ヴァン」

クレアは期待するように、フェイトは頼み込むようにヴァンを見る。

ヴァンは二人の顔を見比べ、苦笑しながら首を振って両手を挙げた。

「……やれやれ、敵わないね。クレアにも、フェイト君にも」

「ふふ、あなたに敬語なんて似合わないもの」

「君” もいらないんだけどなあ」

「まあまあ、それくらいは勘弁してくれよ。いきなり呼び捨ては心臓に悪い」

「わかった。でもいつか取ってくれよ」

「善処するよ」

ヴァンは困ったように笑い、胸に手を当てた。それを見たクレアがくすくすと笑う。

「ヴァンの善処する、は当てにならないのよねえ」

「え、そうなのかい？」

「おい、クレア。失礼なこと言うな。フェイト君、クレアの言う事信じないほうがいいからな」

「残念でした。フェイトはきっと私のことを信じてくれるわよ」

起き上がったクレアがフェイトの腕に抱きつく。突然のことにフェイトの顔が一瞬で朱色に染まった。

「く、クレア!？」

「フェイト? 顔真っ赤だけど……風邪?」

「い、いや、その……」

まさか、密着されてると恥ずかしいなどと言えるはずも無く。フェイトは赤くなった顔を見られないようにそっぽを向き、黙り込んでしまった。

クレアは不思議そうに首を傾げて、壁に寄りかかってフェイトに同情の眼差しを向けていたヴァンを見上げる。

「フェイト、どうしちゃったの?」



「お前、ほんと相変わらずだよ……」

窓を通って、穏やかな風が窓際のパルミラの花を揺らす。

その甘い香りを楽しむように眼を細めたクレアをヴァンが愛おしそうに見つめていたことに、フェイトだけが気づいていた。

## 晴れ、ときどき雨

「で、何の用かしら？ 出来れば手短に。即刻に」

ペターニの街角にある喫茶店。

流れるような蒼の髪を持った凜とした女性が、目の前の茶髪の童顔娘を見る。

茶髪の童顔娘——ソフィア・エステイドは引きつった笑いをしながらお茶を啜った。

「マリアさん、私のこと嫌いですか？」

「……そうでもないわよ」

「その間が気になりますけど……まあいいです。今に始まったことじゃないですし」

「訂正するわ。やっぱり嫌い」

ソフィアの笑顔に対して、マリアは冷ややかな視線を向ける。

チャリ、とマリアは自分の分のお茶代を机の上に置き、席を立った。ソフィアはマリアさんらしいな、と感心しながらも彼女の服を引っ張って行かせようとはしない。

「ちょ、待ってくださいよ」

「何よ。クレアとフェイトを引き離そうなんてことなら協力しないわよ」

「えー、なんでですかあ」

本当にそんな用件だったのか、とマリアは呆れてソフィアを見た。口をへの字に曲げてぶーぶー言っている。

「私にはなんの得にもならないからよ」

「損もしないじゃないですか」

「時間の無駄だわ」

今度こそマリアは喫茶店を出て行った。

本当に出て行くとは思っていなかったのか、ソフィアは慌てて勘

定を済ませてマリアの後を追いかける。

「待ってくださいよ、マリアさんっ！ さっきのはちょっとしたお茶目ですって！」

「あーもう五月蠅いわねっ！ 鬱陶しい。正直鬱陶しいわ」

「ひどいっ！ そんなひどいです！」

わざとらしく泣きまねをするソフィアをマリアは華麗にスルーし、シランドへ向けて歩いていく。

カツカツと石の道を靴で鳴らし、空を見上げる。曇っていた。マリアは顔を顰め、足を速めた。

ペターニ北門を抜け、イリスの野へ出た頃、ソフィアが追いついてきた。マリアは小さく舌打ちをし、目の前の魔物に向けて苛立たしげにフェイズガンの引き金を引いた。

ただの銃弾が紋章に包まれ巨大なレーザーへと変化する。飲み込まれた魔物は塵一つ残さずに消滅した。

「時間の浪費だわ」

肩に掛かった髪を払い、銃をホルスターに収める。力を使った後でも、以前のような頭痛や眩暈はしない。

マリアはこの一年弱、ある人物の元でアルティネイションを完璧にマスターさせていた。

「うわぁ、マリアさん容赦ないですねー」

ソフィアはマリアの後ろからひょいと顔を出し、先程まで魔物が居た場所を凝視した。

「本当ならあなたを撃ちたいところなんだけどね」

「マリアさん、冗談に聞こえないです」

「当たり前でしょ。本気なんだから」

さらりととんでもないことを言うマリアにソフィアは額から冷や

汗を流す。

「で、何の用？　また馬鹿なこと言うようならアレと同じ末路を辿るわよ」

「遠慮します。私まだ死にたくないのです。で、実はこれなんですけど」

ソフィアが慎重に鞆から出したものを見て、マリアの整った眉が動く。

マリアは手渡されたそれを見て、本物のようね、と呟きソフィアに視線を戻す。

「あなたやフェイトが持ち込んだもの……なワケじゃないわよね」

「はい」

「バンデーンのは……」

「既に全て処分済みです。あの後フェイトが念入りにスキャナーで探してましたから取り残しも有り得ません」

ソフィアの表情も口調も真剣そのものだ。

マリアは眉間の皺を一層深くして、溜息を吐いた。

「……めんどろくさくなりそうだわ」

マリアは空を一瞥する。その手には、黒く光るエリミネートライフルらしき銃がしっかりと握られていた。

灰色の空から、静かに雨が降り出した。

※

シランドの近郊にある修練場で二人の男女が向かい合っていた。

そして、それを少し離れた所から一人の青年が見守っている。

「本気でいきますよ」

「ええ、手加減なんてしたら減俸よ」

ヴァンが腰の鞘から白銀の剣を抜くのを確認すると、クレアも愛刀の柄に手をかけた。手をかけるだけで抜こうとはしない。

「クレアの獲物は刀か。そういえばアドレーも剣じゃなくて刀を使ってたっけ」

しかし、実際にアドレーがそれを抜刀することなど殆ど無い。ソフィアの杖のようなものかと思っていたが、実は違うのかもしれない、とフェイトは思った。

「じゃあ、いきますよ!!!」

短く告げると、ヴァンは地面を強く蹴り、高く飛び上がった。そのまま懷に手を入れ、数本の小刀をクレアに向けて投げつける。クレアはそれを紙一重のところでは避けるが、一本が長く靡くマフラーを掠めた。

「かわされましたか。でも……」

クレアが小刀に気を取られている間に背後に着地したヴァンはその無防備な背中に向けて鋭い突きを繰り返す。

決まった。

ヴァンが、フェイトが思った。

だが、

「残念」

「くっ!!」

クレアは驚異的ともいえる速さで半身になり、これをかわした。ヴァンはすぐさま前のめりになった体勢を立て直そうとするが、その隙を見逃すクレアではない。くるりと身体を回転させ、逆にヴァンの背後をつく。

手には、先程ヴァンが投げた小刀。

「私の勝ち」

クレアが無邪気な笑みを浮かべた。

ヴァンはひとつ溜息を吐いて降参のポーズを取り、剣を手から落とす。カラン、と白銀の剣が石畳を鳴らした。

「……獲物くらい抜いてくれてもいいじゃないですか」

「ふふ、残念でした」

「俺もまだまだってことですか」

口調こそ変わらなかったが、表情はやはり悔しそうだった。

小刀が下ろされたのを確認して、クレアに向き直ったヴァンは眼を丸くした。クレアの顔がヴァンに負けず劣らず悔しそうだったのだ。

「なんてね。抜かなかったんじゃないかって抜けなかったのよ。そんな余裕なかったわ」

「は？」

「それに避けたのだってあなたが寸止めするつもりで威力を抑えたからだし」

「え、えーと」

ヴァンは答えに困り、頬を掻く。その眼前に整った長い指が突きつけられた。

「もう一度」

「え？」

「もう一度よ。今度は別のやり方で勝ってみせるわ」

「残念だけど」

子供のようにムキになるクレアを止めたのはフェイトだった。その表情はどことなく暗い。

ただならぬ様子に、クレアとヴァンの表情が強張る。

「何かあったの？」

「ああ。ヴァン、君は急いでネルを呼んできてくれないか？ きつとペターニに居ると思う」

「は！」

「見つけたらすぐにシランド城の会議室まで来るように伝えてくれ」  
ヴァンは頷くと、すぐさまペターニに向かって駆け出した。

フェイトはクレアに視線を向ける。クレアは口の中が異常なまでに渴くを感じた。ぎゅっと手を握り締め、フェイトの言葉を待つ。フェイトは通信機に一度目をやってから、再びクレアに向き直る。「バンデーンの残党が……シランド近辺に潜伏しているかもしれない」

「それはどういった理由でかしら？」

流石だ、とフェイトは思った。多少なりの動揺は見られたものの、クレアは冷静だった。

クレアはそれなりの事情を理解している。フェイトがこの星に残ると決めた時、国の重要人物だけには知らせておいたほうがいいと思ひ、クレアを始めとするシーハーツ六師団の師団長達にはその旨を伝えたのだ。

「マリアから通信が入ったんだ。子供がシランドの近くでエリミネートライフルを拾ってソフィアに渡したらしい。幸いにも安全装置がかかっていたから間違って発砲されることはなかったんだけど」

「そう、良かった。……拾ったってことはバンデーンの姿を見たわけじゃないのね？」

「ああ。けど、可能性はゼロじゃない。ただ、気になるところもある」

「武器をわざわざ落とすなんて馬鹿な真似、普通はしないわよね」

クレアは首を振って、額に手をあてる。きっとその頭の中では色々な問題が駆け巡っていることだろう。折角平和な日常が訪れたのに、すぐに問題はやってきた。クレアの表情が曇る。

出来るなら二度とこんな顔はさせたくなかった。フェイトは拳を握り締め、空いた手でクレアの肩をそっと抱き寄せる。

「フェイト？」

「大丈夫。絶対何も起きない。僕が起こさせない」

「……ええ、そうね」

クレアは束の間眼を閉じ、身体を預ける。どちらのともいえない心音が、優しく鼓膜に届いた。

時間にしたら数分後も経っていないだろう。クレアはゆっくりとフェイトから身を離れた。

「至急対策本部を設置します。ネルが戻り次第対策を立てるわ」

シーハーツが誇る紅き双剣の片翼が、身を翻す。

「フェイトはルージュに連絡を。何かあってからじゃ遅い。迅速に事を解決します」

「仰せのままに」

クリムゾンブレイド直属、守護の三柱が一つ蒼き騎士はその場に  
跪き、頭を垂れた。



## 守護の三柱

クリムゾンブレイド直属の部隊『星海』、守護の三柱とも呼ばれる部隊がシーハーツい新設されたのは、今からおよそ三ヶ月ほど前。フェイトやマリア、そしてソフィアがエルクール2号星に移り住むことを決めてから半年後のことだった。

『星海』は部隊とはいっても構成員はたったの三人。任務の内容も三人が同系統のものではなく、それぞれの担当管轄は全く異なる部類なのである。

一人は軍部。一人は政務。一人は施術。一つ一つの部隊の職務内容が決まっているシーハーツではまさに異色の部隊であった。

そして、他の部隊と大きく異なる点はもう一つある。

それはクリムゾンブレイドの承認を得た時に限り、その任務を代行出来るということ。

通常特A級の重要案件はクリムゾンブレイドのみの管轄であった。しかし、アーリグリフとの戦争、星の船の襲来、卑汚の風。短期間に様々な問題がゲート大陸を襲い、国内は混乱の渦に飲まれた。そのような状況下でクレアとネルはとも二人では捌ききれないような仕事を、その類まれなる才能と努力によってなんとかこなしてきたのである。

とはいえ、いくら優秀とはいっても人間。そのような激務をいつまでも続けられるはずもなかった。

「ネルが倒れたって!？」  
「フェイト」

その日、ネルが倒れたと聞いたフェイトは息を切らしながらネルの自室に飛び込んできた。ネルが眠るベットの脇にある椅子に腰掛けていたクレアが、口元に指を当てフェイトの名前を呼ぶ。

フェイトはそこで漸く冷静になり、まるで借りてこられた猫のように身を縮こまらせた。

「ご、ごめん」

「本当、心配性ね。ネルなら大丈夫よ。過労みたいだから二、三日も寝てれば良くなるわ」

「そうか。良かった」

脱力したように、フェイトはその場に座り込んだ。

その様子を見て軽く微笑んだクレアは優しくネルの髪を撫でながら眉根を寄せる。

「無理も無いわ。ここ数ヶ月働きづめだったんですもの」

「それは君もだろ？ ネルも君ももっと休みを取るべきだ」

「ダメよ。クリムゾンブレイドが二人揃って休んだりなんかしたら仕事が進まないわ」

「なら、僕が手伝うよ」

フェイトが立ち上がる。クレアは首を横に振った。

「気持ち嬉しいけど、私達しか取り扱えないものなのよ」

「クリムゾンブレイドしか？」

「ええ。重要度の高いものとかね」

「そう、か」

残念そうに呟くフェイトにクレアは小さく微笑んだ。

「でも、心配してくれてありがとう、フェイト」

「クレア」

疲れを隠せないクレアの顔色を見て、フェイトは顔を歪めた。自分に力があれば。そう思わずにはいられなかった。

「さて、そろそろ私は仕事に行かないと」

「何か手伝えることはないのかい？」

「ネルを看でてあげて。私が一番に望むことはそれよ」

「わかった。ネルのことは任せといてよ」

フェイトは力強く頷く。

お願いね、と言って扉を開け、部屋の外に出ようとするクレア。しかし、

「クレアっ！」

突然、クレアの身体が崩れ落ちた。フェイトは慌てて手を伸ばす。だが、クレアを抱き止めたのは手を伸ばしたフェイトではなく、

「ほんと、あんたもネルもバカなんだから」

腰上まである朱色の髪を二つに結った、気の強そうな女性――抗魔師団『炎』の師団長ルージュ・ルリーズだった。

「るー……じゅ」

かろうじて意識を保っているといった感じのクレアがか細い声をあげる。ルージュは呆れたような瞳をクレアに向け、その身体を抱き上げた。

「あんたは軍人としては立派。でもね」

ルージュは一旦言葉を切る。そしてフェイトを一度チラリと見て、また視線を戻した。

「親友や恋人としては失格。見なさいよ、あのフェイトの顔。情けないったらありやしないわ」

クレアはゆっくりとフェイトを見る。それはもう情けない顔だった。

眉は下がり、何か言おうとしては思いとどまり、また口を開きかけては閉じるを繰り返している。

「ふえい、と」

「クレア」

クレアが手を伸ばすと、フェイトはそれをしっかりと握り締めた。

「ごめんなさい、私はもう大丈夫だから」

「でも、クレア」

「ルージュ、ありがとう。もう降ろしていいわ」

「却下よ」

「え、ちょ、ルージュっ」

「フェイト、ちょっとクレア借りるわね」

ルージュはそう短く言うと、クレアを抱きかかえたまま部屋を出る。

一人残されたフェイトはどうしようか迷っていると、

「行きなよ」

背後から凜とした声が聞こえた。

何時に間に起きたのか、ネルが上半身を起こしてフェイトを見ている。

フェイトは一瞬戸惑ったが、やがて意を決したように頷くと踵を返してルージュの後を追ったのだった。

「だあかあらあ！ このままじゃクレア達が壊れちゃうって言うてんのよ！ この数ヶ月クレアが一体何キロ痩せたと思ってんのよ！ ただでさえ痩せてるってのに……羨ましいいったらないわっ！！」

「る、ルージュ」

「……あなたね」

ルージュ、クレアそしてフェイトはラッセル執政官の部屋に居た。ルージュは仁王立ちになり、ラッセルの机を軋ませるほどに強く叩いている。途中から全く関係ないことを言い出すルージュにフェイトは苦笑し、クレアは額に手を当て、盛大な溜息を吐いた。

眉間の皺を更に深くし、明らかに怒りをあらわにしているラッセルに尚もルージュの暴言は続く。

「ちよっと聞してるの！？」

「で、一体どうしろというのだ？」

ラッセルがルージュを見上げる。ルージュはニヤリと笑い、目を

細めた。

「エレナ様発案のアレ。そろそろ出しちゃってもいいんじゃない？」

「お前、知ってたのか」

「抗魔の情報網、ナメないでよね。で、どうなのよ？」

「ルージュ、何のこと？」

完全に蚊帳の外になっていたクレアとフェイトだが、とうとう耐え切れずにクレアが口を挟む。ラッセルとルージュが驚いたようにクレアを見た。

「あんた、知らなかったの？」

「ふん。お前と違ってクレアは忙しいのだ。そんなことに時間を割いている暇はなかったのだろうな」

「何よ。あんなただ漏れの情報時間を割くまでもなく分かったわよ。クレアとネル以外の師団長はみんな知ってでしょうね。情報管理に問題あるんじゃないの？」

「偉そうに言うな。しかし、まあ……そうだな。クレアとネルには無理をさせ過ぎている」

ラッセルがゆっくりとした動作で椅子から立ち上がる。それを見たルージュの顔が輝き、未だ啞然としているクレアとフェイトに向けてウインクする。

ラッセルは扉に手をかけると、顔だけ振り返る。その表情はどうか穏やかだった。

「クレア、フェイト」

「はい」

「は、はい」

「フェイトは一時間後に MARIA とソフィアを連れて謁見の間まで来い。クレアはそれまで部屋で休め。ルージュはエレナを連れて来い」

「「は？」」

「はいはい」

訳が分からずお互いの顔を見合わせるフェイトとクレアを尻目に、ルージュは軽い足取りでラッセルと共に部屋から姿を消した。

※

「えええええ！？」

「そ、そんな……」

「唐突ね」

「ラッセル様、そんないきなり……」

シランド城の謁見の間にフェイトの絶叫が、ソフィアの驚愕の声が、マリアの抑揚の無い声が響いた。クレアまでもが驚きの表情を隠せないでいた。

その声にラッセルは顔を顰め、女王は穏やかに微笑み、エレナは不満そうな声を上げる。

「シヨックだなあ。そんなに私の案が嫌なの？」

「い、いえ。そういうワケでは……」

「それともなくに？ クレアちゃんとネルちゃんにこのまま働きなさいって？」

「そ、そんなことは！」

「エレナ、言葉を選べ」

ラッセルがエレナを嗜め、一つ大きな咳払いをする。

フェイトはついムキになってしまったことを恥じるが、隣に立っているクレアが嬉しそうにしていたので良しとした。

「で、具体的な内容は？」

一番冷静に状況を分析していたのはマリアだった。相変わらずの涼しい顔でエレナとラッセルを見る。

ソフィアは口をポカンと開けたまま何も言えずにいた。

「流石にお前は冷静だな」

「こういうの初めてじゃないのよ。嬉しくないことに」

その物言いにフェイトは思わず苦笑した。おそらくクオークのリーダーに推薦された時の事を言っているのだろう。あのクリフのことで。今のように唐突だったに違いない。

「マリアちゃんの質問に関しては私が答えるわね」

「止めてくれ、日が暮れる。ルージュ」

「はい」

今までにこやかな笑みで沈黙を保っていたルージュがフェイト達の前に立つ。

「具体的に話すと日が暮れちゃわないことも無いけど、面倒だから端折るわね。この部隊はシーハーツ六師団と決定的に違う点があるの」

フェイトは女王の前でさらりと普段の大雑把さを曝け出すルージュに半ば関心する。

ルージュは人差し指を立て、口を開く。

「それは構成員の管轄が全て違うということ。ま、構成員って言うてもあなた達三人だけなんだけど」

「具体的には？」

「軍、政治、そして我が国の象徴とも言える施術」

「仕事内容は？」

「シーハーツ六師団の管理、ラッセル様の補佐、新設される予定の施術士養成所の管理」

「そんな重大なものを私達に任せていいのかしら？ この国に来て一年も経たない、ましてや異星人である私達に」

「お前達には実力がある。それで十分だ」

マリアとルージュの会話にラッセルが口を挟む。

「それに、陛下も民も、皆お前達を信頼している」

フェイトが、マリアが、ソフィアが目を見開いた。まさかあのラッセルからそのような言葉が聞けるとは思っていなかったのだ。

だが、フェイト達は実際そう言われるだけのことをしてきた実績があるのは事実だった。

フェイトは言わずもがな、永きに渡ったアーリグリフとの戦争を終結させた和平の使者。国の英雄として広く名を馳せている。

マリアはエリクールに移住してから、様々な政治問題について助言してきた。クオークのリーダーとして活動してきたのは伊達ではない。彼女の功績は目を見張るものだった。彼女がいなければ国の復興は今の二倍の時間がかかっていたとさえ言われている。

そしてソフィア。彼女はあるいはフェイトやマリアよりずっと身近に国民に信頼され、慕われた人物である。彼女はその回復術の腕を生かし、多くの人を救ってきた。シーハーツ人だけでなく、アーリグリフ人も、裕福な人も、貧乏な人も、分け隔てなく。

そんな彼らは今や国民から絶対の信頼を受けていた。そうでなければ、ラッセルは決してフェイト達を認めはしなかっただろう。

「誰も異論は言うまい」

ラッセルの穏やかな口調が響き、弾かれたように三人の顔が引き締まった。覚悟を決めた目だった。

その瞬間を待っていたかのように女王が立ち上がり、透き通った声がそこに居る全ての者の耳に優しく届いた。

「フェイト・ラインゴット」

「はい」

フェイトが跪く。

「マリア・トレイター」

「は」

マリアが跪く。

「ソフィア・エステイード」



「は、はい」

ソフィアが跪く。

「以上の三名をクリムゾンブレイド直属部隊『星海』に任じます」  
フェイト、マリア、そしてソフィアが深く頭を下げる。

こうして、聖王国シーハーツに新たな部隊が誕生した。

## 風の帰還

「あれからもう三ヶ月も経つのか」

「何よ、やぶからぼうに」

シランドへ向かいルムを走らせている途中、フェイトは何気なしに呟いた。懐かしむように空を見上げ、目を閉じる。

穏やかな風がフェイトの、クレアの頬を優しく撫でる。緑に満ちた大地。そこかしこから聞こえる鳥の囀りや木々の揺れる音がまるで子守唄のように響く。

先程までの剣呑な雰囲気は微塵も感じられなかった。まるで何事も無かったような空気。

少しでもクレアの不安を和らげようと、フェイトは移動中ずっと他愛の無い会話を続けていた。エリクールに住み着いた当初こそルムの扱いには苦勞していたフェイトだが、今ではもう手放しでも問題なく操れるほどに成長していた。

「いや、思い出してね。あの時は大変だったなあ」

「そうね。叙任式の後三日三晩大騒ぎ」

「アドレーなんか『このまま式をあげるぞ!』とかなんとか騒いでさ」

まいったよ、と両手を挙げ、フェイトは苦笑する。

「あら、私は別に良かったけど」

「え!？」

フェイトは勢いよくクレアの方を向く。が、すぐにその失敗に気付いた。

「冗談よ。単純な英雄さん」

「うっ」

クレアのしてやったり、といった笑みにフェイトは押し黙る。

「でも、ほんと大変だったんだからな。君はうまく逃げてたけどさ」

「知ってるわよ。これでもあの人の娘ですからね」

「……なあ、今度母さんにDNA鑑定してもらわないか？」

「いいわ。そんな決定的な証拠欲しくないもの」

そう言うクレアとフェイトの表情はどこか楽しそうだった。

「またそんなこと言って、アドレーが泣くぞ」

「少しくらい娘離れするといいんじゃないかしら」

「それは同感。ところで、僕がアドレーに捕まってる間は何してたんだい？」

「なんか引つかかる言い方ね。私だって大変だったのよ。お父様のほうがまだマシって思えるくらいに」

「え？」

「恋愛話が好きな女の子達の恐ろしき、知ってる？」

「大変だったな」

フェイトは即答する。その手の話が大好きな幼馴染を持ったおかげでクレアが体験したであろう苦労は嫌というほど理解できた。

「うまく逃げたつもりだったのよ。でもまさかネルがルージュの言いなりになってるなんて思いもしなかったから……油断したわ」

「弱み、握られたな」

「ええ。それに泣きそうな顔して『ごめん、クレア』なんて言われたから怒るに怒れなかったわ」

「ネルも気の毒に」

フェイトとクレアは同時に溜息を吐いた。

「結局その後はずっと質問攻め。病み上がりだっていうのに……仕事してたほうが楽だったかも」

「ははっ。でも、僕は最後に君と踊れたから満足だったよ」

「よく言うわよ。散々人の足踏んでおいて」

「う……わ、悪かったよ。ヘタで」

フェイトはバツが悪そうにそっぽを向く。

対するクレアは悪戯っぽい笑みを浮かべ、追い討ちをかけた。

「あんなに自信満々に『僕と踊ってくれませんか？』なんて言うん

ですもの。私でっつきり……」

「も、もう止めてくれ!!」

フェイトの顔は真っ赤だった。恥ずかしさを振り切る為に速度を更に上げるが、クレアは悠々と追い抜いていく。

するとフェイトの横を通り抜け、茶目っ気たっぷりの笑顔を見せてくる。完全な不意打ちとなったその笑顔に、フェイトの顔は瞬く間に赤く染まった。

「ふふっ、シランドまでどっちが先に着くか競争よ、フェイト!」

「ちょ、そんな急に!」

イリスの野に二人の男女の声が響き渡る。

鳥が、木々が、風が、全てのものが二人を見守るかのように、優しい歌を奏でていた。

※

鬱蒼とした森の中、時々通行の邪魔になる蔦や枝を手でどかしながら数人の男女が足を進めていた。誰もがシーハーツやアーリグリフでは見慣れない服装を身に纏っている。

「あと少しでペターニに着きますね」

「はい、懐かしいです」

軽装の男が快活な笑みを見せる。横を歩く小柄な女性は表情を変えないままペターニの街があるであろう方向に目線をやった。

言葉とは裏腹に、その瞳には「懐かしい」などという感情はない。

「もう一年以上経ちますからね。あっちも大変だったようで」

「アーリグリフとの戦争の終結。まだ信じられません」

「私입니다。でも、良かったですよ。本当に」

男は心底嬉しそうな顔をして、胸元のペンダントに手を添える。

女性は不思議そうに首を傾げると、肩にかかる白銀の髪が揺れた。

「それは？」

「ああ。妻と娘の写真が入ってるんです。可愛い娘でして、明日で四歳になるんですよ」

「誕生日には間に合いそうですね」

「はい。去年祝ってやれなかったですからね。今年は盛大にしない」

男がペンダントの蓋を開く。幸せそうな笑顔が写っていた。それを見る男の顔もまた、幸福という二文字を表情に変えたように、優しげに綻んでいる。

その様子を横目で見つめていた女性の翡翠の双眸が悲しげな色を宿す。しかし、そのことに気付くものは誰もおらず、すぐに女性の瞳に映った悲哀も姿を消した。

森が徐々に拓け、これまで木々の合間を縫って薄っすらと差し込むだけだった光が眩いほどに彼らに降り注ぐ。目の前に広がる見慣れた風景に、周囲の空気が沸き立った。

「見えた！ ペターニ東門です！」

誰かが叫んだ。歓喜と興奮に満ちた声が空気を震わせる。

女性もほっと安堵の息をつき、顔を門へと向けた。その瞬間、光が横を通り抜ける。

「え？」

ドサリ、と何かが倒れる音。女性はゆっくりと背後を振り返る。誰かが叫んだ。恐怖と絶望に満ちた声で。

「これは」

ふらり、と女性が一步後ずさり、震える手を口へ当てた。

「……なぜ」

酷い。あんまりだ。女性は手を力一杯握り締めた。

ついさっきまで幸せそうに笑っていた男が、目を見開いて倒れている。その胸に空いた黒々とした穴を見据え、女性はそれが何を意味するのかを瞬時に理解した。彼が放つその死臭は、あまりにも嗅ぎなれたものだったからだ。

強く、強く握られた彼の拳にしっかりと握られた淡い光を放つペ  
ンダントを見据えながら、女性は静かに視線を伏せた。

※

「……見せ付けてくれるわね」

「この事態に追いかけてご登場とはね。流石、と言えいいのかしら？」

「ルージュ、止めるんだ」

「マリアさんも……確かにちよつとムカつきますけど」

会議室でフェイトとクレアを待ち受けていたのは、ジト目で頬杖をつくルージュと、腕を組んで椅子に座るマリアの悪態だった。

一応ネルとソフィアは庇ってくれているようだが、ネルも苦笑い、

ソフィアにいたっては庇ってくれているのかすら疑問だ。

王都に着く前には二人とも軍人の振る舞いに戻っていたのだが、どうやら見通しが甘かったらしい。見られていたと知ったフェイトとクレアの顔が朱に染まっていく。

「まあ、そんなバカップルは放っておいて。本題よ」

「ま、マリアさんっ！」

クレアが更に顔を赤くして叫ぶが、マリアは気にも留めないように書類を回していく。

これ以上言っても無駄だと悟り、クレアは渋々と中央の席に着く。それを合図にしたかのようにクレアから見て右手にフェイト、マリア、ソフィアの順。そして左手にネル、ルージュが腰を下ろした。クレアはざっと手元の資料に目を通し、納得したように頷く。顔を上げたクレアの瞳は、聡明な指揮官のものであった。

「まず始めに。この件に関しては『光』『闇』『炎』『星海』であつたります」

「『土』は？ あれも国内担当でしょう？」

「現在、ペターニの商人や貴族に不穏な物資の流れが確認されています。今そちらの手は抜けません」

「なるほど。了解よ」

マリアが納得したのを確認すると、クレアはソフィアに視線を向けた。

「ソフィアさん」

「はい」

「その銃を拾った子供の証言を、出来るだけ詳しく話して下さい」  
「分かりました」

ソフィアは一度頭の中を整理するように目を閉じてから、はつきりとした声音で喋り始めた。

「その子の話では、その銃を拾ったのは一昨日の午後三時頃。場所はシランダの城壁のすぐ傍の茂みです。習ったばかりの施術の練習をしようと人に迷惑のかからない場所を探していたところ偶然発見

したらしいです。その場で一度引き金を引いたらしいのですが、安全装置がかかっていたため発射されることはありませんでした。その後それを持ち帰り、翌日私を驚かせようと思ってきたようです」

「親御さんには？」

「話してなかったそうです」

「そうですか。ありがとうございます。マリアさん」

「解体してみたけど、それに書いてある通りで本物よ。模造品って可能性も捨て切れなくはないけど……ほぼゼロだと思っていいわ」

クレアの言わんとしていることを読み取ったマリアが先に結論を述べる。

クレアは顔の前で両手を組み、それに額を当てる。こうして何かを考えるときに両手を組むのは、クレアの癖だった。

数分悩んだ末、クレアは顔を上げた。

「考えられるのは三つ、ですね」

「一つはバンデーンの残党。一番シンプルな考えね」

真っ先に反応したのはルージュだった。机を指でカツカツと鳴らしている。

「もう一つは、フェイト達みたいな先進惑星からの来訪者」

ネルが続ける。ソフィアがなるほど、といった感じに手を叩いた。

「ただ、どちらの場合にも問題がある」

「そうね」

蒼の髪を持つ男女が重々しく口を開いた。彼らの言うであろうことはその場の誰もがわかっていた。

「まずは前者。これはバンデーンの残党の場合は武器を落とす理由が分からない。それに今更侵略を始めようとする理由も無い。セフィラが狙いならとくにカナンのほうへ行っているはずだ」

「そして後者。このエリクールは私達が居ることもあってクリフ達が常にその宙域を監視させている。なにかあったら連絡が来るはずだわ。見落としの可能性も低いわね。加えてバンデーンと同じく武器を落とす理由もない」



そう、どちらにしてもおかしい要素が多すぎる。クレアやマリアがいくら頭を悩ませても答えは出なかった。

沈黙が広がる中、それを破ったのはソフィアだった。

「あのお、残りの一つっていうのは？」

おずおずと手を上げ、クレアに視線を向ける。クレアは両手を組み直し、ソフィアを真っ直ぐに見た。

だが、その視線はソフィアではなく、何処か遠い別の場所へ向けられている。

束の間の沈黙の後、クレアは褐色の瞳を鋭く細めて告げた。

「技術国家グリーテンです」

「いくらこの大陸より文明レベルが高いからと言って、流石に無理なんじゃ……」

「ええ。ですが、否定は出来ません」

真っ先にソフィアが疑問の声をあげる。ソフィアの疑問ももつともだった。そんなことはクレアだって分かっている。ただ、何か、何かがひっかるのだ。

「なんたってずっと鎖国中の未知の国ですものね」

「でも、師団員を送り込んでるんですね？」

だったら何か情報が、と言いかけてソフィアはその言葉を飲み込んだ。

クレアの纏う雰囲気明らかに変わったのを敏感に感じ取ったのだ。

「グリーテンへ向かった師団員とは、一年以上連絡が取れていません」

ソフィアだけでなく、マリアやフェイトまでもが驚愕に目を見開く。ネルとルージュは視線を伏せた。

「必ず一ヶ月毎に報告が来ていたの。でも一年と少し前、それが途絶えた。通常なら確認と引継ぎの為に人員を送り込むんだけど……」

「アーリグリフとの戦況の悪化で、それが出来なかった」

ルージュとネルが詳しい説明を付け加える。次に疑問を持ったのはフェイトだった。

「なら、なぜアーリグリフとの戦争が終わったのに人を送らないんだい？」

「入れなかったのよ」

「え？」

「警備が以前よりずっと嚴重になっていた。以前使っていた潜入経路全てが閉鎖されていたの」

クレアが再び手を組み直す。

「だから今グリーテンの情報は一切入っていないわ。たまに噂で聞くことはあっても、確かな情報じゃない」

「その噂って言うのは？」

「そうね。強いて挙げるものがあるとするなら……アルゼムの鷲卿が亡くなったことくらいかしら」

「アルゼムの鷲卿？」

聞きなれない響きにフェイトは首を傾げた。

次の瞬間、ソフィアの咳払いが聞こえたかと思うと、マリアの肘がフェイトの脇腹に刺さる。

「いっ！！」

「あなたね。いくら自分の管轄じゃないからってそれくらい覚えときなさいよ」

「え、そ、そんなに有名人物なのかい？」

「グリーテンを統べるドールマスターの一人だと言われている人物さ」

呆れ顔から戻ったネルが助け舟を出す。ソフィアが目線でフェイトのバカ、と言ってる。フェイトはばつが悪そうに顔を逸らすと、クレアがくすりと笑った。

「笑うなよ」

「あら、勉強不足なあなたが悪いんじゃない？」

「そうそう。フェイトってば軍や治安の調整ばかりで政治はからっきしなんだから」

クレアとルージュのダブル攻撃を受けてはフェイトが適うはずもない。ぐうの音も出ないフェイトに笑いが起こった。

張り詰めていた空気が幾分か和らぐ。

「そ、そんなことより話を」

フェイトが照れ隠しに話を進めようと資料を持ち直した、そんな矢先だった。

「申し上げます！」

会議室の扉が勢いよく開かれ、見知った男性が姿を現した。

「ヴァン、ノックもなしに何事ですか！」

クレアが立ち上がり、部下を嗜める。

「申し訳ありません。ですが、即刻お耳にいたいことが……」

「この場で構いません。言いなさい」

ヴァンは乱れた息を整えるために一息つき、意を決したようにクレアを見据えた。

「クレセント・ラ・シャロム他数名が、たった今帰国しました」

誰かの手から零れ落ちた資料が床に落ち、赤い絨毯の上に散らばった。

## 暴走

寒空の下を飛ぶ一匹のエアードラゴンの背に腰を下ろしていたアルベルは、肌を切るような風の冷たさに小さく身震いをした。

「アルベルの旦那、大丈夫ですかい？」

「ふん、これくらいどうってことねえよ」

強がってはいるが、唇を紫にして震えいては説得力の欠片も無い。疾風の兵士は苦笑して、話題を切り替えた。

「ところでなんだって急にシーハーツに？」

「野暮用だ」

「コレですか？」

「殺すぞ、阿呆が」

兵士は小指を立ててニヤニヤと笑うが、アルベルが刀の切っ先を突きつけてやるとすぐに前に向き直った。

カルサアを抜け、アリアスに入った頃から徐々に気温は上がり、ペターニ上空を飛んだ頃には既に雪は止んでいた。こうなると居心地が悪いのは鎧をしっかりと着込んでいる疾風兵士のように、片手で起用に手綱を操り、兜を脱ぐ。

兜の下から出てきた顔は、喋り方や雰囲気からは想像もつかないほど若い男。アルベルより若干下、といったところだろうか。いかにも人当たりが良さそうな青年だった。

その顔には見覚えがあったアルベルは、眉根を寄せつつ青年に声をかける。

「おまえは、疾風の？」

「ああ、はい。不肖の輩ながら団長やらせてもらってますデュラン・フォルモントです。もつとも、アルベルの旦那が竜と契約するまでの間の繋ぎみたいなもんですがね」

「ってことはこの男爵級の竜は……」

「お察しの通りでさ。こんな俺ですからね、早いとこ疾風団長なんて降りたいんですよ」

デュランは笑った。年齢に合わない年よりじみた笑い方だった。色々な笑い方をする、とアルベルは思った。しかしそのどれもが、本当の笑いではない気がした。

「安心しろよ。このヤマが片付いたらとっとと契約済ませててめえを引きずりおろしてやる」

「そう願いたいものです」

今度こそ、二人の間に完全な沈黙が広がった。

※

「クレセント・ラ・シャロム、只今帰還致しました」

小柄な女性は流れるような動作で女王の前に跪くと、彼女のシルクのようにきめ細かな白銀の髪がさらりと肩から滑り落ちた。

女性というには幼い顔立ちである、クレセント・ラ・シャロムは一年以上帰らなかった部隊を仕切っていた人物で、『風』の二級構成員であった。

およそ一年ぶりの帰国だというのに、クレセントの態度は落ち着いている。まるで普段通りの報告をするような彼女の姿勢は、どこか異質だった。

「クレセント、無事でなによりです」

「はい、ありがとうございます」

女王の言葉には優しさが溢れていた。クレセントの言葉には一切の感情がなかった。

クレセントの人らしくない冷めた声に、同じくその場に跪くフェイトは息を呑む。横目でクレア、ネル、ルージュを見るが、彼女らの表情は変わらない。むしろ、安堵しているような顔だった。

「して、クレセント」

ラッセルが話を切り出す。

「早々で悪いが聞きたいことが山ほど……」

「クレセントおっ!!」

が、壁を打ち破らんほどの声が聞こえたかと思うと、次の瞬間にはクレセントの身体は忽然と消えていた。

ワンテンポ遅れて聞こえる、鈍い音。フェイトの隣から聞こえる溜息の合唱。

フェイトがぎこちない動作で頭だけを音のほうへ向けると、頭から血を垂れ流すクレセントと、

「クレセント、大丈夫!? 怪我してない!? 心配したんだから!」

虚空師団『風』師団長、シレーネ・リシャスが崩壊した柱の下にいた。柱の下から顔を出して大声を上げているのを見ると、どうやら無事ようだ。

クレセントも下半身を柱の下敷きにされながらも、冷静にシレーネを見ている。

「シレーネったら」

「全く」

「あほね」

クレアが額に手を当て、ネル、ルージュが呆れたように腕を組んだ。

「た、大変だ。クレセントさんを助けないと」

「大丈夫よ、フェイト」

「心配するだけ無駄だね」

「っていうか、シレーネはいいんだ」

フェイトが柱をどかさうと足を進めようとしたとき、クレアに肩を掴まれた。ルージュの眩きは無視される。

「大丈夫ってあんなの女性の手でどうにか出来る重さじゃ」

「問題ないわよ、あれくらい」

ルージュが顎でシレーネを指す。フェイトは戸惑いながらもそれに従う。次の瞬間、フェイトは目を疑った。

シレーネの身体から旋風が巻き起こる。小さな小さな風の渦が徐々に大きさを増していった。

風の刃が柱を細かく切り刻む。

「風陣？ でも大きさが……」

ネルのそれとは比べ物にならないくらいの風の渦。もはやそれは風の防護壁としてあるべき大きさを超えていた。

フェイトが呆然とその様子を眺めていると、横に居たネルの息を呑む音が聞こえた。

「あ、あの馬鹿！ クレア！」

「ええ。フェイトは自分でなんとかしてね」

「え、え？」

ネルがクレアの名前を呼ぶと、さも分かってる、と言わんばかりにクレアは応える。

狼狽するフェイトを残し、クレアは女王の下へ駆け出した。素早く詠唱を行うと、手を天に向けて翳す。

「打ち消しなさいープロテクション！」

半径十メートル以上はある光の防護壁が女王とラッセルを覆う。ルージュとネルも自らの周りに防護壁を張った。

そして、風の渦が謁見の間を飲み込んだ。

漸く風が収まった頃、シレーネは閉じていた目を開けた。そして未だに頭から血を流すクレセントをぎゅっと抱きしめる。

「クレセント無事!? どっか痛くない?」

「あ、あの、シレーネ様……周りを……」

「何々――あ」

シレーネはクレセントに言われるがまま振り向き、そのままの姿勢で固まる。

綺麗に飾られた調度品や絨毯は跡形もなく消え去り、謁見の間は清々しいまでにこざっぱりとした空間と化していた。

シレーネは顔に手を当てて天を仰ぐ。

「あちゃー、またやっちゃった……」

「あちゃー、じゃないわよ、このバカ! 殺す気!?!」

「これで何回目だい?」

「今回は減俸じゃ済まされないかもしれないわね」

防護壁を解いたルージュ、ネル、クレアがシレーネとクレセントを取り囲む。三人の顔を見回し、シレーネはへらつと笑った。

「まあまあ。みんな無事だったんだから……結果オーライ?」

ね、とシレーネがウインクをした時、

「そんなわけがなからうがっ!」

ラッセルの叫びが響き渡った。

「こんの大馬鹿者が! 陛下にもしものことがあったらどうしてくれる!?!」

「んもー、ラッセル様ってば声大きい。クレセントの耳壊れたらどうしてくれるのよー」

「五月蠅いわ! クレセント、その馬鹿から離れろ! お前にまでアホが伝染る!?!」

「は、何!? もしかしてラッセル様ってクレセント狙い!? 止めてよ、この子は私のです!」

「おまえは何を言っているのだ!?!」



「……まったく何やってるんだか」

「フェイト、大丈夫？」

シレーネとラッセルの意味の無いやりとりが繰り返される中、多量の切り傷を作って床につつぶくしてるフェイトをクレアが抱き起こした。

「あ、いたた……」

クレアが回復術を唱えると、淡い銀色の光がフェイトを包み込み、傷が瞬く間に消えていく。

フェイトはゆっくりと身体を起こした。

「ありがとう、クレア」

「そういえば、あなたはプロテクション使えなかったわね」

「ああ。にしてもネルとルージュも助けてくれたっていいのに……」  
フェイトが不貞腐れたようにネルとルージュを見ると、二人は顔の前で手を合わせた。

「す、すまないね」

「ほら、私達ってばクレアと違ってせいぜい一人分なのよねえ」

あはは、とルージュの口から乾いた笑いが漏れる。

尚もフェイトがルージュとネルを見ていると、後ろから頭をはたかれた。

「いてっ」

「はいはい。そこまで。まずはあのお馬鹿さんを止めるわよ」

クレアは手をパンパンと叩く。ネルがクレアに歩み寄り、指でシレーネを指す。

「止めるったってクレア。あいつ止めるのは大変だよ？ 頼みの綱の陛下は止める気なさそうだし」

ネルの言葉通り、女王は楽しそうに口元を綻ばせてシレーネとラッセルを見ていた。なるほど、止める気はなさそうだ、とフェイトは思った。

有能な女王なのだが、どうも甘い、というか大らか過ぎるところが多々あった。先程まで自分が怪我しかねない状況だったというのに、その顔には怒りも焦りも無い。あるのは穏やかな微笑だけだった。

「そうよ。前あの人止めようとしてヴァンがズタボロになったの忘れた？」

「そんなことあったのかい？」

「そ。あれ以来ヴァンってばシレーネに近づこうとしないのよね」  
フェイトはチラリとシレーネを見る。シレーネは決して小柄ではないものの、どこにヴァンをズタボロにする力があるのか分からないほど細身の女性なのだ。

人は見かけによらない。フェイトはその言葉を改めて思い知った。  
「で、どうするんだい？」

ネルが再度クレアに尋ねる。クレアはにっこりと笑って言った。

「平気よ。あの人が素直だったら、穏便に済ませるわ」

クレアがくりと身を返してシレーネの元に歩いていく。クレアの笑顔を目の前にしたネル、フェイト、ルージュは恐怖で身体を硬直させた。そして、シレーネに深く同情したのだった。

「もお、やだやだ。いい、クレセント。もうラッセル様に近づいちゃダメだからね。報告は部下にやらせなさい、部下に」

「そういうわけには」

「むしろお前がくるな！ 毎度毎度支離滅裂な報告ばかりしおって」

「ちょっと、聞き捨てならないんだけど 私の報告書のどこに不満が――」

「シレーネ」

舌を噛まないのが奇跡と言えるほどの速さで喋り続けていたシレ

ーネの言葉がピタリと止んだ。シレーネが顔だけをクレアに向ける。もしこの動作に音をつけるとしたらキリキリなどと、まるで機械仕掛けの人形のような音がしていることだろう。

「く、クレア……もしかしくなくても、怒ってる？」

「ご明察。分かったのなら大人しくして貰えるかしら？」

「ご、ごめんね。クレセントが帰ってきたっていうもんだからつい……」

意外と素直に折れた。それはあれほどの殺気に向けられればそうなるかもしれないが、本来の性格も大人しいほうなのだろう。

しゅんと項垂れて、シレーネは女王に頭を下げた。

「申し訳ありません、陛下。如何様にも処罰して頂いて構いません」「いいですよ。久方ぶりに愉快的時間でした」

「陛下」

笑って許そうとする寛大過ぎる女王に、ラッセルは厳しく言い立てる。

「甘やかしてはいいことはありません。たかだか柱をどけるのにあんな……」

「クレセントがそれだけ大切ということです。喜ばしいことではありませんか」

「全く、陛下は甘すぎますぞ」

そう言ったきり、ラッセルは黙った。

シレーネは女王に笑顔を見せて、クレセントを振り返る。

「さあ、クレセント。陛下に連絡、を……」

シレーネの声が尻すばみになる。その目はクレセントの頭から流れる血を捕らえていた。

音速を上回る速度でクレセントに駆け寄ったシレーネは、細い両肩をぐっと掴む。

「ちょ、どーしたのその血!？」

「……」

今更何を。その場に居る誰もが心の中で突っ込んだ。

「誰！？ 誰にやられたの！？ まさかフェイト君！？」

「え、僕！？」

唐突に名前を出され、フェイトの声は思わず裏返った。

シレーネは鬼のような形相でフェイトの胸倉を掴み挙げる。

「私のクレセント傷物にするなんていい度胸じゃ——」

「懲りてなかったようね、シレーネ」

クレアの怒気を含んだ声と共に耳を塞ぎたくなるような音が響き、シレーネの身体が崩れ落ちた。

開放されたフェイトはその場にしりもちをつき、顔を顰める。そして、目の前に白目をむいて転がるシレーネを見て、また顔を引きつらせるのだった。

「よし、これでいいわね。あとは何処か怪我したところない？」

そんなシレーネとフェイトをまるでないもののように、クレアはクレセントに医療施術を施していた。

「大丈夫です。有難う御座いました」

「いいのよ。それで報告、お願いできるかしら？」

「はい」

クレセントは変わらない瞳で女王の前に立ち、喋り始めた。

閉ざされた国での出来事を。

## 風と孤独

空は鈍色一色で、真つ白な雪が静かに石畳の上へと降り注いでいる。小さな、何処にでもあるような一軒屋の窓から顔を出したクレセントは、舞い散る雪に負けないほど白い手を窓から突き出し、空へ向けた。

手のひらに舞い降りた雪は刹那の冷たさをクレセントに残し、跡形もなく溶け、指の隙間を通して地面に飲み込まれた。

赤くなった手のひらから伝わる、じん、という痺れに、クレセントは自嘲めいた笑みを浮かべる。こんなにも心の中は冷めているというのに、身体は人並みの暖かさを持っている。暖かさなど何も救ってはくれないのに、と口の中で呟き、クレセントは瞳を閉じた。

誰も、何も救ってなどくれない。生まれた時から既に……。

「クレセント様、いらっしゃいますか？」

扉を規則正しいリズムで鳴らす音に、クレセントは深い思考の底から拾い上げられるように覚醒する。窓を閉めて自らのデスクに腰掛け、凜とした声で言う。

「どうぞ」

「失礼します」

顔を出したのはグリーンテン風の服装に身を包んだ中年の男だった。手には報告書だろうか、数枚の紙を持っている。

「これが今週の首都ヴォルケーフの調査書です。これと言った変化はありません。ですが、所々でゲート大陸に未知なる文明がもたらされたとの噂が広まっています。あくまで一般人の会話の中です  
が」

「そうですか。ご苦勞様でした。ああ、それと」

「既に二名の者が報告書を持ってシーハーツへ出発しました」

「そうですか」

先んじてそう告げた男にクレセントは頷いて、彼の手から報告書を受け取る。

「今頃は城壁を抜けているかと」

「無事に辿りついてくれるといいのですが」

「平気ですよ。今までだって何事も無かったんですから」

クレセントもそう思いたかった。しかし、今朝方から絶え間なく襲ってくる胸騒ぎはそんな余裕を与えてはくれない。

かと言って、クレセントには今更どうすることも出来ないし、ただの感で定期報告をさせないわけにはいかない。両肩に重く圧し掛かるような不安を振り払うかのように頭を振って、椅子から立ち上がった。

「では、私達はそろそろ食事に行きましょう。今日は私が作ります」

「そんなクレセント様自らなさらずとも……我々のほうで準備しますので、どうぞお休み下さい」

「いえ、かまいません。料理は嫌いではないですし、丁度手を動かしたかったので」

そう言うときクレセントは男の横を通り抜けて部屋を出ようとしたが、

「クレセント様!!」

叫び声にも似た声が耳に入り、足を止めた。

廊下の端から騒がしい足音が鳴り、二人の兵士が姿を現す。

「どうしたのですか？」

「おまえ達はシーハーツに向かっているはずじゃ」

クレセントと男が訝しげに二人の男を見る。

二人の男は不安と焦りを含んだ顔をクレセントに向けた。

「シーハーツに繋がる脱出経路が全て封鎖されました!」

「な、何だと!？」

驚愕する副官の横で、クレセントは整った眉を潜めた。しかし、まだ言葉を発することはせず、報告の続きを黙って促す。

「国内の下水道は全て機工兵に見張られ、その他の経路は破壊、も

しくは修復されていました」

「バカな……我々の存在に気付いたというのか」

「いえ、元より感づかれてはいたのでしょう。しかし、このような行動に出てくるとは……」

クレセントは握った手を口元へ持っていく。

「考えていても仕方ありませんね。私が街の様子を見えます。それまであなた達はここで待機していて下さい」

「そんな！ 危険です！」

「そうです。偵察なら我等が参ります」

先程戻ってきた二人組みの男が、外套を羽織い出て行こうとするクレセントの前に立ち塞がる。

「ですから、クレセント様はここで――」

待っていて下さい。

その言葉は続かなかった。背後で開く扉の音に、師団員の男は息を呑んで振り返る。

決して通すまいと思っていた。こんな非常事態に上官一人を危険地に飛び込ませるなど言語道断。たとえ誰かが命を落とす結果になろうとも、偵察は自分達の役目のはずだった。

だというのに、彼女は既に扉の前に立ち、今まさに外へ出んとしている。

「いつの間に」

彼女の横に立っていた中年の男さえ、驚愕に目を見開いていた。

クレセント・ラ・シャロムには音が無い。

以前、シーハーツで誰かがそう噂しているのを耳にしたことがあった。足音も、剣を振る音も、呼吸の音も、生きている音も。全ての動作が最小限の音でこなされ、その動きを捕らえられる者はいない。

『音無しの風』。その言葉は敬意よりも畏怖の呼び名であった。

「万が一のことがあれば即刻退避。機密書類は持ち運べない場合、全て処分して下さい」

しかし、今この場にクレセントを恐れ、忌む者など誰一人としていない。皆、クレセントを信じ、憧れた者達だった。

クレセントもそれは十分に分かっていた。だからこそ、死なせたくなかった。気付かぬうちに、彼らを危険晒したくないと思っていた。

「私なら大丈夫です。逃げるときも私のことは気にせず、生き残ることだけを考えて下さい。ここに来たときに約束したでしょう。必ず全員で帰ると」

「クレセント様」

「無事お帰りするのを待っています」

「アペリスの加護があらんことを」

部下の言葉を小さな背中に受けながら、クレセントは夜のヴォルケーフへと溶け込んだ。

夜の街とは言っても、明かりはそこかしこから発せられ、大通りはまるで昼間のような明るさだった。

シーハーツで言う営力が発達しているらしく、夜になれば松明の光が灯るだけのシーハーツでは考えられない光景だ。

「特別目立った動きは見られない、か」

クレセントはごく普通の一般人とやら変わらないように振舞いながら、しかしその翡翠色の双眸は辺りの異変を一片たりとも見逃すまいと鋭く細められている。

確かに脱出経路は全て封鎖されていた。やはりスパイが国内に居ることは知られていたのだろう。しかしそんなことは承知の上であった。要は捕まらなければいいわけなのだから。

その点では、少なくとも機工兵が出動されることも見張りの兵士



が増えていないことから、心配はないようだった。

「それにしても、何故今更になって……」

これだけ完璧に封鎖されているとなると、大分前から侵入、脱出経路は全て露見していたはずだ。クレセントも全く感付かれていないとは思っていなかったが、それら全てが押さえられているとはさすがに思っではいなかった。

しかし、今考えるべきはシーハーツの潜伏を完全に見破った諜報力ではなく、見破った上で放置していたという事実。それはおそらく、彼らグリーンテンにとってシーハーツが取るに足らない存在であるという自信の現われだろう。

だが、取るに足らない存在を今になって国外から出せない事態が起きた。もしくは、何者も国内に入れたくない、か。

「どちらにせよ、何か起きているのは確かかなようですね」  
物言わぬ城塞都市。何かが動き始めていた。

※

「――そのまま一年間、私達はグリーンテンで過ごしました」

クレセントはそう言って一度言葉を切った。ゆっくりと息を吐き、話を続ける。

「そして、半月前。突然地下水路の警備が解かれたのです。罠である可能性も否定はできませんでした。しかし、何時また封鎖されて

しまうか分からない状況です。この好機を逃す手はないと、脱出に踏み切りました」

「クレセント、危ないことしちゃダメって言ったのに」

何時の間に起き上がってきたのか、シレーネがクレセントにピツタリとくつついている。

「シレーネ、そのままでもいいから黙ったときな」

また何か言い出す前にネルが釘を指した。

そのままでもいい、と言われ、シレーネは満面の笑みを浮かべるが、クレセントは微かに眉を下げてネルを見た。

その視線を感じ取ったネルが、手を挙げて「すまないね」と言うと、クレセントは仕方ないといった感じに瞳を伏せる。

「それで、あなた達が無事に帰ってきたと言う事は」

クレアが先を促すようにクレセントに問いかける。クレセントは頷き、再び口を開いた。

「はい。追手も一切なく、シーハーツに着くまで何事もなく進んだのですが……」

クレセントは口籠った。瞳を強く閉じ、必死に何かに耐えているようだった。

やがて、クレセントは自分の腕を強く握りしめ、瞳を開いた。

「ですが、ペターニ東門に着いた時、一人の兵士が突然倒れ——命を落としました」

その場に居る者全員が息を飲んだ。

「何があったのか、どんな攻撃を受けたのか、まるで検討もつきません。ただ……」

「ただ？」

「兵士が倒れる前……光のようなものが、横を」

クレセントの言葉は最後まで発せられなかった。後ろに立っていたフェイトが急にクレセントの肩を掴んだのである。

驚いたような目を見開くクレセントに、フェイトは「ずい、と詰め寄った。」

「光の矢……それは本当なのか!？」

「え……は、はい」

あまりの剣幕にクレセントはたじろぐ。

その更に後ろではクレア、ネル、ルージュが険しい表情を浮かべていた。

「やっぱり、グリーテンの仕業なのかしら」

「断言は出来ない。でも」

「可能性は高くなったわね」

「それまでだ」

これ以上は無用だと判断したラッセルが口を開く。

「クレセントはグリーテンの調査書と共にこの件に関しての報告書を後ほど持って来い。クレア、ネル、ルージュ、フェイトは引き続き調査を続行しろ」

聖王国シーハーツに仕える兵士は揃って胸に手を当て、謁見の間を後にした。

「私は？」

そんな中、一人なんの指示も出されずに置いて行かれたシレーネは慌てて皆を追いかけたのだった。

「あの」

「どうしたの？ クレセント」

謁見の間を出て、二階の階段付近の廊下へと差し掛かった時、不

意にクレセントが口を開いた。全員が足を止め、代表してクレアが問う。

クレセントは控えめにフェイトの方を見た。

「この方は……？」

「あ、そっか。フェイト君が来たのって丁度クレセントがグリーテ  
ンに行った後だから、知らないのも無理ないか」

シレーネの言い方にクレセントは首を傾げる。

「来た？」

「そう。この子はシーハーツの人間じゃないのよ。勿論、アーリグ  
リフでもなし」

「シレーネさん」

フェイトが慌てたように口を挟む。この調子ではフェイトが異世  
界の人間だということまで喋ってしまいそうな勢いである。余計な  
混乱や誤解を招かないためにも、クレセントにはうまく誤魔化して  
おきたかった。

シレーネはそんなフェイトの意図を汲み取って、大丈夫、と片目  
を瞑った。

「実はフェイト君はグリーテンの技術者だね。あ、もしかしたらク  
レセント知ってるかな」

「いえ」

「そっかそっか。それで、彼とその仲間さんが新開発の乗り物で  
お父さん助ける為に敵の所へ行く途中で故障してアーリグリフに墮  
ちてネルに拉致されちゃってクレアが口説いて――」

「すみません。通訳お願いします」

クレセントは変わらぬ表情でシレーネから視線を外す。

「私が説明するよ」

あらぬ疑いをかけられたネルが溜息混じりに一步前に出た。

「なるほど。そうだったのですか」

一通りの説明を受け、クレセントは漸く納得したようだった。

「でも、驚きました」

「え、何がだい？」

全く驚いていないような顔で、クレセントは言う。

「空を飛ぶ機械など、耳にした事が無かったものですから」

「あ、あーあ。それは、その……」

フェイトの額から嫌な汗が吹き出る。

グリーテンという国をフェイトよりもよく知っているであろうクレセントに対し、一体どう誤魔化そうか悩んでいると、助け舟は意外にもクレセントから来た。

「機密だったのでしょうか」

「そ、そう！ グリーテン国内でも技術者の間だけの機密でね」

「そうですか。申し遅れました。私はクレセント・ラ・シャロム。

虚空師団『風』の一員です」

クレセントが思い出したように言って、手を差し出す。フェイトは微笑んでその手を握った。

「僕はフェイト、フェイト・ラインゴッド。よろしくお願いします、クレセントさん」

「クレセントでいいですよ」

「無理無理、クレセント。フェイトってばバカ丁寧だからいきなり呼び捨てなんて――」

「分かった。よろしく、クレセント」

「早くないっ!？」

ルージュが間髪居れずに突っ込む。

「なんでよ！ 私の時は半年間呼んでくれなかったじゃない!」

「い、いや。だってルージュのほうがかなり年上だったから、気が引けてたっていうか……」

「かなりって四つ！ 四つ！ 四歳だからあ！ ——ってフェイト、あんだ」

ぎゃんぎゃん喚いてたルージュがピタリと止まる。その後ろでクレアとネルとシレーネも苦笑いを浮かべ、フェイトを見ていた。

フェイトはわけが分からずクレセントに視線を向けると、同じように眉を下げていた。

「……僕、なんかマズイこと言ったかい？」

「いえ、そんなことはないのですが……」

「フェイト」

言っていいものか、と口籠るクレセントの肩にクレアが手を置きフェイトを見る。口に手を当て、必死に笑いを堪えていた。

一人置いてけぼりにされたフェイトは面白くなく、唇をへの字に曲げる。

「なんだよ。皆して笑ってさ」

「クレセントは私達と同じ年よ」

「ああ、そうです——はああああああ！？」

絶叫が長い廊下に木霊した。

フェイトはクレセントとクレアの顔を交互に見比べ、口を金魚のように開閉させる。

「お、同じ年？」

「はい」

「二十四？」

「はい」

「年上？」

「フェイトさんのお年にもよりますが」

「二十」

「なら、そうなります」

驚くほど短い会話を終えたフェイトは、壁に手について空を仰いだ。

そして、再びクレセントをまじまじと見る。

確かにそう考えて見れば、見えなくも無い。整った顔立ちや落着いた雰囲気は大人っぽいと言える。

が、やはり、どんなに多く見積もっても十七、十八。いや、やはり十四、五がいいところだ。

フェイトがそのままクレセントを正面から凝視していると、クレセントは居心地悪そうに顔を逸らした。

「こら、フェイト。女の子をまじまじと見るのはマナー違反よ」

クレセントに変わってクレアがフェイトを叱責する。シレーネの視線も痛いのでフェイトは頭を掻いて視線を外した。

「ごめん。あまりに以外だったから。あ、クレセントさん」

「いいですよ。そんな急に畏まらなくても」

「う、うん。じゃあ僕もフェイトでいいから」

フェイトがそう言うと、クレセントは申し訳なさそうに首を振った。

「すみません。あまり呼び捨てというものに慣れていなくて」

「そうなのかい？」

「ああ。この子は部下にもこの口調だよ」

ネルがクレセントの頭をぽんぽんと撫でる。その様子は同い年の同僚というよりも、むしろ年の離れた姉妹のように見えてしまい、フェイトは思わず笑みを零さずにはいられなかった。

※

「クレセント」

その後、場所を会議室に移して、クレセントに国内の問題について話していると、紫の髪の男性と、青空のような水色の髪の青年が姿を現した。

名前を呼ばれたクレセントは顔を上げ、その人物に視線を向ける。紫髪の男性は、フェイト達には目もくれずに早足でクレセントに近寄る。そして、ほんと胸を撫で下ろすと、息を吐き出しながら顔を綻ばせた。

「怪我は、ないようだな」

「はい。心配をおかけしてすみません、ネイビス様」

「いや、無事ならいいんだ」

ネイビスと呼ばれた男性はさっと顔を逸らしてそう言った。横に立っていた青年もクレセントに微笑みかける。

「ご無事で何よりです、クレセントさん。心配しましたよ」

「ありがとうございます」

クレセントは淡々とした口調だったが、二人は別段気にする様子もなく、笑顔で対応している。むしろネイビスに到っては顔が赤い。つまりは、そういうことだろう。

フェイトはこの二人と直接話したことはない。だが、ハッキリと見覚えがあった。城内では勿論のこと、確か叙任式のときも。

「もしかして、『土』と『水』の？」

「ん、ああ。そういえば、話すのは初めてか。俺は連鎖師団『土』の師団長、ネイビス・ティモールだ。ネイビスで構わない。で、こっちが」

「初めまして。僕は幽静師団『水』の師団長、アゼル・クロイツです。僕もアゼルと呼んで下さい」

二人とも友好的な笑顔だった。ネイビスのほうは若干冷めたイメージを受けるが、これまでに培ってきたフェイトの選択眼は彼らの善良さを感じ取った。

「よろしく、ネイビス、アゼル。僕はフェイト・ラインゴッド」  
型通りの自己紹介を終えると、ネイビスがフェイトのことをジロ



ジロと見る。

そして、ニヤツとした笑みを浮かべ、フェイトの肩に腕を回した。  
「おまえ、あの堅物のラーズバードを落としたんだってな。なかなかやるねえ」

「堅物？」

「ちよっと、ネイビス！」

フェイトが片眉を上げ、クレアが顔を赤くして叫んだ。ネイビスは、おまえだって知ってんだろ、と更に顔を歪めて笑う。

「コイツは昔っから男っ気がなくなっくってな。今まで彼氏の一人もいなかったんだぜ。ま、ただの鈍感だな。全く、鈍いんだよなあ、うちの女どもは」

「それで何人の男性が涙を飲んだか分かりませんね」

手を顔の前でひらひらと振りながら、ネイビスはくつくつと笑う。  
アゼルもクスリと笑い、クレアに視線を向けた。クレアはバツが悪そうに顔を逸らして、覚えてなさいよ、と小さく呟いた。

「ま、一人例外もいるけどな。たいしてモテないくせに人一倍敏感な奴が」

ネイビスがルージュに視線を向けた。

ルージュはニコリと口だけで笑って、ネイビスの頭を鷲掴みにする。ミシミシと、嫌な音が鳴り、ネイビスの顔から血の気が引いた。

「それ、誰のことよ」

「お、おまえじゃないことは確かだ」

「そ、ならいいのよ」

ルージュは満足そうに頷いて手を離れた。

頭を抑えて蹲るネイビスに、アゼルが、自業自得です、と呆れたように肩を竦める。

「それで、ネイビス君達は何か用だったの？」

「あ、ああ。そうだった」

シレーネが声をかけると、ネイビスは思い出したように立ち上がり、クレセントに向き直った。

「おまえも長期任務で疲れただろう。そんな疲れも吹き飛ぶようなうまい料理を出す店を見つけたんだ。きっと気に入るはずだ」

ネイビスは嬉々とした表情でクレセントの手を引き、そのまま会議室を出て行こうとする。

だが、

「すみません」

その手は、無造作に振りほどかれた。

呆然と立ち尽くすネイビスから目を逸らし、クレセントは胸元から淡く輝くペンダントを取り出して、ぎゅっと握った。

「私には、行かなければならない所がありますから」

「それ……例の兵士の遺品か？」

ネイビスがハッとした目でクレセントを見る。

クレセントは何も応えなかった。ただ黙って、ペンダントを握っている。

「それはおまえだけが背負うものじゃない」

「いえ、私の責任です」

「クレセント！ おまえまたそうやって！」

「では、失礼します」

そう短く言うと、ネイビスの言葉を見無視して、クレセントは会議室から姿を消した。

途端に静まり返る会議室。何を言えいいのかわからず、ただクレセントの出て行った扉を見据えていたフェイトの耳に、鈍い音が響く。

「ネイビス」

振り返れば、絨毯に視線を落として壁を殴るネイビスの姿。血の滲んだ拳を強く握り、唇を噛み締めたネイビスは、喉の奥から押し出したような低い声で言った。

「くそっ……あのバカヤロウが」

吐き捨てられたような呟きは、拳から流れる血と共に、床に広がる赤い絨毯に吸い込まれていった。



## 目覚めた感情

窓一つない密閉された室内を照らす唯一の明かりは、机上に置かれた銀燭から零れる微かな光。そのような薄暗い空間の中に椅子に腰をかけた男と、その前に立つ男の影がぼんやりと浮かび上がる。

「そうか。万事順調のようだな」

落ち着いた男の声。その声は僅かながら、しかし確かな喜びの感情を見せていた。

「はい。我々は次の行動に移ります。“あれ”を移動させる手段はいかに？」

こちらは若い男の声。先の男と違い、何の感情もこもってない声だ。

「抜かりはない。だが、一つ変更点がある。例の件は、こちらで処分することにした」

瞬間、若い男の顔に驚愕の色が浮かび、すぐに逆上したように男に掴みかかった。

「何故ですか！？ あれは我々がやってこそ意味がある！ 他人にやられても意味がない！」

「落ち着け。万が一にも君達が疑われでもしてみろ。その後の計画は全て台無しだ」

「しかし、それではアイツが救われないっ！」

男の胸倉を掴んだまま、若い男は項垂れる。男は若い男の腕を掴むと、決して乱暴にならない手つきで手を離れた。

「救うとは？ 彼らへの報復が君達の望みではあるまい。確かに奴の気は晴れるかもしれんな。しかし、彼らはほんの一端に過ぎないのだぞ」

「それは……」

「それに復讐するだけで終わりなら、君は我々の協力など必要なか

つたはずだ」

そこで男は言葉を切り、言い聞かせるような口調で、若い男の肩に手をかける。

「改革、それこそが君達の望みだろう？」

「はい」

「こんな所でいらぬ疑いをかけられでもしたら、その望みは叶わなくなるかもしれぬのだぞ」

「ですが――」

「我々と君達との契約を忘れたわけではないな？」

「……」

「君達が約束の品さえ渡してくれるのなら、私も約束は守ろう。彼女の引渡しと例のもの」

若い男の表情が動く。

「……分かりました。ではその間我々は何をすれば？」

「待機だ。くれぐれも無茶はするな。君は必要な人材だ」

若い男は無言で男に背を向け、扉へ向かうと、そのまま一度も振り返らずに部屋の外へと消えていく。

しっかりと扉が閉められ、足音が遠ざかっていくことを確認した男は本棚へ手を伸ばした。一冊のファイルを手に取り、無造作に開く。男の口元が歪に吊り上げられた。

「そう。君の換えはいない、あの人形と違ってな」

※

その日、聖王国シーハーツは午後から雪が降っていた。ペターニの石畳も、今では真っ白なヴェールに覆われて煌いている。

しかし、そんな神秘的な光景などマリアにとっては何の感慨もない。青い髪に降り積もる雪を払いながら、マリアは忌々しげに空を見上げた。

「突然降り出すなんて聞いてないわよ、全く」

意味のない悪態を吐きながら足を進めていると、綺麗に整えられた花壇へと辿り着く。もう花壇を作った人物はいないというのに、相変わらず綺麗なままだった。

気候が温暖で、雪が降ることなど滅多にないシーハーツではこうして一年中花がそこかしこに咲いている。白い地面から顔を出す色とりどりの花は、見ているだけで心を穏やかな気持ちにさせた。

「ソフィアがよくここに来るのも、分かる気がするわね」

私には全く似合わないけど、と呟いてマリアはその場を去ろうとし、向かいの家から聞こえる叫び声に足を止めた。

静かな雪の日には不似合いな、悲痛な叫び声だった。

マリアはそつと家に近づき、窓から中を覗き込む。

そこに居たのは、まだ年若い女性と白銀の髪を持つ女性。そして、小さな女の子。

「あの子……」

マリアはその白銀の髪の女性に見覚えがあった。そう、ほんの数時間前のことだ。シランド城ですれ違ったのを覚えている。

もっとよく顔を見ようと、マリアが窓に近づくと、年若い女性――おそらく少女の母親――の声ははっきりと耳に届いた。

「どうして貴女達が生きて、あの人だけが帰ってこないのよ!？」  
誹謗中傷の嵐だった。

第三者であるマリアですら耳を塞ぎたくなるような言葉を浴びせられているというのに、白銀の髪の女性は怯みもせず立っていた。まるで女性の言葉に対し何も感じていないように。まるで、彼女に

は感情がないのではないのかと疑うほどに、女性は眉一つ動かすことなくそこにいた。

そんな彼女の態度が女性の怒りに油を注いだのだろう。罵倒はさらに苛烈に、理不尽に続いていく。

「部下を見殺しにしてよく平気ね!? あの人命なんてどうでもよかったってこと!? 私是一年以上もあの人を待っていたのよっ!」

白銀の髪の女性の表情が微かに動き、何か言いかけて、口を噤んだ。

マリアはここで漸く理解した。白銀の髪の女性の正体。

「あの子が、クレセント・ラ・シャロム。グリーテン潜入部隊の指揮をとっていたのが、こんな子なんてね」

マリアは髪をかき上げた。

「それに、シャロム家」

ゆっくりと記憶を掘り返していく。

シャロム家。ラッセルと共に政治の世界に深く関わりだしているマリアは、この名前をよく知っていた。

「確か、彼女の母親は造反の疑いで要注意人物に指定されてたわね」ペターニの領主でもあるシャロム家は商家の取り纏め役をも務める優秀な家柄で、実績もシーハーツ内では常にトップクラスを誇る大貴族ではあるのだが、一つの問題があった。

シャロム夫人がペターニの商人を抱き込み、裏でなにかを企んでいるとの情報が複数件入っているのだ。その件に関してはマリアが行政に携わるずっと前から証言が取れていることであり、以前から調査を続けていたのだが、現在の時点で決定的な証拠はなく、煮え切らない状況が続いていた。

そういえば、シャロムの一人娘はずっと任務で出ているとラッセルが言っていたのを思い出しながら、マリアはふたたびクレセントに視線を向ける。

「返してよ! あの人を、返しなさいよお!」

ついに女性が泣き崩れた。その場にペタリと座り込み、顔を両手で覆う。

クレセントは静かに女性に近づき、淡く光るペンダントを差し出した。

「これを……」

「——っ！」

女性をそれを見るやいなや、クレセントの手から乱暴に奪い取り、両手で固く抱きしめた。

クレセントがそんな女性に深く頭を下げ、しかし何も言わずに家を出ようとした時、何かが彼女の服の裾を引っ張った。クレセントが視線を下に向けると、ぬいぐるみを抱いた少女が大きな瞳でクレセントを見上げている。

「ばば、帰ってこないの？ わたしが悪い子だったから、きらわれちゃったの？」

「……っ」

クレセントの翡翠色の瞳が、初めて大きく揺れた。無感情だった瞳が僅かな生気を宿し、少女を見る。

床に膝をつき、クレセントは少女を強く抱きしめた。突然のことに少女は目を白黒させている。クレセントは優しく少女の髪を撫で、瞳を閉じた。

瞼の裏に映るのは、幸せそうな笑顔でペンダントを握っていた、男の顔。

『可愛い娘でして、明日で四歳になるんです』

照れ臭そうに、でも本当に幸せそうに、男は言ったのだ。

「違う。あなたは悪くない。お父さんはあなたの事を、本当に……大切に想ってた」

クレセントは想う。あの時の男の気持ち。

「じゃあ、なんで帰ってきてくれないの？ 今日ね、わたしの誕生



日なの。前の前の誕生日は、これをくれたんだよ」

少女は手に持っている兎のぬいぐるみをぎゅっと抱きしめた。

『去年は祝ってやれなかったですから、今年は盛大に祝ってやらないと』

まる鋭利な刃物で胸を抉られたかのような衝撃がクレセントを襲う。無意識のうちに服の上から胸を強く握るが、痛みが鎮まることはない。

「お姉ちゃん、泣いてるの？ どこかいたいなの？」

少女の小さな手がクレセントの頭を撫でた時、クレセントの瞳から大粒の涙が零れた。抑えるものが決壊してしまったかのように、クレセントの涙は止まらない。

これが悲しいということだろうか。クレセントは初めて抱く感情に一抹の不安を覚えた。胸が苦しくて、どうにかなってしまいそうなのだ。

しかし、いくら胸を押さえようとも、その痛みと苦しみは引かない。

絶望でも、恐怖でもないこの感情は一体何なのか。答えの出ない自問自答を重ねながら、クレセントはまた涙した。

「ごめん……なさい……」

自らの頬を流れる雫を肌で感じながら、クレセントはひたすらに謝罪の言葉を繰り返した。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

そう、何度も。何度も。胸を襲う確かな痛みを感じるたびに、また一筋流れる涙を感じながら、クレセントは謝罪の言葉を繰り返す。壊れた人形のように、ひたすらに同じ言葉を吐き出し続けた。

※

「クレセントってどんな子なんだい？」

ネイビスとアゼルが退出し、ルージュとシレーネも私用で席を外した会議室で、フェイトは真向かいの席に腰掛けるネルとクレアにそんな質問をしていた。

その質問にネルとクレアは顔を見合わせ、困ったように笑う。

「どうかしたのかい？」

「申し訳ないんだけど、私達もあの子に関してはあまりよく知らないのよ」

フェイトは首を傾げた。先ほどの会話のスムーズさから見て、それなりにクレア達と親しい間柄かと思っていたからだ。

ネルが足を組みなおして、言った。

「まあ、全く知らないってわけじゃないよ。でも、ほんとにちょっとしたことだけさ。それでもいいかい？」

「うん、それは問題ないよ」

フェイトは頷く。

「クレセントはペターニ領主の娘だね。師団に入ったのは十八の時だったかな。代々商家であるシャロム家の娘が軍属に入っているんで、一時は結構話題になったんだよ」

「実力も皆の期待を遥かに超えていたわ。特に武器の扱いと発想の転換に関しては、天才よ」

「あの子にかかればこんなペンだって立派な武器になる」

そう言ってネルは机に置いてあった羽ペンを、指でくるくると回した。

「それともう一つ。隠密としての才能も抜きん出ていたのさ」

「あの子ね、この辺じゃ『音無しの風』って呼ばれてるの」

「おとなし？ 音が無いってこと？」

フェイトの問いに、ネルとクレアは同時に頷いた。

ネルは手にしていた羽ペンを真上に放り、それをキャッチする。

「そう。音が無い。あの子に尾行なんかされたら、私でも察知できるか分からないよ」

「ネルが？ 嘘だろう？」

ネルは隠密のエキスパートであり、国内でも一、二を争う実力者だと聞いている。そんなネルが察知できないほどの隠密が二級構成員に留まっているわけがない。

「他の能力に何か問題があるのかい？」

「いいえ。指揮、武力、施術。どれをとっても劣るところはないわ。本来なら、一級構成員か師団長になってもおかしくはないでしょうね」

「なら、なんで」

「母親に問題があるんだよ」

ネルは羽ペンを置き、机に頬杖をついた。その顔は不機嫌極まりない。

「シャロム夫人の造反疑惑。あんただって耳にしたことくらいあるだろう？」

「確か……ペターニの商人達を纏めてなにかやろうとしてるってやつ、だったっけ？」

ネルのあからさまに不機嫌な態度にフェイトは少々戸惑いつつ返す。

クレアは苦笑して、言葉を継いだ。

「その通りよ。そんな疑いのある人物の娘をそう易々と一級構成員、ましてや師団長になんて出来ない。頭の固い貴族さんの考えね」

「なるほど。ネルが不機嫌なわけが分かったよ」

情に厚いネルのことだ。母親に疑いがあるからといって、才能のある娘まで被害を蒙っていることが気に入らないのだろう。

ネルはガタリと椅子から立つと、扉に手をかけた。

「ネル？」

「むしゃくしゃしてきたから、ちょっとファリン達と情報収集してくる」

そう言うと、ネルは苛立たしげに靴を鳴らして出て行った。その後姿を見て、クレアは肩を竦めて笑った。

「可哀想に。疲労で倒れたりしなきゃいいけど」

「ハハ」

機嫌の悪いネルに八つ当たりのように扱き使われるタイネーブとファリン。その状況が容易に想像できてしまい、フェイトは小さく苦笑する。

「そういえば、また話は変わるんだけど」

「何？」

一先ず話しがひと段落したところで、フェイトは気になっていたもう一つの話題を切り出す。

「クレセントってシレーネさんやネイビスからやけに好かれてるようだけど……」

クレアは突拍子もないフェイトの疑問に、一瞬目を丸くしてから、ああ、と笑った。

「シレーネは私も分からないわ。ただクレセントのことは師団入りする前から知っていたらしいけど」

「へえ。でも、シレーネさんの変わりようには驚いたよ。ちょっと抜けてる大人しい人ってイメージあったから」

「でしようね。私だって驚いたわよ。任務でクレセントがちよつとでも怪我するとすぐ暴走。その度にラッセル様の雷が落ちてたわ」

そう言って額を抱えるクレアの姿は、その時に怒ったであろう被害の現状をありありとフェイトに伝えてくれた。

フェイトはその暴走で満身創痍にされたことを思い出し、大きく身震いをする。

「ネイビスに関しては……なんか言うのも馬鹿らしいというか……」  
「もしかして、クレセントに勝負しかけて負けちゃって、再戦してるうちに——なんてね」

「……」

「え、本当に？」

クレアが黙り込む。フェイトとしては冗談のつもりだったのだが、どうやらの射てしまったらしい。

まさか、そんなベタな。

フェイトがそう思って乾いた笑いを浮かべたところで、クレアが溜息混じりに口を開いた。

「ネイビスは単純だから。異例の速さで2級構成員にまでなったクレセントが気になったらしくてね。しつこく頼んで、ようやく一度だけっていう約束でクレセントが了承したのよ。で、結果はクレセントの圧勝。」

クレアは背もたれに寄りかかり、呆れとも微笑みともつかない、曖昧な表情で続けた。

「当時ネイビスは『闇』の1級構成員で、腕が立つって評判だった。彼もそれは自覚していて、少し天狗になっていたところがあったのも、まあ事実ね。そんな彼が師団に入ってたった三年の、それも見た目華奢な子に負けたなんてことがあったら」

「相当悔しかっただろうね」

「そういうこと。でもお陰でネイビスはサボりがちだった訓練も真面目に取り組むようになったんだけどね」

それでもクレセントには負け続きだけど、とクレアは付け加える。フェイトはなるほど、と頷いて、今まで手をつけていなかった紅茶を口を含む。クレアが注いでくれたものだ。

少し苦めのそれも、クレアが注いでくれたことを考えると甘く感じ、そんなことを思う自分はもうどうしようもないくらいに彼女に

惚れてしまっているのだと、フェイトは苦笑してしまった。

「ところでさ、さっきネイビスが『闇』の一級構成員だったって言うってたけど、どうして今は『土』にいるんだい？」

何気ないフェイトの言葉にクレアの瞳は大きく見開かれた。ただならぬ雰囲気、フェイトは手に持っていた紅茶を置く。

カップの中の液体が不安げに揺れ、波紋が広がった。

「ごめん、聞いちゃいけないことだった、かな」

「ううん、フェイトは悪くないわ。でも……ごめんなさい。私の口からは言えない」

「そうか、分かったよ」

「ごめんなさい」

「気にするなよ」

フェイトは身体を伸ばして、申し訳なさそうに項垂れるクレアの頭に手をやり、緩々と撫でる。

クレアは擦ったように目を細め、極上の笑顔を見せた。

「不思議ね。こんな些細なことが、幸せでたまらない」

「僕もだよ。君と居るだけで幸せだ」

「ふふ、相変わらずくさい台詞ね」

「そう言うなよ」

フェイトは困ったように笑ってクレアの頭から手を離し、椅子から立ち上がる。

そして、そのまま机を迂回して、優雅に椅子に腰掛けるクレアの前に立った。

「クレアだって満更でもないだろう？」

「ええ、すごく嬉しい」

そう言ってクレアも立ち上がり、少し背伸びをしてフェイトに口付ける。微かに触れるだけのキス。

一瞬ぽかんとしていたフェイトだったが、すぐに照れたような笑みを浮かべ、そっとクレアの唇に自分のそれを重ねた。

たった、それだけ。

それでも、彼らは十分すぎるほどの幸せを感じていた。

ただ傍に居るだけでこんなにも胸が満たされることの幸福。

幸福という言葉は、まさにこの瞬間のためにあるのだらうと、フ  
ェイトはそつとクレアを抱き寄せながら目を閉じた。

しんしんと降り積もる雪がシランドを包み込む中、一つになった  
男女の影は暫く離れることはなかったのだった。

※

両目を赤く腫らして先ほどまでいた家屋から出てきたクレセント  
は、花壇の傍にあるベンチに腰をかけている青髪の女性を一瞥する  
が、すぐに視線を逸らして歩き出す。

クレセントが女性の横を通り過ぎた時、マリアは視線を真正面に  
向けたまま、口を開いた。

「どうしてあなたが謝るの？ この国の隠密は命を捧げる覚悟で任  
務に臨んでいると聞いたのだけど」

クレセントが足を止め、振り返る。

初対面でぶしつけな質問をされているにも関わらず、嫌な顔一つ  
しない。

「ずっと見ていたのはあなただったんですね」

「ええ、悪いとは思ったけど、好奇心が勝ったわ。それで、どうし  
て謝ったの？」

「ペターニを目前にし、私は気を抜いてしまいました。もし、あの

時もっと注意を払っていたなら」

「防げていたかもしれない、と？」

クレセントは頷く。

女性は口の端を吊り上げて笑うと、おもむろに立ち上がった。

「構えなさい」

「え？」

クレセントは突然のことに眉を顰めるが、マリアの威圧的な雰囲気  
に少し身体を強張らせ、前を見据えた。

その瞬間、

「――っ!？」

光の弾丸がクレセント頬を掠める。

クレセントは驚きのあまりその場に座り込み、どくどくと脈打つ  
心臓を右手で強く押さえた。

女性が腰から何かを取り出したのは見えていた。だが、そこから  
光が放たれたと思ったときには、既に生暖かいものが頬を伝っていた。

真っ白な雪の絨毯に、紅い花が咲く。

「あなたは……一体」

クレセントが動揺に満ちた目で女性を見ると、彼女は平然とした  
顔で小型の金属の塊を仕舞っていた。

ばさりと髪をかき上げ、女性がクレセントに歩み寄る。

「油断してなかったら、避けられた？」

避けるどころか、少しでも身体をズラすだけで精一杯だった。こ  
の身長で敵と対等に渡り合うために会得した身のこなしとスピード  
も、なんの役にも立たなかった。

もし、あの時油断していなかったとしても、あの男性は。

「助けられなかった……ということですか」

「そういうことね。だからあなたが気に病むことなんてないんじゃない？」

ぶっきら棒な口調だったが、どこことなく優しさを感じる声色だっ



た。女性の表情も、クレセントを責めているようなものではない。クレセントは不思議で仕方なかった。一体この人物は何をしたいのだろう、と。

人を小馬鹿にした態度をとったかと思えば、今は優しい雰囲気。こんな人物に合うのは初めてだった。

クレセントが不思議そうに女性を見つめていると、女性は罰が悪そうに顔を顰める。

「……そういう問題でもないわよね。ごめんなさい」

女性はいまだ座り込んだままのクレセントの前に膝をつく、傷口へ手を当てた。途端、蒼い紋章が浮かび上がり、傷は跡も残さずに消える。

「本当は当てるつもりじゃなかったんだけど、まさか動くとは思わなかったわ」

「私、余計なことしたんですね」

眉を下げて、クレセントが言う。

女性は気まずそうに頬を掻いて立ち上がり、クレセントに手を差し出した。

「いえ、その、ほ、褒めてるのよ。まさか初見で動かれるなんて思ってたから」

「まぐれです」

クレセントはその手を握り、立ち上がる。

「あなたね、人が折角褒めてるんだから素直に嬉しがりなさい……って何よ、その顔」

まるで珍獣でも見るかのような目で見あげてくるクレセントを女性は訝しげな目で見据えた。クレセントは慌てて首を振る。

「いえ、不思議な人だと思って」

「それ、褒めてるの？」

「そのつもりですけど」

控えめにクレセントが言うと、女性は渋々ながら納得したようだった。

「もういいわ。なんだか馬鹿らしい」

「ご、ごめんなさい」

「なんであなたが謝るのよ」

「いえ、なんとなく」

俯きがちにそう言うクレセントの額に、女性はびしっと指を突きつける。

そのまま、二、三回額を小突き、腰を曲げて顔の高さを合わせた。真っ直ぐに自分を見つめてくる彼女の視線を、クレセントはなんだか擦ったく思った。

「いいこと。自分が悪くないのに謝らないことね。謝ったらその時点で負けよ」

「あ、はい——どうかしたんですか？」

今度はクレセントが首を傾げる番だった。女性がさっきのクレセントと同じように目を丸くしているのだ。

そして、ふっと優しい笑みを浮かべた。

「何よ、笑えるんじゃない」

「え……？」

クレセントは自分の頬に手を持っていく。触ったところで分かりなどしないのだが、無意識のうちに手は動いていた。

「私、笑っていますか？」

「え、ええ」

クレセントがあまりにも信じられないといった口調なので、女性は眉を顰めながら頷いた。

が、次の瞬間クレセントから出た言葉に、女性は思わず仰け反ることになる。

「笑ったのなんて……物心ついた時以来、初めてです」

「はあ!？」

素っ頓狂な声がペターニの路地に響く。

女性はクレセントの肩をがっしりと掴むと、腰を曲げて顔を覗き込んでくる。

「嘘でしょう？」

「嘘？　なぜ、私が嘘を？」

「友人と遊んで笑ったりとか、何か楽しいもの見て笑ったりとか、色々あるじゃない」

女性がそう言うと、クレセントは困ったように眉を下げた。視線を逸らし、行き場を失ったそれを道端に作られた小さな雪だるまへと向ける。

「……友人は、いませんでした」

「え？」

「友人らしい友人が思い当たらないんです」

寂しいことですね。

その言葉をクレセントを続けることが出来なかった。

寂しい、そんなこと今まで一度だって思ったことがなかったのに。クレセントは急に不安になった。この女性と居ると、奥深く、誰にも触れられないようにしていたものが引っ張り出されるようなのだ。

「ど、どうしたのよ？」

いきなり黙り込んだクレセントをどう思ったのだろうか。女性の声に僅かな焦りが伴う。クレセントは自分の手をゆっくりと胸に持っていくと、小さく囁くように言った。

「なんだか、不思議です、とても」

「は？」

「こんなの、私には過ぎた望みなのに」

そう言って、悲しそうに微笑む少女のような女性に、マリアは無意識のうちに眉根を寄せていた。

何時だろうか。こんな微笑を見たことがあった。

『仕方……ないですよ。やっぱり叶わない夢だったのかな』

浮かんだのは、ソフィアの顔。

まだクレアとフェイトが今の恋人関係へと発展するよりも前に、ソフィアはフェイトに告白した。だが、その時にはもうフェイトの心はクレアのこと一杯だった。そのことを知ったソフィアは泣きそうな顔で、声で、マリアに微笑んだのだ。

どうして諦めるんだろう、とマリアは思った。諦めたらそこで終わりなのに、と。

聞き分けの悪い子供と思われるかもしれない。引く事だって大事故かもしれない。でも、

『決して諦めないで。最後まで生きて。あなたにはそう出来る力があるのだから』

母の言葉が、最後の優しい笑顔がその時のマリアの脳裏を掠めた。その言葉を聞き、胸に秘めたあの日以来、マリアは諦めた事などなかった。どんな逆境の中でも、どんなに辛いときも。

ルシファーとの戦いで全てを消されそうになった時も、諦めなかった。

諦めなかったから、自分は確かにここに存在していると信じたから、今生きているのだ。

そのことはマリアにとって胸の内に秘められた確かな誇りであり、母が残した形見でもあった。だからこそ、マリアは諦めるということが何よりも嫌いだった。

しかし、目の前の女性は幸せになることを諦めている。

マリアは掴んだままだったクレセントの肩に、更に力を込めた。細すぎる肩はそれだけで折れてしまいそうだったが、そんなことは

気にしない。

「諦めるんじゃないわよ」

「はい？」

「努力したの？ 手に入れるためにあなたは動いたの？」

マリアの真剣な眼差しに、言葉に、クレセントは身体を強張らせる。

そして、顔を伏せ、震える声で言った。

「この世界に、私は何も期待していません。それに私には、そんなこと望む資格も――」

「資格？ そんなの誰が決めたのよ。神様？ 自分が嫌だっと思うなら神にだって抵抗しなさいよ」

「神、に？」

「そうよ。例えば神がお前は幸せになると言うなら、そんな神倒せばいいわ」

そう言ってマリアはクレセントの肩から手を離し、ホルスターからフェイズガンを抜いて空に放つ。光の軌跡はまっすぐに空に伸び、雲間から差し込む太陽の光と一体化した。

「あなたを倒してでも私は幸せになる、ってね」

自信たっぷりに微笑むマリアの顔は、一筋の光に照らされていた。クレセントは暫く呆然とその笑顔を見つめていたが、やがて小さく吹き出した。

「か、神様を倒すって……っ」

くすくすと笑うクレセントを見て、マリアは急に自分が恥ずかしいことをしたような気になった。顔に熱が集まり、朱色に染まっていく。

「わ、笑うことないじゃない！ 人がどんな気持ちで……っ」

「ふふっ……ご、ごめんなさ……あははははっ」

「ちよっとっ！」

堪えきれなくなったクレセントは、ついにその場に膝をつき、お腹を抱えて笑い出した。

地面についた膝から伝わってくる雪の冷たさを感じながら、クレセントは笑う。

息が苦しい。

喉が痛い。

しかし、クレセントはそれもいい、と思った。

今までずっと怖かった。この感情を曝け出して、何かを欲して、止まらなくなることが。己の運命を見失うことが。

こんな世界には、なんの期待も抱かない。そう思うことで、自分を守ってきたのかもしれない。こんな自分でもと希望を抱いて、それが崩れるのが怖かったから。

でも、神をも倒すと言ったこの蒼髪の女性が居てくれるなら、何も怖くない。

近いうちに別れの時が来ると分かっている。

今はただ、この味わったことのない心地良さに身を委ねていたい。そう思い、クレセントはまた笑うのだった。

## シャロム家

フェイトとクレアの居る会議室に息を切らせたヴァンが飛び込んできたのは、夕日の橙色で室内が紅色に染まる時刻だった。

静かな会議室に緊張が走った。クレアもフェイトも息を飲んでヴァンの言葉を待っている。

神秘的な面持ちでクレアの前に跪くヴァンの額から、汗が一滴落ちる。ヴァンは手の甲で汗を拭い、顔を上げた。

「シャロム夫妻が、何者かにより殺害されました」

「な!？」

「まさか……」

フェイトがを見張り、クレアも信じられないといった風に首を振る。

「お二人は早急に現場に赴き、ネイビス様と協力して調査に当たれるとことです。例の件は一旦ネル様、ルージュ様に任せよ、と」

「あ、ああ」

「ヴァン、あなたは？」

クレアが問うと、ヴァンは俯く。月光のような金糸が彼の端整な顔に暗い影を作りだした。

「私はクレセントを探してきます」

「……そう、よね。お願いね、ヴァン」

「は」

ヴァンは頭を下げ、そのまま会議室を後にした。

クレアもフェイトも、どうしようもない気持ちたちが胸の中で渦巻いていた。

やっと母国に帰ってこれた途端にこの事件。クレセントは一体どう思うだろう。

クレセントは両親を好いていない、またその逆もあることは軍内

部にとって周知の事実であり、フェイトも先刻クレアから聞かされていた。シャロム夫妻は実の娘であるはずのクレセントを、まるでそこに存在しないかのように扱っている、と。

しかし、だからと言ってクレセントはこの事実を喜ぶだろうか。否、そんなはずがない。どんなにいがみ合おうとも、家族なのだ。

「こんな時なんて言っただけであげたらいいのか、分からないわ」  
クレアが声のトーンを落として言う。

「ネルの時もそうだったの。何もしてあげられなかった」

「そんなことないよ」  
「え？」

フェイトの穏やかな声にクレアは顔を上げた。微かに潤んだ褐色の瞳がフェイトを映す。

「ネル言ってたよ。クレアが居てくれたから乗り切れたって。ずっとネルの傍に居たんだろう？ ネルが一人にしてって言ったのも聞かずに」

「う、うん」

「一緒になって泣いてくれて、すごく救われた。あの子にはいくら感謝しても足りない。そう言ってたよ」

「ネルが……」

「でも、このことは恥ずかしいから内緒にしててくれ、って言われたんだ。だから内緒だぞ？」

フェイトは人差し指を口に当てて片目を瞑った。

そして、クレアの頭をさらりと撫でると、真剣な表情を浮かべた。  
「行こう。こんなことをした犯人、なにがなんでも見つけ出して裁きを受けさせてやる」

「そうね、絶対に」

眉を吊り上げ、怒気の含んだフェイトの声。クレアも同意するよう頷く。

蒼と銀の風が、ペターニへ向けて疾走した。



※

「ちょっと、何時まで笑ってんのよ」

ペターニの外れにある第三修練施設。ベンチに腰を下ろし、くすくすと笑い続けるクレセントに、いい加減怒り疲れたマリアはげんなりと言った。

「ご、ごめんなさい」

と、クレセントは言うものの、まだ口に手を当てて笑いを堪えている。

マリアは盛大な溜息を吐き、手にしていたコーヒーを口に含んだ。クレセントも笑いを飲み込むようにコーヒーを飲む。

「それにしても、何、この砂糖とミルクの量」

「お口に合いませんでした？」

「甘すぎるわ」

カップの中の液体はコーヒーというよりも、コーヒー風味のミルクではないかと思うほど甘かった。

クレセントに頼むんじゃないかった、とマリアは後悔し、甘いそれをまた口に含んだ。

「ごめんなさい、普段これで飲んでるので……」

「お子様ねえ」

「もうそんな年でもないんですけどね」

「そういえば、あなた何歳なの？」

一瞬の迷いの後、クレセントは口を開いた。

「……二十四です」

「へえ、二十四ね——って二十四!？」

マリアの手からカップが落ちる。それを間一髪のところでは受け止めたクレセントは苦笑した。

今朝もこんなことがあったな、と。

「信じられないわ」

クレセントからカップを受け取ったマリアは、奇跡的に零れていなかったコーヒーを覗き込んだ。勿論信じられないとはコーヒーが零れていなかったことに対してではなく、クレセントの年のことであるのだが。

クレセントは横でぶつぶつと何か呟いているマリアをチラリと見て、空になったコーヒーカップを膝の上に置いた。

「同じ反応をあなたにそっくりな男性からされました」

「私と似てる？ フェイト？」

「はい、お知り合いですか？」

「私の双子の弟」

クレセントが目丸くしてマリアを見た。

「双子？」

「そう、そっくりでしょ？」

「とつても。じゃあ、マリアさんもグリー——」

「ストップ」

マリアはクレセントの顔の前に手を突き出して言葉を遮った。

いきなりそんなことをされたクレセントは首を傾げてマリアを見上げる。

マリアは残ったコーヒーを一気に飲み干し、クレセントにカップを突きつけた。

「マリア」

「え？」

「敬語が癖になってるならそれはそのままでもいいわ。でも、さんは止めて。友人にさん付けなんてされたくないの」

「……っ」

クレセントはその言葉に弾かれたように下を向いた。両手で持ったカップをぎゅっと握り締めて、マリアの言葉をゆっくりと噛み砕いていく。凍ってしまった心が、どんどん溶かされていく感覚だった。

束の間の沈黙の後、クレセントは顔を上げ、

「なんだか、擦ったいです……マリア」

嬉しそうに笑うのだった。

「クレセント！」

長身の男が修練施設の門から顔を出した。

クレセントはすっと立ち上がり、その姿を確認する。

「ヴァン様」

「こ、ここに居たのか……やっと」

そこまで言ってヴァンは口を閉ざした。その視線の先に居たのは、マリアだ。

急に口を閉ざしたヴァンに、マリアが不思議そうに声をかけた。

「どうしたの？ 何か慌ててたようだけど」

「あ、ああ、そうでした。クレセント、落ち着いて聞いてくれ」

「はい」

「シャロム夫妻が、殺された」

驚いたのはクレセントではなくマリア。

クレセントは表情を変えない。その瞳に“悲しみ”の色はなく、変わらない無表情がそこにあった。

瞳を閉じて、そうですか、と呟くクレセント。その態度に食って掛かったのはマリアだった。

「ちよっと！ 自分の親が殺されたっていうのになんでそんな落着いてるのよ！？」

「……悲しく、ないんです。親だとは思ってなかったからでしょう  
か」

「っ！」

乾いた音が、広い修練施設に響く。

あまりにも突然のことに、クレセントは何が起きたのかをすぐには理解できず、ただ痺れるような痛みを頬に感じていた。

頬に右手を添え、クレセントは呆然とマリアに視線を向け、大きな瞳を瞬かせる。

「マリア？」

泣いていた。マリアは透き通るような碧の瞳一杯に浮かべた涙を零さないよう、必死に堪えていた。

ヴァンもどうしていいのかわからず、その場に立ち尽くしている。マリアは勢いよくクレセントの胸倉を掴むと、そのまま壁に押し付けた。

クレセントの身体が宙に浮く。

「今の言葉……もう一度言ってみなさいよ……」

「くっ……」

「親だと思ってなかった？ そんなこと二度と口にするんじゃないわよ！」

クレセントはマリアがどうしてもここまで怒るのか検討もつかず困惑した。

「どんなに憎い親でもね、死んだら会えないの。あとで後悔したって遅いのよっ！」

「マリア……まさか」

マリアの口振りで、クレセントはマリアが怒る理由に辿り着く。

おそらく、マリアの親は……。

「ごめん、なさい」

クレセントは自分の浅はかさを呪った。

正直、クレセントがシャロム夫妻を親と思っていたのは本当だった。ただ言葉にすることではなかったのだ。自分の胸の内に秘め

ていればよかった。

今まで、そうしていたように。誰も理解などしてくれないのなら、いっそのこと誰にも見せないほうが楽だった。

少し、ほんの少しだけど、マリアなら理解してくれるかもしれない。そう思ったのは高望みだったのかもしれない。

クレセントはマリアを両目に映す。しかし、俯いているマリアの表情が見えず、それがクレセントを酷く不安にさせた。

「ごめんなさい……」

クレセントはもう一度謝った。

すると、急に胸倉を掴んでいた力が抜け、クレセントの足が地面に着いた。

「ごめん」

「え？」

「あなたにも何か理由があるのよね。理由もなしにそんなこと言う子じゃないってのは分かってる。自分の境遇をあなたに押し付けるなんて、最低ね」

「……っ」

クレセントの身体が揺れる。

「どうして……あなたは」

それはすぐ傍にいるマリアの耳にすら届かないような細かい声で、クレセントの意思とは関係なしに零れ落ちた囁きだった。

額に手を当てて眉を顰めるマリアを見据えながら、クレセントは自分の中の覚悟が、必死に隠してきたものが崩れそうになるのを必死で押さえた。

そして、俯くマリアの頭に小さな手を乗せ、クレセント特有の、口の端を少し上げたただけ微笑みを見せる。

「そんなことないです。ありがとう、マリア」

それが、今クレセントがマリアに伝えることが出来る精一杯の感謝。

マリアは小さく首を振ると、そのままペターニへと駆け出した。

クレセントとヴァンもそれに続く。

決して早くない速度。でも、クレセントは追い抜くことはしなかった。前で靡く蒼の髪を見つめながら、クレセントは口の中で呟いた。

「ごめんなさい」

先程の謝罪の言葉とは違った意味を持つ言葉。

それがなんの意味を持つのか、クレセントのみが知っていた。

※

「よお、夫婦揃ってお出ましか？」

急ぎ足でペターニに向かったクレアとフェイトを待ち受けていたのは、変わらない雰囲気 Neybis だった。

日は既に落ちていて、無数の星が空に瞬いている。

クレアとフェイトは頭を下げてくる師団兵達に軽く挨拶をしながら Neybis の元へ歩み寄った。

「どういふことなの？」

「俺もよくわかんねえよ。ただ、物取りの犯行じゃないと思うぜ。

金品は一切盗まれてないみたいだし、使用人は全員無傷だ」

「怨恨の可能性が高いつてことかい？」

フェイトが口を挟む。Neybis は考えるように頭を掻き、肩を竦めた。

「多分な。それにしちゃあっさり殺されてたが」

「あっさりって？」

「なんていうか、普通恨みだったらもつと苦しめてから殺るもんだろ？　それが頸動脈一発」

ネイビスは手で首を切るマネをする。

「まあ、それはおいておきましょう。それよりも現場を見せてくれるかしら？」

「ああ、こっちだ」

ネイビスが軽く手を振って屋敷の中へ入っていく。フェイトとクレアもネイビスの後に続いて屋敷に足を踏み入れた。

広い屋敷だった。しかし必要最低限の調度品は質素というよりも、一種の高級感を感じさせる。過度に豪勢で派手な内装が目立つ貴族の館では珍しい部類に入るだろう。

玄関から入り、真正面にある階段の右手の廊下の奥から二番目。そこでネイビスは足を止めた。

「遺体はまだあるぜ。大丈夫か？」

ネイビスがクレアを気遣うように言う。勿論クレアの答えはわかりきっていた。

「大丈夫よ」

ネイビスは頷き、ゆっくりと扉を開ける。部屋の中央にはシートを掛けられた遺体が二つ、丁寧に置かれていた。

クレアは現場を荒らさないように遺体に近づき、顔の前で手を合わせた。そして、慎重にシートをめくり、傷口を確認したクレアは難しい顔で呟く。

「これといって特徴的な傷口じゃないわね」

「こっちも同じ、か」

フェイトもシートを捲り傷口を確認するが、別段珍しくもない傷口だった。

ざっと室内を確認するが、とくに荒らされた形跡もなければ揉み

あつた形跡もない。

「この他に不審な場所は？」

「わかんねえな。今調べさせてるが広すぎんだよ、この屋敷」

「じゃあ、私とフェイトも手分けして探すわ。フェイトは二階をお願い」

「ああ」

「何かあつたらすぐ知らせるから」

そう言うのと、クレアは急ぎ足で階段を駆け下りた。

クレアは一階の部屋を片っ端から調べた。しかし、調べても調べても、血痕が残っていたり荒らされた形跡がある場所はない。

そして、最後の部屋。

「部屋っていうより、図書館ね」

明かりを点けながら、クレアは感嘆の声を漏らした。

小さな図書館といっても過言ではないくらいの量の本棚。そこにはありふれたタイトルの本から、クレアが知る限り相当な価値がつくほど貴重な本など、様々な種類の本が並べられていた。

クレアは自分の身長を軽く越す本棚の間を歩いていると、ふと違和感を覚え、立ち止まった。踵を返し、歩き出す。少し歩いて止まる。そしてまた反対を向き、歩く。

「音が……違う？」

そう、ある一箇所だけ音が違うのだ。

クレアはその場に膝をつき、床をくまなく調べた。床に手を滑らせ、なぞっていく。

「これは」



僅かな取っ掛かり。もしやと思って辺りを見渡すと、本棚の脇に先端が曲がっている棒をかけてあった。

クレアはそれを手に取り、取っ掛かりに引っ掛け、力強く引いた。ガコン、という小気味いい音がして、床が持ち上がる。

クレアは頭を空いた穴へ入れ、真っ暗な中を覗き込んだ。暗闇に目が慣れると、徐々に見えてくる。

「ビンゴ、って言うのかしらね。こういう場合」

溜息をつくように笑いながら、クレアは体を起き上がらせた。

※

「なあ」

「なんだい？」

クレアが一階へ向かった後、フェイトは二階の端の部屋から順々に調べていた。

そして、丁度半分を調べ終えた所で、不意に現れたネイビスにフェイトは本棚を漁っていた手を止めて振り返る。

「アイツ、どうだった？」

「アイツ？」

「クレセントだよ。ショック受けてたなかったか？」

「ごめん、僕達はクレセントと一緒にじゃなかったんだ」

「そうか」

ネイビスは爪先で絨毯を蹴った。

何処か遠い所を見るような眼は、一体何を映しているのか。言う

までもない。白銀の髪を持つ女性に他ならないのである。

「ネイビス」

フェイトが声をかけると、ネイビスは大きく息を吐いてその場その場にずるずると座り込んだ。髪をぐしゃぐしゃと掻き乱し、唸っている。

「なあ、ラインゴッド。俺はアイツに何をしてやったらいい？」

「え？」

「わかんねえんだ。何て言ってやったらいいのか」

顔を手で覆うネイビスが、一瞬クレアとダブって見えてしまい、フェイトは小さく笑って、ネイビスの横に腰を下ろす。胡坐をかいた上に手を組んで瞳を閉じる。

「一緒に居てあげればいいよ」

「は？」

「もしクレセントが泣きたいのに泣けないなら、君が代わりに泣いてあげるといい。ただ傍に居るだけでもいい」

「……」

「どうしようもなく辛いときは、誰かに傍に居てもらうのが一番だと思う」

静かに思いを馳せれば浮かんでくる、ネルの恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうな顔。

そして、それがゆっくりとぼやけていき、蒼と銀を形作る。

「僕の場合は、乱暴に背中を叩かれて立ち直った。まあ、その後十分慰めてもらったけどさ」

落ち込む自分の背中を、思いっきり叩いてくれたあの人。

全てが終わって、耐え切れず泣いた自分を優しく抱きしめてくれたあの人。

救われた。人という存在は、こんなにも温かい。そう感じた瞬間だった。

「ネイビスが思ったことをしてあげたらいいよ。きっとクレセントも救われる」

「……そっか。サンキュ」

ネイビスは、顔から手を放し、笑顔を浮かべた。

「借りが出来たな。今度何かあったら言えよ。俺がなんとかしてやる」

「それは頼もしいね。是非お願いするよ」

フェイトは立ち上がり、ぐっと背筋を伸ばした。

ネイビスも同じく立ち上がり、親指を立てる。

「おう、女の口説き方でもなんでも教えてやるぜ」

「女の子一人口説けない人が何を教えるのかしら？」

「おわあっ！」

「あ、クレア」

突然会話に入ってきた第三者の声にネイビスは思わず大声を出した。

フェイトは別段驚く様子もなく、笑顔でその人物——クレアに手を振る。クレアは呆れたように腰に手を当て、ネイビスとフェイトを指差す。

「全く、こんなところに座りこんで何やってるのよ」

「ら、ラーズバード、いきなり現れんな！ ビックリするだろっ！」

「あら、気配の一つも察知出来ない師団長さんが悪いんじゃない？」

「それは言ってる」

フェイトがうんうんと頷く。

ネイビスは殺気に満ちた目でフェイトを見た。

「おまえは気付いてたつてのかよ？」

「うん、だってクレアだし」

「もうフェイトっ！」

「……」

いきなり惚気るフェイトにクレアは顔を赤く染める。

余りのバカっぷルぶりに呆れて物も言えないネイビスは、一つ咳払いをしてクレアに向き直った。

「で、何か見つけたのか？」

クレアの顔が引き締まる。

「ええ。何に使ったのかは知らないけれど、書庫の下に巨大な地下室があったわ」

そんなことを聞いても、一度緩んでしまったフェイトの顔はなかなか直らなかった。

※

慌しく動くペターニとは裏腹にシランドは静かな闇に包まれていた。

シランド城にある白露の庭園。朝はアペリスの導きを浴びて神々しく輝く庭は、薄暗い闇の中で神秘さを醸し出している。

その庭の真ん中、まるで不釣り合いな格好をした大柄の老人が腕を組んで佇んでいた。

アドレー・ラーズバード。クレアの父親にして、元クリムゾンブレイドの片割れ。

アドレーは音もなく腰に挿した刀を抜き、正眼に構えた。神経を研ぎ澄まし、手先から刀へ、そして全身へ施力を巡らせる。アドレーなりの精神統一の仕方だった。

時間に見ればほんの数分のことであるにもかかわらず、再び目を開いたアドレーはもう数時間も経ったような感覚を覚えた。

慣れた手つきで刀を仕舞い、肩越しに背後を見る。

そこに誰か居るのはずと分かっていた。

「何用だ、リーゼル」

「お気づきでしたか」

静かな月夜に響く、高いソプラノ。

漆黒の長い髪を靡かせた女性が、闇の中から姿を現した。

リーゼルと呼ばれた女性はどこか含みのある笑顔を顔に貼り付けたまま、アドレーに一歩一歩近づく。

カツン、カツン、と大理石を鳴らす靴音はまるで音楽のように月夜に木霊した。

「お久しぶりですね」

「お主は滅多に屋敷から出んからの」

「今流行の引きこもり、というやつです」

流行ってないだろう。そうアドレーは言おうと思ったが止めた。

どうせ何を言っても無駄なのを、アドレーは経験で分かっていた。伊達に子供の頃からの付き合いではないのだ。

漆黒の髪の女性――リーゼル・ゼルファーは、言うまでもなくネルの母親である。

そして、アドレーの昔馴染みでもあった。

アドレー、ネーベル、リーゼル。三人は何時も一緒に居た。遊ぶときも、食するときも、寝るときも。アドレーとネーベルでどちらがリーゼルの婿になるかと、争ったことも数え切れないほどあった。当のリーゼルはそんなこと露知らず、のほほんと微笑んでいたのだけど。

「それで、お主がワシに何の用じゃ？」

「いえ、ただ風が強くなりそうだと思ひまして」

「荒れるか」

アドレーの言葉に、リーゼルは答えない。ただ、穏やかな笑みを浮かべているだけ。

「シャロンは、元気ですか？」

「分かん」

「と言いますと？」

「久々に家に戻ったら『どうぞ食べて下さい、あなた』とハートマーク付きの書置きと飯があつてな。意気揚々と食べたまでではないが、気付いたら三日経っておった」

アドレーが自慢の髭を撫でながら言う。

「今回は何の毒だったんでしょね」

「なんでも少量で鯨を動かなくするやつらしいの。書置きの裏に『やっぱ生きてたか』という愛のメッセーじと共に書かれておったわい」

「まあ、愉快なことですね」

「はっはっは、流石はワシの妻じゃ」

アドレーの豪快な笑い声と、リーゼルの控えめの笑い声が二人以外は誰も居ない白露の庭園に響き渡った。

「やはり、ルリ島に行ったのでしょうか？」

「うむ。おそらくそうじゃろうな」

ひとしきり笑った後、リーゼルがポツリと呟いた。

アドレーも同意するように腕を組んで頷く。

風に靡く髪を片手で軽く押さえながら、リーゼルは空に煌く星を見上げた。

「随分と昔の話ですが、シャロンがルリ島から女の子を連れてきたことがありますね」

「おお、懐かしい話じゃのう」

「あの子はどうしてますか？」

「立派に成長しておる。やはりあやつの目は正しかったのじゃ」

アドレーは自慢げに顔を綻ばせる。

リーゼルもそんなアドレーを見て口元を緩めるが、すぐに悲しげな色を浮かべた。

「シャロンがこうして各地を飛び回っているのは、まだあの子のことを探しているからなのでしょうかね？」

「……あやつなりに負い目を感じておったからのお」

「シャロンのせいではのですが、そう言って聞く人ではないですね」

「うむ」

星が一つ、流れた。

まるで月が流した涙のように、星達は夜空に輝いている。寂しい。そんな月の叫びが今にも聞こえてきそうなほど、空は月の涙で一杯だった。

「アドレー」

「なんじゃ？」

リーゼルの心地よい高さの声が、アドレーの耳に優しく届く。

二人の足元にひっそりと佇む白い花が、フワリと揺れた。

「この先きつと風が強くなる。子供達を守ってあげて下さい」

「何、ワシら大人が手を出さんでもあやつらは十分脅威に立ち向かえる強さも、仲間も持っておる」

「穏やかな風の中にこそ……いえ。そうですね。信じてあげなくてはいいかもしれませんね」

リーゼルが何かを言いかけて、首を振った。

指元で光る銀の指輪に手を添え、そっと瞳を閉じた。

「頑張ってね、ネル、クレアちゃん、皆」

「心配無用じゃ。さ、戻るぞ。風邪をひいてはかなわんからの」

「そう思うなら服を着たらどうですか？ クレアちゃんに嫌われますよ」

「む、痛いところをつく」

和やかな会話を続けながら、アドレーとリーゼルは城内へと戻った。

庭園に静かなる闇が訪れる。

二人の気配が完全に消えた頃、小さな旋風が巻き起こる。それは白い花を無残に切り裂き、闇の中に溶けていった。

## 地下の秘密

広大な空間だった。おそらくシャロム邸の敷地全体ほどの広さを持っている。

書庫の床から下に降りた先には、一般市民の一軒屋が立てられそうなほどの広さの空間が一つ。そしてその三分の一程度の部屋が十数個。

真っ先に違和感を感じたのは、その白さだ。壁や床、その他の装飾品。構成しているものが白かった。作られている材質そのものの色なのか、後から塗布されたもののかは分からないが、四方を見渡しても一面の白という空間は、清楚さよりも奇妙なざわめきを覚える不気味さを感じさせた。

辺りをぐるりと見渡しても、特に目立ったものはなかった。まるで引越し前の新居のように、家具や置物などは一切置かれず、ただ何もない平面があるだけだ。

クレア、フェイト、ネイビスは薄暗い部屋を松明の明かりを頼りに進んでいた。

部屋を一つ一つ調べ、また次の部屋へ。それぞれの部屋も書庫から下りた先にあった空間と同じく、目だったものは何もなかった。中には本棚や机などが残っていたものもあるが、それらの中は全て空で、やはり手がかりにはならない。

「ったくなんだってんだよ、この家は」

「こんな広い空間一体何に使っていたのかしら」

「分からない。でもやっぱりシャロム家は何かを隠してたんじゃないかな」

フェイトが空振りだった部屋の扉を閉めながら言う。

クレアとネイビスは顔を歪めた。

「でも、クレセントは関係ねえよ」



「そう信じたいわね」

誰だって仲間を疑いたくななどない。

フェイトも頷き、次の部屋の扉へと手をかけた。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、鍵がかかってるみたいなんだ」

そう言ってフェイトはノブを回そうとするが、動く気配はない。

今まで鍵のかかっている部屋などは一つとしてなかった。

フェイトとネイビスが顔を見合わせて頷き、

「「はっ!!」」

同時に扉を蹴った。

が、

「びくともしない」

「かてえ……」

傷一つついていない。

勿論手加減などしていないし、二人とも腕には自身のある男達だ。普通の扉なら三重構造だろうと蹴破る自信があった。

フェイトとネイビスが呆然と扉を眺めていると、クレアが一步前に出た。扉を軽く二、三回叩き、人差し指を顎に持っていく。

「ねえ、フェイト。これって鉄かしら？」

「え、でも白いよ？」

「ま、試してみればいいか」

クレアはふう、と息を吐いて、扉に向けて手を翳す。澄んだ詠唱が聞こえ、クレアの手が銀の紋章に包まれる。

「ファイアボルトっ」

銀の紋章から次々に炎の弾丸が放たれた。

通常なら一度に出せる火球の数は多くて五から十と言われているが、クレアが繰り出したそれはゆうに三十を超えていた。

もはやフェイトからでは扉を確認することさえできないほどの煙と光を纏った爆発。体の芯まで響くような騒音を轟かせ、炎の弾丸

は余すところなく全て扉に命中した。

しかし、煙が晴れたあと、やはり焦げ跡一つついていない扉を前にフェイトは肩を落とした。

「ダメか」

「まだよ——ディープフリーズ!」

無詠唱。ファイアボルトで熱した扉が冷め切る前に、クレアの施力によって発現した氷雪が扉を凍らせていく。急激な温度差。ファイアボルトによって熱せられ、それが急激に冷やされたことにより、扉は粉々に砕け散った。

「さすがだな、ラーズバード」

ネイビスも感嘆の色を浮かべている。

クレアは優雅に微笑むと、慎重に中を覗き込んだ。

あれだけ頑丈に作られていたからには、きっと何かあるはず。入り口に何もトラップらしきものがないのを確認すると、クレア、フェイト、ネイビスはゆっくりと足を踏み入れた。

そこは他の部屋とは明らかに違っていた。他の部屋は全くと言っていいほど生活感が感じられなかったのに、この部屋はまるでほんの少し前まで使われていたように見える。

クレアが部屋の中央へと進み、フェイトは辺りを見渡す。ネイビスは入り口の所で外の様子に気を配っていた。

部屋の中にあるのは、空の本棚が数個に机。そして、大の大人でも二人は入れそうなほどの大きさがあり、無数の導線やチューブに繋がれた、透明なカプセルのようなものだった。

クレアはそれを調べようと手を伸ばした。

「これは……」

何かしら、その言葉はフェイトによって遮られた。

「イザーク!」

「おわっ!」

フェイトが急に大きな声を出して部屋の奥へと駆けていく。外の様子に気を配っていたネイビスも釣られて大声をあげてしまう。

部屋の隅にひっそりと佇んでいたもの。それはフェイトがバナラや他のクリエイターと共に復活させたかつての機工兵――イザークだった。

「イザーク！ どうしてこんなところに」

フェイトはイザークに駆け寄る。だが、イザークは何の反応も示さない。フェイトは首を傾げて、どこか故障箇所でもあるのかとイザークの機体を調べ始めた。

「何やってるのかしら」

イザークの存在を知らないクレアはその様子を不思議そうに見つめていたが、

「フェイト！」

「うわっ！」

急に息を飲んで駆け出し、フェイトを突き飛ばした。同時に鳴り響く銃声。

「っ！」

「クレアあ！」

身体が宙に浮く感覚を覚えながら、フェイトは見た。

今までピクリとも動かなかったイザークが急に動き出し、サブマシンガンのような銃火器が火を噴いたのを。

その無数の銃弾がクレアの身体を無残に貫くのを。

自分を突き飛ばしたクレアの唇が微かに動いていたのを。

その表情が困ったように笑っていたのを。

何もかもがゆっくりと感じられた。

体が浮く感覚も、弾丸も、散らばるクレアの銀糸も、全て。

頭が、真っ白になった。

「ラーズバード！ 畜生っ！」

クレアの体が地面に倒れる。ネイビスがクレアを庇うようにイザークの前に立ち塞がった。腰に差した長剣を抜き、イザークに向ける。

容赦なく放たれる弾丸をネイビスが驚異的な動体視力で弾き返す。

倒れるクレアに、呆然と座り込むフェイトに当たらないように。ネイビスは舌打ちをした。

このまま凌ぎ切れるとは思えない。肝心のフェイトは使い物にならない。二人を守ったままでは反撃もできない。

ネイビスの目の前には先の見えない闇が広がっていた。

鳴り響く銃撃の中、フェイトの頭は固まったままだった。

しかしその瞳はしっかりと捕らえていた。倒れ伏したクレアの体の下から広がる、赤い鮮血を。

「あ、あ……ああ……」

フェイトは頭を両手で覆った。

額が熱くなる。押さえきれない衝動。頭の内から全てを破壊されるような感覚。

蒼い光が目の前を覆った。

他の事は何一つ冷静に考えられなかったのに、これだけは分かった。

破壊の力が、暴走する。

フェイトがそう確信し、僅かな理性がそれを必死に止めようとした最中だった。

「空破斬ッ！」

「ウインドブレイド！」

地を這う衝撃波と風の刃が、イザークの機体を吹き飛ばす。二刃

の衝撃波はイザークを壁に強く打ち付け、機工兵は動かなくなった。フェイトの額に浮かび上がっていた紋章が消えていく。涙に濡れた顔を衝撃波が放たれた方へ向け、フェイトは崩れ落ちるように膝をつく。

「この阿呆が！」

「マリア、急いでクレア様を！」

冷たい瞳でフェイトを睨み付けるアルベルと、後ろにいるマリアに向かって叫ぶクレセントが、そこに居た。

「アルベル……くれ、せん……と」

フェイトの意識は、そこで途切れた。

※

「お待ちしておりました。ネル・ゼルファア様、ルージュ・ルイズ様ですね？」

「ああ」

「相変わらずここは寒いわね」

アーリグリフ城門前、外套のフードを取ったネルとルージュは異なる赤髪を雪の混じった風に靡かせた。

両手で自分を抱きしめるようにして震えるルージュに門兵は苦笑を漏らしながら、二人を城内へと招き入れる。

向かうは、アーリグリフ王執務室。

「よく来てくれた。まさか君達のような人物が二人も来てくれるとはな」

決して広くはない執務室。その奥に置かれたデスクに、アーリグ

リフ王国の王が腰を下ろしていた。

書類に走らせていたペンを止め、ネルとルージュに視線を向ける。ネルとルージュは敬礼をし、深く頭を下げた。

「事が事ですから。私達上層部の者でしか、他にこの話を理解できるものはいません。それで、本当なのですか？」

「うむ。アルベルが確認したのだから。おそらくそうだろうと言っておった」

「これで、二つ、いえ、三つかしら」

ルージュが呟くように言う。

アーリグリフ王は控えていた部下に指示を出し、布に巻かれた長い物体を持ってこさせる。

兵士はネルにそれを手渡し、部屋から出て行った。

ネルがアーリグリフ王に目配せすると、頷きが返ってくる。

慎重に布を取り払っていくと、白い物体が姿を現した。

「間違いない。本物だ」

「何だつてのよ、一体」

ネルの焦りを隠せない声とルージュの悪態が、窓を叩く風の音に掻き消された。

※

セフィラから流れる恵みの水が、木の葉を何処かへと運んでいく。張り巡らせた栈橋の上から、アゼルは水面下を覗き込んだ。

古代の遺跡。揺れる水面の下には、遥か昔に沈んだ都市、サーフ

エリオが静かに佇んでいた。

四百年年ほど昔、技術国家グリーテンの従属からの解放を求めたシルヴィア一世はセフィラの力で大洪水を起こし、機工兵をグリーテン大陸に追いやったという。

そして、その時に機工兵と共に沈んだのがサーフェリオ。グリーテンから逃れるため、サーフェリオの文明は水に飲まれたのだ。

一体ここはどのような文明が栄え、人々はどのような生活を送っていたのか。

考えれば考えるほどアゼルの胸は高鳴っていった。

「あのお、アゼルさん」

ソフィアは遺跡を食い入るように見つめるアゼルの袖を引っ張る。アゼルはそれで漸く我に返って、勢いよく立ち上がった。

「あ、ああ、何ですか？」

「何ですか、じゃないですよ！ 何しに來たと思ってるんですか！」

「す、すみません。つい……」

アゼルはすまなそうに頬を指で搔き、目の前で仏頂面をするソフィアに頭を下げた。

「もう、古いものが好きなのはいいですけど、時と場合を考えて下さいねっ」

アゼルの動きがピタリと止まる。

急に視界がぼやけ、別の景色と人物がアゼルの目の前に映った。

『もう、デートの時くらい古いものの事は忘れてよ』

左目がズキリと痛む。

左目から流れる血。目の前で微笑む女性。真っ白に染まる視界。

「――っ」

気付けばアゼルは棧橋に肩膝をついていた。  
汗が額から流れ、背中もじっとりと濡れている。

「アゼルさん！ 大丈夫ですか！？」

「平気です。ちょっと眩暈がしただけで……」

そう微笑むアゼルの顔は蒼白だった。

ソフィアは小刻みに震えるアゼルの肩にそっと手を置きながら、  
諭すように言う。

「無理はダメです。村長さんのところへ行きましょう」

「ええ、そうですね」

有無を言わさない態度でアゼルに肩を貸しながら歩き出すソフィアを見て、アゼルの口から乾いた笑いが漏れた。

女性が強いのはこの国だけじゃないのか。そう思い、アゼルはおぼつかない足取りで歩き出すのだった。

「具合はどうだい？」

「だいぶ楽になりました。調査に来たというのに、ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

ベットに横になっていたアゼルは、額に乗せられたタオルを取りながら上半身を起こした。

村長夫人はそのタオルを受け取り、気持ちのいい笑顔を見せる。

「いいんだよ。うちの馬鹿息子で慣れてるからね」

「そうそう。あの馬鹿息子ときたらまた飛び出していきやがって。  
ところでどうだい、兄さん。一つ昔話でも」

「やめな」

水没都市サーフェイリオの村長——アズノール・S・T・ハクスリーが意気揚々と昔話を語りだそうとしたところで、夫人の強烈な肘内が炸裂した。まともにそれを受けたアズノールは、声にならない



い声をあげてその場に倒れたまま動かなくなる。

そんなアズノールを横目で見ながら、アゼルは顔を引き締めた。

「それで、例のお話なのですが」

「ああ、これのことさ」

夫人は家の奥から持ってきたものをアゼルに手渡す。

アゼルはそれを一通り眺めてから、ソフィアに渡した。

「どうですか？」

「本物……のような気がします。詳しく調べてみないとなんとも言えませんが」

ソフィアの頬を汗が伝う。

アゼルはベットから起き上がって、上着に袖を通した。

「これを拾った場所に案内してもらえますか？」

「任せときな」

夫人は腕に作った力こぶをぽんと景気よく叩き、大股で歩き出す。アゼルとソフィアもお互いの顔を見合わせ、それに続いて村長宅を後にした。

※

ペターニに置かれた大型の中央病院。その中心にある中庭で、クレセントは夜明け前の空を眺めていた。薄もやのかかった藍色の空。水平線の向こうから、優しい黄金色の光があふれ出そうとしている。そんな静けさをもたらす光景とは打って変わり、病院の中は慌しく動いている。

しかし、それも当然の話だった。シーハーツの象徴である女王陛下の名代——クリムゾンブレイドの片翼が負傷したのだから。

あの後、クレアをヴァンが、気を失ったフェイトをネイビスが担ぎペターニへ向かった。

クレアの容態は決して軽くはなかったが、命の危険はなかったことは不幸中の幸いと言えよう。今だ意識は戻らないものの、シーハーツの医療技術を持ってさえすれば、二、三日安静にしていれば退院出来るだろう。

フェイトはまだ目を覚まさなかったが、外傷は一切ないため、おそらくすぐに目を覚ますだろう、というのが医師の見解だ。

釈然としない気持ちだが、クレセントの胸の中を駆け巡っていた。撃たれる直前、クレアは咄嗟に防護壁を張った。それが不完全ながらも急所へのダメージを避けたのだ、とクレアが撃たれる場面を見ていたネイビスは語った。

その話を聞いたとき、クレセントは不思議でしかたなかった。どうしてクレアはフェイトの周りに防護壁を張らなかったんだろう、と。その方が庇いつつ不完全な防護壁を張るよりもずっと安全なはずだ。

クレセントがそれをマリアに問うと、マリアは目を細めてクレセントの頭に手をやり、「いつか分かる」と微笑んだのである。

「いつか、か」

徐々に鮮明になっていく黄金色の光へ向けて、クレセントは手を伸ばした。

何かがそこにあるかのように。そこにある何かに縋るように。

しかし、伸ばした手は何も掴むことなく下ろされ、胸の前で強く握られる。

一羽の鳥がクレセントの肩に止まり、一声鳴いた。その鳥に視線を向けてから、クレセントは目を閉じる。

近づいてくる、一つの足音。

聞きなれない足音にクレセントは目を開いて足音の主へ顔を向け

た。

シーハーツでは見ない奇抜な服装。黒と金の髪。赤い瞳。抜き身の刀のような佇まい。

「私に、何か？ 歪のアルベル」

その言葉を言い終わる前に、風が吹き抜けていく。クレセントの肩に止まっていた鳥が大きく鳴き、羽を散らしながら飛び立っていた。

暁の空に照らされたクレセントの白銀の髪が数本、はらりと地面に落ちる。

「何故避けない」

クレセントの白い喉には、魔剣クリムゾン・ヘイト切っ先がつきつけられている。

しかし、動揺しているのは剣を向けた主のほうだった。

クレセントがこの程度の攻撃を避けられないはずがないということぐらい、アルベルには分かっていた。

だというのに、クレセントは一步もその場を動かない。視線もアルベルを見据えたまま、瞬き一つせずに、そこに立っていた。

クレセントは一度クリムゾン・ヘイトに目を落としてから、ふたび剣を突きつけてくるアルベルを見据える。

「止めると分かっている刃を、避ける意味がありますか？」

「クク……なるほど。やはり俺の目に狂いはなかった」

アルベルは刀を鞘に納めると、くつくつと笑った。

確かに、アルベルはこんな場所で殺人を犯すなどという愚かな真似をする気はなかった。

だが、相手はあの歪のアルベルである。万が一ということも考え、避けるのが常人の考えだ。例えば避けられずとも、向かってくる刃に対し目を瞑ることさえしないクレセントは、アルベルから見ても異常の域に入る。

「お前、名は？」

「クレセント・ラ・シャロム」

「フン、覚えておこう」

そう言ってアルベルはくるりと身を翻すと、肩越しにクレセントを見る。真紅の瞳が、燃えているように輝いていた。

「今度は本気出してやってもらうぜ」

真紅と翡翠が交差した。

束の間の沈黙の後、アルベルその場を去ろうと足を踏み出した瞬間、その一寸先の地面が砕かれた。

アルベルですら足を止めてしまうほどの殺気。アルベルはクレセントを振り返るが、彼女の視線はアルベルに向いてはいなかった。靴底が石畳の上に転がる砂利を踏みしめる音が聞こえる。

「クレセントに近づくな、アーリグリフが」

冷酷な声だった。

いつものおちゃらけた雰囲気など欠片もない。

クレセントとアルベルが立つ右手側。静かな殺気を纏ったネイビスが、左手に剣をぶら下げてその姿を現した。

## 夜明け

「ああ？」

アルベルは自分へと向けられている殺気を感じながら、ネイビスを見返した。

ネイビスは金色の瞳をアルベルに向けたまま、一步踏み出す。ぶら下げられた刃が石畳を掠る音が、静かな中庭に響き渡った。

「ネイビス、様」

クレセントは困惑していた。感情の起伏が激しいネイビスであるが、こんなにも殺意を剥き出しにすることはいまだかつて見たことがなかったのだ。クレセントは躊躇いがちにネイビスに近づき、アルベルとの間に立ち塞がった。

「どいてくれ、クレセント」

「何をするおつもりですか？」

聞かなくても分かる。ただの話などでここまでの殺気は出さない。クレセントがその場から動けずにいると、背後で刀を抜く音が聞こえた。

「ふん。なんだか知らんが、俺はいつでも相手になってやるぞ、クソ虫」

「いい度胸じゃねえか」

アルベルがクリムゾン・ヘイトを構えると、ネイビスも剣を正眼に構える。

「止めてください。今はそんなことしてる場合じゃないでしょう？」

「どけ、阿呆。貴様もついでに相手してやろうか」

「クレセントに対する暴言、殺すぞ」

アルベルとネイビスが臨戦態勢に入る。二人の目にはもうお互いしか映っていない。

「……とにかく、このままでは」

このままこの二人が争えば病院崩壊ではすまない。クレセントがそう判断し、力づくで止めようとした時だった、

「いい加減にしなさい！ この馬鹿！」

「ぐはっ！」

「ぶべっ!!」

蒼い光を伴った強烈な蹴りが、アルベルとネイビスを吹っ飛ばす。日常生活では決して聞くことはないような嫌な音が耳に響き、折れた、とクレセントは反射的に理解した。

本来は静かにしなければならぬ病院で騒音を発したマリアは、眉間に目一杯皺を寄せながらアルベルとネイビスに近寄る。ズタボロになりながら呻き声をあげる二人に、マリアはもう一度容赦なく蹴りを入れる。クレセントは思わず目を瞑った。

「あなた達ねえ、何やってるのよ。ここは病院よ？ 病院で怪我しようだなんて馬鹿じゃない？」

「……て、てめえがそれを言うか、阿呆」

「同感だ……」

よろめきながら起き上がるアルベルとネイビス。これは本当に骨の一本や二本折れているのかもしれない。

クレセントはマリアには逆らうまいと胸の中で誓った。

マリアは大きな溜息を一つ。そしてネイビスに顔を向けた。

「まあ、問題はアルベルよりもあなたのほうにあるわね。どうしたのよ？」

「……なんでもねえ」

「なんでもないわけないでしょう」

「いや、俺が悪かった。すまなかったな、つい感情的になった。あんたに恨みがあつたわけじゃないんだ」

ネイビスは土だらけになった服を払い、アルベルに頭を下げた。

そうしおらしく頭を下げられては、流石のアルベルも居心地が悪い。無造作に立ち上がると、舌打ちをして病院の中へ入っていった。「相変わらずガラ悪いわね」

「マリア、歪のアルベルと面識あるんですか？」

「え、ええ……まあ、そうだったかもしれないわね」

まさか一緒に創造主を倒した仲だ、とは言えず、マリアは適当に笑って誤魔化した。

「さ、そろそろ病院に戻りましょう」

「……私、少し家に帰ります」

「クレセント？」

「すぐに戻ります。クレア様達をお願いします」

「お、おい！」

クレセントはマリアとネイビスに頭を下げると、足早に病院を去っていった。

小さな背中はずぐに見えなくなり、沈黙だけが流れる。

それを破ったのは、マリアだった。

「何やってるのよ」

「はあ？」

「追いかけなさいよ。好きな子をほっとくのがこの国の流儀なの？」

「なあっ!？」

ネイビスの顔がみるみる赤くなる。マリアと話すのはこれが初めてのはずだ。それなのにこの短い間にもう見破られていた。

ネイビスが赤くなった顔を手で覆っていると、マリアがその背中を叩く。

「って！」

「早くしなさい。両親が亡くなった家にあの子を一人行かせるつもり？」

「で、でもアイツだって一人に……」

『傍にいてあげるといいよ』

フェイトの言葉がネイビスの脳裏を掠めた。

ネイビスは両手で頬を叩くと、顔を上げて駆け出した。

「しっかりやんなさいよ」

マリアはその後姿を呆れながら見送ると、落ち着いた足取りで病院の中へ姿を消した。

※

真っ暗な世界だった。右も左も、上下の感覚さえ掴めない。

朦朧とする意識の中、フェイトは暗闇をただ歩き続けていた。

ここが何処かも分からない。どうして歩いているのかも分からない。ただ歩き続けなければならないと、頭が囁きかけてくる。

不意に今まで真っ暗で何もなかった世界に、散らばっているものがあつた。

「銀の……糸？」

黒の世界によく映える銀。

フェイトはそれをよく見ようと足を進めた。

一步、一步。

足を進めるたびに、胸の動悸が激しくなった。

これ以上進みたくない。進まなければならない。

二つの感情が闘ぎあつて、足元がふらついた。

おぼつかない足取りで辿りついた場所にあつたのは、散らばった銀糸だけではなかった。

「嘘……だ、ろ……」

フェイトはそれを震える手で抱き上げた。そして、力強く掻き抱



く。

腕の中で青白い顔をしている女性。

「クレアっ！」

フェイトは叫んだ。

喉が壊れるほどに、大きく、強く。

世界の闇が一層濃く深くフェイトを包み、視界を覆った。

「――っは！」

目を開け、真っ先に視界に飛び込んできたのは、見慣れない天井だった。

汗でべつとりと濡れた髪が額につく不快感。乱れる息を整えながら、フェイトは辺りを見渡した。

「良かった。目を覚ましたんだな」

「ヴァン……」

「なかなか起きないから、もう目を覚まさないかと思ったよ」

ベットの傍の椅子に腰掛けていたヴァンは優しい笑みを浮かべて、フェイトに水を手渡す。

フェイトはそれを一気に飲み干し、額にかいた汗を拭った。

「僕は……シャロム邸に行って……そこで」

だんだんと頭が冴えてくる。

そして、弾かれたように飛び起き、ヴァンの肩を掴んだ。

「そうだ！ クレアは！？」

「無事だ。もう目も覚まして」

「やっとお目覚めかしら？」

フェイトの声でもヴァンの声でもない澄んだ声が、静かな病室に響く。フェイトも、ヴァンですら驚愕に見開いた目を入り口に向け

た。

「そんな真っ青な顔しちゃって。どっちが怪我人なんだか分からないわね」

頭や腕に痛々しい包帯を巻いたクレアが、松葉杖に身を預けて立っていた。

ヴァンは慌ててクレアに駆け寄る。

「クレア！ まだ安静にしてない、と……」

「きゃ！」

ヴァンが目丸くして、クレアが小さな悲鳴をあげた。

松葉杖が、音を立てて床に転がる。

「クレア……良かった……っ！ 本当に——良かった！」

クレアを強く抱きしめたフェイトの口から、嗚咽が漏れた。

クレアは痛みに顔を顰めながらも、フェイトの髪を優しく撫でる。

「大丈夫。私はちゃんとここに居るから」

「ごめん……ごめんっ！」

守れなくてごめん。傷つけてごめん。目を覚ました時、傍に居てあげなくてごめん。

クレアを抱きしめたまま泣き出すフェイトを、クレアは優しい眼差しで見つめる。

その様子を見ていたヴァンは、クレアの肩をぽんと叩き、静かに病室から出て行った。

クレアは泣きじゃくるフェイトに身体を預けながら、その暖かさを感じていた。

「あなたもとんだ道化ね。ネイビスみたいにもっと素直に生きればいいのに」

クレアの病室を出たヴァンが待合室の椅子に腰掛けていると、その横に座る人物が居た。

眼も醒める蒼い髪の女性。

ヴァンは穏やかに微笑んだ。

「本当に貴女は鋭い方ですね」

「クレアは気付いてるの？」

「幸か不幸か、少しも」

「案外鈍いのね」

マリアは眉を下げてヴァンに微笑んだ。

その表情の意味するところをヴァンは図りかねなかったが、敢えて追求はしなかった。

「で、アイツの容態はどうなんだ？」

長い前髪をうっとおしそうに払いながら、アルベルが待合室に姿を現した。

マリアは組んだ足の上で頬杖をつき、不適な笑みを浮かべる。

「あら、あなたが他人の心配なんて珍しいわね？　それとも兄弟は好みも似るのかしら」

「殺すぞ」

「やれるものならやってみなさい」

「病院で乱闘は止めて下さい」

火花を散らすアルベルとマリアをヴァンが止めに入った。

アルベルとマリアはお互いに鼻を鳴らしてそっぽを向く。実はこの二人仲がいいのでは、とヴァンは思ったが口には出さなかった。

もし口になど出そうものなら、その瞬間に口が持っていかれそうな雰囲気だったのだ。

ヴァンは一つ咳払いをして、アルベルに視線を向けた。

「それにしても、お久しぶりですね。兄さん」

「止めろ。気持ち悪いな。普通に喋りやがれ」

アルベルがあからさまに顔を歪めて手を振ると、ヴァンはやれやれと肩を竦めた。

「アルベルこそ、いい加減に喋り方を変えたらどうだ？　まだクソ虫とか阿呆とか言ってるんじゃないだろうな」

「……」

「言ってるわよ。それはもう口癖のように。貧困な語彙力よね」  
答えないアルベルの代わりにマリアがさりと答える。

アルベルは何か言い返そうと口を開いたが、本当のことなので何も言い返せず、結局口を閉じた。

それがおかしかったのか、ヴァンは控えめに笑った。

「はは。でも、変わってなくて安心したと言えば、安心したよ」

「お前の方は随分と変わったみてえだがな」

その言葉にヴァンの顔から笑みが消え、眼がずっと細められる。

だが、それも束の間。すぐにまた穏やかな笑顔が戻った。

「そうか？」

「何があった？」

「何も。特に言う事はないさ」

ヴァンの笑顔は穏やかだったが、有無を言わさない威圧感を放っていた。

「さ、じゃあ俺はラッセル様の所に報告に行ってくるよ。クレアの容態も伝えたいし」

「そう」

「では、マリア様、兄さん。失礼します」

笑ってない笑顔をアルベルとマリアに見せ、ヴァンは待合室から出て行った。

開いた扉の向こうが、朝日に染まって明るく輝いている。鳥の鳴き声と教会の鐘の音が、不可解な騒動が起きたペターニに朝を知らせた。

※

同時刻、アーリグリフ城物見の塔。

そこから見える殺風景な雪化粧に彩られた景色をネルとルージュは見下ろしていた。

「ここに落ちてたっていったわよね」

「ああ。でもなんでこんな所に」

ネルは口元をマフラーに埋めて考えを巡らせる。しかし、考えても考えても思考は深みに嵌っていくばかりで、納得した結果は得られない。

ルージュも事情を知っているとはいえ、詳しいわけではない。

やはりマリアかフェイトを連れてくるべきだったとネルは顔を顰めた。

「あら、難しい顔してますね。ネール」

「——つつつ！」

「あだっ！」

手摺に肘をついていたネルの眼前に、突然漆黒の髪の女性が姿を現した。

ネルは驚きの余りにその場を飛びのき、真後ろに居たルージュにぶつかる。ドサリ、と二人は重なるように倒れ込んだ。

「あらあら。どうしたんですか、そんなに驚いて。よいしょっと」

漆黒の髪の女性は不思議そうな声をあげて、軽い身のこなしで手摺の上上がった。

ネルは口元を引きつらせながら、女性に向かって叫んだ。

「普通は驚きますよっ！」

「あ、おば様」

ネルがどいたことで解放されたルージュが、女性を見て嬉しそう

な笑みを見せる。

女性――リーゼルはルージュ向けて和やかな笑顔を向けた。

「久しぶりですね、ルージュちゃん」

「お久しぶりでえすっ」

「お久しぶりじゃない！ 母上、出てくるなら出てくるでもう少しまともな登場の仕方をして下さい！」

「ネルは朝から元気ですね。いいことです」

聞いている。ネルの話など全く聞いている。

ネルは心底疲れたように肩を落とし、眉間を押さえた。案の定、これでもかと言うほど皺が寄っていた。

「それで、おば様は何しに来たんですか？」

「ネルの顔が見たくなっちゃいました」

「それはそれは。愛されてるね、ネルっ」

「五月蠅いよ」

頬に手を当てて微笑むリーゼルとビッシと親指を突き立ててウインクするルージュを見て、ネルは盛大な溜息を吐いた。

心なしか頭が痛い。

「それで、何の用なんですか？ わざわざ引きこもりの母上が屋敷から出てくるなんて、余程の理由があるのでしょうか？」

「ちよっとネル、引きこもりとか言わないの。傷つくじゃない。私は愛しいネルに」

「会いに来たって言ってるじゃないの」

「ルージュ、母上」

ネルがニツコリと微笑む。ルージュの表情が固まった。

よくネルがクレアの笑顔は怖いと言うが、ネルの笑顔も相当怖い、とルージュは寒さとは別の理由で身を震わせる。

リーゼルも同じように固まっていた。愛娘の笑顔で固まる親。なんか嫌だ、とルージュは唸る。

「それで、何なんですか？」

ネルが腰に手を当てて、リーゼルを見る。

リーゼルは一旦眼を伏せ、すぐに顔をあげた。

「アドレーには放っておけと言われたのですが、一つ忠告を」

さっきまでのリーゼルとは一変した冷然たる態度に、ネルとルージュは息を飲んだ。

紫の瞳が鋭い輝きを放ち、二人を真正面から射抜く。

リーゼルは手摺の上で回転し、ネルとルージュに背を向け、

「赤眼の光に注意しなさい」

とだけ言い残し、そこから姿を消した。

「は、母上！」

「うそ、ここから地上まで何メートルあると――」

ネルとルージュが慌てて下を見下ろすが、リーゼルの姿は何処にもなかった。

雪の混じった風が、ネルの頬を冷たく冷やす。

ネルはルージュをチラリと見て、地面に視線を落とした。

「ルージュ……赤眼の光って……まさか」

「でも、そんなことあるわけ！」

「母上は……意味のないことは言わないよ」

「そ、うだけど……」

ルージュが口籠る。

それは、ネルの言葉が本当なのを知っているから。

いつもリーゼルは突拍子もない事を何気ない言葉で現すが、それは必ずしも何らかの形で現実のものとなった。

まるで、アペリスの予言のように。

ネルは一度軽く首を振ってから、ルージュの肩に手を置いた。

「とにかく、一度クレアに連絡しよう。確かアストールが居たはずだから、彼に伝令を頼むよ」

「そうね」

外套のフードを被り直し、ネルとルージュは物見の塔を下った。

その後、クレアへの手紙を書いていた二人の下へ、息を切らせたアストールが『クレア負傷』の伝令を持ってきたのは、それから数十分後のことだった。



## 過去

フェイトとクレアは身体を寄せ合うようにして、ベットに腰掛けていた。フェイトの涙はもう止まっていたが、その目は赤く腫れている。

「落ち着いた？」

「う、うん……」

「ほら、しっかりしなさい。これからやることは山積みなんだから」

「分かってる——クレア」

「何？」

フェイトが赤くなった目を擦りながら、クレアに向き直った。

クレアは腕に巻かれた包帯を見て、大袈裟ね、と呟いてフェイトを見る。

フェイトは少し躊躇って、クレアの手を握った。

「もう、僕を庇うのは止めて欲しいんだ」

「嫌」

「クレア！」

きっぱりと言い切るクレアに、フェイトは詰め寄った。

クレアの頑なな瞳が、フェイトを射抜く。

「じゃあ、フェイトは？ フェイトは同じ状況だったら私と同じことをしたでしょう？」

「それは——」

「ほらね。それで私にはするなって？ あなたの気持ちは分かるわ。私だってあなたが私を庇って傷つくのは嫌」

クレアはでもね、と続ける。

「分かるから……分かるからこそ、止められないのよ。いいえ、止める事が出来ないのが分かってる」

「……」

「だから、私は止めないわ。でも、その代わりに決めたの。全力であなたを守ってみせるって」

「でも、僕はっ」

フェイトは手で顔を覆って蹲った。

さっき見た夢が、頭の中にこびり付いて離れなかった。散らばる銀糸が、青ざめたクレアの顔が。

ロキシ、そしてアミーナやディオンの死んだときのような絶望感と虚無感が、フェイトを襲う。

人の命が失われることに対してフェイトは異常なまでに過敏になっていた。一種のトラウマになっているのだ。

蹲ってカタカタと震えるフェイトの背中に、クレアは手を置いた。

「フェイト？」

「嫌なんだ……これ以上誰かが死ぬのは……」

「……」

「大切な人がいなくなるのは……もう嫌なんだっ!!」

フェイトの叫びは、クレアの胸に刃となって突き刺さった。

クレアはその端正な顔を歪ませ、唇を噛んだ。

分かっていた。フェイトが人の死を極端に恐れているのを。

分かっていた。優しい笑顔の裏で、彼はいつも震えていること。

分かっていた。その傷を癒すのがどれほど大変か。

でも、それでも、クレアは引くわけにはいかなかった。フェイトの傷を癒すことが出来なかったクレアの、最後の意地でもあった。

「ごめんなさい。それでも、約束は出来ないわ」

「っ」

「もし、もしあなたを助けられるのに助けなかったら……私は一生後悔する……」

クレアも涙を流していた。

「あなたを庇わないという約束は出来ないわ。でも」  
フェイトが顔を上げる。

クレアはそのままフェイトの首に抱きついた。

「私は絶対に死なない。あなたを置いていなくなったりしないって、約束する」

「クレア……」

クレアはフェイトから身を離して、そっと額をくつつける。

至近距離で褐色と碧が交わった。

「大丈夫。私結構しぶといの。なんたってあのお父様の娘ですからね」

「……そうだね、そうだった」

「まだあなたは会ったことないでしょうけど、お母様なんてもっとすごいんだから」

「分かるよ。君を生んだ人なんだから」

クレアの笑顔が固まる。

至近距離でこの笑顔はキツイ。フェイトは慌てて目を逸らそうとしたが、なんの魔力か目が逸らせない。

「それはどういう意味かしら？」

「ごめん、嘘。きっと綺麗で落ち着きがあって気品ある人なんだろうね」

「――顔に嘘って書いてあるわ」

「え、嘘!？」

「嘘」

クレアの瞳が楽しげに揺れる。

フェイトも釣られて笑っていた。

何時の間にか、泣くのも忘れていた。

頭にこびり付いて離れなかったあの光景は、もう消え去っていて。代わりに「絶対に死なない」と言ったクレアの勝気な笑顔が映し出されていた。

何の確証もない口約束だったけど、フェイトにとっては何よりも

大事で、どんな誓いよりも意味のある約束だった。

「ありがとう、クレア」

まるで呪縛から解き放たれた証のように、フェイトの瞳から落ちた透明な雫が白い床を鳴らした。

※

シャロム邸を彩る豪勢な庭の植物は、朝露を帯びてまるで宝石のように輝いていた。

ネイビスはそんな情緒的な光景に脇見もせず、シャロム邸に入っていく。

玄関から入りその広い屋敷を見渡したところで、足が止まった。

右を見ても部屋。左を見ても部屋。上を見ても部屋。

「ど、何処にいるんだよ……」

昨日初めてシャロム邸に足を踏み入れたネイビスがクレセントの自室など知るわけもない。大きく溜息を吐き、片っ端から調べることを決めたネイビスは、ふと視線を二階へあげた。

「ん？」

二階のシャロム夫婦の遺体があった部屋の丁度反対側にある部屋。そこから微かな物音がネイビスの耳に入った。

地下の事件があつてから、一旦師団員は下がらせた。ならば、あの物音の主は一人しか居ない。

ネイビスはぐっと握り拳を作り、豪華な絨毯がひかれた階段を昇

った。

ノックをしようと、手を挙げて、また下ろす。

さっきから何回目だろうか。自分の意気地無さに嫌気が差しつつも、またネイビスは手を下ろした。

どうしたものか、とネイビスが頭を搔いていると、絶えず聞こえていた物音が止み、大きな音がした。

「――っ、く」

そして、くぐもった声。

「クレセント！」

ネイビスは考える前に扉を開けていた。

そこには案の定、胸を押さえて床に倒れているクレセントの姿。その表情は苦しみに満ちていた。ネイビスはすぐにクレセントに駆け寄り、そっと身体を抱き起こす。思っていたよりもずっと小さな身体。

クレセントの青白い手を、ネイビスはきつく握る。

「クレセント！　しっかりしろ！」

「う……ネイビス、さま」

「待ってろ。今医者に連れて行ってやる！」

クレセントを抱きかかえ、そのまま駆け出そうとするネイビスをクレセントが止める。

「だい、じょうぶ……です」

「そんなわけあるか！　顔色が真っ青じゃねえか！」

「お願い……です……少し休めば……なんとも、ないですから」

「クレセント……」

ネイビスの服を力の無い手で握り締め、クレセントはベットを指差した。その顔は真っ青で、言葉も切れ切れ。病院へ行かなければ

ならないのは一目瞭然だった。

だが、ネイビスはクレセントを優しくベッドに横たえた。

「もし、少ししてもよくならなかったらすぐに病院へ連れて行く。

文句は言わせねえ」

「……はい。ありがとうございます」

胸を押さえ、クレセントは苦しさ堪えながら微笑んだ。

ネイビスの切れ長の瞳が点になり、その顔が朱に染まる。

「ーッ！」

「どう、かしましたか？」

クレセントは片手は胸を押さえたまま片手は額の上に当て、その隙間からネイビスを見た。

その視線に気付いたネイビスがぱっと後ろを向く。

そして、呟くように一言。

「な、なんでもねえ」

「顔が……赤いようです、けど」

「なんでもねえったらっ！ あ、あー、水！ 水持ってきてやる！  
！」

「あ、あの」

「大人しくしてろよ！」

ネイビスはクレセントの顔を見ないまま部屋を飛び出した。

残されたクレセントは額から手を離し、天井を仰ぐ。

「水差し、そこにあっただけですけど……」

苦笑交じりの声。

クレセントはおもむろに手を顔の前に持ってきた。

「暖かい」

ネイビスに握られたそれは、春の日に包まれたように暖かく感じた。

クレセントが居る部屋の外。

顔を真っ赤にさせたネイビスが、クレセント同様胸を押さえて扉に寄りかかっていた。

「あー……ちくしょ。クレセントのやつ……」

少し横に移動して、壁に寄りかかるようにして座り込む。

おもむろに自分の手を目の前に掲げる。あの時は必死で考えもしなかったが、確かにクレセントの手を握っていたことを思い出し、ネイビスは更に顔を赤くさせた。

苦しげに微笑んだ瞳が、頭の中でフラッシュバックする。

「初めて見た……笑った顔」

胸の高鳴りは、まだ収まりそうも無い。

※

「おい、そろそろいいか？」

「少しは人目も気にしてくれるかしら？ フェイト、お義姉様」

クレアの病室。呆れ顔のアルベルと半笑いのマリアが入り口の所でフェイトとクレアを凝視していた。

フェイトがぎこちな動作で二人に顔を向ける。

「いつから？」

「安心しなさい。最初からなんてベタなことと言わないわ。っていうか、見てたくないし」

冷めてた。どこまでも冷めていた。

お義姉様と呼ばれたことに顔を赤らめているクレアを尻目に、マリアとアルベルは部屋に入った。扉を閉め、鍵も掛けて。

「クレア、彼があなたに聞きたいことがあるそうよ」

「私に？」

「ああ」

アルベルは手近にあった椅子を引き、クレアの前に腰掛ける。勿論マリアの椅子を用意するなど気の利いた事はしない。

後ろからフェイスガン放とうとするマリアを立ち上がったフェイストが抑える。

アルベルの真剣な表情に、クレアはベットから起き上がろうとするが、手で制された。

「怪我人が気を使うな、阿呆」

「お気遣い有難う御座います。ではお言葉に甘えて」

クレアは微笑み、上半身を起こすだけに留めた。

後ろで漸くフェイスガンをしまったマリアが「随分とお優しいことね」と皮肉たっぷり言うが、アルベルは無視を決め込んだ。

更に怒り狂う姉を、弟は必死に止める。フェイストが繰り出されるマリアの拳を避ける。が、同時に繰り出されていた左の拳がフェイストの顎に入った。

クレアはフェイストに小さくエールを送ると、アルベルの真紅の瞳を見つめた。

「それで、私に話とは？」

「俺の母親についてだ」

クレアの整った眉が動く。

意外な言葉にマリアとフェイストは争う手を止めてアルベルを凝視した。

クレアは包帯に巻かれた手を組み、瞳を向ける。その目は、クレア・ラーズバードのものではなく、シーハーツ軍総司令官のもの。重苦しいほどの重圧に、フェイストの額から汗が流れた。あのマリアですらも、クレアに気圧されている。



しかしアルベルだけは涼しい顔で、その瞳を見返していた。

「どうしてそれを私に？」

クレアの声が静かな病室に響く。決して大きくはないが、その声も何ともいえぬ重圧を放っている。

アルベルの唇が薄く笑った。

「隠しても無駄なんだよ。聞いてるんだろう、俺の親父から。全てを」

「……」

「話せ。俺には聞く権利があると思うがな」

「知って、どうするおつもりですか？ これはシーハーツの内情にも深く関わること。生半可な気持ちで聞かれては――」

クレアは言葉を止めた。

ずっと見つめていたアルベルの真紅の瞳が、一瞬優しげな光を宿したのだ。

「理由がいるのか？」

「――いいえ、私の失言でした。お詫びします」

クレアは深く頭を下げる。

あのアルベルが親のことを気にするわけが無い。そういう考えが根付いていた。浅はかな、そして愚かな考えだった。

「にしても、おまえ、俺の親父とどういう関係だ？」

「はい？」

アルベルの少々照れを含んだ物言いに、クレアは目を丸くする。

どういう関係、とはどういうことだろう。受け取り方によってはあらぬ誤解を招きそうな言葉だ。

実際、クレアは後ろから突き刺さってくるフェイトの視線をひしひしと感じていた。

「これだ」

アルベルが一枚のメモのようなものをクレアに手渡す。随分と年季の入ったものらしく、所々が黄色く変色していた。

クレアはアルベルに目をやってから、メモに視線を落とす。フェ

イトとマリアも後ろから覗き込んだ。

「……グラオ様」

クレアが手で額を押さえる。

「クレア、どういことだよ！」

フェイトが叫ぶ。

「まさか——あなた年上趣味？」

マリアが口に手を当て、信じられないといった表情を浮かべる。

「違いますっ！ フェイトも誤解しないで！」

クレアはそれを必死に否定し、グラオを呪った。

八年前、雨降る森の中で一度だけ会った人。

メモには殴り書きしたような汚い字で、こう書かれていた。

『母親について知りたかったらクレア・ラーズバードを尋ねろ。

あと駄目もとで口説いとけ。俺が認めるいい女性だぞ』

※

「僕も聞く。絶対に聞く」

「私も。面白そうなもの」

蒼髪の双子はそう断言した。

メモ騒動の後、ようやくフェイトを落ち着けたクレアは、アルベルに全てを話すと約束した。

そして個人に関わることなのでフェイトとマリアには席を外してもらおうと思ったのだが、これである。

フェイトは腕を組んでその場に座り込み、マリアは不適な笑みを浮かべてベットに腰掛けた。造りの良い木のベットは、二人分の体重を受けてもビクともしない。

「あのね、フェイト。これはアルベルさんとヴァンのプライベートに関することなのよ？ マリアさんも」

「アルベルに人権なんかあるもんか。ヴァンにはあとで謝っておく」「その通りよ」

酷い言い草である。

普段は紳士なフェイトも、クレアのことになると我を見失いがちな面があるのが玉に暇だ。

アルベルはフェイトの頭を殴り飛ばした。

「斬るぞ、阿呆。――しかし、別に俺は構わん。ヴァンには口を出させん。そっちの内情とやらは知らんがな」

「いえ、アルベルさんがそう仰るなら構いません。それにフェイトやマリアさんならお話しても構わないかもしれません。ですが、絶対に他言無用です。何しろこの話は関係者以外は陛下ですら知らないことなのです」

「そんなの許されないんじゃない？」

「はい。本来なら報告すべきことなのでしょう」

「ならどうして？」

マリアが驚きを隠せない様子でクレアに問う。

「理由は二つ。一つはこの件に関して物的証拠がないこと。確証もないことで国を混乱させるわけにはいきません。この事が公に知られれば、国民の大暴動が起こるでしょう」

「もう一つは？」

クレアが瞳を伏せる。

「私自身が、話したくなかった。信じたくなかった。陛下やネル、この国を心から愛している人達に知られたくなかったんです」

「だからといって隠すことが正しいとは思わないけど」

辛辣なマリアの言葉に、クレアは口元だけで笑った。

「その通りです。ですから、今全てを打ち明けます。そして、この話を聞いたあなた方がどうするのかは、あなた方の自由です」

クレアは深く息を吐くと、手と手をを重ね合わせた。

そして、何か思い出すように天井を見上げる。

「さあ、そろそろアルベルさんも痺れを切らす頃でしょうし、お話しします。何から話せばいいでしょうか。……私がこの事実を知るきっかけから、かな」

そう、笑い混じりに言うクレアの瞼の裏には、幼き日の思い出。クレアとヴァンが初めて出会ったのは、今から十年ほど前のこと――。

※

第一印象は、その赤い瞳。

その綺麗な力強い輝きに引き込まれそうになったのを、今でも覚えてる。

その日、シランドにある大きな屋敷で、光牙師団に新たに配属される数名の歓迎会が催されていた。本来ならこのようなことは大袈裟にやる必要など無いのだが、どこかのお偉いさんの息子が入った

らしく、こういった会場が用意された。

光牙師団の軍人に加え、シラントでも名だたる貴族達が自分の事業の話やらに華を咲かせている。歓迎会というより、貴族達の功績の自慢会、といったほうがしっくりくるのかもしれない。

この時若干十四歳にして三級構成員という地位に就いていたクレアの瞳はそのぼんぼんの息子などではなく、ある一点を捉えていた。落ち着いた金の髪に、赤い瞳。精悍な顔。まだあどけなさの残る少年にクレアの目は一瞬奪われた。

「では、ここに居る7名を新たな光牙師団の一員として歓迎しよう！」

光牙師団『光』の師団長アドレー・ラズバードが声高らかに言った。

グラスが合わさる音。騒がしい声。沸き立つ人々。新参者に向けられる視線。

クレアが少年について誰かに尋ねようとした時、そのパーティに参加していた貴族達の会話が耳に入った。

それは、歓迎の言葉などではなかった。

ひそひそと声を潜めて繰り出される言葉に、クレアは顔を顰める。

「ノックス……あの疾風の団長と同じではないか」

「まさかスパイか」

「でも、ラッセル様の養子らしいわよ」

「……どうしてまた。なんにせよ、奴には注意したほうがいいな」

「アーリグリフ——施力は？」

「それなりにあるらしい」

「しかし、アーリグリフの将の息子など……」

クレアはかぶりを振った。またか、と。

シーハーツの傾向は貴族社会。血筋第一。どんなに無能な者でも血筋さえ良ければ高い地位に就き、有能な者が溺れていく。

そして、そんなシーハーツを構成する貴族達の閉鎖的な考え。シーハーツの民以外は野蛮だと決めつけているのだ。

特に宗教国家のシーハーツから見て、無宗教のアーリグリフはどのように映っているのか。考えるまでも無いことだ。

「クレア、君も注意しなさい」

「はい、分かりました」

不意にかけられた声に、クレアは笑顔で頷く。

内心はその言葉に苛立ちを覚えているが、クレアが被る仮面は厚く、気付かれることはない。気に入らないからといってここで食って掛かるほど、頭も悪くなければ子供でもない。クレアは軽くお辞儀をして、その声の主の下から離れた。

クレアは顔見知りの貴族達に適度な社交辞令を済ませ、適当に会場を回っていると、一人テラスの所で佇む少年を見つけた。

どうしてこの少年がそんなに気になるのかは分からない。でも、クレアはこの少年と話してみたいと思った。

手にジュースを二つ持って少年のもとへ行こうとした時、後ろから伸びてきた手に肩を掴まれた。

「クレア・ラーズバードさんだよね。師団長のご息女の」

クレアが振り返ると、綺麗な藍色の髪の少年が笑顔で立っていた。その顔はよく知っている。大貴族の息子で、今日の主役だ。確か四級構成員に配属されたはずだが、真新しい軍服を着こなし、手にグラスを持っている姿は軍人と言うよりも貴族そのものだった。

クレアは仮面の笑顔を浮かべて微笑んだ。

「ええ。ジル・S・フランさん」

「あは、僕のこと知ってるんだ。光栄だな」

ラーズバード家もシランドでは有数の大貴族に入るのだが、上には上がいる。フラン家はシーハーツで五指に入る大貴族である。

クレアは決して人を血筋や家柄で判断しない。それはクレアの信念だった。

だが、同時に現実の厳しさや愚かしさを身に染みて分かっていた。こんなことをアドレーが知ったら怒り狂うだろうが、クレアは父の立場の為、嘘を吐く。ここで下手なことを言えば、責任を取らさ

れるのはアドレーも同じだからだ。

クレアは偽りの笑顔と偽りの敬意を晒した。

「フラン家を知らないほうが失礼というものですから」

クレアがまた微笑むと、ジルも嬉しそうな笑顔を浮かべた。

そしてクレアの顔をじっと見つめる。

「うん。やっぱり可愛いね。見合い写真なんかよりずっと」

「ありがとうございます」

クレアはうんざりとした。またあの父は嫁に出す気もないくせに見合い写真をバラまいたのか、と。

そんなクレアの気も知らず、ジルはふとクレアの手元に目を落とした。

「それ、どうして二つ持ってるんだい？」

「え、ああ。彼のあげようと思って」

クレアは後ろを振り向く。その視線の先に居るのは、テラスで夜風に吹かれている金髪の少年。

「そういうわけなので、失礼します」

「待ってよ」

「何でしょう？」

「僕と踊ってくれないかな？」

ジルがクレアに手を差し出す。

綺麗な手だった。剣を握った形跡すらない手。

きつとこの少年は軍属に入っても戦争に駆り出されることは無く、あったとしても安全な位置から戦況を眺めるだけなのだろう。豪勢な椅子に座り、高みの見物をしているジルがクレアの脳裏にありありと浮かんでくる。

フラン家は代々軍人の家系。しかし、功績をあげたものなどはいない。

地位と権力のあるものだけが、上に昇ってくる。

クレアはジルに見えないように顔を歪め、その誘いをやんわりと断った。

「申し訳ありませんが、またの機会に」

「どうして？ 僕が誘っているのに」

「踊りたい気分じゃないんです」

ジルのしつこさに、だんだんとクレアも苛立ってくる。決して悟られるような真似はしないが、それでも語尾は少し上がった。

「いいじゃない。一回くらいさ」

「ですから――」

「あんまりシツコイと嫌われる」

決して低くは無いが、落ち着いた声がクレアとジルの間に割って入った。

驚き見開かれたクレアの瞳に映る、輝く金と深い赤。

いつの間に移動してきた金髪の少年が、ジルの腕を軽く掴んでいた。

「君は、確かラッセル様のところの――なに、僕の邪魔をするのか？」

「あんた、さっきからこの子が嫌そうにしてるの気付かない？」

「え」

クレアはまたも驚いた。

自信はあった。完璧に感情を隠しているつもりだった。

「いくら大貴族とはいえ、クリムゾンブレイドの娘に対してやりすぎだろ？ それにこの子の父上の性格を知っているなら、そろそろ引いたほうが身のためだと思うけど」

その言葉にジルの動きがピタリと止まる。

「……そうだね、今日の所は諦めるよ」

クレアの父親、現クリムゾンブレイドのアドレー・ラーズバードは娘溺愛で有名なのである。娘の為というなら、国一個潰してしまうというのも過言ではないほどだ。

それに、ジルも貴族の息子。身の振り方くらいは心得ている。ジルは一息吐いて、金髪の少年の腕を振り払った。爽やかな笑顔をクレアに向け、大人の中に姿を消していった。



クレアは暫く呆然としていたが、やがて弾かれるように少年に頭を下げた。

「ありがとう。どうやり過ごそうか困ってたの」

「いいよ。それより、それくないか？ 喉渴いちゃってさ」

少年は喉に手を宛がってクレアの持つグラスを指差した。

クレアが微笑んでそれを手渡すと、少年の顔が穏やかな笑みを浮かべた。

「なんだ。そんな笑い方も出来るんだ」

「え？」

「ずっと見てた。この子も他の奴らと同じで嘘の笑いしかしないのか、って」

少年はグラスのジュースを煽り、口元を手の甲で拭った。

そして、クレアの瞳を覗き込み、また笑った。

「でも違った。あんたの笑った顔、すごく綺麗だ」

「っ！！」

クレアの顔が少年の瞳に負けないくらい真っ赤に染まる。

可愛いとか綺麗とか、男の子に言われるのが初めてなわけではない。

が、こんな綺麗な表情で笑う男の子は、クレアにとって初めてだった。

「あ、そういえば自己紹介まだだったっけ」

そんなクレアを尻目に、少年は明るい口調で話を進める。

「俺はヴァン。ヴァン・ノックス」

「クレア・ラーズバード、です」

クレアはそう答えるのが精一杯だった。

ヴァン、と名乗った少年は屈託の無い笑顔を見せ、クレアの手を握る。

「よろしく、クレア」

その手は傷だらけで皮の厚い、剣士の手だった。

## 光の中に闇

「ちょっとクレア、この馬鹿過去の出来事に嫉妬してるんだけど――鬱陶しいから蹴っていいかしら？」

そこまで話し終えクレアが一息ついた所で、マリアが呆れたような声で言った。

マリアに促されるままにクレアがフェイトを見る。物凄い仏頂面が目に入り、クレアは思わず顔を逸らした。そして、顔は逸らしたまま、手だけでマリアにOKサインを出す。

次の瞬間に耳に入った確実に骨に響いているであろう音と共に聞こえた呻き声を無視し、クレアは一つ咳払いをした。

「それから私とヴァンは何事も無く、順調に任務をこなしていきました」

「……話の端を折るようで悪いんだけど、ちょっといいかしら？」  
手を軽くぱんぱんと叩きながら、マリアは再びクレアの横に腰掛ける。

クレアは首を傾げて、手を軽く差し出した。

「何でしょう？」

一瞬の沈黙。花瓶に飾られたパルミラの花が傾いた。

「フランね――私の記憶が間違っただけなら、『光』に居るのは女じゃなかった？」

「ええ、セフィリア・S・フラン。ジル・S・フランの妹です」

「じゃあ彼は――」

「死にました」

クレアの声ではない。まだ幼さの残る高めの声がクレアの横、マリアの背後から聞こえた。

風がクレアの髪を撫で、パルミラの花を揺らした。突然の風と声

にマリアとクレアは目を見張り、クレアのすぐ横にある窓を振り向く。

肩口まである深い藍色の髪と瞳。右の横髪は小さな三つ編み。額に黒いハチマキらしきものを巻いた少女が、室内に足を垂らした格好で窓枠に腰掛けていた。

「セフィリア！」

クレアが声をあげた。

「へえ、この子が有名な最年少の一級構成員、ね」

マリアは珍しいものでも見るように窓際に腰掛けるセフィリアを眺めた。

セフィリアは冷ややかな笑みをマリアに向け、すぐ視線を窓の外へ移す。

「二年前、アーリグリフとの交戦中に別働隊を指揮していた兄は途中で恐れをなして逃げ出したんです。部下を捨て、一人で。結果、部下は全員死亡しました」

アルベルが頭に手を当て、何か思い出したように顔を上げた。

「思い出したか、歪のアルベル。そうです、指揮官を失った烏合の衆は貴方の率いる漆黒の特殊部隊に壊滅させられました」

「ああ、あの歯応えの無かった連中か。あの時は随分と興ざめたものだ」

アルベルが高圧的な笑みを作ると、セフィリアは冷笑を浮かべた。

「そう、その結果兄はフランの名に泥を塗り、拳句両親から勘当され——自殺しました」

「自殺！？」

「元より親のスネに齧りきりの人でしたから。一人で生きていくなど出来るはずありませんね」

やっと起き上がってきたフェイトに一瞥もくれず、セフィリアは言う。まるで他人事のような口振りだった。そして、この話は終わりとばかりに口を閉ざし、軽い身のこなしで室内に足を踏み入れる。セフィリアはクレアに対し頭を下げ、手に持っていた白い花の束

を差し出した。

「申し訳ありません、クレア様。大変なときにあなたのお傍にすることが出来ず」

「そんなことないわ。あなたにはあなたの任務があったんだから。聞いたわよ？ 一ヶ月はかかるって言われてた魔物駆除、半月で終わらせたそうじゃない。それも予定の半分の人数で」

クレアは、ありがとう、と言って花束を受け取る。それをフェイトがさり気なく受け取り、新しい花瓶へと生けた。

「『炎』がディルナを出してくれましたから、それほどの苦労はありませんでした」

「ディルナって……あのでこぼこ三姉妹の？」

「施力を除けばトップクラスの者です。正直、今回の任務の大半は彼女の功績です」

「そう、何にしてもお疲れ様。明日は休みを取っていいわ。全然休んでないでしょう？」

クレアが心配そうにセフィリアの顔を覗き込むと、凜とした表情の影にはっきりと疲れが見て取れた。

しかしセフィリアは首を横に振った。

「クレア様が仕事を出来ない以上、ヴァンだけに任せてもおけません。クレア様の仕事は重要案件以外は私がやります。それ以外は三柱にお願いすることに――フェイト様、マリア様、お願いできますか？」

「僕は構わないよ」

「そうね。例の件もネル達に戻るまではお預けでやることないし」  
「では、お願いします」

セフィリアはフェイトとマリアに軽く頭を下げ、窓枠に手を掛けた。クレアがセフィリアの服を掴む。

「そういえばセフィリア、あなた何時からそこに？」

「安心してください、何もまずい事は聞いていませんし、見てもいません。フェイト様が吹っ飛んだ所辺りからです」

「よりによってそこか……」

淡々と言うセフィリアの言葉に、フェイトは少し顔を赤くして項垂れた。

セフィリアは口だけに微かな笑みを浮かべ、窓枠から飛び降りる。窓からちょこんと顔を出し、セフィリアは整った眉をやや吊り上げて言った。

「では、私は王都に戻ります。クレア様、くれぐれも無理して早期退院などなさらないように。医師からは最低でも三日と聞いていますから、それより早く退院なさったら強制的にでも戻っていただきます」

「どうも病院って好きじゃないのよね。落ち着かないっていうか、退屈っていうか」

クレアが肩を竦めると、セフィリアは毅然とした態度でそれを啗めた。

「子供みたいなこと言わないで下さい。『光』は三日くらい私とヴァンでなんとかかります」

「仕方がないわね。じゃあお願いするわ。でも私が復帰したらあなたには休みを取らせますからね」

「承知しました。それでは」

クレアの茶目っ気たっぷりの笑みにセフィリアは微笑みを返し、藍色の髪を揺らしながらペターニの雑踏に姿を消した。

※

「さて、三日間の余裕も出来たことですし、ゆっくりお話ししましょうか」

セフィリアの姿が完全に見えなくなった頃、クレアが苦笑混じりに言った。

「三日間の余裕があるのはあなただけよ」

「そうでした」

マリアが嫌味たっぷりに言うが、クレアは余裕の笑顔で返す。こちら辺が年の差というものだろうか、とフェイトは思ったが恐ろしくて口には出せない。

「それにしても忠犬みたいな子ね——あなたに対してだけ」

「ええ、あの子にも色々あるんです。あれでも結構苦勞してきてるんですよ」

「そうね。例えば兄の失敗だったとしても、その妹にバッシングがいかないとも限らないし。この名譽ばかりを気にする貴族社会のトップなら妹に責任を取らせようとしたでしょうしね」

つまらなそうに語るマリアを見て、クレアは小さく拍手を送った。「……その通りです。本当は、あの子は軍に入るような子じゃないんです。打たれ弱くて、繊細で。でも人一倍責任感が強いから、なんとかフランの名譽を守ろうと努力してきましたんです。今じゃ次期師団長候補だとか言われていますけど、全部努力の結果なんですよ」

「なんかネルに似てるわね」

「そうですね。そうかもしれません」

クレアが困ったように眉を下げた。

「おい、続きをさっさと話せ」

そこにアルベルが痺れを切らしたような口調で入ってきた。

クレアは「そうでした」と手を合わせ、アルベルの瞳を見つめた。「それから私とヴァンは1年間共に過ごしました。たったの1年ですが、辛い訓練、命がけの任務。これらを一緒に乗り越えてきた私達は、お互いを心から信賴していました。ですが私達が二級と三級構成員になった時、ある事件が起きました」

クレアの表情が曇った。アルベル、フェイト、マリアも固唾を飲んでクレアの声に耳を傾ける。

たっぷり十秒間の沈黙を置き、クレアは口を開いた。

「――ヴァンが、傷害事件を起こしたのです」

※

その日はバケツをひっくり返したような雨の降る日だった。時折雷が轟き、薄暗い修練施設に一瞬の閃光を降り注いでは消えた。降水量も並みではなく、既にいくつかの河川が氾濫している。土囊の補強などで手は打っているが、このままの状態が長く続けば、それだけでは危ういだろう。

クレアは手に持った訓練用の刀を振る手を止め、窓の外に目をやった。葉っぱや枯れ枝などが混じった雨が窓を容赦なく叩きつけている。

「嫌な雨ね」

クレアはポツリと言葉を漏らす。

「何か……嫌な予感がする」

クレアはおもむろに自分の胸に手を当てた。何時もと変わらぬ速さの心音。

気のせいだ。

そう思い、クレアが胸元を一度ぎゅっと握り、頭を振って刀を握りなおした時だった、

「クレアは居るか!？」



『光』の一級構成員の男性が、血相を変えて入ってきたのだ。

クレアの心臓が一度大きく脈打った。すぐさま刀を鞘にしまい、男性に駆け寄る。男性に一步近づくと、胸に渦巻く不安が一層大きなものとなった。

「何か御用でしょうか？」

「すぐにシランド城に。団長が呼びだ」

「お父様が？」

「とにかく急いで行くん」

そう言つて男性はクレアに外套を差し出したきり、何も言おうとはしなかった。

クレアはそれを不審に思いながらも手早く外套を羽織り、修練施設を飛び出した。予想外に強い雨と風。しかし、クレアには立ち止まる余裕など無かった。胸騒ぎがどんどん強くなり、一刻も早くシランド城へ行きたい気持ちで一杯だった。

外套のフードを被り直し、クレアは全速力で駆け出した。

「クレア・ラーズバード、参りました」

シランド城にある光牙師団団長の執務室の扉を開き、クレアは膝を曲げた。ポタリ、と髪についた雫が床に落ち、染みを作る。

自らのデスクの椅子に腰掛けていたアドレーはガタリと音を立てて立ち上がると、手に持ったタオルでクレアの髪を拭いた。丁寧さの欠片もない拭き方だったが、それがアドレーらしくてクレアは小さく笑ってしまった。

アドレーもそんな娘の笑顔につられるように笑みを見せ、雨に濡れてしっとりとした銀の髪を撫でる。

「クレア、落ち着いて聞くのだぞ」

「はい」

二人以外誰も居ない部屋に、アドレーの少ししゃがれた声が重く響いた。

「ヴァンが――人を刺した」

「え……？」

クレアは何を言われているのか理解できなかった。

ただアドレーの言葉が頭の中をぐるぐると駆け巡るだけで、何も考えられない。

呆然とするクレアの頬にアドレーは大きな手を当てる。冷えたクレアの肌がじんわりと熱を取り戻す。

アドレーはもう一度繰り返した。

「何時も通り師団兵達が訓練をしている時だった。ずぶ濡れになったヴァンが急に姿を現して目に前に居た師団兵を斬ったのだ。幸い処置が早かったお陰で命に別状はないが……」

「どうして……そんなこと」

「分からん。あやつがこんなことをする奴でないのはワシも皆も重々承知じゃ。だが、あの時のヴァンの目は……まるで死人のようだったそうじゃ」

クレアの頬に当てられたアドレーの手が震えている。

震えたいのはクレアも同じだった。しかし、クレアの頭は本来の冷静さを取り戻しつつあった。

「それで、ヴァンは何処へ？」

「それがワシが止めるのも聞かずに飛び出していきおった。おそろく、シランドにはおるまい」

力無く項垂れるアドレーを見て、クレアは顔色を変えた。

部屋に入ってきたときから感じていた違和感。アドレーが上着を着ているのだ。クレアはそっとアドレーの腹へと手を伸ばすと、アドレーはすぐさまその手を掴んで止めた。

「やっぱり――怪我をなさってるんですね」

「なに、掠り傷じゃ」

「ヴァンですか？」

クレアの瞳が揺れる。

アドレーは平静を装いつつ、口元に笑みを浮かべた。

「情けないものじゃ。皆には言う出ないぞ。ワシが刺されたことは誰も知らん」

クレアは頷いた。

師団長を刺したなどあっては、たといかなる理由があろうとも通常の処罰などでは済まされない。

クレアはアドレーに心の中で感謝しながら、意を決したように立ち上がった。

「私がヴァンを探してきます」

「駄目じゃ。この雨で上流に巢食う魔物共がこちらに流れてきておる」

アドレーも同じように立ち上がり、クレアの行く手を遮った。

事実、シランド近辺では見られないはずの魔物の目撃情報は多数入っている。現在はシランド城門前に師団兵達を待機させ、最低限街に入れないようにはしているが、外は分からない。

「ですが、このままではヴァンが襲われる危険性もあります。大丈夫です。必ず戻りますから」

「全く、頑固な所はアイツにそっくりじゃわい」

アドレーは大きく息を吐いた。

「お父様には言われたくないですけどね」

「絶対戻ってくるのじゃぞ——ヴァンと共に」

その言葉にしっかりと頷いたクレアは、まだ湿り気を帯びている外套を身に纏って再びシランドを後にした。

目指すはシランドの西方にある、フォスターの森。別名死神の森と呼ばれ、滅多なことでもない限り軍人でも立ち入らない森である。どうしてそこを目指すのかは分からない。だが、そこに行けばヴァンに会える気がした。

アドレーから譲り受けた刀を片手にしっかりと握り、クレアを死

神の森へひたひた走る。

粘着性のある土が、足にべっとりと張り付いてくる。すっかり水を吸ってしまった外套は重く、足取りも自然と緩慢になった。

死神の森の異名に相応しいほどに絡まりあい、奇妙な造形を作り出す木の蔓がクレアの行く手を阻んでいる。クレアはそれらを刀で薙ぎながら、おぼつかぬ足取りで暗い森の中を進んでいた。

「ヴァン……どこに居るの？」

既に喉は枯れてしまった。痛む喉を片手で押さえつつもクレアは足を止めなかった。ここで引き返せば、もう二度とヴァンに会えなくなる。そんな予感がした。

クレアは随分と前に枝で斬った足を引きずりながらも、しっかりと前を見据えていた。もう足の感覚はない。こんなところを魔物に襲われでもしたら一貫の終わりだというのに、やはり引き返す気に離れないのだ。幸いここまで魔物には一度も会っていないが、この先もそうとは限らない。

クレアが顔を顰め、髪から滴り落ちる水滴を拭ったとき、遠くに金が揺らめいた。

「ヴァンっ！」

クレアは叫んでいた。枯れたはずの喉が悲鳴をあげる。

足を引きずりながら必死に走った。見失わないように。見逃さないように。

「ヴァン……！」

徐々に金が鮮明に見え、その端正な横顔もはっきりと見えるようになった。

クレアは力を振り絞って駆けると、今まで視界を覆っていた木々

や蔦が無くなり、広い空間に出た。森の中にぽっかりと空いた穴のようなそこは、元々あった空間ではなかった。

明らかに人の手によって破壊されたもの。木は乱暴に薙ぎ倒され、蔦が細切れになってそこら中に散らばっている。その散らばる木や蔦の中に既に動かなくなった青い小鳥の雛の姿を見た時、クレアの中で何か熱いものがこみ上げてきた。

「ヴァン……」

クレアは薄緑を杖代わりにしてゆっくりと金の髪の少年に近づく。クレアとヴァンの距離が限りなくゼロになった時、ヴァンは漸くクレアに目を向けた。クレアはその冷たい瞳に背筋が震えたが、ぎゅっと手を握り締めて耐えた。

「ヴァン……どうしてあんなことをしたの？」

「クレア、この国は腐ってると思わないか？」

クレアの質問には答えず、ヴァンは乾いた笑いを漏らした。くつくつと喉の奥で笑っている。

「腐ってる。汚いよ、この国は」

「――ヴァン、一体どうしたの？」

「俺が刺した奴、どうなった？ 死んじゃった？ 団長は？」  
「――！！」

クレアは無意識のうちに動いていた。鈍い音がクレアの耳に響き、ヴァンの口内に鉄の味が広がった。

整った眉を吊り上げ、クレアは頬を真っ赤に染めるヴァンを睨む。

「いい加減にしてよ！ こんなあなたらしくないわ！！」

「……」

「こんな――こんなことして……一体何になるって言うのよ！ あなたは私の知ってるヴァンじゃない！！」

「――お前に、俺の何が分かるんだよ」

低く、そして冷たい声。

燃えるような真紅の瞳が、クレアを容赦なく貫いた。

と、同時にヴァンが素早く腰の剣を抜きクレアに切りかかる。ク

レアは咄嗟に薄緑の鞘でそれを受け止めるが、踏ん張りの利かない足でヴァンの重い斬撃に耐えられるはずも無い。クレアの身体は勢いよく吹き飛び、太い木の幹に叩き付けられた。

「か、は……っ」

強く打ち付けられた肺から空気が漏れる。

クレアはそのままするりと座り込み、その手から刀が落ちた。

ヴァンはふらりとクレアに歩み寄って薄緑を蹴飛ばし、膝をついてクレアの顔を覗き込んだ。苦渋に満ちたクレアの表情を見て、ヴァンの口元が一瞬強く結ばれる。

「知った風な口利かないでくれ」

「な……で……」

「クレアには分かるか？ 絶望を味わった奴の気持ち」

自嘲めいた笑みを漏らし、ヴァンは下を向いた。

クレアの顔を見ているのが辛かった。

シーハーツが憎い。その感情は本物。でも、目の前の少女に対する気持ちも本物。

「頭が——おかしくなりそうだよ。何もかも壊してやりたい。でも、出来ない」

何もかもを破壊すると言う事は、クレアをも破壊すると言う事だから。

ヴァンは顔を上げた。

「——殺してくれ、クレア」

先程の自嘲めいた笑みは消え失せて、変わりになんともいえない表情が姿を現した。

クレアが目を見開いた。

「何……言ってるの？」

「気が、狂いそうなんだ。この国に、自分の愚かさに反吐が出る。早く解放されたい」

「——ふざけないで」

「クレア」

クレアがヴァンを睨み付ける。滅多に見たことのない、クレアの本気で怒った目だった。クレアは一度咳き込んでから、ヴァンの胸倉を掴んだ。

「あなたがどうしてそんな風になったかなんて知らないわ！ でもね、このまま死ぬなんて許さない！」

「――じゃあどうしろっていうんだよ！？ どうせ俺にはもう何も残っちゃいないんだ！ 母さんも、妹も！ 全部シーハーツに奪われたんだ！！」

「どういう、こと……？」

クレアの動きがピタリと止まる。ヴァンは荒い呼吸を繰り返しながら、泥水を跳ねさせながらその場に座り込んだ。

「殺してくれ……頼むから」

緋る様な声。クレアは拳を握り締めた。

「なら、私を殺しなさい」

ヴァンが弾かれたように顔を上げる。目に映ったのは、ヴァンが落とした剣の柄を真剣な表情で差し出すクレアの姿。

「私もあなたの憎むシーハーツの人間。それに、私を殺せば法があなたを裁いてくれるわ」

「ば、馬鹿なことを言うな！」

「お父様や他の人は刺せても私は刺せないの？ あなたの憎しみってその程度のものなの？ そんなものでお父様を刺したっていうの……！？」

「違う！！」

ヴァンは剣を奪い取り、クレアの身体を地面に押し倒した。泥水が跳ね、クレアの銀髪とヴァンの金髪を汚す。

クレアの喉元には、白銀に輝く刃が突きつけられている。そのまま振り下ろせば、その脆い喉は容易く切り裂けるだろう。しかし、クレアは動かなかった。ただ、曇りのない瞳で真っ直ぐにヴァンを見つめている。

束の間の静寂。降りしきる雨は容赦なく二人を濡らしていった。

「違う——俺は……」

ヴァンの剣を持つ手がカタカタと震え出した時、クレアの唇が動いた。

「私はあなたを信じてる」

「!」

ヴァンの口が金魚のように開閉するが、音を発することはない。クレアは酷く穏やかな口調で続けた。

「だってヴァンは何時だって私を守ってくれた。信じてくれた。だから私もあなたを信じてる」

「……」

「私はあなたを救いたい。死しかあなたを救えないなんて信じたくない。だから、話して欲しい」

クレアの手がヴァンの頬に伸びる。ヴァンは身を強張らせるが、決して振り払おうとはしなかった。

「何があったの？」

クレアの優しい瞳がヴァンを真っ直ぐに見つめる。

ヴァンの顔が悲愴な面持ちに変わり、唇がワナワナと震えだした。

「おれ、は……」

ヴァンの手から白銀の剣が零れ落ちる。それはクレアの顔の真横を通り、白い肌に小さな傷をつけて地面に突き刺さった。

クレアは雨で顔に張り付いたヴァンの前髪を軽く払い、その頬を優しく撫でた。

真紅の瞳から透明な雫が零れ、クレアの頬に落ちた。クレアは優しい笑みを浮かべ、泣き崩れるヴァンを抱きしめる。

「だいじょうぶ」

雨の音さえ掻き消すような、澄んだ声。



それはヴァンの知るどんなものよりも優しく、そして暖かな響きだった。

※

クレアは意識を失ったヴァンを抱きしめたまま、呆然とその場に座り込んでいた。正直、足の痛みとヴァンに攻撃された痛みとで意識を保っているのもやつの状態だ。

相当疲れていたのか、ヴァンが起きる気配はない。結局何があったのかも聞けずじまいなのだが、それはヴァンが起きてから聞けばいいと納得し、とにかくこの状況を打破する方法を見つけようとクレアは頭を働かせていた。

先程から回復術をかけてはいるのだが、弱りきった体力でかける回復術などたかが知れている。とてもじゃないがヴァンを担いでこの森を抜ける体力などない。

加えて、こうしている間にも何時魔物が襲ってくるかわかったものではない。忘れていたが、ここは死神の森なのだから。

「とにかく、このままじゃヴァンが風邪を引いちゃう」

クレアがとりあえず雨の当たらない木の下にでも移動しようと、ふらつく足を立てた時だった、

「俺の倅が迷惑をかけたようだな」

深く被った外套のフードの隙間から、ヴァンと同じ金の髪と翡翠

の瞳を垣間見せた男性がクレアの正面に姿を現した。

クレアは小さく首を振った。

「いいえ、とんでもありません——グラオ・ノックス様」

男は声なく笑い、フードを取った。

そこにあつたのはアーリグリフ三軍『疾風』の軍団長にして、ヴァンとアルベルの父親グラオ・ノックスだった。

「アドレーの娘か。賢そうな顔だ。奴に似てなくて安心したぞ」  
クレアは苦笑するしかない。

「どうしてここに？」

「ああ、それは——いや、それよりも風邪を引く。歩けるか？」

クレアが頷くと、グラオは口元に笑みを浮かべて、無理はするな、と告げ、ヴァンを担いで森の外へと歩き出した。

途中何度か魔物に出会いはしたが、全てグラオが剣一閃で薙ぎ払った。その圧倒的な強さは疾風団長の名に恥じないものだった。

クレアの怪我を気遣いながら歩いたのでだいぶ時間はかかったが、漸く森を抜けたグラオとクレアは、近場に廃屋のような家を見つけ、ひとまずその腰を下ろした。

比較的綺麗なベットにヴァンを寝かせ、グラオはクレアに座るように言う。クレアもそれに従い、手近な椅子に腰掛けた。

グラオは懷から小さな麻袋のようなものを取り出すと、クレアの足元に膝をつく。

「どれ、ちよつと靴脱いでみてくれないか？」

「は、はい」

言われたとおり、クレアは靴を脱いだ。

グラオはその真っ赤に染まった傷口を見て、顔を顰めた。傷口から黴菌が入り、化膿している。ここに来るまでも、気が遠のくような激痛だったが、クレアはそれを隠していた。

グラオはそれに気付いてやれなかったことを悔やみつつ、そつとクレアの足を取った。

「酷いな。辛かっただろう」

「いえ、慣れてますから」

「つたく、シーハーツの女は強いな。だが、女の子がそんなんじゃないぞ」

そう言って快活な笑顔を見せるグラオを見て、クレアは吹き出した。

グラオの目が点になる。

「どした？」

「い、いえ。お母様から聞いていた通りの方だったもので……つい」  
「シャロンか。アイツはまたろくでもないことを娘に吹き込みやがって」

グラオはまるで子供のように顔を顰め、ぶつくさ言いながらクレアの足を清潔な布で拭いた。

そして、麻袋から塗り薬を取り出すと、それを患部へと塗っていく。ピリッとした刺激にクレアは小さく呻き声を漏らした。

「——っ」

「すまん。少し痛い効き目は保障する。君の国の術に負けないくらいのとびきり良い薬だ」

「いつも持ち歩いているんですか？」

「うちのもう一人のワルガキが怪我ばかりするからな……よし、これでいい」

思ったよりもずっと綺麗に巻かれた包帯を見て、クレアは舌を巻いた。

以前父に巻いてもらった包帯は包帯の意味をなしていないものだったのだ。ただだからといってそれを巻きなおす気には何故かなれなかったのだが。

「にしても女の子に怪我させるなんて——後で根性叩き直してやる」  
「浅いですし、平気ですよ。ほうっておいたら治ります」

「だからそういうところは……いや、やはりアドレーとシャロンの娘ってことか」

髪をくしゃりと手で押さえ、グラオは乾いた笑いを零した。そし

て新しい布を手にとると、クレアの泥や雨で汚れた顔と髪を丁寧に拭いていく。クレアは擦ったさを覚えながらも、大人しくしていた。

「折角の美人が台無しだな」

手を動かしながら笑うグラオに、クレアは照れたような笑みを見せて口を開いた。

「グラオ様、一つお伺いをして宜しいでしょうか？」

他でもない。ヴァンのことである。

グラオもそれを分かっているらしく、最後にクレアの前髪を拭き、タオルを机の上に置いてヴァンを指差した。

「コイツのことか？」

「はい、ヴァンのお母様は一体どういう方なんでしょうか？ ヴァンが暴走した理由はそこにある気がするのですが」

クレアの真摯な眼差しを受けて、グラオは罰が悪そうに頬を掻いた。腕を組んで頭を二、三度捻らせ、真剣な瞳をクレアに向けた。

切れ長の翡翠の瞳が更に鋭く細められた。

「この話は君の信仰を壊すかもしれん。それでも聞く覚悟が、君にあるか？」

その言葉に、クレアはなんの迷いもなく答えた。

「嘘偽りの信仰なら、いつそ壊れたほうが清々します。真実を見極め、その上で私は私の道を選びます」

グラオは一瞬呆気にと取られていたが、すぐに穏やかに笑い、椅子に腰掛けた。

「シャロンは良い娘を持った」

グラオは静かに瞳を閉じ、暫し言葉を閉ざした。

束の間の沈黙の後、開かれた翡翠の瞳は父親の、そして妻を憂う夫のものだった。

「では、話そう。シーハーツの知られざる禁忌を」

遠くで、雷が落ちる音が響いた。

## 墮とされた王女

「君は、シーハーツの民全てが純粹にアペリス神を崇拝していると思うか？」

グラオの話は、こんな質問から切り出された。

クレアは一呼吸おいて、首を横に振った。即ち、否、である。

「いいえ。そう信じたいとは思いますが」

「そうだろうな。だが現実が違う。それも君の想像していることよりもずっと愚かな過ちをこの国の研究者は犯してしまった」

「過ち？」

グラオは膝の腕組んだ手の指先に光る指輪を見つめ、クレアに向き直った。

「施術を科学で解明しようとした。それも、人体実験という最悪の手段でな」

エレノアの怒りが轟き、驚愕に染まったクレアの顔が一瞬雷光に照らされる。

「そ、んな……」

弱弱しく掠れた声。

異常なまでの喉の渴きを覚え、クレアは自らの喉を片手で押さえた。同時に込みあがってくる吐き気が、胃の奥から不快感を込み上げさせる。

この国は腐っている。

そう言ったヴァンの言葉が突き刺さり、クレアは無意識のうちに顔を両手で覆っていた。予想だにしてなかった現実、純粹に女王陛下と国を守る為に努力してきた少女には重過ぎるものだったのだ。グラオはそんなクレアの様子を見て、頭を振った。

「やはりショックが大きい。しかし、この程度で参られては困る。こんなもの、まだ序の口に過ぎないからな」

「――っ」

「強制はしない。君が辛いというのなら、話はここまでだ。だが、その代わり君にヴァンを支えてやることは出来ない」

クレアの瞳が大きく開かれる。

そして、急に椅子から立ち上がると壁にかけてあった薄緑を手を持ち、足を引き摺りながら家から飛び出した。

グラオは横目でクレアを見送ると小さく息を吐き、いまだ眠り続けるヴァンの顔を見つめた。

「あの子なら……お前の苦しみを分かってくれると思ったんだが。いや、あんな小さな女の子にこんな重荷を背負わせること事態が、間違っていたのかもしれないな」

薬指で光る紫の指輪を片手で押さえながら、グラオは目を閉じた。まるで走馬灯のように頭の中を駆け巡る記憶。楽しかった日々。

愛しい妻。

「なあ――レイナ」

白銀の髪に赤い瞳の女性が、穏やかな笑みでこちらを見ている気がした。

動く桜色の唇。

「大丈夫……か」

そう、呟いた時、背後で扉が開かれる音がした。

グラオは、まさかと思い後ろを振り返ると、雨でずぶ濡れになったクレアが真剣な瞳でグラオを見ていた。

「話して下さい、グラオ様。私は、私はヴァンを支えてあげたい」

「君は……」

おそらく、精神を安定させるために外で剣を振っていたのだろうか。

彼の幼馴染であるクレアの母シャロンも不安になると同じように雨の中剣を振るっていたのを思い出し、グラオは顔を綻ばせた。

やはり、この子なら分かってくれる。

そう思い、グラオは新しい布をクレアに放った。

「長くなる。風邪をひかれてはかなわないからな」

「はい」

クレアは布を受け取ると、長い銀糸を拭き、それを羽織って椅子に腰掛けた。

グラオも再び椅子に腰掛け、話を続けた。

「研究者と言っても一部の者だ。それにこれもまた一部の貴族が加わり、研究は行われた」

「女王陛下はご存じないのですか？」

「ああ。勿論現クリムゾンブレイドの二人も知らない。知っているのは本当にごく少数の者達だけだ」

クレアはほっと安堵の溜息を漏らし、すぐに気持ちを切り替えた。

「研究の目的は、より強い施術士を生み出すため、ですか？」

「その通り。最初は罪を犯した施術士などを使っていたのだがな、そんな者そうそう居るものでもない。だんだんと数が足りなくなってきた」

クレアの眉が顰められる。その先の言葉が予想できたのだ。

「ついに実験体の底がついた時、奴らは考えた。犯罪者がいないというのなら、作ればいい。多少強引な手を使っても、施術士を犯罪者として仕立て上げればいい、と。そしてこれに役立ったのが、貴族共だ。奴らの権力を持ってすれば犯罪者を仕立て上げるなど造作もないことだからな」

クレアは十数年前、まだ自分が生まれる前にシーハーツで施術士が次々と捕まったという事件を思い出した。

既に子供たちの間でも怪談話程度にしか知られていない話だが、その真実は愚かな科学者と貴族の所業だったのである。

「こうして実験体の数が二桁に達した時、研究者達は行き詰まった。一向に成果が見られなかったのだ。貴族は多額の投資をしているのに成果が出ずに怒鳴り散らし、研究者の仲間内でもアペリス神の怒りを恐れ、実験から手を引こうとする者さえ出てきた」

「それで……どうしたんですか？」

グラオの翡翠の瞳が怒りに揺れた。

その異常なまでの殺気に、クレアは喉の奥で小さな悲鳴を上げる。それに気付いたグラオは申し訳なさそうに「すまん」と謝り、頭を下げて話を続けた。

「このままではまずいと判断した研究者達は、ある提案を持ちかけた。それは……」

長い長い、沈黙。

再び開かれたグラオの口から出た言葉に、クレアは鈍器で頭を殴られたような衝撃を覚えた。

「最も強い施力を持った者。――すなわち、王家の血筋を使うことを進言したんだ」

暫くの間、クレアは何も言う事が出来なかった。

人体実験というだけでも神への冒瀆だというのに、更にアペリスの聖女にまで手を出した研究者。許されることではない。

クレアは身体の奥から込み上げる怒りを必死に抑え、グラオに続けるように促す。

「でも、王家の人間を実験体になんて――不可能です。王家の人が犯罪者になどなれば大きな騒ぎになり、ます……し」

クレアの声が尻すぼみになる。冷や汗が一滴、クレアの顎を伝い地面に落ちた。

「現女王の子供は二人だそうだな。生きている者は」

あったのだ。王家の人間を利用できる方法が。そして、それをやつてのけたという痕跡が、確かにあった。

グラオは言葉を繋ぐことが出来なくなったクレアのかわりに話を続ける。

「だが、もう一人居ただろう？ 三人目の子供が」



「そんな——そんな……！」

クレアは半ば叫びながら頭を抱えた。耳を塞いだ。  
聞きたくなかった、そんな話など。

今まで自分の信じてきたものが音を立てて崩れるような、そんな  
虚無感をはらんだ感覚が、空から滴り落ちる雨にも冷たさでクレア  
を襲う。女王やクリムゾンブレイド達は知らない。その言葉だけが  
唯一クレアが立つぬかるんだな地面を支えていた。

不意に、父の顔と大きな手を思い出した。あの笑顔を向けられれ  
ば、あの大きな手で頭を撫でられれば、いくらかこの虚無感を和ら  
げられるかもしれない。

だが、今父はいない。乗り越えるしかないのだ、自分で。  
そうクレアが思ったとき、頭に乗せられるものがあつた。

「ごめん……クレア」

アドレーには遠く及ばない、小さな手。だがしかし、同じくらい  
暖かく、頼もしい手。

クレアは緩々と手を頭の上に持っていく、その手を握った。  
そして、涙で濡れた顔を正面へと向ける。

「ヴァン——！」

泣きそうな顔をしたヴァンが、そこに居た。

「クレア、もう聞かなくていいよ。こんな話忘れてしまふんだ」

そう言ったところで忘れることなど出来はしないのなど、ヴァン  
もよく分かっている。だが他になんと言えればいいのか、ヴァンには  
見当もつかなかった。

この抱きしめれば折れてしまいそうなほど華奢な少女が、自分な  
どの為にその身を削る思いで話を聞いている。そう考えると、全身  
が引き裂かれる思いだった。

ヴァンはやんわりとクレアを抱きしめると、その虚ろな眼差しをグラオへと向けた。

「父さん、これ以上は——」

「続けてください」

ヴァンの口の前に手を掲げ、その言葉を遮ったのは他ならぬクレアだった。ヴァンから身体を離し、大きく息を吐く。その顔は未だ蒼白で、立っているのもやっとといった感じだったが、その瞳だけは真っ直ぐに前を見据えていた。

強い少女だ、と、グラオは思った。

ここへ来てクレアは二度辛い事実を知る羽目になった。知らなければ、己の道を迷うこともなく、ただ国をひたすらに思う武人として翳り無き生涯を迎えられたかもしれないというのに、クレアは知ることを望んだ。

今クレアを支えているものは何なのか。クレアの間の前には一休閻以外の何が見えているというのか。

皆目見当もつかない問いにグラオは喉を鳴らせた。

「だ、そうだが？ おまえに彼女の意思を止める権利はないぞ」

「クレア！」

「いいの。私が、知りたいんだから」

クレアの有無を言わさない視線を受けたヴァンは言葉を詰まらせた。

その様子を見ていたグラオが「諦めろ」と小さく口にし、椅子に深く腰掛けた。ヴァンも納得のいかない表情を浮かべながらも、ベツトに腰を下ろす。

「さて、続きといこうか。君も気付いている通り、研究者達は現女王の三番目の子供を研究対象に選んだ。既に二人生まれていたからな、三人目ならいいと思ったんだろう」

「罰当たりな……」

「全くだ。で、だ。その方法は簡単」

「死産、とみせかけたのですね。確か記録にはそう残されています」

クレアの言葉に、グラオは片目を瞑って応えた。正解、と。

「産婦達も研究者の回し者だった。女王には死産と告げられ、赤子はそのまま研究所送りになった。勿論ダミーの赤子の死体を用意するとこも忘れてはいない。何せバレたら一大事だからな」

「――酷い」

「その三番目の赤子の名前は”レイナ”。勿論女王、母親に付けられた名前ではない。実験番号017。だから、”レイナ”」

クレアはグラオがその名を呼ぶとき、酷く優しい表情になるのに気付いた。翡翠の瞳が細められ、口元には微かな微笑み。

「どんな実験が行われていたか、詳しくは知らん。だが、見当はつく」

クレアも頷く。言葉にするのがはばかれるような非道な実験だったのだろう。

「死にたくなるような実験の日々だったそうだ。だが、レイナが十八になった時、一つの転機が訪れた。レイナを哀れに思った一人の研究者が、隙を見て彼女をアーリグリフへと逃がしたんだ」

「アーリグリフへ？」

「そうだ。シーハーツならどこへ行こうが貴族の情報網からは逃れられない。逃亡するならアーリグリフ以外なかった」

貴族達は基本軍人を快く思っていない。なぜなら、軍人は決して家柄の良い者ばかりではないからである。

勿論ネルやクレアといった大貴族の軍人もいるが、大半は庶民の出のものがほとんどだ。家柄重視の貴族から見たら階級の低い者が出しゃばる、さぞ卑しい集団に見えることだろう。

だから貴族は基本的に軍人を信用しない。それゆえに金で雇った者などを使い、独自の情報網を築き上げているのだ。その情報網は広く、執念深い。シーハー国内のことならば、大抵のことはそれに引っかかるだろう。

しかし、アーリグリフはそうかかない。あちらも貴族の権力が強く、且つシーハーツを毛嫌いしている傾向にある。そう易々と情

報は入ってこないのである。

「レイナがあてもないままアーリグリフで怯えるように暮らし数ヶ月が過ぎた頃だ。彼女は一人の男と知り合った。男はレイナに一目惚れをし、すぐに求婚を申し込んだんだ」

「い、いきなりですね」

「男ってのはそんなもんだ。それで、レイナは男を巻き添えにするのを恐れ断っていたんだが男はしつこかった。断っても断っても諦めなかった」

グラオの口調が徐々に昂ってくる。

「そのうちレイナもあまりのしつこさに根負けし、男に秘密を打ち明けることを決心した。そうすれば諦めてくれると思って、な」

「その方はなんと？」

クレアの問いに、グラオがにやっと笑う。椅子から立ち上がり、マントを翻らせてクレアの前に跪いた。

「『そのような不肖の輩などに、貴女を渡したりしない。私の天駆ける竜の背に乗せ、彼奴等の手の届かぬ雲の向こうまでお連れしましょう』」

そう、まるで何かの劇のような台詞を言い、グラオはクレアを見上げた。その優しく、しかし強い光を持った瞳にクレアは少したじろいだ。目線を逸らし、手を膝の上で組む。

「その男性が……グラオ様なのですね」

「その通り。なかなかのくどき文句だろう？　これ聞いたレイナも人形のように綺麗な顔が急に崩れてな。大笑いしたんだ」

「それは、そうでしょうね」

「ま、なんにせよだ。こうして俺と彼女は出会った」

グラオがどかと椅子に腰掛ける。

今まで沈黙を通していたヴァンがクレアに歩み寄り、物憂げに眉を下げて笑った。

「そう。つまり、俺はシーハーツの王女の息子ってことさ。――墮とされた王女のね」

何時の間にかパルミラの涙は止まり、イリスの息吹が風通しの良い家を吹き抜けた。

※

「お話は分かりました。ヴァンが暴走した理由、それはこの事実を知ってしまったから、ということですね？」

束の間の沈黙を置き、クレアは組んだ腕を解きグラオを見つめた。

「ああ。だが、まだ知りたいことがあるんだろう？　なんなりと言ってくれ」

「では、お聞きします。その後レイナ様はどうなったのですか？」  
クレアはこの言葉を発した後に後悔した。グラオとヴァンの表情がみるみるうちに暗くなっていたのが分かったからだ。

グラオは大きな手でくせの強い髪を搔くと、長く息を吐いた。

「……死んだ。いや、殺された、のほうに近いかもしれないな」  
「殺された!？」

「俺とレイナが誰にも知られないように結婚し、一年が過ぎてアルベルが生まれた。幸せだったよ。レイナもよく笑うようになった」  
長い前髪がグラオの顔に影を落とす。

言葉とは裏腹にその表情は重く、暗い。

「そしてレイナが二人目の子供を身ごもった頃、シーハーツの研究者に事が露見してしまったんだ。レイナはシーハーツに連れ戻され

た。よりによって俺がいない時にな」

顔を手で覆うグラオが酷く小さく見えた。逞しいと思えた両肩は情けなく震え、彼の心境を物語っている。

「幸か不幸か、突き止められたのはレイナがアーリグリフに逃げたということだけで、俺とアルベルのことは知られていなかった。シーハーツの連中も探りを入れようとしていたみたいだが、まさか疾風団長の元でかくまわれていたとは思わなかったのだろう。結局分らずじまいだった」

「それで……グラオ様は？」

「探したさ。必死になって。だが、見つけれなかった。愛した妻も、生まれてきてすらいな赤ん坊も、俺は助けることが出来なかった。奴らは嘲笑うかのように、俺から大切なものを奪っていった」  
グラオの拳が強く、白くなるほどに握り締められる。

「そればかりか、連中はレイナを取り戻すだけに留まらなかった。レイナが身籠っていると知ると、生まれてくる子供までも利用することを決めたんだ」

豪雨が去った後の完璧なまでの静けさが、辺りに漂った。先程まで五月蠅く窓を叩いていた風の音も、息遣いも何も聞こえない。ただ混沌とした重圧だけが、今クレアが感じる全てだった。

一時の間、音を失ったのは世界ではなく自分のほうだとクレアは理解した。

完全なる沈黙の世界に突如響いたグラオの声と共に、クレアは音を取り戻した。

「だが、ここで連中に誤算が生じた。一つはこの非道な研究に反対するものが居たということ。もう一つは――生まれてきた子供が双子だったということ」

「双、子？」

「そうだ。そこで研究に反対していた研究者の一人が、その双子の片割れを逃がすことを決めたんだ。レイナもその研究者も苦渋の決断だっただろう。女の赤子を残し、男の赤子を逃がした。勿論連中

は双子だったということなんて知らないからな。全く気付かずじま  
いだった」

一人を助けるためとはいえ、一人を犠牲にした。  
それが正しいのか正しくないのなど、一体誰が決められようか。  
クレアは込み上げる何かに耐えるように強く目を瞑った。

時に人はどちらかを選択しなければならぬ時が必ず来るものだ、  
と誰かは言った。

それを聞いたとき幼馴染は言った。誰よりも強くなってどちらも  
助けてみせる、と。

例え話として誰と誰を比較に使ったかは覚えていない。しかし、  
例えそれが誰であろうと、あの優しすぎる幼馴染はそう言ったのだ  
ろう。

だがクレアは違った。どちらかがこの国のために有益か。無意識  
のうちにそれを考えてしまっていた自分に、クレアは嫌悪感を覚え  
た。軍人としてはそれは正しいのかもしれない。でも人としてどう  
か。答えはいつもクレアに優しくはなかった。

「グラオ様、は……その決断をどう思われますか？」

「難しい質問だな。だが、俺は感謝している。でなければこうして  
ヴァンに会えることはなかったんだからな」

「父さん……」

「レイナももう一人の子も俺にとっては掛け替えのないものだ。だ  
からその二人が命を賭してまで守った命を、俺は絶対に守ってみせ  
る。無論アルベルも」

そう言って微笑むグラオの顔に迷いなどなかった。ただ愛しきも  
のを想い見る一人の男の表情。

グラオは話を続けた。

「逃がされたこいつは知ってのとおりその研究者が信頼をおける人  
物に預けられた。それがラッセルだ。すぐに俺の元へ送り返しては  
怪しまれる危険があったからな」

「ではラッセル様はこの事をご存知なのですな」

「うむ。ただ奴はこのことを一切口外する気はないらしい。神に  
対しての冒瀆。国民が知ればどうなることか」

「暴動が起きて、多数の死者が出ることになるでしょう」

クレアの応えに満足したようにグラオは頷く。

「あれで国のことを大事に思っているからな。話を戻すが、ヴァン  
は養子という形でラッセルに預けられた。ヴァンにも施力があつた  
からな。アーリグリフよりシーハーツのほうが暮らしやすいと思っ  
た」

施力を持つものはシーハーツ国内でも数少ない。つまり、施力が  
行使出来るというだけで様々な特権が与えられるのだ。

力あるものは力無いもののためにその力を行使すべきだ。そうグ  
ラオに言われたヴァンは、この生まれ持った力を最大限に発揮でき  
る地、シーハーツを選んだのである。

「そんな中、ヴァンがシーハーツに居つくと決めてすぐのことだっ  
た。ヴァンを逃がした研究者からレイナと女の子供が死んだと聞か  
されたのは」

「っ」

クレアが息を飲む。

「ヴァンには母親のことは一切話していなかった。当時ヴァンは五  
歳。こんな酷なこと、言えるはずも無い。いずれは話さなければな  
らないと覚悟していた」

だが、とグラオは俯く。

「どうしても告げる気になれなくてな。特に君と出会ってからヴ  
ァンは楽しそうで、幸せそうだった」

「俺は……」

「しかし、運命というのは残酷だな。ヴァンは自ら答えを出した。  
ラッセルの部屋に忍び込み研究者とのやり取りの手紙でも読んだの  
だろう？」

グラオが首だけをヴァンのほうへ向けると、ヴァンはすぐに顔を  
逸らした。



「前から父さんとラッセル様が俺に何か隠してるのは分かった。だから、気になって……」

「それで事実を知って我を失ったってわけか」

「許せなかったんだ！ 人の命を道具のように使うやつらが！ たかが知的欲求の為に母さんや妹が殺されたと思うと、俺は――」

クレアは兄弟を持っていないし、母親も健在だ。無論父親も。だからヴァンの苦しみを理解することはきっと出来ない。

そう心の中で思っていた。

だが、

「クレア？」

「どうした？ 足が痛むのか？」

「え、あ……」

頬に手を持っていく。濡れていた。一筋の涙が、クレアの頬を濡らしていたのだ。

クレアはすぐに手の甲でそれを拭い、笑顔を作った。

「ご、ごめんなさい。なんでもないの……なんでもないんだけど、ど……」

涙が止まらなかった。拭っても拭っても、それはまるで枯れることを知らないかのように次々と溢れ出す。

ただただ、その真実を知ったヴァンの気持ちを思うと、悲しくて仕方なかった。

パルミラの嘆きとエレノアの怒りは去り、残されたのはイリスの抱擁。暖かい風がクレアを、ヴァンを、グラオを包み込んだ。

※

「クレア、俺はもっと上に行く。偉くなって、この国を変えるんだ。もう二度と母さん達のような人を出さないためにも」

「うん。私も協力する」

「ありがとう。きっとそうするほうが、俺が復讐に生きることよりも母さん達は喜んでくれる気がするから」

夜空に満点の星達が煌く中、ヴァンとクレアは小高い丘の上に並んで腰を下ろしていた。

二人の間には僅かな距離。この近すぎず、遠すぎずな距離感が妙に心地よかった。

クレアが泣き止んだ後、クレアとヴァンはこの話は胸の内にしまっておくことを決めた。そしてヴァンは自らの考えを改め、復讐を止めることを誓った。それが真正面から向き合ってくれたクレアへのせめてもの恩返しだった。

ヴァンは自らシーハーツに戻り、アドレーとヴァンが傷つけた師団兵に謝罪をした。無論処罰無しというわけではないが、精神が不安定だったことが考慮され、半年の謹慎と四級への降格という、クレアが予想したよりも遥かに軽い処罰で済んだ。

無論、アドレーがヴァンに刺されたことを黙っていたことが大きいのではあるが。

むしろ、ヴァンにとってはラッセルとグラオからのお怒りのほうがよっぽど堪えたことだろう。本当の父親ではないとはいえ、十数年の間ヴァンの面倒を見てきたラッセルは、ヴァンを本当の息子のように思っていたに違いない。

二人の父親に愛されるヴァンをクレアは少し羨ましく思ったが、アドレーが二人居ることを想像し、すぐにその考えを改めた。

「皆には黙ってるって言ったけど、アルベルさんには話すつもりなのよね？」

「もう少ししたら話すよ。すごい勢いで修行に打ち込んでるらしく

てね、今話すと支障をきたすだろうからって」

「次期疾風団長候補でしょ？　すごいじゃない」

「ああ。俺も負けてられないな」

ヴァンがまるで幼い子供のように笑う。

そしておもむろに立ち上がると、クレアに訓練用の刃を欠いた模擬刀を投げた。

「というわけで、一回手合わせ頼むよ」

「私、足の怪我完治してないんですけどね」

そう言いつつもクレアは刀を手に取り、正眼に構える。

「ま、いいわ。それくらいのハンデあげるわよ」

「後悔するなよ」

夜の空にひとつの流れ星が駆ける。

それを合図にしたように、二つの影が同時に地面を蹴る。打ち鳴らされる、刃と刃が交わる音。静かな平野に、その迷いない音はどこまでも広く冴え渡った。

刃を交える二人の表情は、この上なく希望に満ちていたのだった。

## 月夜の訪問者

「これが、私の知る全容です。その後は何事もなく、数年後には研究は打ち切られたそうです。真実は定かではありません。しかし、少なくとも施術士や国民が犯罪を犯し姿を消す、ということはありませんでした」

クレアは息を吐いた。長い話をしたのだ、疲れるのも当然だろう。フェイトは窓際の机に置いてあった水差しを手にとると、コップに注いでクレアに渡した。

クレアがフェイトに礼を言って水を飲む。相当喉が渴いていたのだろうが、水分を摂ったクレアの表情が和らいだようだった。

誰も何も言葉を発しなかった。アルベルもマリアも、考え込むように視線を伏せている。

俄かには信じられない話。この信仰厚い都の下で、外道とも言える研究が繰り返されてきていた。

進歩には犠牲がつき物だ。フェイト自身もそれは分かっていたことだし、地球で学生をしていた頃は気にも留めなかった。認めたくないが、所詮は他人事と思っていたのかもしれない。

しかし人事ではなかった。他ならぬ自分が実験体として使われていたのだから。

一度は父を恨みもした。全てが終わったとき、一体自分は どうすればいいのかと嘆き、悲愴にくれた日もあった。体の中に凶器を仕込んだ自分に居場所などない——そう思っていた。

だが、受け入れてくれる人がいた。支えてくれる人がいた。背中を押してくれる人がいた。

そして、それはヴァンも同じこと。事情が違うとはいえ、並大抵の衝撃ではなかったはずだ。悪い言い方をすれば、彼は母と妹の犠牲があつてこそ、今日まで生きていたのだから。

だからこそ、クレアの存在はヴァンにとって大きなものなのだろう。

フェイトは、ヴァンがクレアを大事にしている気持ちに本当の意味で理解できたような気がした。

そこまで考え、ふと向けた視線の先でフェイトは目を留めた。

「あれ？ アルベル、そんな腕輪してたっけ？」

「ああ。メモと一緒に親父の机の中に入ってた」

アルベルの右手首に輝くのは、紫水晶のような腕輪。細い輪が三つ腕に通されているようだが、一つ一つはきちんと繋がっている。クレアもその腕輪を見つめ、思い出したように声を上げた。

「確か、ヴァンも同じような腕輪してました」

「母親の形見らしいからな。あいつが持っても不思議じゃない」「そうなんだ」

フェイトの声が揺らぐ。あんな話を聞いた後では、どんな言葉をアルベルにかけていいのか分からなかった。

しかし当人のアルベルは気にする様子もなく、音を立てて椅子から立ち上がった。

「話はこれで終わりだろう？ 俺は行く」

「アーリグリフに帰るのか？」

「いや、王に届け物を頼まれてるからな。その準備に二、三日かかるらしいから、その間はシラント城に居るつもりだ」

心底嫌そうに吐き捨て、アルベルはドアに手を掛けた。

「悪かったな、時間取らせて」

短く言い切り、アルベルは病室から姿を消した。

それを見届けたマリアも大きく背伸びをして立ち上がり、クレアに礼を言って出て行った。フェイトはその後姿がどこか焦っているように見えたのだが、気のせいだと振り払った。

「なんかさ、アルベルとマリアって似てないか？」

「私も同じこと思ったわ」

「似たもの同士なのかな。素直じゃないところとか」

「そんなこと言って、怒られるわよ？」

「どっちに？」

「さあ？」

そんな他愛ない会話を続けていたところで、病室の扉が控えめにノックされた。

そして、一人の医師が控えめに顔を出した。

「クレア様、そろそろ面会終了のお時間です」

「あ、もうそんな時間？」

話を始めた頃は太陽がさんさんと輝いていたはずの空は、今はもう紅く染まっていた。白い病室も、窓際に飾られたパルミラの花も、すべてが美しい紅色へと染め上げられている。

太陽が一日で一番輝く時間。最後の最後にありったけの光を放ち、それは山際に消えていくのだ。

「明日は晴れかな」

「え？」

「昔さ、夕焼けが綺麗な日の次の日は晴れて聞いたことがあるんだ」

「そうなの」

「うん。だからきつと明日は晴れるんじゃないかな。あ、じゃあ僕は行くよ。明日またお見舞いにくるから。——おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

フェイトは扉を閉める間際、医師と楽しそうに談笑するクレアの顔を一度見て、ゆっくりと扉を閉めた。

※

既に日は落ち、女神達が夜の闇に浮かんでいた。沢山の星の涙は、今日も変わることなく瞬いている。

そんな中、フェイトは頭を捻らせながら歩いていた。考え事をしながらふらふらと歩いていけば、行き着いたのは光の架け橋。シランドとイリスの野を繋ぐその橋は二重構造になっていて、どうしてものように作られたのかなどは一切わかっていない。

シランドを満たす聖水の流れる音が、風に乗って夜に響く。絶えず流れる聖水は月明かりに照らされ、昼とはまた違った雰囲気を出している。

神秘的とも言えるその情景に、フェイトは暗幕がかかっていたような頭の中が晴れていくのを感じた。

「落ち着いて考えなきゃな」

フェイトは一度深呼吸をして、橋に凭れ掛かった。そして考えを巡らせる。

ついさっき入った通信で、アーリグリフそしてサーフェリオで発見されたものは本物のエリミネートライフルだったと報告された。ソフィアは落ち着いた様子で話していたが、ネルのほうはクレアの怪我を聞いた後だからか、不安を隠せないでいた。しかしフェイトが元氣だと伝えてやると彼女らしい冷静さを取り戻したようだった。

「これで三——いや四、か」

クレセントの話を信じるならば、エリミネートライフルはもう一つある。それも使用可能な状態で、だ。

幸い新たに見つけた二つは本人認証が作動していたらしく使用できない状態だったが、そもそもこうも立て続けに発見されること事態がおかしいのだ。

「さっきのクレアの話も気になるけど、まずはこっちが優先だ」

目下の問題はエリミネートライフルの件とシャロム家の件。下手をすればまた死人が出る。それだけは避けなくてはならない。

多数のエリミネートライフルの発見。シャロム夫妻殺害事件。一見何の関係もない事件。しかし、何か関係がある。ただ、何かそれを繋ぐものが欠けているだけ。フェイトはそう思えて仕方なかった。

「いや、勘だけで先入観を持つのは良くないよな」

フェイトはぶんぶん頭を振った。

「そうだね。でも思弁なしでは進まないこともある」

「え？」

突然の声に、フェイトは思わず辺りを見渡した。それらしい人影は無い。ただ黒く染まった木々がさわさわと揺れているだけ。

しかしその声は幻聴などではなく、ごく自然とフェイトの耳に溶けた。

「君は何を悩んでいるの？」

「誰だ？ 何処に居る？」

フェイトは辺りに気を巡らせつつ、声に問う。声からは全くもって敵意は感じられない。むしろ楽しそうな声色だった。

「分からないことは勝手に想像すればいい。それが正しかったとしても、間違っていたとしても、ここで足踏みするよりはマシでしょう？」

「確証のないことを推し進め、犠牲が出たらどうするんだ」

「でも、このままにしておいても犠牲は出る」

「詭弁だ」

声が笑った。決して高くもなく、低くもない声だが、その笑い方はまるで少女のようだった。

「面白いね。噂通りの生真面目君」

「笑ってないでいい加減姿を現したらどうなんだ？」

「そうだね。ここじゃ話しぶらい」

フェイトの背後でガサリと音が聞こえ、何かが地面に降り立つ音。ムーンリットの端、シランド側に立つ木の根元に一つの人影があった。影がゆっくりとフェイトに近づいた。月明かりに照らされ、その姿が露になる。



「初めまして、フェイト・ラインゴッド君」

月が一層強く輝いた。まるで彼女を祝福するように。

しかし、月が輝けば輝くほど、星の涙は増えていく。涙が一つ流れ、何所へともなく姿を消した。

悲しい情景のもと、フェイトは目の前に佇む黒髪の女性から目を逸らせずにいた。月が地上に落とした涙のように、どこか寂しげな、彼女の姿から。

※

シランド城の謁見の間に不穏な空気が流れていた。

そこに居る二人の人物は声を潜めるようにして、会話を続けている。

「それは真なのですか、陛下」

「はい、間違いありません」

額に脂汗を浮かべながら問いかけるのは、この国の執政官であり、女王の右腕でもあるラッセル。そして、それにこれもまた神妙な面持ちで答えるのが、聖王国シーハーツの女王、ロメリア・ジン・エミュールである。

「とすれば、あやつは一体……」

「――わかりません」

「ともかく、正体が分からぬ以上野放しには出来ませぬ。――誰かラッセルが大きく手を叩く。

「何用得御座いましょうか？」

一人の師団兵が謁見の間に現れ、女王とラッセルの前に跪いた。

「今、シランドに師団長は居るか？」

「は。現在は『風』のシレーネ・リシャス様が居られます」

「すぐに呼んで来い。ああ、それとセフィリアもだ。念のためシレーネのサポートにつかせる」

「は！」

師団兵は大きく頭を下げると足早に謁見の間を後にした。

ラッセルはさり気なく女王の表情を伺う。暗く重い影が落ちていた。

「シレーネには、辛い任務になりますね」

「止むを得ないでしょう」

そう言うラッセルの顔もまた、歪んでいた。

静かな空間に、暫しの沈黙が訪れた。

※

「君は……だれだい？」

フェイトがそう問いかけると、目の前の女性はにっこりと微笑んだ。どこか違和感を感じる笑顔に、フェイトは少し戸惑う。

毛先がところどころはねた、短い黒髪に紫水晶の瞳。身長はすらりが高く、ネルと同じかそれ以上はあるようだった。そして、何よりフェイトの目を引いたのは、その服装。黒い上下の上に、地球でいう白衣のようなものを羽織っている。

「――それで、君は一体何を悩んでいるの？」

女性はフェイトの質問には答えず、橋の手摺に腰をかけ、足を宙に投げ出した。

フェイトは大きな溜息を吐き、手摺に両肘をつける。どうやらこちらの質問に答える気はないらしいということが分かったからだ。

「さあね。強いて言うなら何をすればいいのか分からないってのが、悩みかな」

シャロム家の事件も、エリミネートライフルの件も。誰が何のためにこんなことをしたのか。皆目検討がつかなかった。

シャロム家については理由がありすぎて困りものなのだ。シャロム夫人の反乱疑惑は有名なことであるし、恨みを持っている人間が居ても不思議ではない。下手な話、国内の過激派が密かに暗殺を目論んだという話もなくはないのだ。

疑わしきは罰せよ、と。

ただそうなるとシャロム家の領主まで殺す必要があったのかは疑問だ。領主は立派な人物として有名であるし、彼がいなくなったことで早くもペターニの商取引が滞っているという情報も入っている。

夫人が反乱を企てていたのだから夫もまた関係していると思われるのだろうが、決定的な証拠もないままに国の貴重な収入源を減らすようではリスクが大きすぎる。――となると、やはり内部の犯行ではないと考えるのが妥当だが、そうなるとまた振り出しに戻るだけなのだ。

フェイトは溜息を吐いて項垂れた。本日何度目か分からない大きな溜息。

女性はすつと手を伸ばしてフェイトの蒼髪に触れた。フェイトが驚いて顔を上げて、その手が止まることはない。

ただただ楽しげな表情でフェイトの髪を撫で続けている。

「似てるね」

「何が？」

「その悩んだ時の顔。もうだめだー、みたいな顔でさ」

「誰に似てるっていうんだよ」

「君も良く知ってる人。そっくりだよ。頭良いくせに深みに嵌ると抜け出せないとかそっくり」

女性が手摺から飛び降りる。

「正攻法だけじゃ駄目だよ。世の中には理解できないことが沢山ある。理解できない考えを持った人も居る」

「それはどういう――」

「それに、思いもよらないことが繋がってる場合もあるかもしれない」

フェイトは目を見開く。まるで自分が思っていた事を読んでいるかのような言葉だった。

「……君は、誰なんだ？ シーハーツ人か？」

「さあ、どうだろう」

女性は笑った。

聞くな。――その笑顔は暗にそう語りかけているような感じがして、フェイトはそれ以上追及出来なかった。

まるで子供のような無邪気さの中に垣間見える深い悲しみが、絶えることなく闇に溶けていく。

「寒くなってきたね、そろそろ帰らなくちゃ」

「ちょよ、ちょっと待って！」

「またね、フェイト」

その言葉が全て言い終わる前に、女性はフェイトの前から姿を消した。

残ったのは悲しみの欠片、ただそれだけ。フェイトは目には見えないそれを手に取るように宙をつかみ強く握り締めた。

それから小一時間。フェイトは呆然と空を眺め続けていた。

月が、酷く輝く夜だった。

シャロム邸の広間にある長い机の一端に腰掛けたクレセントは、湯気の立つスープを掬い口に運んだ。

「美味しい」

「ほんとか!？」

クレセントの真向かいに座ったネイビスが喜びを前面に出した表情で身を乗り出す。クレセントは頷いて、ふたたびスプーンに口をつける。

「はい。とても美味しいです」

何時も通りの淡々とした表情と口調だったが、ネイビスはほっと胸を撫で下ろした。

「そ、そうか」

「ネイビス様が料理出来たなんて、少し驚きました」

この手のタイプは料理などしたこともないというのが定番なのが、意外にもネイビスの作ったスープは本格的だった。

ネイビスは赤くなった顔を隠すようにクレセントから顔を逸らし、頬杖をついた。

「俺とアゼルが幼馴染だったのは知ってるよな。でさ、俺ら二人とも親忙しくてどっちかが作るしかなかったんだが、アゼルがまるで料理駄目だよ」

「アゼル様が料理苦手なんですか？」

「意外だろ？ ああやってなんでもやってのけそうなタイプほど料理とか苦手だったりするんだぜ」

「そういえば、マリアも料理が苦手でした」

苦々しげに料理について語るマリアの顔を思い出し、クレセントは僅かに顔を綻ばせた。

「驚くくらい、知識はあるのに、どこか変なところがあって失敗し

ているんです」

「……」

「おかしいですよね」

「好きなんだな、あいつのこと」

頬杖をついたままのネイビスがクレセントに笑顔を向ける。クレセントは戸惑いつつも、首を縦に振った。

ネイビスは頬杖を解き、癖の強い髪を掻く。

「たった二日でおまえが心許しちまうなんてな。一体どんな魔法を使ったのやら」

「——そうですね。私も不思議です」

「ハハ。まあ、あいつは並みの奴じゃなねえとは思ってたけどな」  
クレセントはその言葉に同意するように頷きながら、また食事を再開する。トマトの味と共に広がる優しい味に胸が満たされるのを感じながら、ゆっくりとスプーンを口に運んでいく。

徐々になくなっていく赤いスープとクレセントの顔を、嬉しそうに眺めながらネイビスは黙って座っていた。

幸せだ、と心の中で呟き、ネイビスが小さくガッツポーズを取った時、

「あなたって本当単純よね」

妙な威圧感を持った声が、ネイビスとクレセントの視線を入り口の方へと向けさせた。

「マリア」

「おまえ……居るなら声かけろよ」

青い髪を一つに束ね、入り口の壁に凭れ掛かったマリアが、呆れたような笑みを浮かべてネイビスを見ていた。

クレセントはスプーンを置いて席を立ち、マリアに駆け寄る。

「どうしたんですか？」

「あのね、あなたがなかなか帰ってこないからでしょ」

「あ……」

「まったく、何がすぐ戻るよ。丸一日帰ってこないで」

そう言って、マリアがクレセントの頭をこつんと叩く。

困ったように下を向くクレセントと、呆れたような表情を浮かべるマリアの間に入ってきたのは、ネイビスだった。

「そう言うなよ。こいつ今朝方ぶっ倒れちまって今の今までベツトの上だったんだからよ」

「倒れた？」

マリアがハッとした様にクレセントを見た。その顔色がみるみるうちに変わっていく。

クレセントは慌てて手を振った。

「だ、大丈夫です。ちょっと疲れが溜まってだけですから」

「そう——そうよね。帰ってきたばかりであんなことがあったんですものね」

「心配かけてごめんなさい。もう遅いですし、今夜はマリアもネイビス様も泊まって行って下さい。すぐに夕食の準備をします」

腕まくりをしてキッチンへ行こうとするクレセントをネイビスとマリアが止める。

「あのな、病み上がりなんだからちつとは休んでろよ。俺が作るから」

「そうよ。私も手伝うわ」

「おまえはいい」

「なんでよ？」

「いや、へたくそなんだろう？」

マリアの容赦ない蹴りが炸裂する。が、ネイビスはそれをひらりとかわし、急ぎ足でキッチンへと駆けて行った。なかなかの身のこなしである。

行き場の失った足を下ろし、マリアは苛立たしげに椅子に腰掛けた。クレセントも手近な椅子に座り、捲くった袖を下ろす。

マリアは暫くつまらなそうにしていたが、やがて怒りも収まってきたのだろう、組んでいた腕を解いてクレセントに向き直った。

「……本当に大丈夫なの？」

「――え？」

突然の言葉にクレセントは間抜けな返事を返してしまう。

マリアの言葉の意味するところを理解出来ないでいると、マリアが付け足すように言った。

「体。疲れてるなら休んだほうがいいんじゃない？」

「いえ、大丈夫です。この通り、今はなんともないですから」  
胸に手を当てて微笑むクレセントが、どこか無理をしているように見えて仕方なかった。しかしクレセントがそう言う以上、マリアはどうすることも出来ず、そう、と呟いてクレセントから視線を逸らすしかなかった。

マリアを横目で見るクレセントの表情は重く、翡翠の瞳には影が落ちていた。

それ以降ネイビスが妙に気合の入った料理をカートに乗せて姿を現すまで、二人は沈黙を保っていた。

※

「そうか。まさかあの部屋を開けられることになろうとはな」

「いかながなされますか？」

「放っておいても構わんだろう。どうせ大した資料は残っていないのだし、あれをこの国の者が見ても見当がつくまい」

暗い室内の中、大きな椅子に堂々と腰掛けた男の持ったグラスの中の氷が、カラリと軽快な音をたてた。

傍に立つ若い男が不満そうな声で言った。



「しかし、エレナ女史を始めとし、シーハーツには侮れない人物が多々おります。油断は大敵かと」

「ふむ」

「三柱個々の能力や知識もシーハーツ六師団の師団長以上かと思われます」

「壺と式は分かるが……参の少女もか？」

男の顔色が妖しく光った。

若い男は頷き、手元の資料に目を落とした。

「まだ政治的な能力やカリスマ性に欠けるため表舞台には出ていませんが、その施力は計り知れません」

「それは、面白い」

「加えて体に施紋を刻まなくても施術を行使できることも確認されています。特に施紋を刻んだ武具を装備しているわけでもないようです」

「ほう。……だが、まあいい。とにかくあそこは放っておいて構わん。君は暫くは大人しくしていてくれ。——計画は少し先延ばしになる」

男がグラスに酒を注ぎ足して煽る。

「良くない知らせだ。シーハーツの神童が帰国した」

「それは本当ですか？ あの前者は六年前からサンマイトに行ったきり、音信不通となっていたはずでは」

「目撃情報が入った。間違いない。早急に奴を出し抜く策を用意しなくてはならない。君はその間でできる限りの情報を集めてくれ。――」

「何、奴の体は欠陥だらけ。いざとなれば殺してしまえばいい」

若い男の表情が動く。それを横目で読み取った男が、制するように右手をあげた。

「分かってるさ。私とて奴ほどの頭脳を失うのは乗り気ではない」

「……」

「慎重に事を進める必要があるな」

男は立ち上がり、星が瞬く空を見上げた。

頭の中は既にいくつもの作戦が形を成している。これを如何に工夫し、成功確率を上げるか。

シーハーツの天才と謳われた頭脳。それをどう崩すのか。男は得も言えぬ感覚に満たされていた。

※

食事を終え、クレセントに好きな部屋を使っていと言われたマリアは、クレセントの部屋から一つ離れた部屋を選び、テラスでぼんやりと月を眺めていた。

ネイビスは一階で、クレセントは自室に入り、既に寝ていることだろう。

一介の客室とは思えないほどの広い部屋のベランダから、マリアは整然と整えられた庭を見下ろした。どうしてだか、急に月を見るのが嫌になったのだ。

真冬の深夜ともなれば、いくらシランドとはいえ相当冷え込む。

淹れたばかりのホットコーヒーを一口飲み、マリアは息をついた。

頭に浮かぶのは、シランドで起こった数々の問題ではなく、白銀の髪の女性。ときおり見せる、今にも消えてしまいそうな瞳が、黒い水面に映った。それはすぐに波紋に飲み込まれてしまったが、マリアの脳裏には消えることなく残っている。

きつと、クレセントは何か重大なことを隠している。そんな予感がマリアの心中を支配していた。長年クォークの上に立ち培つてきた人を見る能力がそう告げているのだ。

しかし、それが何であるのかはおよそ見当もつかないし、今やらねければならないことは沢山ある。明日はクレアの仕事を片付け、その後はラッセルと共に政界の貴族達との会談があるのだ。夜更かしなどしては明日に支障が出てしまうだろう。

マリアが空になったコーヒーカップを持ち、ベランダの窓を閉めたとき、扉の向こうから足音が聞こえた。

足音というには小さすぎる音。だが、確かに人の気配はある。気配はマリアの居る部屋の前で一度止まり、すぐに立ち去った。

ゆっくりと扉を開けるが、そこにはやはり誰も居なかった。そのまま寝てしまう事も出来たが、マリアは上着を手にとって部屋を飛び出していた。

階段を駆け下り、豪勢な作りの扉を開ける。左右を確認すると、丁度白銀の髪が家の角に入ったところだった。マリアは上着をぎゅっと掴み、足を踏み出した。

緑が生い茂る広い庭。その片隅。誰も近寄らないような、ひっそりとした場所。そんな所に、クレセントは居た。

クレセントは手に持った一輪の花を目の前の十字架を象った石の前に置き、胸の前で十字をきった。その石が墓だと分かるのに、さほどの時間はかからなかった。

マリアは極力音を立てないようにクレセントの隣に立ち、膝を折って墓の前に跪き十字をきった。

「起こしてしまいましたか？」

「いえ。起きてたわ」

マリアの方を見ることなく、クレセントの口が動いた。マリアもクレセントを見ない。

「誰のお墓？」

「……猫です」

「嘘つくならもっと上手くつくことね」

月が雲に隠れ、黒い靄が辺りを覆った。急激な気温の低下を感じた途端、空から白銀の結晶がはらはらと降り注ぐ。

吐く息は白く、目の前の視界は黒い。

「雪が降ってきましたね。早く中に入らないと風をひきます」

ずっと立ち上がり屋敷へと足を進めるクレセントの背中を見ながら、マリアは独り言のように呟いた。

「一人で抱え込んだって……良い事なんか何もないわ」

クレセントの足が止まる。

「クレセント……」

「あなたと」

震えた声。今にも消え入りそうなほど小さな声。まるで雪が鳴いているようだった。

「——もっと早く……あなたと会いたかった」

マリアの予感は、確信へと変わった。

しかし、やはり何も出来ないのだ。己の無力さを突きつけられた気がして、マリアは唇を噛み締めた。

白が世界を埋めていく。街も、人も、木々も。全てを白く埋め尽くしてしまえる雪も、しかし二人の間に空いている距離は埋められない。

人との関係は時間ではないというが、それは本当に正しいのだろうか。

もっと早く会いたかった。

そう言ったクレセントの声は、マリアの鼓膜に何時までも残っている。

白が世界を埋めていく。ほんの少し先に行くクレセントの姿は、もうマリアの瞳には映らなかった。

## 二度目の雪

深夜に降り出した雪は止むことなく、夜が明けた今も滾々と降り続いている。緑一色だった庭は白一色となり、朝日に反射してまるで宝石のような輝きを放っていた。

雪の少ないシランドで今冬二度目の大雪だった。一度目は事の発端とも言える事件があった日。ソフィアの元にエリミネートライフルが持ち込まれた日。

そして、彼女が二年の時を経て帰国した日。

雪と共に現れ、雪のような儚さを持つ女性。いつか、この雪が溶ける頃に一緒にいなくなってしまう気がして、マリアはその考えを振り払うように彼女の名を呼んだ。

「クレセント」

寝間着からふだんの服装に着替えたマリアは、音と匂いにつられ、辿りついた厨房でクレセントを見つけた。

何処か影の落ちた表情で鍋をかき混ぜるクレセントはまるでマリアに気付いていないようだった。

昨夜のことが尾を引いているのだろうか、マリアは一瞬声をかけるのを躊躇った。が、大きく深呼吸をしてクレセントに声をかける。

「クレセント」

「あ、マリー——熱っ！」

「ちょ、ちょっと！」

マリアに気付いたクレセントが振り向いた時、その手が鍋に触れたのだ。

すぐさま手を離れたがその手は赤く染まっていた。

マリアは手を押さえたまま呆然と立ち竦むクレセントの手を取り、すぐに蛇口を捻って冷水に当てた。真冬の冷水の切られるような痛みにクレセントの顔が強張る。

数秒冷やしたところでマリアは蛇口を止め、袋に氷水を入れてクレセントに押し付けた。

「馬鹿。何やってるのよ」

「す、すみません」

冷えた袋を赤くなった手の甲に当て、クレセントは項垂れた。

マリアは手で額を軽く押さえると「いいわ」と言い、クレセントの背中を押してキッチンから外へ出した。

「ま、マリア？」

「その手じゃ料理なんて出来ないでしょ？　あなたは大人しく待ってて」

「で、でも」

「疲れなんて吹き飛ぶような料理、作ってあげるから」

ビシリと指を眼前に突きつけられ、クレセントは一步後ろに下がる。そのままキッチンの扉は閉められ、締め出される形になるクレセント。

中から聞こえる騒音紛いの音に、クレセントはその場から立ち去ることも出来ずにただ立ち尽くすしかなかった。

しかしその口元には、僅かな微笑。

不安と期待。クレセントにとって、それは新たな感情だった。

「おい。なんだこの炭は？」

「ステーキよ」

「このどろどろした液体は？」

「野菜スープ」

「まさかと思うが、これは卵焼きか？」

「ええ。なかなか独創的な形でしょ？」

若干黄色が残る程度であとは全て黒い物体。一体どうしたら卵が

こんなことになるのかネイビスには見当がつかなかった。

痛む頭を抱えて蹲るネイビスの前の席で、クレセントは苦笑を浮かべて座っていた。手に持ったスプーンの上には、青紫色の物体。これを食べるには、相当の勇氣と心の準備が必要そうである。

作った本人のマリアはと言えば、自らの作った料理を一切見ずにネイビスの質問に答えている。手元には小麦のパン。机の上の料理に手をつける気はないらしい。

「さ、さあ、とりあえず食べてみなさいよ」

「おまえが食え」

「死んでも嫌」

即答である。

ネイビスがマリアに食って掛かろうとした時、カチャリという食器と食器がぶつかる音が聞こえ、ネイビスとマリアは揃って同じ方を見た。

二人の目が点になる。

「く、クレセント!? おまえなんつーもの食ってんだ!？」

「ムカつくわーじゃなくてあなた……」

野菜スープと言われたモノを、クレセントが飲んでいたのだ。液体の中に浮かぶ何かをスプーンで掬い、不思議そうに首を傾げて口に含む。

その表情は決して美味しいものを食べたときのものではなかったが、どこことなく嬉しそうだった。

マリアもネイビスもその様子を咂然としながら見つめていたが、やがて思い出したように動き出し、マリアがクレセントの手からスプーンを取り上げた。

「あ……」

「な、何してるのよ!？」

「何って」

クレセントが困ったような笑みを浮かべる。

「クレセント平気か!？」    どうか具合悪くねえか!？」    吐きたきや

吐いていいんだぞ！」

「死にたいのかしら？　今、ここで」

マリアがホルスターから銃を抜き、ネイビスへつきつける。勿論安全装置は外している。

ネイビスの顔から血の気が引き、顔の前で両手を大きく振る。マリアは一度ネイビスの額へ銃口を当ててからホルスターに仕舞い、クレセントの隣に腰掛ける。

「水……いる？」

マリアなりの精一杯の気遣いだろう。料理が下手だとは認めたくないが、自分の料理が決して褒められたものでないことをマリアは理解しているのだ。

しかしクレセントはそれを断った。マリアの手からスプーンを取り、またスープを飲む。ナイフとフォークを器用に使い、肉であった黒い塊を切り分けていく。それを口に運んだとき、クレセントは苦笑しつつマリアを見つめた。

「焼きすぎですよ、マリア」

「し、仕方ないでしょ。生だったら困るし。美味しくないなら食べるなくて良いわよ」

「いえ、いただきます。せっかくマリアが作ってくれたものですから」

そう微笑ってクレセントはもくもくと料理を口に運んだ。

マリアがどうしていいのか分からずにいると、今まで黙って様子を見ていたネイビスがフォークを手に取った。

「しゃーねえから俺も食ってやる」

豪快に肉にかぶりつき、飲み込む。

「あー、苦え」

「不思議な味」

その言葉とは裏腹に、二人の手は休むことなく料理を口に運んでいく。

次々と空になっていく皿を見て、マリアは鼻をならしてそっぽを



向いた。

青い髪の間隙から見える赤くなった耳を見て、ネイビスとクレセントは顔を見合わせて小さく笑うのだった。

※

書類の山に手を伸ばし、報告書を一枚取り目を通す。問題がなければ判を押し、あれば再提出用の箱に入れる。単調な作業ではあるが、手を抜くわけにもいかない。

無論それは自分の仕事でもいえることだが、人の仕事なら尚更である。

フェイトは積まれていた書類の丁度半分ほどを終えたところで一息ついた。眼鏡を外し、目を二、三度瞬かせる。数時間とはいえ、ずっと文字と睨めっこだったのだ。少しだが頭がくらくらした。

自分で淹れた紅茶を一口飲み、フェイトは顔を顰めた。既に熱を失い、味も半減している。それに加えフェイトは紅茶を淹れるのが下手だった。いつだったかその話でソフィアに延々と説教を食らった記憶がある。温度大事だとか淹れ方が雑すぎるとか、聞いてて頭が痛くなるような細かさだった。

しかし今この現状を見ると話半分ではなくキッチンと聞いておけばよかったと、フェイトは少し後悔した。クレアの淹れてくれる美味しい紅茶を思い浮かべながら、冷たい紅茶を飲む。だがやっぱり不味いものは不味かった。

「今度、ソフィアに教えてもらおう」

そう独り言のように呟き、フェイトが眼鏡をかけ直したところで、部屋の外がやけに騒がしいことに気付いた。

ばたばたと数人が忙しなく大理石を鳴らす音。焦ったような話し声。会話は聞き取れなかったが、フェイトはその聞き覚えのある声に興味を引かれ、自室の扉を開けた。

部屋から顔を出して声のするほうを見ると、緑の長い髪の女性と、藍の髪の女性が並んで歩いているところだった。歩いているといっても歩調は速い。

「シレーネさんと……セフィリア？」

後姿だけだったので確証はないが、あの声といい、髪色といい間違いはないだろう。それでもフェイトが迷ったのは、シレーネが纏う雰囲気彼女のそれからはかけ離れたものだったからである。

いつもの和やかなものではない。焦りと不安、疑心に満ちたものだった。反対に横を歩くセフィリアは平常そのものであったが、そのアンバランスさにフェイトは一抹の不安を覚えた。

すぐにでも後を追って何があったのかを確かめたかったが、このまま仕事を放り出すわけにもいかず、フェイトは躊躇いがちに扉を閉めた。

まだ半分は残っている。フェイトは「よし」と一声あげて気合を入れ、椅子に腰掛けた。

※

「そう。リーゼルおば様がそんなことを……」

「ああ、だからクレア」

画面に映るのはネルの不安そうな顔。

ギルドに登録していないクレアは、テレグラフの代わりにフェイトお手製の通信機を携帯している。昨日フェイトがやっと完成したからといってクレアに渡したものだ。

一通りの使い方をフェイト教えてもらったクレアは、アーリグリフで調査中のネルに繋いでいた。

そこでネルの母、リーゼルの言動について聞かされたクレアは、意志の強い瞳でネルを見返した。

「おば様とネルには悪いけど、私は彼を信用しているの」

「私だってそうさ。あいつを疑いたくなんてない。でも――」

「ネル。それは有り得ないの。絶対に」

クレアの剣幕にネルが黙る。そこに入ってきたのは、朱色の髪を揺らした女性だった。

「クレア」

「ルージュ。あなたもなの？」

「そりゃね。私だって信じたいよ。でもさ、この世界に絶対なんてないの。ましてや私達は身内ですら疑わなきゃいけない位置に居る」クレアの口が一文字に結ばれる。ルージュの言う事は、最もだった。

信じることから全ては始まる。

そう言う陛下の言葉は正しい。しかしルージュの言葉もまた正論なのだ。

こちらが相手を信じなければ、相手が信用してくれるわけがない。だが、全てを信じていては、きっと国は瓦解してしまう。だからクレアやネル、ルージュ達はまず疑ってかからねばならない。

それは心苦しいことではあるが、仕方のないこともある。

そう割り切っていたつもりだった。だが、心のどこかではそれを認めていなかったのかもしれない。クレアには、リーゼル、ルージュの言葉を受け入れることが出来なかった。

「でも……私は」

「クレア。あんたは全国民の上に立つ存在なの。それを忘れないで」  
ルージュの言葉は、クレアの胸に深く刻まれた。

押し黙ったクレアを見て、ルージュは長く息を吐いた。そして、画面一杯に顔を映してクレアを見つめる。

「それと、あんたは私達の大事な親友。それも忘れないで」  
「ルージュ」

「一人で抱え込むな。相談しろ。もっと友達を頼れ。あんたが馬鹿や  
やってない限り、私達はどんな状況だってあんたを助ける。馬鹿や  
ってたら一発殴りに行く」

険しかったルージュの表情がふわりと和らいだ。画面の端に映る  
ネルも、大きく頷いている。

クレアは目尻を拭って、微笑んだ。

「ありがとう。ルージュ、ネル」

「今度ケーキ奢ってね」

「とびきり美味しいケーキ、用意してあげる」

ルージュの笑みにウインクを返すと、ルージュは「楽しみ」と言  
って画面から消えた。

入れ替わりにネルが正面に映る。

「ルージュに教えられちゃったわ」

「ルージュも考えてないようで考えてるのさ。クレア」

「何？」

「あいつについてやっぱり一度調べてみるんだ」

ネルの言葉にクレアの表情が歪む。

そんなクレアにネルは茶目っ気たっぷりな目を向け、人差し指を  
立てて続けた。

「クレア、視点を切り替えてみなよ。疑いをかけるんじゃない、潔  
白を証明するために調べるっていうのはどうだい？」

「潔白を、証明？」

「ああ。あいつは何も隠してなんかいない。それを証明するために

調べるんだ」

「なんか……上手く言いくるめられた感じだけど」

「まあ、たまにはそういうのもいいんじゃない？」

軽快に笑うネルにつられ、クレアもふっと笑みを零した。

頭に巻かれた包帯を一気に取り、顔を上げる。

「それもそうね。いいわ、私が彼の潔白を証明する」

画面の向こうから、ルージュの「頑張れ！」という声が聞こえた。

※

シランド城に一室を用意されたアルベルだったが、その清浄な空気が肌に合わずシランドの街中をぐるぐると徘徊していた。

特に用事があるわけでもない。しかし城内には居たくない。いくら慣れているとはいえ、大雪の中歩き回るのも面倒くさいと、シランドの傍にある修練施設で体を動かすことも考えたが、今は『土』の訓練が行われている最中で混雑していると聞き、仕方なくこうして歩き回っているのである。

だが刀をぶら下げて城下をうろうろしていると、どうしても視線が付き纏う。

そうした視線を鬱陶しく思い、それから逃れるように彷徨したアルベルは、人気の少ない川辺に着いていた。普段ならカップルや家族やらが数人居るこの場所も、この雪では誰も立ち寄らない。

民家を横に抜けた先にある小川は、まるで時がゆっくり進んでいるように、ゆったりとした時間が流れていた。

川辺に腰を下ろし、手を水に浸す。雪が溶けた水は肌を刺すような冷たさだったが、心を洗われるような水だった。アルベルはそれを不快に思い、手を水から引き抜く。

丁度雲間から顔を出した太陽に手を掲げる。太陽越しに見る手は赤く、それは己の手にこびり付いた血のようだった。

そんな幻覚をアルベルに見せ、太陽はすぐ灰色の雲の間に隠れてしまった。世界が、薄暗くなる。

自嘲気味に笑い、手を地面につける。一度血に濡れた手は、一生綺麗になることはない。

だがアルベルはそれを苦に思ったことも、後悔したこともない。最初に手を汚したその日から、後悔することは止めた。

自らが選んだ道を、自ら突き進んでいく。誰にも邪魔はさせない。邪魔をする奴は容赦なく切り捨てる、そう誓った。その先にあるものがなんであれ、引き返すことはしない。それが自分が奪った命へのせめてもの手向けであり、アルベル自信の信念でもあった。

アルベルは拳を強く握り、立ち上がった。無性に刀を振りたくなつたからだ。

「ふん、適当に狩るか」

「たまにはのんびりくつろぐのも、悪くはないと思うがな」

「ヴァンか」

アルベルが振り返りながらそう言うと、微笑を浮かべたヴァンが木に寄りかかった格好でアルベルを見ていた。

「ご名答」と手を叩き、寄りかかっていた身を起こす。腕に着けた紫の腕輪がシャラリと涼やかな音をたてた。

「クレアから聞いたらしいな」

「ああ」

「黙っていたことはすまない。だが――」

「いい。別に気にしちゃいねえよ」

それはアルベルの真意だった。クレアから話を聞いた後も、ヴァンやクレアに対して特別な感情は抱かなかった。

どうして自分に知らされなかったのか。

そんなことは微塵も思わなかった。

「おまえにはおまえの考えがある。俺がとやかく言う事じゃねえ」  
「助かるよ」

そう微笑ってヴァンが踵を返したところで、ヴァンの動きがピタリと止まる。

「一つ、聞いていいか？」

「何だ？」

「おまえは、どう思った？」

ヴァンらしくもない、不安気な声だった。

アルベルは聞かれた意味が分からず、聞き返す。

「何をだ？」

「クレアの話を……俺達の母親について」

アルベルは納得した様に「ああ」と頷いて、顎に手を当てた。

正直なところ別段何かを思ったわけではなかった。母親の話だつて、たまたまあの手紙を見つけて興味を持っただけだったし、話を聞いたからといってアルベルの心境にはなんの変化もなかった。

ただ、一つ。たった一つだけ思ったことといえば、

「そいつの息子で、悪い気はしねえ。それだけだ」

「そうか。お前はやっぱり変わらないんだな」

「は？」

「俺は、お前のようにはなれなかった」

ヴァンはどこことなく悲しそうに言い、また足を進める。今度は一度も足を止めることはなかった。

「意味がわからん」

アルベルの呟きは、曇天から降る雪と、緩やかな川のせせらぎに飲み込まれていった。

※

「し、死ぬかと思った……」

そう言って机の上に顔を乗せるネイビスは顔面が蒼白で、額には汗が浮かび、その言葉は決して嘘ではないことを物語っていた。

マリアは罰が悪そうに顔を逸らし、机の上に頬杖をつく。

「だったら食べるんじゃないわよ」

「食材に罪はねえ……うえ」

ネイビスが口を押さえる。マリアが神業ともいえる速さで椅子から飛びのいた。

「ちょっと吐くんじゃないわよ。汚いわね」

「うるせえ。黙ってる……」

「クレセント、桶……って今は洗い物してるんだったわ」

ネイビスと違い、マリアの料理を食べても平然としていたクレセントは、具合の悪いネイビスの代わりに食器を洗いにキッチンへ移動した。

この広い屋敷は今マリア達の居る食堂からキッチンまでの距離もそれなりにあり、尚且つ水を使っているクレセントを呼んでも気付かないだろう。マリアは溜息をつき、どこかに手頃の桶か何かがないか探そうと一番近くにあった棚を漁り始めた。

「なあ……」

「何よ。まだ吐くんじゃないわよ」

「誰が吐くか。おまえさ、どうやってクレセントの殻壊したんだ？」  
マリアの手が止まる。

振り返ったときに見えたマリアの碧の瞳に、ネイビスは息を飲んだ。冷たい、それでいて辛そうな、そんな目だった。



「そう見えるなら、あなたの目は節穴でしょうね」

「な……」

「殻が壊れた？ 馬鹿言わないで。一体この国の誰があの子以上に殻に閉じこもってるっていうのよ」

マリアは自分の腕をぎゅっと掴む。

「私は、あの子を知れば知るだけ、あの子が分からなくなる」

「おまえ……」

「でもね、だからと言って私は諦めない。いつかあの硬い殻ぶち破って、引き摺り出してやるわ」

マリアの瞳が強い光を帯びた。不敵な笑みを浮かべ、やってやると言わんばかりにその顔は生氣に溢れていた。

ネイビスはその意気込みに圧倒されていたが、やがてストッパーが崩れたように笑い出した。

「く、はっはっはっは！ そりゃいい！ 俺も見てみてえよ。アイツが腹の底から笑うところ」

もう吐き気も、気持ち悪さも忘れていた。ただ目の前に大きな目標が出来た。

長い間諦めていた。クレセントを笑顔にすることを。だから、ただ傍に居られればいいと思っていた。

だが、今は違う。もう一度試してみようと、ネイビスは拳に力を込めた。

もう一度や二度の失敗で諦めたりなんかしない。今度こそやれることはやりつくしておきたかった。諦めるのは、何よりも簡単だ。

「おーっし！！ なんかやる気出てきた！！」

「本当、単純ね」

意気込むネイビスをマリアが呆れ半分嬉しさ半分で見たとき、

「失礼します」

食堂の扉が、音をたてて開かれた。

マリアとネイビスが扉のほうへ顔を向けると、そこには見知った顔。

「セフィリアか？」

「どうしてここに？」

「任務です」

セフィリアは短く言い切る。

「それは一体何の任務かしら？」

大方マリアかネイビスへの伝言の類だろうと思っていたマリアだったが、それは大きな間違いだった。

気付くべきだったのだ。たかが伝令で、一級構成員が狩り出されることなど滅多に有り得ないことだと。

セフィリアの瞳が鋭くなっていたことを。

彼女の後ろに、もう一つの気配があったことを。

落ち着いた口調で発せられたセフィリアの言葉に、マリアとネイビスは言葉を失った。

「クレセント・ラ・シャロムの身柄を拘束することです」

この日は、雪の少ないシランドで今冬二度目の大雪だった。

## 表と裏

「今、なんつった？」

ネイビスの震える声が静かな部屋に響いた。その震えがどこからくるものなのかは、ネイビス自身にも分からない。恐れか、怒りか、もしくはそれ以外の何かからか。

セフィリアは冷えた藍の瞳でネイビスを見つめる。絶対零度の視線。軽視でも侮蔑でも同情でもない。まるで感情を無くした機械のような、そんな目で、彼女は整然と言い放つ。

「虚空師団『風』の二級構成員。クレセント・ラ・シャロムの拘束。それが私たちの任務です」

「私……たちですって？」

そのとき、マリアはようやく気付いた。セフィリアの背後に居る気配に。

緑の髪を一つに束ねた長身の女性がマリアとネイビスの前に姿を現した瞬間、ネイビスは身の毛がよだつ感覚を覚えた。頭に血が上り、思わず掴みかかりそうになるのを寸でのところでマリアに制される。

しかし、ネイビスを止めたマリア自身も動揺を隠せない様子だった。

彼の目に映っているのは、居るはずがない、居てはいけない人物だったのだから。

「——なんでだよ。なんであんたが居てこんなことになってんだよ！ おい！」

女性は答えない。ただ険しい顔でネイビスとマリアを真正面から見つめている。

ネイビスは怒りを露にし、女性を睨みつけた。

「答えろ！ リシャス！！」

そこに居るのは紛れもなく虚空師団『風』の師団長シレーネ・リ  
シヤスだった。

誰よりもクレセントを信じ、誰よりもクレセントを大切に思っ  
ていたはずだ。だからこそ、ネイビスとマリアの怒りは最もだった。  
シレーネがこんな命令を黙って黙認したのが信じられなかった。  
ネイビスの知るシレーネなら、本人に直接確かめもしないでクレセ  
ントを拘束するようなことは絶対に有り得ない。本人が罪を認め  
もしない限りは、シレーネは誰の命令であろうと何者からもクレセ  
ントを守るだろう。その確信がネイビスにはあった。だが、目の前  
の現実とは違っていた。

今にもとってかかりそうなネイビスからマリアへ視線を移したシ  
レーネは、感情を押し殺した声で言った。

「クレセントはどこ？」

「答える前にどうしてクレセントが捕まるのかを教えて欲しいもの  
ね」

「クレセントを確保したら、必ず」

「理由が先よ」

マリアも、シレーネも譲らなかった。

このままでは埒が明かれないと考え、セフィリアが自ら探し出そう  
とした所で、シレーネ達が入ってきた扉とは別の扉から、クレセン  
トが姿を現した。

「私ならここにいます」

「クレセント!？」

「馬鹿!　なんで出てきたのよ!」

ネイビスとマリアの言葉には一切答えず、クレセントはシレーネ  
とセフィリアのほうへ向かっていく。

その手を、マリアとネイビスが同時に掴んだ。

が、

「!」

掴んだと思った手は、いとも簡単にすり抜けていった。

呆然と空を掴む手を見つめるマリアとネイビスを尻目に、セフィアはクレセントを拘束しようとするが、

「拘束の必要はないわ」

シレーネがそれを止めた。予想外の言葉に、セフィアは戸惑う。

「しかし」

「いいの。――クレセント」

「はい、シレーネ様」

シレーネの視線にクレセントは目で答え、セフィアについて食堂から出て行った。その時、シレーネの瞳が大きく見開かれていたのには、誰も気付かなかった。

扉が閉まる音で漸く我に返ったマリアとネイビスが後を追おうとするが、シレーネがそれを止めた。

「駄目よ」

「どけよっ！」

ネイビスが手を横に払う。その手はシレーネの顔すれすれを通ったが、シレーネは目を瞑ることさえしなかった。

「理由を……教えてくれるのよね？」

マリアも怒りと動揺で揺らぐ頭を必死で抑えながら言う。

シレーネは頷いてマリアとネイビスに座るように促した。マリアはネイビスの背中を押し、椅子に座らせ、その横に自分も腰を下ろした。

「さあ、話して。どうしてクレセントが捕まったの？ まさかシャロム夫人の反乱に彼女が加担してたなんて言い出さないわよね？」

一年以上も前からこの国にいなかった子に

「ええ。それはないわ」

「じゃあなんでだ！」

ネイビスが床を思い切り鳴らす。体中から滲み出る底知れぬ憤怒に、横に居るマリアですら冷や汗を流した。しかし、シレーネは怖気づくことなく、真っ直ぐにネイビスを見ている。

「クレセントの罪は、詐称罪」

マリアもネイビスも、一瞬反応が出来なかった。あまりにも予想外の所からの攻撃に、頭が反応できなかったのだ。

マリアとネイビスがシレーネの言葉をゆっくりと反復していた時、シレーネの口が再び開いた。

「――つまり、あのクレセントは本物のクレセントの名を騙った偽者らしいの」

※

あれだけ勢いよく振っていた雪が、急に止んだ。それでもその名残はちゃんと残っていて、足首までの深さの雪に足をとられないように、クレセントとセフィリアは歩いていた。

吐いた息が白くたなびき、足元からはサクサクと音が聞こえる。やけに静かな白の世界に、響く音はそれだけだった。

会話はない。シレーネも命令通り、クレセントに一切の拘束はなく、セフィリアの一步前を歩く形になっている。

セフィリアは目の前の白銀の髪を眺めながら、理解出来ない感覚に溺れていた。

ラッセルにシレーネと共に呼び出され、クレセントの拘束を命じられた時、セフィリアは驚かなかった。前から疑いのあった母親の娘。驚く要素はない。横に立つシレーネは今にも倒れそうなほど顔を青くしていたが。

ラッセルに食って掛かるシレーネに反して、セフィリアは冷静に事を整理していた。

そして、少し同情した。一年ぶりに帰国して、両親が殺されて、自身も犯罪者となる。身内の愚行により、己の人生を狂わされる辛さと虚しさを、セフィリアはよく分かっているつもりだ。

だが、ラッセルの言葉はセフィリアの予想とは異なった。反乱に加担するなどという、見え透いたものではなかったのだ。

成りすましによる、グリーテン王国からのスパイ容疑。流石のセフィリアでも一瞬頭がついていかなかった。スパイ行動ではよくあることではある。だが、今回は別だ。クレセント達が帰国した時に身体検査は行われた。変装は見破られるはずである。

となれば、顔はそのスパイ自身のもの。しかし、そんな偶然があるだろうか。シーハーツが送り込んだスパイと、たまたま同じ顔の密偵がグリーテンにも居るなどという偶然。

有り得ない。顔も性格も、ここまで瓜二つな人間など、そうそう居る者ではないのだから。

それに僅かとはいえ施力をもっていると言う事はシーハーツ関係の人間。だからこそ、摘発した女王自身も内密に事を進めようとしている。この件について知らされているのは現段階では女王とラッセルを除けばシレーネとセフィリアのみである。

今後は三柱、各師団長と各師団の一級構成員にのみ伝え、秘密裏に事を進める方針だ。

そして、セフィリアがいまだに納得出来ていないことがある。

それはクレセントを偽者だと疑った理由。

セフィリアは前を歩くクレセントから目線をずらさずに言った。

「あなたは、誰？」

「その質問に意味があるとは思えませんが」

淡々とした口調のクレセント。勤めて冷静を装うとするセフィリアだったが、『無音の風』の異名は伊達ではない。

深い翡翠の瞳は沈黙を通すばかりで、何も語りはしなかった。

※

「血統限界値？」

クレセントの逮捕について詳しい説明を要求したマリアとネイビスに投げかけられたのは、そんな言葉だった。

血統限界値とは、端的に言えば個々人の施力を数値化したものである。その数値が高ければ高いほど強い施力を有していることとなり、シーハーツでは特に重要視されているステータスだった。

しかし、どうして今、そんな言葉が出てくるのか。理解できずに片眉を上げるネイビスに、マリアは肩を竦めた。

「あなた、シーハーツ国民のくせに知らないわけ？」

マリアが「呆れた」とぼやきつつ、ネイビスを見る。

「んなわけねえだろ！ クレセントと血統限界値の何が関係あんのかってことだよ」

「ネイビス。クレセントの血統限界値覚えてる？」

「――十六、だったか？」

頭を掻きながら答えるネイビスに、マリアが信じられないといった視線を向ける。

「いくら好きだからってそんなとこまで調べてあるの？」

「あほ！ 自分の師団じゃなくても2級以上の師団員の情報は把握してんだよ」

「へえ。まあ、ネイビスのストーカーについてはいいわ。それで、血統限界値が何だっていうのよ」

ネイビスは黙った。マリアには何を言っても無駄だと気付いたかたである。



「マリアちゃんは陛下が施力の流れを視ることが出来るのは知ってるわよね？」

「ええ。陛下じゃなくても多少は視えると聞いているけど」

「そう。でも陛下の瞳は私達とは比べ物にならない。それこそ、検査なしでも個々の施力の値がどれほど分かるぐらいに」

マリアの眉が動く。シレーネの言わんとしていることが、やっと理解できたのだ。

「で、今のクレセントの血統値限界はいくらなのかしら？」

「あつて三%。とてもじゃないけど、十六%なんて施力を有してないわ」

長い、長い沈黙。勢いよく食って掛かるかと思ったネイビスも、まるで言葉を忘れてしまったかのように黙っている。

全く予想通りの答えに、マリアは深い溜息を吐いた。これが聞き間違いなら、どれほどよかっただろう。

つまりは、クレセントが帰国した時に、女王は自然と視えてしまったのだろう。クレセントの中に流れる施力の流れを。

そして、それが極端に少ないことに気付き、ラッセルに相談した。ラッセルとしても偽者の疑いの在る者を野放しには出来ない。万が一にも備え、拘束しておくのが吉と踏んだのだろう。相手がグリーンテンなら尚のこと。

下手をすれば、クレセントはシャロムの事件も疑われているかもしれない。クレセント帰国後すぐに起きた事件だ。もしクレセントがスパイなら、気付かれる可能性の高い肉親を殺しておく、という考えも捨てきれない。当然スパイはクレセントとその両親が疎遠にあるということなど知りはしないのだから。

しかし、この事実をすんなりと納得できるほど、マリアは単純ではない。

仮にクレセントと似た顔を持つ人物が居たとしても、性格まで同じとはいかない。首尾よくクレセントを捕らえ、替え玉と入れ替えたととしても僅かな動きを見破る『風』の精鋭部隊に気付かれないわ

けがない。仕草、雰囲気などは一朝一夕で身につくものではないのだ。

かといってそう何日もクレセントが行方不明になっては師団員たちも不審に思うだろう。

未だ不明解な点が、多すぎる。

「それで……このままだとクレセントはどうなるの？」

マリアが一番に聞きたいことだった。

もしもスパイ容疑であるというのなら、国家反逆罪として極刑である。

クレセントが死罪。そう考えるだけで、マリアは体の芯が冷えていくような感覚に陥った。

ネイビスやシレーネ、クレア達は以前からクレセントを知っている。だからこのクレセントは偽者。そう割り切れるかもしれない。

だが、マリアは……。

「答えて。どうなるの？」

「安心して。まだクレセントが偽者と決まったわけじゃないもの。軟禁状態にはなると思うけど、待遇は保障しているわ」

「随分と譲歩してるのね」

そうは言ったものの、マリアの顔は和らいでいた。

だが、すぐにそれは引き締まる。もしこの件がマリアかフェイトに回されるようならば、時間は少ないのである。

「貴女なら分かるでしょう？ スパイだとしたら、おかしな点が多すぎるってことを」

マリアは無言で頷いた。

しかし、それでも国はクレセントを拘束した。そして、シレーネもそれに殉じた。それほどまでに、聖王国シーハーツにおいて主神アペリスから授かった御力は大きいということだろう。

「……おかしな点が多いってのに……クレセントを捕まえたのかよ」  
今まで陰悪な表情を浮かべて黙っていたネイビスが口を開いた。

問いかける、というよりも独り言のような呟きだった。

シレーネは膝の上で合わせた手を力強く握る。

「クレセントが……抵抗しなかった、から」

「は？」

「見ていたでしょう？ 私はクレセントをなんで捕まえたのか一切説明しなかった。でも、あの子は従ったのよ」

白くなった手は、わなわなと震えている。

ネイビスはそれから視線を逸らし、ぐっと拳を握る。

「私はあの子が――クレセントが少しでも抵抗したり、状況を理解できていないようだったら、捕まえるつもりはなかった。たとえ陛下のご命令でも。でも……あの子は」

シレーネの瞳が堅く閉じられた。

「あの子の目は……違った。まるでこうなることを分かっているようだった！」

「分かった。もういい……悪かった」

ネイビスは自分を呪い、それと同時に少しの安堵感を覚えた。

「なんで……あんな目を……。信じたい、のに……」

閉じられた瞳から、透明な雫が数滴落ちた。

「シレーネ。一つ、いいかしら？」

「……っ何？」

シレーネは目尻に溜まった涙を指で拭いながら答える。

「後天的に、施力が下がるということはないの？」

「あつたらそう易々とクレセントに容疑なんてかけてないわ」

「それに似た事例は？」

シレーネは一旦考えてから、小さく声を上げた。

「後天的に下がる、というのじゃないけれど、高い血統値を持った者の子の施力が著しく下がる現象はあるわ」

この後、シレーネの言葉を聞いたマリアは、妙に難しい表情を浮かべてシャロム邸から飛び出したのだった。

※

ヴァンは早足で病院の廊下を歩いていた。普段穏やかな笑みを浮かべているヴァンらしくもなく、どこか余裕のない表情だった。真冬だというのに、額に汗すら浮かんでいる。

目当ての病室の前で立ち止まり、軽くノックをして室内に入る。そこに居た仲良さ気な恋人たちは、険しい表情のヴァンを見て不思議そうに顔を傾げた。

「どうしたの、ヴァン？ そんな怖い顔して」

「何かあったのかい？」

クレアとフェイトの質問にヴァンは一呼吸置いてから答えた。

「……クレセントが、スパイ容疑で捕まりました」

フェイトが手にしていた林檎を落とし、クレアの目が開かれる。ごろり、と鈍い音を立てて落ちた林檎は、ヴァンの足元まで転がっていった。

ヴァンはそれを拾い上げ、視線を伏せる。

「シランド城の一室で取調べを受けています。現在はセフィリアが事にあたっていますが、後はフェイト様が引き継ぐようにと」

その言葉を聞き、フェイトは眉間に皺が寄るのを感じた。そして思った。来たか、と。

『星海』が発足して間もない頃、マリアと共にラッセルに呼び出された記憶が脳裏に浮かんた。

「ヴァン——もしかして上は」

「恐らく」

あの日のラッセルは眉間の皺がいつもの倍だった。フェイトとマ

リアは『星海』として呼び出されたのに、なぜソフィアがいないのかを尋ねた。

『まだ早い』

それが、ラッセルの答えだった。

「時間は？」

「残念ながら、悠長に考えている暇はないかと」

ラッセルから話されたのは、『星海』のもう1つの仕事。

単純にそれぞれの管轄の総纏めのためだけに作られたのではない。別に仕事があったのだ。決して表には出せない、裏の仕事。

「フェイト。どういうこと？」

いまいち事情を飲み込めていないクレアが、疑問の声を上げる。

クレアは『星海』の裏の仕事を知らないのだから無理もない。

そこでフェイトは漸く気付いた。

なら、どうしてヴァンは知っている、と。

今まで普通に会話していたから気付けなかったが、ヴァンの口振りは確実にその情報を得ている者の返答だった。

「ヴァン、君はどうして」

「ラッセル様から。私はいざという時はフェイト様を影からサポートするよう仰せつかっています。三柱自ら動けば確実に上の目に留まります。ですから、私は無関係のふりをして強力致します」

「どうして言ってくれなかったんだ？」

「ラッセル様個人の頼みだからです。事が来るまでは黙っているつもりでした」

フェイトは納得したように頷き、クレアに視線を移し、次にヴァンに目配せする。

「別にあの事を黙っている、なんてのは規約になかったよな」

「なるべく漏らさないのが良いと思われませんが、クレア様になら問題ないでしょう」

「だ、だからなんのこと？」

置いてけぼりを食らったクレアがフェイトとヴァンを交互に見る。

フェイトはクレアに向き直り、その細い肩に手を置いた。  
そして、小さく、しかしクレアにだけはハッキリと聞こえる大き  
さで言った。

「上層部は、クレセントを抹殺するつもりだ」

「どういう……こと？」

クレアの肩は震えていた。意味が分からない。そう訴えかけてく  
る瞳が、フェイトを射抜いた。

フェイトはクレアを落ち着かせるように軽く抱きしめ、体を離し  
た。手は、肩に置いたまま。

「いいかい、クレア。僕達『星海』には君達クリムゾンブレイドの  
補佐と総纏め役の他に、もう一つ仕事があるんだ」

「もう一つ？」

「――国内にいる造反者の始末」

フェイトの耳元で、クレアが小さな声を上げた。

「上は僕にクレセントを任せた。それはつまり、この期に乗じてク  
レセントを始末しろ、ということなんだ」

「なん、で？」

「クレセントは反乱疑惑のあったシャロムの娘だからね。不穏分子  
として始末する機会を狙っていたんだと」

フェイトの言葉は最後まで続けられなかった。

静かな怒りを秘めた褐色の瞳が、目の前にあったから。

「違うわ！ 私が聞きたいのはどうしてあなたがそんな事に協力し  
てるのかってことよ！！」

「クレア……」

怒りを露にしたクレアの言葉を、フェイトは噛み締めた。

この話を聞いたとき、フェイトとマリアは即座に『星海』を辞

退することを考えたのだ。

しかし、ラッセルの言葉がそれを踏み留めた。

それを知るからこそ、食い止めることが出来るだろう、と。

「クレア。僕はね、止めたいんだ。今のクレセントのように裏で小細工をされて社会から消されようとしている人を助けたい」

今がまさにその時だ。上の考えがフェイトには分かっている。だからそう易々と思い通りにはさせてやらない。

「クレア、もしフェイト君やマリア様が断っていたら、上層部は別の部隊を作ること考えていた。だからフェイト君達は自らがその役を買うことで食い止めようとしてるんだ」

ヴァンがクレアを宥めるような口調で言う。

クレアは我に返ったように静かになり、その顔がみるみるうちに歪んでいった。

「ご、ごめんなさい。私……」

「いいんだ。むしろクレアが怒ってくれて安心したよ。僕の大好きなクレアは、そういう子だって分かってるから」

「フェイト……」

クレアの頬に手を当て、フェイトは柔らかに微笑む。クレアはフェイトの手に自分の手を重ね、もう一度「ごめんなさい」と呟いた。「うん。もう一つ付け足すとね、『星海』を考えたエレナさんや陛下、ラッセル様はこんなことさせるつもりじゃなかったんだよ」

「頭の中がお金と欲とちっぽけな誇りしかない愚かな人たちの仕業でしょう」

「……そうだけど、クレア、それ本人の前では言わないでくれよ」  
全くその通りなのだが、酷い言いようである。フェイトは冷や汗を垂らしながら苦笑し、更に付け加えた。

「戦争が終わって国内の反乱分子が増えてきたのを理由に、彼らが言い出したんだ。最初は陛下もラッセル様も反対した。けどここで反対したところで彼らは独自の部隊を作る。だから陛下達はせめて自分達の信頼の置ける人に託そうって考えた」

「それが、あなた達」

「ああ。だがクレア達にはこれ以上の負担はかけられない。それに、ネルは何が何でも反対しただろうからな。結局実力もあって信頼の置けるフェイト君達に任せたのさ。陛下達も辛いご決断だったんだが、フェイト君達は引き受けてくれた」

ヴァンが机の上に林檎を置きながら微笑む。

「助けられる命があるなら、僕等は全力で努力します、ってね。クレア、君の旦那様は大したものだよ」

「止めてくれよ。それに、最初にやるって決めたのはマリアなんだし」

「マリアさんが？」

「ああ。馬鹿な貴族の思い通りなんかにはさせない。全員真つ当な方法で裁いてやる、って闘志燃やしてたよ」

その時のマリアの表情を思い出し、フェイトは吹き出した。

動機は半ば普段ストレスを溜めさせられている貴族への復讐もあるのだが、やるとなったら全力で望むのがマリアだ。そうなればこれほど心強い存在はない。

「でも、今回は僕の出る幕はないのかもしれないな」

「どうして？」

クレアが首を傾げる。フェイトは肩を竦めて、息をつく。

「マリア、最近クレセントにつきっきりなんだ。昨日もクレセントの家に行ったきり帰って来なかったし」

「あら、寂しいの？」

「クレアが居てくれるから平気だよ」

「ふふ、なら早く退院しなくっちゃ」

くすりと笑うクレアに、フェイトはビシリと言い放つ。

「明日までは入院。セフィリアに怒られるぞ」

「ふうん。フェイトは私と一緒に居たくないのかしら？」

「う……それはずるくないか？」

フェイトが押し黙ると、クレアは「冗談よ」と微笑む。



こうして繰り広げられる会話の外で、完全に存在を忘れられたヴァンは小さく溜息を吐くのだった。

※

真昼間だというのに、部屋中のカーテンを閉め切った暗い部屋で一人の女性がベットに寝転がっていた。

唯一の明かりは蝋燭に灯された小さな橙の光のみ。

黒に溶けてしまいそうな漆黒の髪が、白いシーツに散らばっている。

ふいに、部屋がノックされる音。女性は体を入り口の死角へとずらし、「いいよ」と答えた。

慎重過ぎる、といっても過言ではないくらいにゆっくりと開かれた扉から、食事を載せたトレイを持った小さな少女が顔を出した。淡いピンクの髪を赤いリボンで縛った少女は素早く扉を閉め、女性に駆け寄った。

「ご飯、持ってきた」

「ありがと、ユティ。うわぁ、美味しそう」

トレイに乗せられていたのは色鮮やかな料理の数々。どれも、シルバーには珍しい食材で作られていた。

女性は「いただきます」と両手を合わせてからフォークとナイフを取り、口へ運んでいく。

「美味しい。ユティ、料理上手くなったね」

「お姉ちゃんが、作らないから」

ユティ、と呼ばれた少女がやんわりとした笑みを見せる。

女性はユティの頭を優しく撫で、にっこりと微笑んだ。

「今度とびつきり美味しいの作ってあげる。ユティの好きなものみーんなね」

「うん、楽しみ」

「さあってと。ご飯食べたら何しようか？ 約束の日は明後日だし」

「だから、もっとゆっくり出れば良かったのに……」

女性に持ってきたものとは別に作られた料理に口をつけながら、ユティは不満そうに述べる。女性はたどたどしい笑みを零し、水分をたっぷり含んだ野菜を飲み込む。

「待ちきれなくて、さ」

「そんなに、楽しみ？ あの人に、会うの」

「うん、すごく。どうしてるかな。元気にしてるといいなあ」

女性の顔はこの上なく嬉しそうで、ユティは思わず顔が綻んだ。年の差は歴然なのに、まるで女性のほうが年下に見えてしまう。そんな不思議な二人組み。

女性は温かいスープを一飲みして、カーテンの敷かれた窓を見つめた。

「もうすぐだよ、クレア」

## 四人目

クレセント・ラ・シャロムが捕まったという事実はすぐさま各師団長、一級構成員に伝えられ、サンマイト、アーリグリフへ散らばった者達にはフェイトが通信で伝えた。しかし公には知らされることはなく、クレセントはグリーテンから帰国した疲れによる一時休暇、という体裁が取り繕われた。

クレセント拘束から一夜明け、仕事を終えたマリアはシランド城の一室を目指して足を進めていた。

嫌な予感が当たってしまったのだ。フェイトからの連絡があった。クレセントは自分に回された、と。

予想はしていた。クレセントは軍部の人間。回されるなら軍部管轄のフェイトが妥当だろう。だが、そんなことはどうでも良かった。とにかく時間が少ない。

『星海』の裏の任務としてはこれが始めてである。少しくらいは遅れても大目に見てくれるかもしれない。

だが、それにも限度はある。

「もって……一ヶ月、かしらね」  
短すぎる。

クレセントが本物であると言う事を証明しなければクレセントは刑を免れないだろう。一応手は打ってあるが、見つからなければ意味がない。そもそも見つかる可能性のほうが圧倒的に低いのだ。

リミットは一ヶ月。その間に見つからなければアウトだ。

今回の場合はクレセントが偽者かもしれないという証拠は出ているが、スパイだという証拠はない。フェイトに与えられた任務は、そこを上手くやりくりして有罪にしろ、ということだ。

つまりは証拠さえ出なければクレセントの有罪は見送られる。

「まあ、そんなことをしていたら奴らはさっさと偽の証拠でも作り

出すでしょうね」

国とはそういうものである。綺麗などころばかりではない。必ず影が巢食うものだ。そしてこのシーハーツも例外ではない。

女王や執政官、クリムゾンブレイドの高潔さはマリアも良く分かっているが、政界、貴族界の腐りようは目に見えている。

とにかくクレセントのスパイ容疑だけでも解かなければならないが……。

「あの子が何か隠してるのは事実だし……馬鹿な考えしなければいいんだけど」

目当ての部屋の前につき、見張りの兵に目配せをすると、兵は敬礼をしてマリアを中に通した。

何時もと全くと言っていいほど変わらないクレセントが、窓際の椅子に腰掛けて外を眺めていた。特に拘束されている様子もなく、どうやら待遇はそれほど酷いものではないようで、ひとまずマリアは胸を撫で下ろした。

ただ一つ変化があるとすればその白い頬に、一筋の跡があったことだけ。

「相変わらずね。何陰気な顔してんのよ」

あえて、マリアはその泣き顔には触れなかった。

「明るい顔してたら変じゃないですか」

「それもそうね」

流れる沈黙。

マリアは内心焦っていた。言いたい事や聞きたい事は山ほどあった。なのに、一言も出てこないのだ。

「マリアは——」

沈黙を破ったのは、クレセント。窓の外を眺めていた翡翠の瞳は、今マリアを映している。

その色が不安気に揺れていると思ったのは、マリアの気のせいだろうか。

「マリアは……私を責めないんですか？」

「どうして？」

「聞いたんですよね？ 私が、偽者……かもしれないとクレセントにしては珍しい、歯切れの悪い言い方だった。

俯くクレセントを見て、マリアは盛大に溜息を吐いた。言いたかった事など、全て吹っ飛んでしまった。

「はあ……じゃあ聞くけど、あなたは偽者なの？」

「……答えられません」

長い前髪に隠れて表情は見えない。

マリアは入り口に凭れかかっていた背を離すと、クレセントの傍まで歩み寄る。足音に気付いたクレセントが顔を上げると、困ったような笑みを浮かべるマリアが居た。

てっきり険しい表情のマリアが居ると思っていたクレセントの目が丸くなる。

「マリア？」

「別に責めちゃいないわよ」

「え？」

「だって、あなたまだ何もしていないじゃない。まあ、あなたが偽者で本物のクレセントをどうにかしたっていうのなら穏やかじゃないでしょうけど、その証拠もないし。それにあなたが別人だったとしても構わないから」

マリアはクレセントの髪を乱暴に撫でる。

「ど、どうしてですか？」

「だってそうでしょ？ 私があなたと会ったのは、ほんの少し前。だから――」

クレセントの髪から手をどかすと、ぐしゃぐしゃの髪のままマリアを見上げるクレセントが目が合う。

クレセントは見た。白銀の隙間から、マリアの碧の瞳が優しくに笑ったのを。

「私にとってのクレセントは、あなただけ」

翡翠から自然にこぼれ落ちる、透明な雫。

きっとクレセントは泣いていることに気付いてすらいないのだろ  
う。呆然とした表情で、マリアを見上げていた。

「またそうやって泣く」

「え、あ……」

「泣き虫」

「そうかも、しれません」

手の甲で目尻を拭い、クレセントは困ったように笑う。

「クレセント」

「はい、なんででしょう？」

「すぐに、疑いを晴らしてあげるから」

よく聞き取れなかったのか、クレセントが首を傾げてマリアを見  
る。

「ごめん、なんでもない。じゃあ私はそろそろ行くわ。ああ、こん  
なとこに閉じ込められてちゃ暇でしょう？ 何か欲しいものがあつ  
たら言いなさいよ」

「また、来てください」

「それは来るつもりだけど、それだけでいいの？」

「それで十分です」

そう言ってクレセントはかすかに笑う。

マリアは「分かった」と返事をして部屋を後にした。クレセント  
は閉じられた扉を一度だけ見ると、また窓の外へ視線を戻す。

それから数分も経たないうちに、一人になったクレセントの居る  
部屋がノックされた。クレセントが「どうぞ」と声をかけると、扉  
は静かに開き訪問者が姿を現す。

「元氣そうだな」

「そう見えますか」

「ああ。随分といれこんでるみたいじゃないか」

訪問者は口元に笑みを浮かべ、扉から離れた。

決して大きくない声で、会話は交わされる。

「……それより、どうするんですか？」

「――その前に、お前の血統限界値が低くなってる理由を説明してもらおうか。お前が偽者なら……」

「あなたに起きた現象が私に後発的に起きた、と私は聞いています。私自身下がっていたことに気付きませんでした」

クレセントは窓際の花瓶に生けられた花を一輪取り、手の中でくるくると回す。

訪問者は大きく息を吐き、クレセントに背を向けた。

「まあ、今更疑う余地もないさ。お前が偽者であるほうがおかしい話だからな」

「ありがとうございます」

「必ず助けてやる。だから、もう少しでもだけ頑張れ」

くるりとクレセントに振り返り、その肩に軽く手を置く。

「三日後……迎えに来る」

そう短く言い切り、訪問者は姿を消した。

そうしてまた独りになった部屋に、夕日が差し込む。まるで血のように真っ赤な夕日が、狭い室内を染めあげた。

「紅い……」

クレセントの長い袖の中、しゃらりとした涼しげな音が、赤に吸い込まれていった。

そして、全てを隠す夜が来る。

※

「本当！？ ネル！」

『ああ。ばっちりさ。資料は明日の朝にでもそっちに届くと思うよ』  
「そう。良かった……」

『ふふっ』

「何よ」

『いや、あんたのそんな顔、なかなか見れるもんじゃないからね』  
「べ、別にいいじゃない」

『それにしても意外だね。あんたがあの子に入れ込むとは思わなかったよ』

「自分でも不思議よ。それも会ってたったの数日なのに」

『時間じゃないんだね。こういうのはさ』

「……そうね。その通りだわ」

『一つ、聞いていいかい？』

「何？」

『あんたがそこまでする理由は何？』

「友達を助きたい。それじゃ駄目かしら？」

『……いや、十分だよ。野暮なことを聞いたね』

「気にしてない」

『私が言えた義理じゃないけどさ。あの子を、頼んだよ』

「ええ、任せておいて。——ネル」

『なんだい？』

「ありがとう」

『どういたしまして』

※

「それで、報告したいことは何だ？」

クレセントが拘束されてから二日目。ラッセルの執務室にマリアとフェイトは真剣な面持ちで立っていた。



マリアが持っていた数枚の紙をラッセルに手渡し、見るように促す。

ラッセルは上から下へ目を通すように見ると、軽く目を開いて顔を上げた。

「これは真実か？」

「ええ。間違いないわ」

「本人とも確認が取れました。これで、クレセントが偽者、という疑いは晴れたかと思えます。そうすればスパイ容疑も晴れるはずです。そちらに関しては具体的な証拠もないのですから」

マリアの言葉にフェイトが付け加える。

ラッセルは二、三度首を捻ると、眉間の皺を深くした。

「しかしシーハーツ人とアーリグリフ人との混血の子供の施力が後天的に下がることなど……」

マリアがラッセルに渡した紙に書かれていたこと。それは、シーハーツ人とアーリグリフ人との間に生まれた混血の子供は、例えば親が高い施力を持っていたとしても著しく施力が下がる傾向にある。そして、その現象が生まれて何年後かに、つまり後発的に起きた事例がある、という内容だった。

混血の子の施力が親に比べて圧倒的に低いという事例は、シーハーツでも周知の事実だ。しかし、稀に下がらない子供もいる。その最たる例は、クレアである。アドレーはシーハーツ人であるが、彼女の母シャロン・ラーズバードは生粋のアーリグリフ人。だが、クレアの血統限界値は三十六%と高い数値を差している。

ラッセルは内容を読み入るように眺めてから、目頭を押さえて顔を上げた。

「このような事例、見たことも聞いたこともないぞ」

「それはそうでしょうね。シーハーツ人とアーリグリフ人の混血は基本的にアーリグリフに流れる傾向にあるから」

戦争が始まる前は友好関係だった国同士、シーハーツ人とアーリグリフ人との混血が生まれることもそう珍しいものではなかった。

しかし、そうした者達は決まってアーリグリフへと流れる。

何故か。シーハーツの過激なまでの差別に耐えられないのだ。無論アーリグリフでも差別は存在するのだが、シーハーツよりいくらかはマシなのである。

言うまでもなく、シーハーツでは当たり前となっている血統限界値の検査はアーリグリフでは行われていない。それゆえ、混血の子供の施力が後天的に下がる、という現象が今まで発見されないでいたのだ。

そもそも何故アーリグリフ人との混血の子供の施力が下がるのかは、いまだ不明である。遙か昔、グリーテンの侵攻に恐れをなし、国を捨てたエーデグリフにまだアペリスが怒っているから等様々な見解はあるが、どれも確証はないものばかりだ。

アーリグリフで施術が発達していないのも、それを行使する術がないのに加えこの妙な現象のせいであると言われていた。現段階で判明している混血の子の施力は一世代で親の約三分の一にまで下がる。そして、それが二世代にもなると限りなくゼロに近くなってしまふのだ。

「混血の子の血統限界値が下がるというのを聞いて思ったのよ。偶発的にこれが生まれた後に発現する可能性もあるんじゃないかって」

「実際に下がったという事例が、現段階で二件」

フェイトが手元の資料をラッセルに渡す。

「極めて稀なケースである事には変わりはありませんが、皆無ではないということですよ」

そこには、実際に下がったとされる人物の出生、経歴、元の血統限界値などが事細かに記されていた。

「そう。そしてクレセントの母親、シャロム夫人は」

マリアの人差し指が立てられる。

ラッセルはに引き出しを開け、クレセントの資料を取り出した。

今回の件の資料として、師団員の記録帳から取り出してきたものだ。ページを捲り、あるページで手を止める。

「父親フロレンス・リ・シャロム。シランド出身。母親ファレス・ラ・シャロム。――カルサア出身、か」

大きく息を吐き、資料を机の上に置く。

「どうですか？ 少なくとも、これでクレセントに釈明の余地はあると思うのですが」

「まあ、証拠としては悪くない。だが、奴らを説得するのには少々時間がかかる。クレセントにはもう二、三日大人しくしててもらわねばならぬ」

「じゃあこれでクレセントの疑いは晴れるわけね」

「ああ。この事例とクレセントのスパイ疑惑についての不明解な点をぶつければ奴らも大人しくなろう。良くやってくれたな。それもたったの二日で」

これでクレセントは助かる。フェイトが横目でマリアを見ると、心底安心したような笑みを浮かべていた。

その目の下にくつきりと浮かんだ隈を見て、フェイトはやれやれと肩を竦めた。

一昨日シレーネから話を聞いたマリアは、アーリグリフに居るネルに連絡を取り、前から懇意にしていたアーリグリフの情報通に連絡を取ってもらった。そして駄目もとで当てはまる人物を探してもらったところ、意外なことに返事は朗報であった。それもたった一日で二件。

すぐに件の人物にコンタクトを取ってもらい、同意の下に資料を作成したのだ。

その資料が届いたのが今日の明け方。それからすぐにマリアは報告書の作成に取り掛かり、それを終わらせた頃には夜が明けていた。つまり、一昨日から丸二日マリアは働き詰めであった。

一方、フェイトはと言えば、

「何もしなかったわけ、ね」

「め、面目ない……」

ラッセルの執務室から退室したフェイトとマリアは、その足でクレアの病室へ来ていた。

事のあらましを説明すると、クレアはほっと安堵の笑みを浮かべ、すぐにその端正な顔を呆れ顔に変えた。

「……もう、情けないわね。全部マリアさんに任せっきりで」

フェイトの剥いた林檎を一口食べ、クレアはベッドの上に目を移した。

今、クレアは椅子に座っていて、本来クレアが寝るべきベッドにはマリアが静かな寝息をたてて横になっている。

丸二日寝ていなかったのが余程堪えたのだろう、話の途中で舟を漕いでしまったマリアを、クレアがベットへと寝かせたのだ。普段のマリアなら断るところなのだろうが、その時は半ば寝ぼけていたのだろう、大人しくクレアに従いベットに入った。その様子がまるで姉妹のように見えて、フェイトは思わず顔を綻ばせた。

そしてフェイトが説明を引き継ぎ、今に到るわけである。

クレアはマリアの蒼髪を起こさないようそつと撫でると、ふわりと微笑んだ。

「私、出会った頃はマリアさんがこんな子だなんて思ってもみなかった」

「僕もだよ。強くて、情に流されない人かと思ってた」

だが、それは違った。

一緒に旅をする中で、フェイトは色んなマリアを見た。

「マリアは人一倍優しいんだ。多分、僕等の中の誰よりも父を助けた修練場で、本音を曝け出して叫ぶ姿。」

思えばあれがマリアの認識を改める最初のきっかけだったのかもしれない。

「でも素直じゃないから、一人でなんでもやろうとする」  
ディプロの中で、独り後悔し続けていた姿。

弱い姿は見せたくない、人を遠ざけていた。フェイトと入れ違いに部屋に入っていったリーベルに、フェイトは小さく「頼むよ」と言ったのを今でも覚えている。

「ほんとは皆と居るのが好きな、寂しがりやなくせにね」  
クオークのメンバーの中で笑顔を見せる姿。

まるで家族のような集団だった。クリフが居て、ミラージュが居て、マリエッタが居て、リーベルやスティング、ランカー達が居た。その中心にいるマリアはとても生き生きして、輝いていた。

「クレセントは似てるんだと思う。マリアに」  
誰も寄せ付けない、孤高の存在に見えた姿。

しかしその影には、いつも涙があった。

「一人でなんでも抱え込んで、誰にも弱音を見せない」

戦闘の時、何時も周囲を気にして、仲間が危険なときは自らを省みずに飛び出す姿。

幾度、助けられただろう。大怪我を負って、目を覚ましたマリアの第一声が「無事で良かった」だったのは、きっと一生忘れない。

「だから、助けたいんじゃないかな」

ルシファーによって存在を消されそうになった時、隣で微笑んできた姿。

あの微笑みに、言葉に、どれほど勇気付けられたことだろう。マリアの声が、いつも覚悟の後押しをした。

「だから、こんなに必死になるんじゃないかな」

そう、まるで独り言のように喋るフェイトの表情は、とても穏やかだった。眠る、マリアの表情も。

クレアはそんな蒼髪の子を優しい瞳に映しながら、窓の外を見つめた。

夕焼けに染まる空に、二羽の鳥が羽ばたいている。紅く燃える太陽に真っ直ぐに飛んでいく姿は、やがて太陽と共に見えなくなった。

それからお馴染みの医師がクレアの退院を告げるまで、フェイトとクレアは心地よい沈黙に身を委ねていたのだった。

※

「ねえ、ネル」

調査の間の宿泊先として用意されたアーリグリフ城の一室で、ネルとルージュは熱い紅茶を囲んで何気ない話をしながら連日の調査で溜まった疲れを癒していた。

その最中投げかけられたルージュの言葉。

ネルが紅茶を口元へ運ぶ手を止めてルージュを見る。

「なんだい？」

「一つ、気になってることがあるのよね」

「私達が何時までここににいるのかってことかい？ それならあと数日だって」

「ううん、そうじゃなくってさ。こういう時一番騒ぎそうな人が静かだなあって思ってる」

「……」

「ネル？」

「忘れてたほうが……幸せだと思うよ」

口に含んだ紅茶は、驚くほどに苦かった。

※

サーフェリオで見つかったエリミネートライフルがあった場所の調査を終えたソフィアとアゼルは、地平線の向こうに目を向けたまま静止していた。

その目はどこか遠い。

「アゼルさん」

「なんですか、ソフィアさん」

「アレ……なんですかねえ」

遙か遠くで一直線に巻き起こっている土煙。その先頭には、小さな黒点が見える。

「幻でしょう」

いっそ清清しいくらいに言い切るアゼル。

アゼルがそのまま足を進め、さっさとサーフェリオへ戻ろうとした矢先、

「アゼルさん」

いまだ地平線の向こうを眺めているソフィアに呼び止められた。

そして、ボソリと一言。

「こっちに來ます」

「逃げますよ」

その瞬間アゼルはソフィアの手を取り全速力で駆け出した。

その細身の体からは信じられないほどの力強さで走るアゼルと半ば引っ張られる形で走るソフィアの横を、一陣の風が奔った。

塊のような巨軀と細身の体はアゼル達を追い越し、数メートル先で急ブレーキをかける。それを見てアゼルも諦めたように止まり、がっくりと肩を落とした。

そして、額に手を当てて、目の前の人間離れをした2人に視線を向けた。

「何か御用でしょうか、アドレー様、リーゼル様？」

「うむ。妻を捜して少々席を外しておつてな。その間の出来事を教

えてもらいたいのじゃ」

「結局見つけられなかったんですけどね」

豪快に笑うアドレーの横で、上品に微笑むリーゼルは場違い極まりないのだが、どこか自然に見えてしまい、アゼルは右目を擦った。ソフィアはあのアドレーと共に走っていた女性を啞然とした表情で見つめている。

「あ、アゼルさん。この方は？」

「あれ、ソフィアさんはご存知ないですか？　ネルさんの母上ですよ」

「初めまして。ソフィアちゃん。いつもネルがお世話になってます」  
リーゼルが柔らかな物腰でソフィアの手を取り、軽く頭を下げる。  
ソフィアは弾かれたように首を振り、腰を九十度曲げて頭を下げた。

「い、いえ！　ネルさんには私のほうが助けられています！」

「いいいえ。ネルから聞いてますよ。常識人がいてくれて助かるって」

ソフィアの顔が引きつる。そんなに苦労させていたのか、と心の中でネルに懺悔した。

アゼルも苦笑を浮かべつつ、リーゼルに軽くお辞儀をし、アドレーに向き直った。

「僕達調査組の方には目立った動きはありません。ですが、シランド、ペターニの方で立て続けに問題が起こっている模様です」

「ほう」

「クレセント・ラ・シャロムの帰国したのはご存知ですね？　彼女がグリーンテンのスパイ容疑で身柄を拘束されました」

「なに？　何故じゃ？」

アドレーが顎鬚を撫でていた手を止め、片目をアゼルへと向ける。  
「どうやら彼女の血統限界値がデータと一致しなかったようです」  
アドレーとリーゼルの瞳が丸くなる。

アゼル一泊置いて、ですが、と付け加えた。



「先程入った新情報です。その件に関しては冤罪だったようです」  
「冤罪……とは？」

「クレセントさんを疑った最初の理由である血統限界値が後発的に下がる現象があったらしいんです」

ソフィアが答える。

「リーゼル」

アドレーが横で静かに会話に耳を傾けていたリーゼルへと振り向く。

リーゼルは顎に手を持っていき、眉間に皺を寄せた。

「私も……初耳ですね」

「お主もか。それは真の話なのであろうな？」

「僕はそれほど関与していないので一概には答えかねますが……」

――あのマリアさんが納得してると考えると、信憑性はそれなりにあるのだと思います」

「ふむ。まあ、グリーテンなどが関与してくるなど考えられんからのお」

アドレーはうんうんと頷き、再び顎鬚を撫でる。

アゼルが一息つくように息を吐き、腰に手を当てて微笑んだ。

「納得して頂けたようですね。それで、御二方はこれからどうするのですか？ クレアさんのお見舞いですか？ まだなんでしょう？」

「それなら心配には及ばん。クレアには一足さきに会ってきたわい」

「消灯時間過ぎた頃に行っただけですごい剣幕で追い返されちゃったんですけどね」

真夜中に窓ガラスを叩く音で目を覚ましたクレアが、窓にへばりつくアドレーを見て容赦ない蹴りを食らわす様子がアゼルとソフィアの脳裏に浮かんでくる。

きっとクレアは夜中の病院ということも忘れ怒鳴り散らしたことだろう。アドレーもクレアのことになると周りが見えなくなるが、クレアもクレアで見えなくなるのだ。

アゼルは引きつる顔を隠そうともせず、乾いた笑いを零す。

「では、我々と一緒にサンマイトの調査にあたって貰えませんか？  
何分調査範囲が広くて、ダグラスの森を探すだけで相当の日数がかかりますから。どうせシランドへ帰っても追い返されるのがオチでしょう？」

何気に酷い。爽やかな笑顔でサラリと傷つくようなことを言っているアゼルと幼馴染が重なった。

しかし、当のアドレーはそんなことを少しも気にする様子はなく、豪快に笑い、二つ返事で了承した。念のためリーゼルにも確認を取ったが、同じく色よい返事が返ってくる。

「では、今日のところはサーフェリオに戻りましょうか。あ、ベツトが少ないのでアドレー様は外で寝てください」

「む、致し方あるまい」

仕方ないのか。という突っ込みをソフィアはぎりぎりのところで抑えた。

ここに来てから一段とアゼルの言葉が辛辣だ。何かアドレーに恨みでもあるのだろうか、と思いつつソフィアはリーゼルと並んで足を進めるのであった。

※

「お呼びでしょうか？」

太陽がとうに沈んだ時刻、蝋燭の灯りだけが灯る謁見の間に三人の男女が跪いていた。

女王は三人に頭を上げるよう言い、ラッセルに小さく告げた。ラッセルは頷くと、白露の庭園へと姿を消す。

「クレア、フェイト殿、マリア殿。此度はそなたらに紹介したい人

物がおります」

クレア、フェイト、マリアが顔を見合わせる。紹介だけならこんな夜遅くにしなくてもいいのではないか。そう思ったからだ。

女王はクレアに一度微笑むと、ラッセルの名を呼んだ。それに答えるようにして開かれる扉。ラッセルの後ろについて現れた人物を見て、フェイトとクレアが同時に立ち上がった。

「君は！」

「嘘……」

短い黒髪が開け放たれた扉から吹く夜風に揺らされ、差し込む月明かりでその顔が露になる。

そこに立つ長身の女性はクレアに柔らかな笑みを向ける。

「久しぶり、クレア」

「……っ」

クレアはその場から駆け出したい衝動を必死に堪え、女性を見つめる。

女性はゆっくりとした足取りで階段を下ると、フェイトに軽く手を振り、クレアの前に立った。クレアは今にも泣きそうな瞳を女性に向けている。

「六年ぶり、かな。でも全然変わってない」

「あなただって……」

「そう？ これでも変わったつもりなんだけど」

「それより無事ならそうと連絡くらいしてよ。六年間も音沙汰なしで……死んじゃったかと思ったわよ」

ついに零れた涙を手の甲で拭いながら、クレアは咎めるような口調で言う。

「酷いな。ちゃんと二本足で立ってるでしょ」

「体は？」

クレアの問いに、女性は首を横に振った。クレア表情が一瞬にして曇る。それを見た女性は焦ったように手を振り、クレアの肩に手を置いた。

「あ、でも大分いいんだ。前みたいにすぐに倒れたりはしなくなったから」

「……」

「そ、それにほら。病気の進行も抑えられてるし……ね」

ぽんぽん、と沈む肩を叩くと、クレアが困ったように笑った。

「ごめんなさい。心配されるのはあなたのほうなのに、私が逆に心配されるなんて」

「いまさらだよ」

「それもそうね」

二人の笑い声が静かな謁見の間に響く。ゆらゆらと揺れる蠟燭の灯りが、優しくそこにいる人々を照らした。

「ところで」

凜とした声がクレアと女性の間に割り込む。クレアがはっとしたように口元に手をあて、女性がぽかんと声の主を見る。

声の主であるマリアは腕を組んだ格好でクレア達に近づき、女王を振り向く。

「彼女は誰なんですか？」

「セレン・ウオン。病気の療養のために六年前からサンマイトに渡っていたものです」

「それで、彼女を私達に紹介した理由は？」

「おまえ達の同僚になるんだ。顔ぐらい知っておいてもいいだろう」  
ラッセルの一言にマリアの、フェイトの、クレアの動きが一斉に止まる。

「同僚って――『星海』に？」

「ああ。セレンは『星海』の一員となることが決まった。担当管轄は技術開発だ。だが、暫くの間はディオンの代わりを務めてもらう」  
「本来なら元鞘に収まり『炎』の師団長になるべきなのでしょうが、現在その地位にはルージュが就いています」

「師団長!？」

マリアの声が上ずる。

「六年前までサンマイトに行ってたんじゃないの？」

「ええ。ですから六年前まで『炎』の師団長に就いていたのです」  
マリアがセレンに振り返り、訝しげな目を向ける。

「あなた……何歳？」

「二十一、だったと思うけど——あの、目が怖いよ」

「十五で師団長に？」

いくら年齢を気にしないシーハーツと言えども若すぎるのではないか。ネルやクレアですら、その年齢では一級構成員にすらなっていないかったはずである。

信じられないと頭を振るマリアに、クレアが苦笑しながら言う。

「シーハーツの神童と呼ばれた子ですから。私やネル以上の実力の持ち主です」

「今はただの食客になりそうだけどね」

頭の上で手を組んで笑うセレンに、ラッセルの咳払いが響く。

「相変わらずだな、お前は。だいたい食客の意味が違っている」

「まあ、そう言わないでください。変わらないって、いいことですよ」

そう言つてセレンが紫の瞳を細めたところで、今まで口を開けたまま硬直していたフェイトが動き出した。

セレンはその視線に気付くと、あの夜と同じにつこりとした笑みをフェイトへと向けた。

「やあ、フェイト。また会ったね」

「ああ。まさかこんな再開をするなんて思ってもみなかったけどね」

「運命みたいだね」

「いや、全然」

茶目っ気たっぷりに言い放つセレンの言葉を、フェイトは笑顔で一刀両断する。

クレアが目丸くしてフェイトとセレンを交互に見た。

「あなた達知り合いなの？」

「うーん」

「知り合いというか……」

知り合いと言っていいものかわからず言葉を濁すフェイト。

実際話したのはあの夜の短い間だけであるし、知り合いというよりも顔見知りといったほうが相応しいのかもしれない。

「数日前にちよつと話を、ね」

「そうなの。――ってセレン。来てたならすぐに会いに来てくれればよかったのに！」

「あ、あはは……そつ、それよりも。ほら、さっきからフェイトが何か言いたそう」

「え、いや、僕は別に……」

言う事はない。そう言おうとしたが、ふと思い当たることがあり、一つ頷いて女王とラッセルに向き直った。

「陛下」

「なんですか？」

「僕達の同僚、ということですが、三柱と称している以上四人になると……」

「ソフィアを抜かす？」

「おい」

マリアの爆弾発言にフェイトが思わず突っ込む。

女王がその様子を見て柔らかに微笑む。

「それは心配要りません。エレナの話では元は五人が正式な人数だったそうです」

「軍部、政界、施術、技術、交易。元は一度に五人を選ぶつもりだったのだが、適任な奴がいなくてな」

「なので名称も五柱に改めれば問題ないと」

「そうすると一人足りないんですけど……」

「それは近いうちに選ぶことになるだろう。――何せ、今現在国内の交易は停滞の一途だからな」

原因は他でもない。シャロム家が機能していないことである。

商家の取締役を務めながらシャロム家自体が交易の中心となって

いるのだ。その党首、夫人ともいない今、本来なら娘であるクレセントが継ぐべきなのだろうが、如何せんこの状況である。

それにもしクレセントが無事な状態であったとしても、家を嫌い軍属になった彼女に商才が備わっているかは甚だ疑問ではあるが。

「とまあ、そういうわけだ。こいつには技術開発を中心に動いてもらう。ああ、くれぐれも戦闘はさせるなよ。以上だ」

「戦闘はさせるなってどういうことだい？」

謁見の間から退室し、会議室へと場所を移したフェイト達は各々の好きな場所に腰掛けていた。

そんな中、フェイトが口に出した質問である。それにマリアも同意する。

「そうね。あなたやネル以上の実力というのならかなりの戦力になりそうだけど」

クレアはセレンと顔を見合わせると、一度頷いてからフェイトとマリアの顔を見た。

「彼女が病気の療養でサンマイトへ行っている、という話は聞きましたね？」

「ああ」

フェイトも頷く。

「その病気というのが厄介でして、治療法が一切ないのです。六年前、任務中に魔物から受けた傷が原因とされてはいるのですが」

「そう。それから数ヶ月はシーハーツで治療してたんだけどね、一向に良くならなくて。シーハーツにはない医療技術があるっていうサンマイトへ行ってたってこと。結局、進行を遅らせることしか出来なかったんだけどさ」

「彼女は激しく体を動かすと強い動悸に襲われてしまうんです。場

合によっては命を落とします」

「そんな……」

「師団長を辞めたのは、それが原因なの？」

言葉を失ったフェイトとは対照的に、マリアは話を進める。

「うん。師団長って言っても一ヶ月くらいだったよ。なってすぐにこんな体になっちゃったから」

セレンがどこか悲しそうに笑い、己の手を見つめたとき、会議室の扉が静かに開いた。

淡いピンクの髪を持った少女が顔を出し、一瞬嬉しそうな顔をするが、フェイトとマリアを見るとすぐに扉の外へ引っ込んでしまった。

セレンは苦笑して肩を竦めると、扉を全開にして少女を招きいれた。

「ほら、ユティ。恥ずかしがらなくてもいいよ、クレアだ」

少女の瞳がおずおずとクレアへと向けられる。クレアも不思議そうに少女を見つめていたが、ユティという名前を聞いてにっこりと笑顔を浮かべた。

「ユティ？ ユティなの？」

「クレア……お姉ちゃん？」

「ユティ！ 久しぶり！」

クレアが両手を広げると、少女は満面の笑顔を浮かべてクレアに抱きついた。

「すっかり大きくなったね。顔つきも大人っぽくなったし……やっぱりセレンの世話は大変？」

「……結構」

「どういう意味かな？」

セレンが笑っていない笑顔で抱き合う2人を見る。

「その子は？」

そこにフェイトがやや控えめに口を挟むと、セレンがユティの頭に手を乗せた。



「この子はユティ。ユティ・ウォン。六年前私がサンマイルに行く時に一緒についていてくれた子だよ」

「ウォンってことは、あなたの妹？」

「うん。血は繋がってないんだけどね。この子、身寄りがなくなっ  
たさ」

「へえ」

「ユティは病院に配属になったんだっけ？」

セレンがユティの頭から手を離して問うと、その首が小さく動いた。おそらく、頷いたつもりなのだろう。

そして、名残惜しげにクレアから離れると、セレンの手を取って歩き出す。

「早く……時間」

「はいはい。じゃあ、また後でねクレア。フェイトとマリアさんも」

「マリアでいいわ。その代わり私もセレンって呼ばせてもらうけど」

「もちろん。じゃあね、マリア」

マリアに手を振り、セレンはユティと共に扉の向こうに姿を消した。

が、

「あ、そうそう、クレア」

すぐに顔だけをひょっこりと開け放たれた扉から出した。

「何かしら？」

今まで柔らかい笑みを浮かべていたセレンの顔が、初めて曇る。

それは些細な変化だったが、その場にいる全員が見て取れるものでもあった。

「見つかった？」

マリアもフェイトもユティもその言葉の意味は理解できなかった。だが、たった1人。言葉を向けられたクレアだけはその意味を知っていた。

セレンと同じように表情を曇らせ、首を横に振る。

「そっか。ゴメン、諦め悪いよね」

「うん。私だって……諦めたくないもの」

「うん」

短く返事をし、セレンは顔を引っ込めた。今度は、もうその顔を覗かせることはなかった。

急に静まり返った会議室で、暗い表情を浮かべて俯くクリアに、フェイトとマリアはどうすることも出来ずにただ立ち尽くすのだった。

## 彩られた写真

フェイトとクレアは、現在この国に起こっている様々な事象を伝えるために、シランドに用意されたセレンの住まいに来ていた。

ベルを鳴らすとすぐに玄関から顔を出したユティは、カーテンを締め切り、やたら多くの蝋燭が灯された部屋にフェイト達を案内した。そして、湯気の立つ紅茶を2人分並べると、手でソファに座るように促す。

「すぐ、来ると思います」

たどたどしい敬語を使っているのはきっと自分がいるからだろうと、フェイトは苦笑した。

クレアの話では、セレンが師団長を辞めるきっかけになった傷を負ったのに、ユティが関連しているのだという。

六年前、アリアスの北東にある一つの小さな村が魔物に襲撃されていると報告されたセレンは、すぐに部隊を編成して討伐に向かった。

しかし、到着したときには時既に遅く、村落は壊滅状態だった。

惨劇を目にしたセレンが生存者の確認を命令した時、村を襲ったと思われる魔物が姿を現したのだ。

一瞬の出来事だった。セレンが反応するよりも早く横をすり抜けた魔物は、たちまち二人の部下の命を奪っていった。セレンはすぐに撤退命令を出し、一人その場に残った。連れてきた師団員では手に負えない。しかし、このまま放置すれば、魔物は血を求めアリアスに辿り着く。そう判断したのだ。

その後、シランドからアドレーとクレアを含む応援部隊が駆けつけた時、既に動かなくなった魔物と血の海の中で倒れるセレン、そしてその傍に佇む少女の姿があったという。

その少女こそが、ユティなのだ。

保護されたユティは自分の名前以外何も覚えていなかった。家族のことも、村のことも。後々分かったことだが、その村落はシランドの情報には一切の記録がない村だった。

そして一命を取り留めたセレンは、ユティを引き取り、姉となった。ユティも最初のうちはセレンを受け入れなかったが、暫く一緒に生活するうちにだんだんとセレンに懐いていった。

それ以来ユティはセレンにつきっきりで身の回りの世話を手伝っている、とうことだった。身寄りのない自分を引き取ってくれた恩義なのか、それとも違う理由なのかは当人が語らない限り知る由もない。

そこまでフェイトが考えたときだった。蠟燭を灯した台をを持たセレンが、姿を現した。

「ごめんね。ちよつと調べものがあつて」

「構わないわ。それで、何から話せばいいかしらね」

「そうだね。とりあえず、フェイトが誰なのかを教えてもらえるっていうのはどうかな？」

クレアとフェイトがギクリと身を強張らせる。

「ふ、フェイトはグリーテンの技術者なのよ。色々な事情でアーリグリフとの戦争に協力してもらって……」

「ふうん。なるほどね。じゃあ、次はシャロム家について」

驚くほどあっさりと引き下がったセレンに、クレアとフェイトはほつとする。

そして気を取り直してフェイトが自分達がエリクールに来てから、ここに居つくと決めたことまでを、クレアがここ数日の間に起こった事を話した。もちろん、先進惑星の技術や創造主については上手く誤魔化している。

「そう。クレセントが」

「クレセントと知り合いなんですか？」

「七年前かな。丁度バツタリ会ってね。その時に少し話をしたぐらいだよ。ちよつと興味もあつたし」

「そうなの。それで、いきなりでなんだけど、あなたの意見を聞かせてほしい」

クレアが身を乗り出す。セレンは紅茶を一口飲むと、足を組んだ。「それは、何について？」

「未知の武器の発見。クレセントの帰国。グリーテンの過剰なまでの鎖国。シャロム夫妻殺害事件。広大な地下空間。そして、今回の血統限界値の相違。繋がりはあると思う？」

「そうだね」

セレンはほんの数秒だけ顎に手を当てて考えると、組んだ足の上で指を絡めた。

「全部が全部ってわけじゃないけど、あると思う。少なくとも、クレセントの帰国、シャロム夫妻殺人、広大な地下空間は関係があると考えたほうが自然じゃないかな。クレセントの帰国から僅か数日で事件は起きた。あまりに短すぎる。彼女がやったんじゃないけど、何かしら関係はあると思ったほうがいいね」

「そうよね。フェイトは？」

「ああ、僕も同じ意見だ。加えるなら未知の武器については、一つだけ考えがある。ああやって一見意味もないようなことには、必ず裏があると思うんだ。例えるなら、もっと重大な何かから目を逸らすためとか」

「重大な何か、か。それが起きてくれれば行動しやすいんだけどな」「あなたね、そういう不謹慎なこと言わないの」

クレアがセレンを軽く睨む。セレンは「はいはい」と両手を上げた。

そうして一旦会話が切れたところで、フェイトは何気なく思ったことを口にした。

「クレアとセレンは、どういう関係なんだい？ 随分長い付き合いのようだけど」

「どういうって……幼馴染」

「そうなんだ。じゃあネルやルージュやヴァンともかい？」

「いや、ルージュは同じ師団だったからそれなりに知ってるけど、ネル様やヴァン君は知り合い程度だよ」

意外な返答にフェイトは目を丸くする。そこに、クレアの助け舟が入った。

「セレンは気に入った人しか寄せ付けないのよ。それ以外は必ず一線引いて接するの。だから友人も私とルージュくらいしかないわ」「一線引く、ね」

フェイトの脳裏にセレンと初めて会った夜の記憶が蘇る。いきなり話しかけられたかと思えば、頭を撫でられた。

あれが一線引いた態度だというなら、どんなに歩み寄った一線だろう。

紅茶を啜るフェイトを見て、クレアは小さく笑う。

「でも、フェイトは気に入られたみたいね」

「へ？」

「でしょ？ セレン」

クレアがセレンに微笑むと、セレンはそれに笑顔を返した。

「うん、そうだね。あ、マリアも気に入ったよ。グリーテンの人は面白いね。この分だとソフィアちゃんって子も興味あるかな」

「ふふ。これから大変ね、フェイトもマリアさんもソフィアさんも」

「どういう意味だい？」

あまり触れてはいけない話題のような気もしたが、怖いもの見たさと同じ心理だろうか、つい聞いてしまう。

内心穏やかでないフェイトに返ってきたは、悪戯っぽい笑みと不吉を匂わせる言葉だった。

「そのうち分かるわよ。セレンに気に入られるってのがどういうことか。手っ取り早いのはルージュに聞くことね。あの子が話せば、だけど」

「そ、そう」

今度それとなく聞いてみようと思ひ、フェイトは残りの紅茶を一気に飲み干した。

そしておもむろに立ち上がると、締め切られた窓のほうへ歩み寄った。

「それよりどうしてこんなに締め切ってるんだい？　今日はそんなに寒くないし天気だって……」

そう言ってカーテンに手をかけたフェイトを見て、今まで大人しく席についていたユティが血相を変えて立ち上がる。

「あっ！」

「ほら、こんなに――え？」

慌ててフェイトの手を止めようとするユティだが一足遅く、薄暗い部屋に煌々とした太陽の光が降り注いだ。

光が、室内を余すところなく照らした。それと何かが割れる音がしたのは、ほぼ同時だった。

ユティはすぐさまセレンに駆け寄ると、その小さな体で太陽光から庇うようにセレンの体を抱きしめる。

そして、フェイトを振り返り、

「光はだめっ！　早く閉めてっ！」

そう叫んだ。

「え……あ、ああ！」

言われるがままにフェイトはカーテンを引く。また薄暗い闇が訪れ、それと共に荒い呼吸が聞こえてくる。

「――っう」

「セレン、セレン！　大丈夫？　大丈夫？」

ユティの涙声とくぐもった声。

フェイトが闇に慣れた目を向けると、床に散らばった紅茶と胸を押さえて床に肩膝をついたセレンが視界に入った。

そのすぐ傍で、クレアが呆然と立ち尽くしている。

そして、長い沈黙の後、

「もう……大丈夫……ありがとう、ユティ」

セレンが、微かな笑みを見せた。だが、その顔は蒼白だ。

セレンはユティの瞳に溜まった涙を指で拭いてやると、ゆっくり

と立ち上がった。ふらつく体をクレアが支える。

フェイトは幻覚でも見ているかのようにその様子を眺めていたが、やがて目が覚めたようにセレンへ頭を下げた。

「ご、ごめん！ 僕っ……」

何度も、何度も。

セレンは緩々と頭を降ると、クレアに支えられながらフェイトの元へ行った。

「いいよ。君は知らなかったんだ。私の過失だよ」

「でも……」

しかし、フェイトは一向に頭をあげようとしなない。セレンは苦笑を浮かべると、フェイトの頭を軽く叩いた。

両手でフェイトの顔を持ち上げ、涙に濡れたフェイトの目と目を合わせてにつこりと微笑む。

「これで、おあいこ」

「……ごめん」

フェイトの顔から手を離す。

「気にしすぎ。でも、優しいんだね、フェイトは」

それは、クレアに向けられた言葉。クレアは柔らかな笑みを浮かべると、大きく頷いた。

「ええ。私の自慢の人よ」

それを聞いたセレンも満面の笑顔をクレアに向けた。

セレンは泣き続けるユティの頭を撫でながらソファに座りなおした。フェイトとクレアも元の位置に戻る。

「セレン。今のはどういうこと？ 昔はそんなことなかったわよね？」

「うん。三年前くらいに、急にね。多分結構無理な治療を続けてたからだと思う。太陽光を浴びると息が、ね」

「……光、アレルギー？」

「フェイト、知ってるの？」

ぼそりと口にしたフェイトの言葉に、セレンが興味を示す。



だが、フェイトはすぐに首を振った。

「いや、でも僕の知る光アレルギーは太陽光を浴びると皮膚に異常をきたすものだった気が……ごめん、よく分からないんだ。ただ太陽光でって聞いたから」

「そうなの」

「今度ミラーージュさんに聞いてみるよ。あの人ならそういうの詳しくそうだし」

「お願いね。あ、そういえばフェイトこの後マリアさんと用事あるんじゃないかった？」

「うん。そうだけど……」

煮え切らない様子を見せるフェイト。理由が思い当たるセレンは、手近にあったクッションをフェイトに思いっきり投げつけた。

柔らかいクッションでも、覚悟もなしにいきなり顔面に当てられればそれなりに痛い。声にならない声をあげたフェイトは、手元に落ちたクッションを取り、セレンに軽く投げ返した。

「ひ、酷いじゃないか……いきなり」

「君がいつまでも気にしてるからでしょ？ 私はまだ大丈夫だよ」

「……でも」

「まったくもう……わかった、わかったよ。じゃあ今度、なにか一つ頼みを聞いてもらおう。それで許してあげる。いい？」

それを聞いたフェイトの顔が少し明るくなり、二度大きく頷いた。

「あ、ああ！ 僕に出来ることなんでも言ってくれ」

そう言ってフェイトは立ち上がり、床に散らばったカップと空になった自分のカップを片付けてから部屋を後にした。

セレンは暫くフェイトが出て行った後を眺め、それから呆れ顔を浮かべてクレアに視線を戻す。

「旦那さんがアレじゃ、君も苦労するね」

「本当よ……」

クレアが盛大に溜息を吐く。セレンはそんなクレアを面白そうに見ると、ぼそりと呟いた。

「私も狙おうかな」

「セレン？」

眼前に投げられた銀製のスプーンをギリギリにところで指で挟んで受け止めたセレンは、目の前の銀髪の幼馴染の目が本気な笑顔を  
見て、

「冗談だって」

と、冷や汗を流すのだった。

※

セレンの家を後にしたフェイトは、ルムを駆ってペターニへと向かっていた。本来なら走って向かうはずだったが、こうでもしないと予定の時間に間に合いそうにないのだ。

あの時間に五月蠅いマリアのことだ。遅刻などしようものなら、マリアお気に入りのスイーツ店のメニュー全品を奢らされる位は覚悟しなければならなくなる。

フェイトは深く溜息を吐くと、ルムの手綱を強く握り、スピードを速めるのだった。

「一分遅刻よ」

「い、一分くらい勘弁してくれよ」

待ち合わせ場所であるシャロム邸の正門前、わざわざスキャナー

で時間を見ていたらしいマリアに、フェイトはがっくりと肩を落とした。

マリアは無慈悲に「却下」と言い捨てると、無言で邸内へと入っていた。これは後で何か奢るしかないとフェイトは観念し、重い足取りでマリアに続く。

階段を上り、シャロム夫妻の遺体があった部屋に入ると、既に到着していたマリアと、

「よお」

軽く手を上げるネイビスが居た。クレセントの容疑が晴れそうということを聞き、ネイビスの機嫌は上々のようである。

フェイトも同じように片手をあげて答える。

「結局地下空間にあれ以上の情報はなかったんだって？」

「ああ。で、トレイターがここ調べたいっていうから俺が付き合ってたのさ。一応この事件俺の管轄になったし」

「そうなんだ。――あ、そうだ。マリア、やっぱりあの装置は旧型の生命維持装置だったよ」

フェイトがスキャナーに映るデータを見ながら言う。フェイトのスキャナーに映るのは、かつてフェイト達の時代よりも遙か昔に使われていたカプセル式の生命維持装置の画像。それは地下空間にあったものと酷似していた。

ネイビスは宙に浮かぶ映像を興味深々に見つめていたが、やがて飽きたように本棚を漁り始めた。

「やっぱりね」

「でも、どうしてこんな未開惑星に……」

「さあね。でも、調べてみる価値はあるわ」

そう言ってマリアがそのデータを自分のスキャナーへと移したところ、

「おい、見てみろよ！」

ネイビスの喧しい声が耳を貫いた。

「何よ？」

マリアが若干苛立った声でネイビスを振り向く。

「これ、アルバムじゃねえ？」

ネイビスが手に持っていたのは、厚手の緑色の本。確かに表紙にはアルバムと表記されている。

マリアはそれをネイビスから取りあげる。

「開けてみましょう」

「賛成」

意気揚々としながらその場に座り込む2人にフェイトが注意しようとするが、

「ちょ、ちよつとプライバシーが……って聞いてないし」

既にアルバムのページ目は開かれていた。

フェイトは仕方ないと肩を竦め、ネイビスの後ろから覗き込む。

いくつもの白黒写真。均等に並べられたのもあれば、ばらばらに貼られたものもある。きつと、貼った人が違うのだろう。

写真の多くは、仲良さげな夫婦の写真。間違いない、シャロム夫妻である。

フェイトが見た彼らの顔は既に青白く、息絶えた姿であったが、こうしてみるとなんと人が良さそうな夫婦である。シャロム家の党首であるフローレンス・リ・シャロムはいかにも誠実そうな男性であるし、その夫人ファリス・ラ・シャロムも柔らかな笑みが似合う女性だった。

とてもじゃないが、この女性が反乱を企てていたなど信じられなかった。

そうして、数ページ捲ったところで、マリアがふと手を止めた。

「この子……」

五歳ほどの幼い少女が満面の笑みを浮かべて鳥と戯れていた。

フェイト達は、その少女に見覚えがあった。小さいながらも、確かに面影がある。

「クレセント、か」

「そのようね。下にも書いてあるし」

マリアの視線を追うと、確かに写真の下に『クレセント、四歳庭園で』と書かれていた。マリアは更にページを捲る。

そうすると、だんだんと今のクレセントに近くなり、十三歳の頃にはすっかりそのままになっていた。ただ、今以上に随分と痩せている。

「やっぱりあの子が二十四って嘘じゃないの？」

確かにここまで変わっていないければそうも思いたくなる。

違うところといえば、髪長さぐらいだ。今は肩より少し下ぐらいまでしかない髪は、この写真では腰の辺りにまで伸びている。

「髪、長かったんだ」

「……可愛い」

口の中で呟かれたような言葉に、フェイトは思わず反応する。

「何か言ったかい？」

「い、いや。なんでもねえ！」

なぜか顔を真っ赤にして声を荒げるネイビスを、フェイトが訝しげな目で見ていたとき、

「変ね」

マリアが神妙な面持ちで呟いた。逸早く反応したのは、ネイビスだ。

「あ？ クレセントの何が変わって言うんだよ」

「まだクレセントだなんて言っていないだろ」

マリアに食って掛かるネイビスをフェイトが宥める。

「顔」

「ちょっと、マリア？」

流石のフェイトもこれには驚く。当のマリアは真剣そのものだから余計にタチが悪い。

静かな殺気を放つネイビスが親指で外を指す。

「表出ろ」

「黙りなさい。表情よ、表情」

マリアが一枚の写真を指差す。それは庭を笑顔で遊びまわるクレ

セントの写真。

フェイトが首を傾げて、聞き返す。

「何が変なんだい？」

「この子、私に言ったのよ。『笑ったのなんて生まれて初めてです』って」

フェイトとネイビスの表情が凍る。

「じゃあ……」

「あのクレセントは……やっぱり」

マリアも唇を噛んで黙る。あの時のクレセントの言葉に嘘偽りがあったとは到底思えない。

しかし、そうなると、やはり……。

「畜生……もうワケわかんねえ……」

ネイビスが力任せに床を殴る。フェイトは写真のクレセントを見つめたまま、項垂れた。

「もし、あのクレセントが偽者だとしたら……本物は……」

「十中八九、殺されてるか……良くても監禁されてるでしょうね」

マリアの言葉が重く、重くフェイト達にのしかかった。

いきなり黙り込んだフェイト達を尻目に、マリアはページを捲っていく。

唐突に、マリアの手が止まる。フェイトが首を傾げてアルバムを覗き込んだ。今マリアが見ているページは、白紙だ。

「ここで終わりみたいだね」

「変よ」

「何がだよ」

ネイビスもアルバムを見ずに反応する。マリアは白紙のページから一枚戻り、最後の写真の下を指差す。

「これ、クレセントが十四歳までしかないの」

「あ、本当だ。ずっと変わらないから気付かなかった」

「いいえ。これだけじゃない。そうよ、最初から気付くべきだった……！」

一人で納得するマリアに、フェイトとネイビスはワケが分からず顔を見合わせる。

「おい、どうしたんだよ？」

「何が変わんだ？」

「どうして、クレセントの写真があるの？」

「は？」

ネイビスの口から間拔けな声がもれる。

マリアはアルバムから顔を上げてネイビスとフェイトを見た。その顔から、一筋の汗が流れる。

「だから……どうしてクレセントを嫌っていたシャロム夫妻が、こんなにクレセントの写真を撮っているのかってことよ！」

※

そよ風が白銀の髪を揺らし、パルミラの花の香りが鼻孔をくすぐる。

鉄格子のかかった窓からぼんやりと外を眺めながら、クレセントは手に持ったパルミラの花をくるくると回していた。

強い風が部屋を吹きぬけたかと思うと、部屋の扉が開く聞こえた。クレセントは思わずふり返った。そこに蒼髪の女性が居るのを期待して。

しかし、

「行くぞ」

幻の蒼は消え、代わりに一つの影が姿を現した。顔をフードで隠した影が、クレセントに手を伸ばす。

「とりあえず暫くの間はあそこに身を隠せ」

「……」

「すまない。辛いだろうが、我慢してくれ」

申し訳なさそうな声に、クレセントは首をふって答え、用意していた浅緑色の外套を身に纏う。

フードを深く被り、差し出された手を取る。悲鳴も上げることなく一瞬で気絶させられた見張りを一瞥して、クレセントは影と共に部屋の外へと飛び出した。

胸の中を、冷たい風が吹き抜けたような感覚。自分の周りにだけ、雪が降っているような冷たさが全身を襲った。

だが、クレセントは振り返らない。もう覚悟は出来ている。

ただ少し、ほんの少しだけ、寂しく思った。小さな後悔の氷が心の中を凍らせていく。

しかし、それを不安に思う反面、安堵している自分もいることにクレセントは気付いた。

（……これで、いい。私が望むものは……ここでは手に入らない）

小さな器に収まりきらなかったモノ達が、静かに流れる涙と共に零れ落ちていく。

それを掬い取る術を知らない悲しい風は、ただそれを見送るだけ。

住人無き部屋の中、一輪のパルミラの花が冷たい床に横たわっていた。



※

薄暗い部屋の中、一人の男が不気味な笑みを浮かべていた。

「ハハハ、情に目が眩み判断を鈍らせたか。あのような偽情報に踊らされるとは」

ガラスのグラスに入った赤い液体が揺れる。

男はそれを一口飲むと、口元を吊り上げた。

「ふん、あの中では一番骨があるとは思っていたがな。所詮は若造か。――それに、シーハーツの神童も思ったほどではない」

男の視線の先にある鉄製のボードには、数枚の写真。

その中の一枚。黒髪の女性の写真へ向け、男は小さな短刀を放る。それは狙いを外すことなく写真の中央に刺さり、大きな傷を作った。

「あとは……そうだな。あの現ラースバードの最高峰をどうやって手に入れるかだが……」

視線が黒髪の女性の写真から少し上にズレる。

「奴を使うか。どうせ、この件が済んだら用無しだ」

そう邪悪に染め上げた笑みを浮かべると、男はもう一振りの短刀を投げる。

やはりそれは、的のど真ん中へと突き刺さった。

## 空白の四年

「何かが……おかしいわ」

マリアは呟くように言った。

血統限界値の不一致。新たに発見された現象。有り得ない写真。不自然な記録。どれかが上手く合致すれば、またそれが崩れ去る。まるで永遠に解けないパズルをやっているようだった。

「ねえ、ネイビス」

「なんだ？」

「シャロム夫妻は、本当にクレセントを嫌っていたの？」

「ああ、間違いねえよ。シャロム夫妻がクレセントに話しかけるところも、笑いかけるところだって誰も見たことねえんだ。そればかりか、まるで自分達に娘はいません、って振る舞いまでしやがる」  
ネイビスは即答した。

「なら、この写真は何？」

「……わからん」

「どう見ても、愛娘の思い出としかとれないよな」

フェイトも思案顔で首をひねる。

写真に写るクレセントの姿。決して家族一緒に写真は無いが、その中のクレセントは楽しそうである。

マリアは再びアルバムに目を走らせ、あるページで手を止めた。

「ネイビス、クレセントに友達はいないのよね？」

「商家のパーティーにはよく顔出してたみたいだから知ってる奴はいると思うが、ああいうところは大人ばかりだしな。友人ってのは……聞いたことねえ。こっちがそう思ってもアイツが思っていないことがほとんどだよ」

「じゃあ、この子は？」

それは唯一クレセントが一人ではなく、誰かと写っている写真。クレセントの見た目が見た目なので確かな年は分らないが、表

記された年齢と比べるならクレセントよりすこし年下、といった感じの少女だった。クレセントの横で、眩いばかりの笑顔を浮かべている。これを友達と言わずになんと言うのか。

ネイビスはその写真をじっと見つめると、思い出したように手を叩いた。

「こいつは……確か」

「抗魔師団『炎』の師団員、デイルナ・シュテンノ」

ネイビスでも、マリアでも、フェイトでもない声が響く。

三人が揃って後ろを振り向くと、腰に長剣を差し、真っ直ぐに背筋を伸ばした女性が立っていた。

女性が一步前に出ると、肩の辺りで一つに結った長い黒髪がふわりと揺れる。

「私とその写真に写っている者です」

「末っ子。お前どうしてこんなところに」

「デイルナです、ネイビス様。いい加減その呼び方はおやめください」

「いや、だっておまえら苗字同じだからよ」

「だからデイルナと呼んでくださいと……ああ、もういいです。それより報告が」

デイルナが姿勢を正す。切れ長の目が更に細められ、マリアとフェイト、ネイビスを射抜いた。

マリアはアルバムを一度床に置くと、薄く笑った。

「面白い話……ってわけじゃなさそうね？」

「はい。残念ながら」

「何があったって言うんだい？」

フェイトが問う。

デイルナはたっぷり五秒間の間を置き、はつきりとした声音で告げた。

「――クレセント・ラ・シャロムが脱走しました」

※

「どう思う？」

「どう、とは？」

クレアと別れたセレンは、ラッセル執政官の執務室に呼び出されていた。足を組んで椅子に座り、温かい紅茶の水面を眺めるセレンは、曖昧な笑みを浮かべた。

ラッセルは大きな溜息を吐くと、セレンの目の前の机に一つの資料を放った。

セレンはそれを片手で持ち上げ、

「クレセント・ラ・シャロムですね。確か脱走したとか？」  
楽しげに喉を鳴らした。

ラッセルは眉を顰め、机に手を組み、その上に顎を乗せた。

「やはり、偽者ということか」

「なぜです？」

「容疑は晴れそうだったのだ。本物なら堂々としてれば良い」

「偽者だって、容疑が晴れそうなら堂々としてますよ」

セレンは資料を無造作に置き、紅茶を啜る。

「そんな話はいい。私が聞いているのは」

「クレセントが偽者かそうでない、か。私の考えでよければ、お答えします」

「そのために呼んだ」

セレンはもう一度資料を手にとると、ラッセルに向けてはつきりと言った。

「結論から申し上げますと、別人でしょう」

「やはり……そう思うのか」

「ですが」

セレンは続ける。

「グリーンテンで入れ替わった、という説は間違いです」

「どういう意味だ？」

ラッセルの眉が更に吊り上がる。

セレンは貼り付けられたクレセントの写真を見つめ、それを軽く指で弾く。

「証言を取ってきました。幼少のクレセントを知る数少ない人物から」

セレンの手から、資料が落ちる。

紅茶に映る顔は、笑みを浮かべていた。

「クレセントは十四歳を過ぎた頃から師団に入るまでの四年間、一切姿を見せなかったそうです」

「……何？」

「そして、彼女はこうも言いました」

ラッセルとセレンの目が真っ向からぶつかる。

セレンは束の間目を閉じ、口を開いた。

「再び姿を現したクレセントは性格が急変していた、と」

※

「マリア！」

ぐらりとよろけるマリアを、フェイトが受け止める。その顔は蒼白で、唇はわなわなと触れている。

フェイトが唇を噛み締めた。

「クレセント……これが君の答えだというのか……」

クレセントのためにマリアがどれだけ必死に動いてきたかを、フェイトは一番よく分かっているつもりだ。だからこそ、クレセントが理解できなかった。

例えばクレセントが偽者だったとしても、ここで逃げ出してはマリアの想いも行動も、全てが水泡に帰すことになるのだ。

マリアがクレセントを助けるために頑張っていたことを、分からなかったはずはない。

「あ……むす……」

ボソリと、マリアが腕の中で呟いた。よほど、ショックだったのだろうか。

「マリア……元気を」

フェイトが顔を歪ませて、マリアの髪に触れようとするが、

「あんの馬鹿娘！ 何考えてるのよ！ わけわかんないわよ！！」

「出し……て……って……はい？」

「もう我慢ならぬわ！ あの子が何隠してようが話してくれるまで待つつもりだったけど、止めよ止め！ こうなったら否が応でも吐いてもらうわ！」

マリアがフェイトの手を振り払い、床を踏みつけながら数歩歩く。フェイトも、ネイビスも、ディルナもその剣幕に圧倒され、言葉が出なかった。

マリアは乱暴に椅子に腰掛けると、足を組んでフェイトとネイビスを見た。

「ネイビス！」

「な、なんだ？」

心なしか、ネイビスの背筋がまだまだかつて見たこともないほど真っ直ぐになっている。

「あなたは今すぐペターニ及びその付近一帯を搜索させなさい！ シラントから逃げたって言うならここを通る可能性が高いわ」

「わ、分かった！」

ネイビスが部屋から逃げるように駆け出していく。

「フェイト！」

「は、はい！」

フェイトの声が恐怖で上ずる。

「あなたは一度シランドへ行きなさい。シレーネとクレアに事態を報告した後、シランドは彼女達に任せてあなたはアリアスへ」

「無理です」

フェイトが返事をしようと口を開けたと同時に、ディルナが一歩前へ出た。

マリアが理由を聞き出すより早く、ディルナが手早く説明する。

「現在シレーネ様はグリーテン方面の調査に、クレア様は一連の事件について独自に調査を進めるとお二人ともシランドを出てゆかれました」

「こんな時に……いいわ、フェイトはシランドへ行った後ヴァンをアリアスへ向かわせなさい」

「残念ですが、それも不可能です」

「まさかヴァンも任務？」

「はい。クレア様の命令だと仰っていました」

マリアは小さく舌打ちをする。

そして、束の間目を閉じて考えを巡らせると、ディルナへと視線を向けた。

「セフィリアは？」

「いらっしやいます」

「じゃあ彼女をアリアスへ向かわせて」

フェイトは大きく頷く。

「分かった。マリア、君はどうするんだい？」

「私はちよつと調べ物。あ、ディルナ……だったわよね？ あなたも残ってくれる？」

「分かりました」

ディルナも頷く。

フェイトは短くマリアとディルナに別れを告げると、早足でシラ

ンドへ向けて疾走した。幸いここへ来るのにルムを駆って来たため、さほど時間はかからずにシランドへはつけるだろう。

ペターニの石畳を駆け抜けながら、フェイトはテレグラフを取り出すと画面を操作する。

「――あ、ソフィアかい？　実はちょっと大変なことになって……」

「あなた、クレセントを昔から知っているんですってね？」

「はい」

「話してもらえるかしら？」

ディルナは大きく頷く。そして、足元へと目を落とす。

「クレセントは……私の初めての友達でした」

顔を上げたディルナの瞳は、まるで過去の思い出を映しているかのように、虚ろな光を放っている。

ゆっくりと足を進めると、屈みこんでさきほどのアルバムを手に取り取る。

「私の実家――シュテンノ家はシャロム家までとはいきませんが、それなりに名の知れた商家です。私には二人の姉がいますが、彼女達は全くと言っていいほど交易など商取引には興味を示しませんでした」

「……」

「ですから、必然的に私が商家のパーティーに連れて行かれたんです。両親も一人くらいは跡取りを、と思ったのでしょうかね」

「でも今は軍人になってるじゃない？」

「軍人になって、この国を少しでも良くすることが私とクレセントの夢だったんです。両親をなんとか説得し、商家の跡取りとしての知識を学びながら、ということを経験に、軍人であることを許されました」



ディルナの長い前髪の隙間から見える右目が、伏せられる。

「私が六歳くらい、でしょうか。私が参加するようになってから数えて四回目のパーティーで、私はクレセントに会いました」

アルバムを開き、クレセントとディルナが写る写真のページで手を止めた。

「商家のパーティーなどに出ていた子供は私くらいでしたので、初めて出会った子供であるクレセントとはすぐに親しくなりました」  
思い出を掘り返すように、写真を指でなぞる。

「その時クレセントは九歳。それまで一切家から出てこなかったクレセントを、子供たちの間では悪魔付きだとか色々言われてましたが、優しくて明るい子でした」

「……」

「それから事あるごとに私たちは一緒に遊びました。クレセントの両親は私の存在を嫌っていたようなので、私達はいつも隠れて会っていました」

ディルナの手かページを捲り、その表情が陰しくなる。

「でも」

白紙のページを見下ろしたディルナは、アルバムを閉じ、それを床へ落とした。

「今から十年前、クレセントが十四歳になったとき、彼女は忽然と姿を消してしまった」

「十四歳って……」

丁度アルバムからもクレセントが消えた時期だ。

「それから四年間……私は一度もクレセントに会っていません」  
「……」

「そして、私が彼女に再会した時、クレセントは私の知るクレセントではなくなっていた」

ディルナの瞳が、悲しみに彩られる。

マリアとそう変わらないはずのディルナが酷く小さく見えた。

「どうということ？」

「どう言葉に表せばいいのかわかりませんが、あえていうのなら……そう、人形みたいなんです。私と話ときも、どこかきこちなくて……」

ディルナの声が、震え出す。

それほどまでに、クレセントのことが大事だったのだろう。

ここまで話を聞いたところで、マリアの頭の隅に一つの考えが浮かんでいた。様々な問題点も解決し、クレセントの急変の理由も納得がいく。

しかし、頭はそれを否定し続けている。

「ラッセル様は……入れ替わりはグリーテンと仰っていますが、私はもし入れ替わりが起きたというなら、その空白の四年間としか思えないのです」

「そうね。私もそう思うわ」

マリアはすぐにでも部屋を飛び出していきたい衝動を堪え、ディルナに微笑む。

「ありがとう。少しだけど、見えてきたわ」

「……あのクレセントは偽者なんですね」

今更隠しても無駄だろう。それにこれはマリアの推論だ。話したところで問題はない。

「おそらく、ね。でないと説明がつかないことが多すぎるわ」

「……じゃあ、やっぱりクレセントはあの偽者に……だから、あの時動揺したのか……!」

もう一度地下空間を調べようと、その場を去ろうとしたマリアの目が、大きく見開かれる。

反射的にマリアはディルナの胸倉を掴みあげていた。ディルナの瞳が驚愕に揺れる。

「マリア様？」

「あなた……クレセントに何を言ったの？」

「は？」

「クレセントに何を言ったのかって聞いているの」

マリアの剣幕に、ディルナがビクリと体を強張らせる。だが、マリアは決して力を緩めようとはしない。

ディルナは搾り出したような声で言った。

「く、クレセントを返せ、と。ここ、はクレセントのいばし……」

ディルナはそれ以上言えなかった。

手を離されたかと思うと、今度は腕を強い力で引っ張られていた。シャロム夫妻の書斎から出て、一直線に地下空間へと向かう。

「ちょ、ちょっと！」

「来なさい！ 私の予想が当たっていれば、あなたは……！」

マリアの真剣な表情と言葉に、ディルナはただ黙ってついていくことしか出来なかった。

「ここは……例の機工兵がいた場所、ですか？」

「そうよ。あなたも手伝いなさい。もしかしたらまだ何か隠されているかもしれない……」

マリアは手当たり次第に棚に並べられた書類や本に手を伸ばす。だが、そのどれもが別段珍しいものでもなく、ジャンルもまちまちだった。育児に関する本もあれば、生態に関する資料もある。およそなんの関連もないものばかりだ。

本の間に何か隠されてはいないかと全てを調べたが、徒労に終わった。

マリアが壁や本棚を調べるが、やはり何もない。

焦りを感じ始めたマリアが、苛立たしげに壁を殴った時、ディルナが声を上げた。

「マリア様、これは調べましたか？」

「え、これって」

「はい、機工兵です」

ディルナが指差すもの。それはアルベルとクレセントによって破壊された、機工兵だった。

「これを調べるって……どうして？」

「知人が言っていた話で、機工兵とまでは行きませんが、一般人には理解し難い機械の中に帳簿や重要書類を隠した商人が居る、というのを聞いたことがあります。もう随分と昔の話ですが」

「……まさか」

マリアは機工兵のボディの鉄板を引っ張る。幸いアルベルとクレセントの攻撃のお陰で接合が脆くなったのか、簡単にそれは外れた。構造はやはり旧式のロボットと同じだったが、マリアはある一点で目を留めた。小さなスイッチを押すと、細い隙間から厚さ数センチほどの薄い引き出しが飛び出す。

その中に入っていたのは、十数枚の紙の束。機械の中は保存状態が良かったのか、それほど痛んでは居なかったが、それでも古いものだと分かるほどに端々が黄ばんでいた。

マリアはその紙束の一枚目、所々に書かれた文字を発見し、戦慄した。

「どうしてこんな技術が、中世の未開惑星なんかにあるのよ！」

「何が、書かれているんですか？」

マリアは紙束をディルナに渡す。

ディルナはそれを理解しようと真剣に読んでいるようだが、やはり理解できないのか首を傾げた。

「いまいち、分からないんですが……」

「ええ。あなた達には全く未知の技術でしょうね。簡単に説明するわ」

「ば、かな……そんなこと神への冒瀆……」

ディルナが力なく後ずさり、背が壁に当たる。マリアは目は手元の紙束に向けたまま、怒りを隠そうともせずにディルナに言った。

「そうね。冒涇よ。でも、今、私が許せないのはあなたの方」

「え……」

「クレセントに何言ったか思い出してみなさい」

マリアの冷徹な言葉に、ディルナの脳裏に先程の自分の言動が蘇る。

そして、ゆっくりと目を見開いたディルナの手が小さく震え出し、彼女は壁に手をついた。マリアは奥歯を噛み締めて、前髪を掴む。

「あの子がなんの目的を持っているのかは知らない。でも、少なくともあの子自信が望んだわけじゃないでしょうね」

「っ」

「どこぞの馬鹿のせいで勝手に望んでもない生を受け、利用されて……あげく、存在を否定された」

「わたし、は……」

「知らなかったんだから仕方ないわ。誰もあなた達を責めることなんて出来ない。でも……」

手が白くなるほどに紙束を握り締めたマリアが、ディルナを睨む。

「悪いわね……私はあなたを恨むわ」

瞼の裏には、あの時のクレセントの顔。涙の跡の理由が、やっと分かった。

ディルナはおもむろに天井を見上げ、煌々と光るシャンデリアを見つめる。黄白色の柔らかい光が、酷くぼやけている。

言葉を失い、呆然と天を見上げるだけのディルナの横で、マリアは悔しそうに呟いた。

「確かに……強力な施術士を大量に作り上げようとして行き着く先は、ここかもしれないわね」

マリアの怒りに同調するかのように、ディルナの虚ろな瞳からは一筋の涙が流れた。

※

シレーネを含む数人の『風』で編成された部隊は、グリーテン方面へと繋がる森を散策していた。凡そ数時間前、この森の中へ不審な武器を持った人影が入っていったという報告が届けられたのだ。クレセント捜索部隊を編成していたシレーネは、自分も同行することでクレセント捜索と不審人物の拘束を一举に引き受けることにした。

しかし、途中魔物の大集団に襲われてしまい、気付けば部隊は散り散りになってしまっていた。この広い森の中で合流するのは困難。こうなった場合は速やかにペターニ東門へと帰ることになっている。だが、シレーネは帰りのルートを見つけることもせずに歩き回っていた。頭の中には、不審人物のことなど一欠片もない。

「クレセント……」

あるのはただ一人の部下。

後悔の念が、今でもシレーネを苛んでいる。女王陛下に勅命を受けたとき、クレセントの反応など関係なしに一緒に逃げれば良かったのかもしれない。

どうして本人の言葉を聞かなかったんだろう。気が動転していたなど、言い訳にならない。

まずクレセントを信じるべきだった。

どうして、クレセントの言葉を聞こうとしなかった？

怖かったのかもしれない。真実を知るのが。

暫くの間答えの出ない自問自答を重ねていたシレーネは、ふと歩みを止めた。

そして、

「止めた」

考えたってどうせ分かりっこないのだ。

「そうね、私らしくもなかった」

何時だってクレセントのことになると、頭で考えるよりも体が動いていた。

そう、今回もそれに従えばいいだけのこと。その先に何かがあるかなど知ったことではない。

とりあえず、信じてみよう。この命を繋ぎとめてくれた存在を。たとえ、それが偽りの存在だったとしても。

「なんとかなる。きっと」

そう呟き、シレーネは風の吹くほうへと足を踏み出した。

※

（ヴァン、何処へ行こうというの？）

同刻、グリーテンへと続く森。シレーネの居る場所とは随分と離れた場所にクレアは居た。

比較的綺麗に舗装されている道を逸れた場所で息を潜め、気配を絶ち、木の陰に身を潜めつつ道を歩くヴァンを見る。

かなりの距離を空けている為、まだ気づかれはいないようだが、油断は出来ない。クレアは深く深呼吸をすると、またヴァンへと注意を向けた。

怪我が完治したクレアは、ネルとルージュとの約束の通り、ヴァンを調べることを決意した。

ラッセルに独自調査の許可を取り、ヴァンを張った。

慎重なヴァンのことだ。何かあったとしてもなかなか尻尾は出さ

ないと踏んでいたのだが、意外にも動きは早かった。何の理由もなしに、ヴァンがペターニ東門の奥へと姿を消したのである。それも、一目を憚って正規のルートを使わずにだ。

不審に思ったクレアはそのまま後を付けることにし、同じように森の中へと入った。

森の中に入ってから、ヴァンの行動はますます不審だった。ここ  
の調査のため派遣されている『風』の師団員と、接触しないよう気を配り、グリーテンのほうへと真っ直ぐに進んでいった。

クレアも誰かに見つけられないよう周囲に気を配りつつ、ヴァンを追う。が、クレアは不意にその足を止めた。冷や汗がクレアの頬を伝い、地面に落ちる。

付けられていることに、漸く気付いた。

迂闊だった。前方を意識しすぎて、後ろに気を配っていなかったのだ。

クレアはくるりと体を回転させると、腰の刀に手を添えた。

「……姿を現したらどうですか？」

一瞬の沈黙。笑い声が響いた。

「やっと気付いてくれましたか。いやいや、このまま気付いてくれなかったらどうしようかと危惧していたところです」

「姿を見せて下さい」

「おっと、失礼」

草を掻き分ける音がクレアの右から聞こえる。そこに立つのは、顔の右半分を覆う仮面を付けた、妙齡の男だった。

見慣れぬ服装。クレセントやシレーネが着用しているような服の上に、白を基調に金の刺繍が入り、紫の輝く飾りをつけたマントを身に纏っている。クレアは一步後ろへ下がると、平静を装って男を見返した。

「その服装……グリーテン人、ですね」

「ご名答」

男は白い手袋をはめた手を2回叩き、口元を吊り上げる。



「では、自己紹介といきましょうか。私はヴァレリア。グリーテンを束ねる五大ドールマスターが一人、ヴァレリアの蠍と申す者」

「初めまして、ヴァレリアの蠍卿。聖王国シーハーツのクリムゾンブレイド、クレア・ラーズバードです。以後、お見知りおきを」

クレアは優雅に微笑み、手を胸に当てて頭を下げる。

ヴァレリアの蠍は愉快そうに笑い、また手を叩いた。

「ハハハ、情報通り聡明な女性のようにです。この状況に少しも動じないとは」

「どうでしょうか。内心は穏やかじゃないのかもしれませんが」

ヴァレリアの笑いが、ピタリと止む。

「食えない方だ。それゆえ、有望です」

「っ！」

頭上から迫る気配に、クレアは素早く横に呼び退いく。

次の瞬間、クレアの居た場所には、黒光りする大きな塊が鎮座していた。

「ほう、避けましたか」

ヴァレリアが感心したように呟き、その塊の傍へと寄った。

その塊をひと撫ですると、塊は四本の足を伸ばし、立ち上がった。四本の足に、長い鼻、大きな耳。まるで狼のような形をした鉄の塊が、クレアの前に堂々と立ち塞がった。

高さだけでもクレアの二倍はあるそれを、驚愕に満ちた瞳で見上げるクレアは、異常なまでに乾いた唇から言葉を搾り出した。

「これは……機工兵？」

「その通り。だが、貴女方が我々を嗅ぎ回るスパイから入手した外敵駆除型や警備型の機工兵とはわけが違う」

ヴァレリアは狼型の機工兵に手をやり笑った。

「教えて差し上げましょう。我らドールマスターは必ず一体、専用の機工兵を所持しております。そして、その性能は――」

ヴァレリアが手を上げる。

「他と比ぶべくもない！」

「くっ！」

機工兵が天に向かって咆哮し、クレアに向けて一直線に襲い掛かった。クレアは高く跳躍して回避し、そのまま木の枝に飛び乗った。そして木の根元に食らいつき、木を倒さんとする機工兵を、クレアは苦笑して見下ろす。刀を持つ手は、僅かに震えていた。

「……参ったわね。犬とか狼は苦手なだけだ」

機械なだけマシか、と息を吐くと、クレアはぐっと歯を食いしばってヴァレリアに視線を下ろす。

ヴァレリアはそれを下から見上げると、歪な弧を口元に描いた。

「そして私も……」

だんっ、と地面が蹴られる音が響いたと思うと、ヴァレリアはクレアの目の前にいた。

驚く間もなく、まるで鈍器で殴られたような衝撃がクレアの右腕に走った。体がぐらりと揺れ、地面に落ちる。

「つう！」

なんとか受身を取り地面に叩きつけられることはなかったが、落ちた衝撃が右腕を走り、頭の芯にまで響く。下手をすれば折れているのかもしれない。

クレアが右腕を押さえながら立ち上がると、ヴァレリアは軽い動作で地面に着地した。

「機工兵を操るだけが、脳ではないですよ」

「……そのようですね。私も、本気を出さなければいけないということですか」

気休め程度にしかない治癒施術をかけ、刀を握る。なんとか持てるが、痺れて上手く力が入らない。

クレアは後ろ髪を纏めたりボンを解くと、それを右手に巻きつけて刀と腕を固定した。銀糸が風に舞い、褐色の瞳がヴァレリアを強く睨んだ。

「楽しませて下さい。貴女には期待しているのですからね……ラーズバードの血を引く者」

機工兵が一気にクレアへと襲い掛かる。クレアは機工兵の爪を避け、走り出す。

「逃げる気ですか？」

クレアは答えない。時に機工兵の攻撃を避け、時には刀で受け止める。

ヴァレリアはその様子を傍観し、やや高揚した口調でクレアに声をかけた。

「ただ避けるだけとは……シーハーツが誇る施術とやらを見せていただきたいものです。我々にはない神秘の力を!!」

クレアの動きが止まり、左手が真っ直ぐに機工兵へと向けられる。

「お答えしましょう……ディープフリーズ！」

絶対零度の雪の結晶が機工兵の頭上から舞い散り、その機体を凍らせていく。

足が地面に縫い付けられ、徐々に固まっていく。ものの数秒で、黒光りする巨体は氷の彫像と化した。

ヴァレリアは機工兵を一度仰ぎ見ると、クレアに向けて拍手を送る。

「無詠唱とは、素晴らしい。しかし、その程度では我が機工兵は止められない」

それを合図にしたかのように、機工兵を覆う氷が水蒸気を撒き散らせながら解けていく。

クレアはその様子を平然と見てみると、小さく微笑んで手を上に掲げた。眩いまでの銀の紋章が、クレアの手をから放たれる。

「では、これはいかがでしょう？」

白い雷鳴が、機工兵を貫いた。目も開けられぬほどの閃光が森を切り裂き、轟音が地を揺るがした。

水に濡れた機工兵から、白い煙が上がり、その巨体が崩れ落ちる。

「こ、これは……」

「風系統の中でも最高級の威力を誇る施術です。ご自慢の機工兵もこれは堪えたようですね」

「馬鹿な……このような高等施術を無詠唱で、だと……」

ヴァレリアが信じられないといった目をクレアに向ける。クレアは何も言わず、刃の切っ先をヴァレリアへと向けた。

だが、ヴァレリアは刀を向けられていることなど露ほどにも気にせず、口元に手を当てて考え込んでいる。

そしておもむろに顔を上げると、声を上げて笑い出した。

「クク、そうか、そういうことですか！」

仮面に覆われていない方の顔を手で押さえ、仮面に空いた穴からクレアを見る。

見開かれた金の瞳に、クレアは一種の恐怖を覚えた。

「遅延呪文。先に詠唱を済ませておいた施術を遅らせて発動させる術。まさかこんなものまで使えるとは……本当に素晴らしい！ 私を知る数多くの施術士の中でも、その若さでこの術を使えるのはあなたで三人目だ」

「褒め言葉として、受け取っておきます」

クレアは動かなくなった機工兵を横目で見ると、ヴァレリアの喉に刃を突きつけた。

「大人しく投降していただけませんか？」

「残念だ」

「そうですか」

クレアは一瞬の躊躇いもなくヴァレリアの腹部に刀を突き刺す。殺してしまっただけは、意味がないからだ。

だが、

「っ！」

剣先は何か堅いものに当たったように、一向に進まなかった。

「これは！？」

「ドールマスターの力、なめないでいただきたい」

ヴァレリアは刀を素手で握ると、刀ごとクレアを投げ飛ばした。数回回転をして、クレアが着地する。

クレアがヴァレリアの手を見ると、今の今までヒューマンのそれ

となんら変わりなかった手が、岩のように色と形を変えていった。その人間離れした変形に、クレアは背筋を伝う汗を感じた。それでも、表情は笑みを崩さない。

「そういえば、アンフロックは岩石から進化した亜人でしたね」

「そういうことです」

先程クレアの刀を弾いたのも、あの服の中で体を硬質かせていたということだろう。

ヴァレリアは余裕の表情を崩さぬまま、クレアに一步步み寄る。

「クレア・ラーズバード。私がわざわざあなたの前に出てきたのはそれなりに理由があるのですよ」

「お聞きしましょうか？」

「私の実験に協力して頂きたい。ご同行願えませんか？」

「私がそれを飲むとでも？」

クレアが凜然と言い切る。ヴァレリアが顔を伏せた。

「残念です、とても」

その口元が、凶悪なまでに吊上がっていることに気付いたときには、首に強い衝撃を感じた後だった。

抵抗する暇もなく、力が抜け、体が崩れ落ちるところを小さな体に受け止められる。

「よくやったな」

ヴァレリアの声が聞こえる。

クレアは朦朧とする意識の中、顔を上げた。そこには、見知った顔。

「申し訳ありません、クレア様」

「……く、くれせん……と」

翡翠の瞳が見守る中、クレアの意識はそこで途絶えた。

## Remember

「連れて行け。場所は第二実験室だ」

気を失ったクレアを抱える顔を全て仮面で覆った男に、ヴァレリアはマントを翻しながら言った。仮面の男は頷き、クレアを抱えたまま姿を消した。

「クレセント、おまえは手筈通りに」

「はい」

クレセントも頷き、フードを深く被りなおしてその場から去る。残されたヴァレリアは停止した機工兵を見上げ、息を吐いた。

「ふむ、シーハーツの施術はやはり侮れんな。一時的とはいえ、私の機工兵を停止させるとは」

軽く手を振ると、今まで固まっていた機工兵が奇妙な音を立てて動き出す。だが、その動きはどことなくぎこちない。

「どこかの回路をやられたか……万が一のために直しておく必要があるな」

ヴァレリアがそう呟くと、機工兵はやや遅いスピードで森の奥へと走り去っていった。

「――まさか、クレアがっ……」

ヴァレリアの立つ場所からかなり離れた茂みの陰。シレーネは今にも飛び出そうとする足を必死に押さえて、しゃがみ込んでいた。

ここで飛び出すのは簡単だ。だが、クレアが叶わなかった相手に、自分が勝てる確率などないに等しい。

シレーネは歯を食い縛って耐えた。

森の中を散策していたとき、シレーネは遠くで白い稲妻を発見し、

その場所へ急行した。念の為離れた地点からその様子を観察したところ、クレアと見知らぬ男が対峙していた。

そして、その背後に忍び寄るクレセントを視認したと同時に、クレセントの手刀がクレアの首を突いたのだ。

「クレセント、どういうつもり？」

男が誰なのは確認できなかったが、先程走り去っていった塊。始めてみる形状だったが、間違いなく機工兵だと、シレーネは確信した。

つまり、それを操るあの男はドールマスター。

「どうしてグリーテンのドールマスターが……いえ、考えていても仕方ないわね。とにかく報告を」

「それは、困りますね」

「!!」

シレーネは頭で考えるよりも早く足元にあった長槍を手に取り、声のするほうを突いた。まるで岩石を突いているかのような手応えに、シレーネの顔から血の気が引く。

「おやおや。いきなりご挨拶ですね。虚空師団『風』の師団長シレーネ・リシヤス殿」

先程までギリギリ目で視認できるほどの位置に居た男が、今シレーネの前に居た。

「……グリーテンのドールマスターが、何故このような場所にいるの？ クレアをどうするつもり!？」

「ヴァレリアと申します。まあ、私にも色々な事情があるのでですよ。クレア・ラーズバード殿には、少々お手伝いしてもらいたいことがありますね」

ヴァレリアが口元だけに笑みを作る。

「それで、まだ私の存在を知られては困るのですよ。それに、クレセントのことも」

シレーネの表情が変わる。

「クレセント!？ あなたクレセントに何を……」

「それは、本人にお聞きください。――あの世で」

「……あ……？」

鈍い鈍痛が腹部に走ったかと思うと、口から唾液の混じった血が吐き出される。

緩々と下を見下ろすと、ヴァレリアの鋭く尖った手が腹部を貫いていた。

「あ、か……」

手が引き抜かれ、生暖かい血が溢れ出す。腹部に手を当てると、そこからまた大量の血液が零れ落ちる。

足がふらついた。そのまま二、三步後ろに下がると、ガクンと体が崩れ落ちる。

「さようなら」

体が宙に舞う。己の手についた血を舐め取るヴァレリアが目に入り、どうしようもない怒りが込み上げてきた。

紅い血を舞わせながら落ちていく。すぐ後ろは、切り立った崖だったのだ。

「こ、んな……終わり方、か」

元居た場所がどんどん遠くなっていくのを見ながら、シレーネは血の混じった笑いを漏らした。ヴァレリアは、もういない。

もう痛みすら感じない。感覚が麻痺したのだろう。

「そ、いえば……前にも、こんなことあったな」

それは軍に入りたての頃、出生のことで毎日のように苛められ、ついに耐え切れなくなり、崖から身を投げたときの記憶。

これで、楽になれるそう思っていた。

だが、

『生きてください』

助けてくれた人がいた。

とても綺麗な、陽の光で輝く白銀の髪が印象的だった。

『あなたが死んだら、悲しむ人が居るでしょう』

憂いを帯びた翡翠の瞳は、どこまでも澄んでいた。



『なら、私が悲しみます。一つの命が消えることは、悲しいことだ  
と思うから……』

淡々とした顔は無表情だったが、どこか不思議な優しさを感じられた。

『居場所……それは、とても大切なものです』

無言で立ち去っていく背中が、とても小さかった。

あの時は名前も知らなかった少女。けど、今は違う。

「……ちゃんと……知ってる」

翡翠の風に全身が包まれた。ふわりと体が宙に浮く感覚。知ってる。

あの時も、助けてくれたのはこの風だった。

冷たくて、でも温かい。そんな不思議な風。

背中が地面につく感覚で、シレーネはゆっくりと目を開ける。

そこにあったのは、あの時と同じ無表情な顔ではなく、今にも泣きそうな顔。

「やっぱり……いつ、も……助けてくれるのは、あなただった……  
クレセント」

「シレーネ、さま……」

クレセントの頬に手を伸ばす。その手に、クレセントは躊躇いがちに手を重ねた。

シレーネは少し驚いて、それから微笑んだ。

「ごめ、んね……信じてあげられ……なくて……わたし、あなたの  
上司、なのにな」

「違う。あなたは信じてくれた。いつだって……いつだって、あなたは私を気にして……」

クレセントの瞳から流れる涙が、シレーネの手を伝って頬に落ちる。

シレーネは上手く動かない指を僅かに動かし、涙を拭って目を閉じた。

「でも、今は……信じてる……クレセント。やっぱり……あなた

は、私の大切、な……」

シレーネの手が、クレセントの手から滑り落ちた。クレセントの瞳が大きく見開かれ、涙が零れる。

手の甲で涙を拭い、シレーネの髪をそっと撫でたとき、

「こんなところにいたのか、クレセント。――何があった？」

近くの木の陰から、フードで顔を隠した影が現れた。クレセントに近寄る足を止め、血だらけのシレーネとクレセントを見比べる。

クレセントは何も言わずに立ち上がると、影の横に立った。

「シレーネ様の傷をお願いします。応急処置後、ペターニの病院まで運んであげてもらえますか？」

「構わないが、どうしてペターニに？ シランドのほうが設備は整っているだろう」

「シランドでは万が一にも巻き込まれる可能性があります。出来れば、この人にはこれ以上……」

「……分かった。後で会おう」

「お願いします」

深く被られたフードの中、優しく微笑んだ影はクレセントの頭を撫で、走り去っていった。

その姿が見えなくなるまで見送ったクレセントは、何処までも蒼く澄み渡る空を見上げて呟いた。

「ありがとう、シレーネ……さようなら」

※

「ルージュ！」

「まっかせといてよ！」

王都アーリグリフの南東に位置する岩場に、赤と朱が舞う。そして、それらから必死に逃げ惑う人影。

ルージュは高く高く舞い上がると、手を真上に掲げた。空に朱の紋章が広がり、背筋に寒気が走るような力が集結していく。

「散々引っ掻き回した罰！　しっかり受けなさいよ！！」

ルージュの全身が炎を纏い、人影へ向けて急降下する。地を轟かす様なをたて、ルージュの降り立った場所を中心に爆発が起きる。

飛び散る岩の破片を避けつつ、ネルが慌てたように叫ぶ。

「ばっ！　殺したら意味ないじゃないか！！」

ネルは爆発地点へと向かうが、土煙が酷く場所が特定できない。漸く土煙が晴れた頃、そこには、

「やりすぎちゃった」

口から泡を吹いて倒れる男の上に座り込み、舌を出すルージュの姿。

ネルはにっこりと笑うと、ルージュの頭に拳を振り下ろす。

「やりすぎちゃった、じゃないよ！」

「いったあ！　ネル本気でぶったでしょ！　ひどいひどい！」

「う、る、さ、い、よ。――はあ、あんたに任せた私が馬鹿だった」大袈裟に溜息を吐き、ネルはルージュに男の上からどけるように言う、手に持っているエリミネートライフルを取り上げる。

「最近現れた謎の武器を持って徘徊する男って、こいつでいいんだよね？　事件解決？」

「ああ。多分ね。でも、呆気なさすぎる」

フェイトからクレセント脱走の連絡が入り、ここ数日、特に目新しいものも見つからず、特に被害もなかったのでネルとルージュは予定より早くアーリグリフでも調査を切り上げることを決めた。

だが、そんな矢先、アーリグリフの近くで、謎の武器を持った男が時たま街に現れては姿を消す、という情報が入ってきたのだ。

幸い見せびらかすだけ見せびらかし、あとは何もせず去っていくので被害はないが、それでも放っておくわけにはいかない。

ネルとルージュは帰国を先延ばしし、まずこの犯人を捕らえることに決めたのだ。

「そだね。むしろなんか上手いこと足止め食らっちゃった気分」

ルージュが頭の上で手を組み、足元の小石を蹴る。

ネルは顎に手を当てたまま考え込んでいると、急に立ち上がった。

「……そうか。そうだよ、ルージュ！」

「わわっ！ い、いきなり大きな声出さないでよ！」

「ちよっと、起きな！」

「うわっ、ネル、えげつない……」

ネルは足元に倒れる男を思い切り蹴飛ばし、首元を掴んで数回揺すった。

男は呻くような声をあげて重たい瞼を開き、目の前にいるネルの鬼のような形相に短い悲鳴をあげた。

「いいかい？ これから私が質問することに素直に答えな。黙秘は許さない」

ダガーを男の前でチラつかせながら言うネルに、男は何度も頷く。

「あんた、この銃をどこで手に入れた？」

「も、もらった……」

「誰に？」

「し、知らない。仮面をつけた男が突然現れて、金を渡すからこの銃を持って噂になるように……」

「なーる。一本取られちゃったってわけだ」

ルージュの口調は軽かったが、口元は引きつっている。ネルは小さく舌打ちをすると、男を殴って気絶させた。

「くそっ」

「こっちがそうってことは……サンマイトも？」

「ああ、その可能性は高いだろうね」

そう言ってネルが苦虫を噛み潰したような顔を浮かべたとき、テレグラフが鳴った。

ネルは腰のポケットからテレグラフを取り出し、スイッチを入れ

た。

『ネルさん!』

画面に映っているのは、茶髪の少女。心なしか、焦っているように見える。

「ビンゴ、みたいだね」

ルージュが横で腕を組んで、嘆息した。

ネルは「ああ」と頷くと、画面に向き直る。

「ソフィア。もしかしてあんたの所にも現れたのかい? 謎の武器を持った徘徊者」

『はい。も、ってことは、やっぱりアーリグリフにも』

「ああ。今捕まえたけどね。そっちは?」

『アドレー様とリーゼル様が追っているのです、数分もしないうちに捕まえられると思いますよ』

「アゼル……って、今何て?」

ソフィアの代わりに画面に映ったアゼルの言葉に、ネルは引きつった笑みを浮かべる。

『はあい。ネル、元気ですか?』

アゼルが答えるより早く、黒髪の女性が映った。画面の端には、なにやら雑巾のように伸びた人を持ったアドレーが意気揚々と走り回っている。

ネルは、深い溜息を吐き、頭を抱えた。

「なんで母上とアドレー様がアゼル達というんですか?」

『アゼル君に頼まれちゃって。暇なら手伝って下さいって』

「暇だったんですか?」

『暇だったんです』

笑顔で言い切るリーゼルに、ネルの溜息は益々深まった。

『ネルさん』

「ああ、アゼル」

いつの間に入れ替わったのか、画面にはアゼルは神妙な面持ちで映っている。

『ネルさんなら気付いていると思いますが、嵌められました』

「そうだろうね。目的は私達の足止め、ってことかい？」

『ええ。おそらくは』

「ただ、目的が分からないね。一体私達を足止めして何のメリットが……」

ネルの表情が凍る。画面のアゼルも頷いた。

『今すぐシランドへ戻りましょう。必ず、何かが起こります。……いえ、下手をすればもう』

その言葉を最後に、画面は真っ黒く染まった。

※

「なあ、アルベル」

シランド城にある客室。今は滞在するアルベルのために宛がわれた部屋に、フェイトは居た。

セフィリアをアリアスへ向かわせたフェイトは、すぐに『光』から数人を選抜し、シランドの街とその付近の調査に当たらせた。

それで、折角だからアルベルにも協力を頼もうと尋ねたのだが、

「面倒くさい」の一点張りだった。

椅子の背もたれを前にして座り、肘を上置く。

「なんだ？ 人探しに協力するつもりはねえぞ」

対するアルベルはベットにどっかりと腰を下ろし、刀の手入れをしている。銀色に輝くそれは、使い込まれた上によく手入れされていた。

フェイトは小さく溜息を吐き、足元に視線を落とした。

「……おまえさ、どう思った？」

「何がだ？」

アルベルが刀から顔を上げる。フェイトも足元から視線をアルベルへと移した。

「いや、ほら……母親についてだよ」

「別になんとも思わねえ」

「そうか」

フェイトが曖昧に笑う。アルベルは罰が悪そうに顔を背けると、ただ、と呟く。

「ただ、なんだい？」

「……すげえ奴だったってのが分かった。それだけだ」  
腕に光る紫のリングが柔らかい光を放つ。

「……アルベルらしいよ」

フェイトは声押し殺して笑うと、アルベルは鼻を鳴らせて刀の手入れに取り掛かった。

「ところで、さ」

暫くの沈黙の後、フェイトはアルベルに声をかけた。アルベルは目線だけフェイトに送り、先を言うよう促す。

「アルベルも知ってるよな？ エリミネートライフルの件」

「ああ」

「あれ、誰がどんな目的でやってるんだと思う？ いや、そもそも何処で手に入れた？ やっぱりバンデーンの仕事なのか……」

いきなりの質問攻め、アルベルは一瞬哑然として手を止めたが、

「……俺が知るか」

面倒くさそうに吐き捨てた。

フェイトは、そうだよな、と呟き、頭を掻く。

また訪れる沈黙。しかし、今度はそう長くはなかった。

「あいつら、一度ここで派手にやらかしたよな。そんな時じゃねえか」  
フェイトが目を瞬かせ、それからガタリと椅子から立ち上がる。

勢いよく立ち上がったせいで、椅子は派手に転倒した。

「そうか。それで手に入れた方がいいが、本人認証装置のせいで使えなかった」

「だから捨てたってのか？」

「違う。何か、何かあるはずだ。アーリグリフ……サーフェリオ……シーハーツ……グリーテン……」

フェイトはぶつぶつと呟いて、部屋の中を右往左往する。

そして、はたと立ち止まる。

アルベルは見た。フェイトの目が揺れ、顔がまるで自身の髪のように青褪めていくフェイトの姿を。

「そう、か……そういうことか」

「なんなんだよ」

「アルベル、今このシランドに僕らを除いて戦闘に秀でた人間がいるかい？」

「俺が知るわけねえだろうが。——いないのか？」

取って付けられたようなアルベルの問いに、フェイトは頷く。

「ネルとルージュはアーリグリフ。ソフィアとアゼルはサーフェリオ。シレーネさんはグリーテン。セフィリアはアリアス。クレセントは行方不明。各師団の上位構成員はそれぞれの任地に出払っている。クレアとヴァンもない」

「がらがらじゃねえか」

アルベルは呆れたように言い、刀を鞘にしまった。

「戦力の分散。これが狙いなのかもしれない。未知の武器が発見されたとなればそれを調べに行くはずだ。そして、調べに行かされるのは上層部だと踏んだんだ」

「つまり、ここで何かが起こるってことだろ？ 面白い」

「目的はなんだ……？」

フェイトが頭に手を当て、考えを巡らせたとき、扉がけたたましく叩かれた。

そして返事も待たずに一人の兵士が室内へ飛び込み、その場に跪く。



「フェイト様！ ご報告が！」

「どうした？」

「封印洞の……」

兵士は床に視線を落としたまま、拳を地方強く握った。

「封印洞の封印が解かれ……聖殿カナンへ侵入者が入りました！」

「嘘だろ！？ 封印を解く方法を知っているのは陛下と執政官以外にはネルとクレアしか……」

「信じられませんが、事実です。フェイト様は直ちに部隊を指揮して賊を捕らえよと」

「……そうか、目的はセフィラだったのか」

フェイトが悔しそうに顔を歪める。

「分かった。相手は何人だ？」

「現状は二人と報告されています」

「警備兵はどうしたんだ？」

封印洞を使わなくても、カナンには地上からの入り口がある。そこから入ってくる賊対策のため、カナンには数十人の警備が付けられているはずである。

最も、聖殿に侵入し、カナンを奪おうとする大それた者など早々いるものではないのだが。

「それが……全く歯が立たないと。相当の手練のようです」

「ふん、そうでなくっちゃな。フェイト、俺も手を貸そう」

「助かるよ」

刀を握り、口元を吊り上げるアルベルを見ると、フェイトは兵士に向き直った。

「封印洞を通る許可は？」

「下りています」

「分かった。僕とアルベルは今すぐ向かう。君は『光』の小隊を集めた後、援護に向かわせてくれ」

「は！」

兵士は深く頭を下げると、早足に退室していった。

フェイトは立てかけてあった剣を腰に差す。

「行こう、アルベル」

「ああ、久々に楽しめそうだ」

アルベルは愉快そうに喉を鳴らし、大聖堂へ向けて走り出した。

※

眩しい……。

まるで真夏の太陽のような強い光が、薄目を開いたクレアを射抜いた。

クレアは虚ろな頭で手足を動かそうとするが、動く気配はない。どこか寝台のようなものに寝かされ、手足を拘束されているらしいかった。

「目を……のか？」

「いや……ないだ……」

人影に似た黒いものが、ゆらゆらと光の中に揺らめいていた。目は、まだぼやけている。

「ど……しそうか？」

「……思ったよりも……が不安定……」

「リー……と同じ……でも駄目か」

「待て……目を覚ましかけ……麻酔を」

ようやく頭が回りは始めたところで、腕に僅かな痛みが走る。そして、クレアはまた深い闇へと沈んでいった。

## 光と風の真意

二つの影は、真っ直ぐにカナンの最奥へと向けて疾走していた。その進攻を阻むべく、立ち塞がった兵士は一瞬にして気絶させられ、冷たい大理石へ次々と倒れ伏していった。

「急げ。おそらくすぐに動くだろう」

「はい」

会話を繰り広げつつも、二人の体は合理的に動いていた。

前後に立つ六人の施術士。待ち伏せしていたのか、既に詠唱は完了し、四方から放たれ施術が侵入者二人へ襲い掛かる。

だが、そのどれもが、長身の侵入者が張った光の壁の前に掻き消されていった。

慌てた施術士達が次の詠唱に入ろうとしたとき、もう一人、小柄な侵入者は、すでに施術士の背後へと移っていた。

「ごめんなさい」

背後をつかれた三人の施術士達はその澄んだ声を耳にしたと同時に、施術士達は意識は途絶えた。

倒れる施術士達を見下ろしてから前を向くと、立っているのは一人の施術士だけだった。

「……」

小柄な侵入者が施術士に向かい攻撃をしかけようと懷に手を入れ、短剣の柄を掴んだとき、

「あ、う……」

施術士が、呻き声をあげて崩れ落ちた。

その後ろには、剣を構えた侵入者が立っている。

「行くぞ」

長身の侵入者が短く言い、小柄な侵入者は短剣から手を離して走り出した。

深く被られたフードの中で、白銀の髪が揺れた。

※

「陛下！」

「ルージュか。随分と早い帰国だな」

女王と執政官のみが佇む謁見の間に、朱色の髪を揺らしたルージュが入ってくる。

ルージュはその場に跪くと、胸に手を当てて女王を仰ぎ見た。

「ルージュ・ルイズ。アーリグリフでの調査を終え、只今帰国致しました」

「ご苦労でしたね、ルージュ。して、ネルはどこです？」

「ネルはまだアーリグリフに。事故処理を任せてあります。私は陛下に報告があり、一足先にエアードラゴンを借りて帰国致しました」  
女王の表情が陰しくなり、ラッセルに目配せする。ラッセルが頷く。

「おまえが言おうとしていることは、ここシランドで何か厄介ごとが起きる、ということか？」

「どうしてそれを……まさか！」

ルージュの目が大きく開かれる。

ラッセルは大きな溜息を吐き、頭を抱えた。

「その通りだ。もう既に起きている」

「くっ！ 一体何事ですか？」

「カナンに賊が入った。――封印洞を使ってな」

「馬鹿な！ 封印洞が開けられるなんて……」

ルージュが信じられないと頭を振る。

「そうだ。私と陛下、そしてネルとクレアしか知らぬ。だがネルとクレアではない」

「なら誰が――」

「……おまえたちには黙っていたがな。もう一人いるのだ。いざという時の為に、な。――奴が裏切るなどとは微塵にも思っていないかったんだが」

ラッセルの苦渋に満ちた顔を見たルージュは、すぐにある人物を思い浮かべた。

だが、ルージュにはそれを信じる事が出来なかった。

「まさか、あいつがセフィラを奪うなんてこと……」

「いや、この際誰かはどうでもいい。問題はセフィラを守ること。それだけを考えろ。既にフェイトとアルベル・ノックスが先行している。お前は『光』の小隊を率いて急ぎカナンへ向かえ」

「は！」

「それ、私も行っていいかな？」

ルージュの、ラッセルの、女王の動きが止まる。

緊迫した場の雰囲気には似つかわしくない楽しい声が響き渡った。

ルージュが首を後ろへと回すと、真っ黒な外套に身を包み、フードを深く被ったセレンが笑顔で立っていた。

「やあ、ルージュ。久しぶりだね」

「あ、あ、あああんた……」

極限まで声を震わせたルージュが、セレンに飛び掛った。胸元を掴み、顔を凝視する。

そして束の間天を仰ぐと、耳が裂けんばかりの絶叫を放った。

「あ、悪夢だあああああ……！！」

「……ちよつと、感動の再会にそれはないでしょ。、まったく相変わらずなんだから」

「相変わらずなのはアンタのほうでしょ！？ 何！？ 何なの！？ 何でアンタがここに居るのよ！？」

「あれ？ フェイトから聞いてない？ ちょっと前に帰ってきたの、サンマイトからココに」

セレンが人差し指で下を指差す。

ルージュがその場にへたり込む。何やらぶつぶつと呪文のように繰り返して、ルージュを、セレンは困ったように見下ろし、

「じゃあ、陛下、ラッセル様。封印洞、通らせていただきますよ」

朱と黒のマフラーを引っ張って踵を返した。当然ながら首が絞まったルージュは蛙が潰されたような声をあげ、動かなくなった。

そのまま気にせずに出て行こうとするセレンをラッセルが呼び止める。

「待たんか！ おまえ、今は真昼間だぞ！」

「直接の太陽光じゃなければ平気ですよ。きちんとフードもかぶっていきますからご心配なく」

「万が一戦闘になったらどうする？」

「大丈夫です。なんの為のルージュですか」

セレンは笑顔で全く役にたたなそうなルージュを指差す。

「しかしだな」

「ただ、待っているのは性に合わないんです」

「ラッセル。行かせてあげなさい」

女王が目を閉じてラッセルに言う。

ラッセルは納得が出来ないといった表情を浮かべ、セレンと女王を見比べた。

「どうせ止めても無駄でしょう」

「はい」

フードの隙間から笑みを見せ、セレンは即答した。同時に、女王の横から聞こえる盛大な溜息。

「おまえが死んだら悲しむ奴がいるんだぞ」

「分かっています。ユティを一人にはしません。クレアにも……二度も同じ悲しみを味合わせることなんてしない」

そう言い切る瞳は、力強く優しい。ラッセルはすうっと息を吸い

込み、ゆっくりと吐いた。

「――頼んだぞ」

セレンはフードを取り、胸に手を当てて深く頭を下げた。

「御意」

そしてすぐに被りなおし、再びルージュを引っ張って謁見の間から姿を消した。

「セレンめ……一体何をしようとしておる」

「……私達の知らないところで、何かが動いているようですね」  
騒々しい二人組みが去った後の空間は、寒気がするほど静まり返っていた。

※

ペターニに設けられた病院の一室、静かに開けられた扉にネイビスは立ち上がった。

そこから顔を出したのはペターニでは見慣れた女医。

ネイビスを手招きをして室内へと迎え入れ、女医は部屋から出て行った。

去り際に、

「応急処置が早かったおかげで命に別状はないですが、安静にと、言い残して。」

ネイビスは清潔なベットに横たわるシレーネを見下ろし、困ったように眉を下げた。

「……ったく。こんな大怪我してんのになんて顔してんだよ。おま

えはさ」

シレーネの寝顔は、まるで良い夢でもみているかのように安らかなものだった。

口元には微かな笑み、寝息も健やかだ。

ネイビスはシレーネの強く握られた拳をそっと開き、苦笑した。

「会ったんなら連れて帰ってこいよな」

一本の白銀の髪を再びシレーネに握らせたネイビスは、軽く手をあげて病室から立ち去った。

扉を閉め、壁際に据え付けられた椅子に腰掛ける。

『土』の4級構成員でありながらネイビスお気に入りの師団員であるアイーダから、シレーネが大怪我をして病院に担ぎ込まれたという報告を受けたネイビスは急ぎ病院へ向かった。

そこに居た医師に話を聞くと、シレーネを運んできた人物はフードを深く被って顔は見えなかったが、どこか聞き覚えのある声の男性だったという。

そして、医師がシレーネの治療に忙しく動いている合間に、男は姿を消していた。

「フードを被った男、ねえ」

両手を椅子について、天井を仰ぐ。

正直な話、ネイビスは頭を使うのは苦手である。だから報告書類も全部アイーダにやらせてきたし、デスクワークをしたことはほとんどない。

そんなネイビスが何故文武両道を目指す師団員になれたのは、いまだに本人すら疑問に思うが、それを考えても仕方のないことだ。

ネイビスは腰を上げると、ぐっと全身の筋肉を伸ばした。

「あーあ……俺もおまえくらい頭良ければ良かったのになあ」

視線を横に向ける。

そこに佇む空色の髪の青年は、柔らかな笑みを浮かべた。

「そんなネイビスは見たくないな。気持ちが悪くてかなわないよ」

「そうだな。腹黒くないおまえくらい気持ち悪いな……アゼル」



久方ぶりに会う親友に、ネイビスはにかつと笑みを浮かべる。

アゼルは苦笑混じりに溜息を吐き、肩を竦めた。

「シレーネさんがこんなことになって、愛しのクレセントは行方不明だっていうのにえらく余裕だね」

「ん、ああ。悩み事が一つ減ったからな」

「悩み事？ ネイビスが？」

「クレセントは、偽者なんかじゃない。俺はそう信じることにした」  
シレーネのあの顔が、そうだとネイビスに語りかけてくるのだ。

「根拠は……あるわけないよね」

ネイビスは頷く。

そしてアゼルに向き直って手を顔の横で小さく振った。

「なんにせよ、お疲れさん。早速で悪いがシランドへ行くぞ。賊二名、何が何でも捕らえろとさ」

「やれやれ、人員不足も深刻だね。大変だけど今年の入団試験も去年のようになるのを祈るしかないか」

「……それだけは御免だ」

※

「ここ、は」

目を開けて一番に目に入ったのは、見慣れぬ天幕。だが、どこか懐かしい天幕だった。

クレアは僅かに痛む頭を抑えつつ、上体を起こして辺りを見渡す。  
天幕付のベットに豪華なシャンデリア、調度品も質の良い物ばかりの、まさに貴族の屋敷であった。

ただ、違和感を感じたのは、窓に付けられた鉄格子と、ドアの外  
の気配。見張りが居る。だが、生物の気配ではない。

「機工兵……かしらね」

だんだんと冴えてきた頭が弾き出す記憶。

ヴァンを追って入り込んだ森の中でヴァレリアの蠍と名乗る仮面の男に襲撃を受け、そして……。

「――クレセント」

あの状況から判断すれば、クレセントはドールマスター側の、グリーテンの人間なのだろう。

「やっぱりスパイだったってことかしらね」

だが、そうなるともたいくつも疑問点が浮かび上がる。それを全て解決する道は、今のクレアには一つしか思いつかない。

（クレセント本人が、自分の意思で裏切った……そう考えるしかないのだけど）

頭に浮かぶのは、意識を失う間際に見た悲痛な表情と、懺悔の言葉。

元々の仲間を裏切ったことに対するせめてもの謝罪だろうか。しかし、クレアは違うと感じていた。

（考えてても仕方ないわ。とりあえずここから逃げないと）

クレアはドアにピタリと張り付き、外の気配を窺う。確かに機工兵らしき気配はあるが、数は多くない。

ここまで軟い見張りだと逆に拍子抜けするが、かといってこれ以上嚴重になられても面倒である。

一つ大きく深呼吸をすると、クレアは木製の扉へ手を翳した。

「炎よ……」

強い光を放つ銀の紋章が浮かぶ。その力を感知したのだろうか、扉の向こうからガチャリと機構兵が動く音が耳に入る。

だが、もう遅い。

「扉ごと吹き飛びなさい。イラプション！」

直後、クレアは後ろへと飛びのく。ボコリと小さな音を立てて現れた火の泡は瞬く間に扉を中心とする一帯を飲み込んだ。

溶岩によって溶かされた扉の向こうでは、人型の機工兵と大型の

機工兵がその鉄の塊を無残な形に変えながら溶岩に飲み込まれている。

クレアはそれを見て、背筋が冷えていくのを覚えた。

「……アレが何体もいるんじゃないでしょうね……」

アレとはもちろん犬型の機工兵である。

クレアはがっくりと肩を落とすと、今だ煮えたぎる溶岩を凍らせて部屋の外に飛び出した。

部屋を出て最初の曲がり角に張り付き、壁越しに左右を確認する。敵らしい気配はない。窓から見た景色で、現在地は二階であることが分かっている。飛び降りるくらいはわからないが、下に機工兵が待ち構えているとも限らない。慎重を期さねばならなかった。

そして、可能ならば出来るだけ多くの情報を手に入れておきたい。ヴァレリアの蠍と名乗る男が何をしようとしているのかは検討もつかないが、少なくともクレアの勘はそれを良い事だとは思わなかった。

「……そういえば、ここって」

クレアは漸く気がついた。目を覚ましたときから感じていた違和感。見覚えのある調度品やシャンデリア。この蒼い絨毯の敷き詰められた廊下。

「どうりで、見覚えがあるはずね……」

クレアはほんの一瞬悲しそうな表情を見せると、すぐに顔を引き締めた。

この洋館の場所と見取りは理解した。脱出するのは簡単である。おそらくヴァレリアも知らない秘密の抜け道があるのだ。

となれば、そこに向かいつつ情報を集められるだけ集めて退散するのが好ましい。長居は無用。何も得られるものがなくとも、後々直接ヴァレリアの蠍を捕らえて吐かせればいい。

クレアは慎重かつ迅速に進んだ。

途中何対か人型や犬型、壁に据え付けられた機械を発見したが、そのどの視界にも入らないように進んだ。

不思議なことにここに居ると踏んだヴァレリアの蠍やクレセントに気配はせず、特に障害もなかった。若干拍子抜けをしていると、ふと通り過ぎた部屋から人の声が聞こえた。呼ばれている。そう、感じた。

クレアは部屋を出る直前に見つけた、無用心にも部屋の隅に丁寧に置かれていた愛刀を握り締めると、ゆっくりと扉を開ける。

背中が壁に貼り付けたまま、首だけを動かして解き放たれた部屋を中を覗き見る。

真っ暗だった。見渡す限りの黒。これは部屋の明かりがないだけでなく、壁自体も黒く塗りつぶされているからだろう。なかなか闇に目が慣れることはなかった。

クレアが辺りを警戒しつつも中に入ると、入り口からは死角になった場所で、ぼんやりと光る薄緑の物体があった。

慎重に、音を立てずに、闇に紛れて近づく。まるでネルのようだとクレアは内心苦笑した。

漸く緑の光の正体が分かったと同時に、クレアは息を呑んだ。

光の正体は透明なカプセル。シャロム邸の地下空間で見たのと全く同じタイプのものである。

違ったのは、それに微かに泡立つ水らしきものが入っていたこと。奇妙な音をたてていたこと。

そして……。

『こんにちは、可愛いお嬢さん』

※

「これが――セフィラ」

「そうだ。お前は見るのは初めてか？」

小柄な影は頷く。それほど大きくない台座の中央で、ゆらゆらと水に浮かぶ銀色の球体。

聖王国シーハーツが誇る至宝、聖珠セフィラ。

セフィラから流れる無限の聖水がシランドを満たし魔物を避せつけることのない神聖な地にし、周辺の土地は緑に溢れた肥沃な土地になっている。

それほどまでの力を秘めたセフィラは、歴史上幾度となく奪取されそうになったという。その最たるは三百年前の起きたグリーンテンの進攻であるとされている。

そして、今も。

小柄な影がセフィラへと手を伸ばすが、

「そこまでだ！」

音を立てて開け放たれた扉と、聞こえてきた声に、小柄な影は小さく笑みを浮かべてセフィラから手を引いた。

くるりと振り向き、声の主を確認する。

そこに構えるは、巫女の国の蒼き騎士と竜の国の漆黒の騎士。

「意外と、早かったですね」

「まさか、その声っ……!？」

小柄な影が、フードを取る。

さらりと白銀の髪が流れ、虚ろな光を放つ翡翠の瞳が薄く開かれる。

口元に浮かんだ笑みはとうに消え、浮かぶ表情は冷淡。

フェイトは思わず手に持った剣を落としそうになるのを、寸でのところ堪えた。

顔が露になった女性は、その虚ろな瞳をフェイトに向けた。

「そのまさか、です。フェイト様」

見紛うことはない。普段と何ら変わらない、出会った頃と全く同じ瞳をしたクレセントが、そこにいたのだ。

「クレセント……どうして君が!？」

「その質問には、私が答えよう」

今までクレセントの後ろで沈黙を保ってきた長身の陰が、一步前へ進み出た。

フェイトも、そしてアルベルも、その耳を疑う。それはあまりにも聞きなれた声だった。そして、今聞こえていいはずがない声だった。

「少し、久しぶりな感じがするな。フェイト君、アルベル」

長身の影が深く被られたフードを取り払う。

金の隙間から見える深い紅が、優しく微笑んだ。

アルベルは思わず金髪の男に掴みかかっていた。体が抑えられなかった。頭が信じようとしなかった。

そしてそれは、フェイトも同じ。

今度こそ手にした剣は大理石を鳴らし、それが奏でた虚しい音がその場にいる全員の耳へと響く。

「ヴァン……君まで？」

「どういうつもりだ？」

フェイトの呻きにも似た声とアルベルの低い唸りが、静かな大理石に飲み込まれていく。アルベルの眼光を真っ直ぐに受け止めたヴァンは、優しい瞳を一転させて冷笑した。

「我等が願いはただ一つ」

低い、まるで海の底から這い上がってきたような声。

ヴァンはアルベルの手を振り払うと、後ろに下がってクレセントと並んだ。

「全てを……この手に取り戻すためだ」

## 偽りの傀儡

「全てを……取り戻す？」

ヴァンは冷徹な表情を崩さないまま頷く。

「フェイト君、アルベル。君たちは聞いたのだろうか？ シーハーツの犯した禁忌を」

「強い施術士を造り出す為に、沢山の施術士や王家の血筋を使ったこと。そしてその人こそが、君とアルベルの母親だということか」

「そうだ。そんなくだらない研究のために母さんや罪のない人たちまでもが犠牲になった。そして、こんなことをした愚か者共は、今も裁かれることもなくのうのうと生きている！」

ヴァンは拳を握り締める。

アルベルは鼻を鳴らして失笑した。

「ハ、だからなんだ？ 今貴様がやっていることとなんの関係がある？」

「その通りだ、ヴァン。セフィラを奪って一体何になるというんだ？ それに、どうしてクレセントまで」

フェイトはヴァンからクレセントに視線を移す。クレセントは何も語らない。フェイトの視線も、まるでないもののように無表情だった。

ヴァンは吐き捨てるように笑うと、左手の袖を捲くった。涼しげな音と共に、紫の腕輪が姿を現す。

「フェイト君、君の質問に答えよう。クレセント」

クレセントもヴァンと同じように袖を捲くる。

「それは……」

「そうだ。アルベル」

クレセントの腕で光っていたもの。それは、アルベルやヴァンが持つものと全く変わらない、紫の腕輪だった。

「分かるだろう？ この意味が」

誰も答えない。

フェイトも、アルベルも、まるで自分の影が縫いつけられてしまったかのように、その場から動けない。

静まり返ったカナンの奥地で、ヴァンの声だけが虚しく響いた。

「――このクレセントこそ、母と共に研究者の手に落ち、死んだとされていた俺達の妹だ」

三本の輪が連なった三つの腕輪が、セフィラから聖水の音と共に涼しげな音を響かせた。

※

「アンタさ、体治ってないんでしょ？　大丈夫なの？」

「ハハ、相変わらずルージュは優しいね。心配してくれるなんて嬉しいな」

首にくっきりとマフラーの後を残したルージュと、黒い外套を羽織ったセレンはややゆっくりとした速さでカナンの奥地、セフィラの安置所を目指していた。

元々運動能力が高いセレンとしてはもう少し早く走っても体に負担はかからないのだが、ルージュの気遣いを無下にしたくはなかった。

「そのおちゃらけた性格は変わらないのね。で、何がしたいのよ？」  
「何がって？」

「とぼけないで。ぶっちゃけこのまま行っても役に立たないアンタが行くっていうんだから何かあるんでしょ？　足手纏いになっても行きたい何かがある」

ルージュの真剣な表情に、セレンは目を丸くしてから声を立てて



笑った。

「嫌だな。君は変なところで鋭いんだから」

「あ、アンタね……」

「別に深い意味はないよ。ただ、確かめたいだけ」

それ以上は何も言わない。ルージュも聞かない。

セレンの顔が、笑っていたから。

「——はいはい。何も聞かないわよ」

この笑顔を見せたセレンには、何を行っても無駄なのだ。

ルージュは一つ溜息を吐き、顔を前に向けた。

まだカナンの半分も来ていない。所々に倒れる兵士や施術士達を無視し、前へ進んでいく。

「助けなくていいの？」

「平気よ。全員気絶してるだけ。分かってるくせに聞かないで」

「恐れ入るね」

「でも、傷つけてないってことは——」

「ダメだよ、ルージュ」

言葉を途中で遮られたルージュはセレンを振り向く。

そして、思わず息を飲んだ。セレンは今まで浮かべていた微笑を一切感じさせない表情で、ルージュを見ていた。

「もちろん、その可能性も捨てきれなくはない。けどね、彼はセフィラを奪うつもりなんだ。迷いなんか持ちっちゃいけない。戦わなくちゃならないかもしれないんだから。いくら君の大切な幼馴染でもね」

「セレン、気付いて……」

「分かるよ。ラッセル様の口振りと君の焦り方を見れば」

ルージュは齒を食い縛った。

セレンの言う通り、確かに少しでもこの事実を否定するものが欲しかった。違うと信じたかった。クレアには厳しいことを言ったくせに、まだ諦め切れていない自分に嫌気が差した。

「私たちは……身内ですら疑わなきゃいけない所にいる」

自分に言い聞かせるように、呟く。

セレンは何も言わず、ただルージュの後を追う。

「大丈夫……私は、いざとなったら迷わない。でも——」

「……」

「信じてる……アイツを。クレアが信じたんだもん。私が信じてやなくてどうするのよ」

そう言って、無意識のうちに速度を速めて走り出したルージュの後ろで、セレンは困ったように笑うのだった。

※

「クレセントが……君——君たちの妹？」

やっと喉から搾り出した声。フェイトは口元が引きつるのを感じた。

頭を抱え、手を出す。少しでも考える時間が欲しかった。頭の中がぐちゃぐちゃに掻きまわされたように、何もかもが噛み合わない。横目でアルベルを見ると、流石に何を言っているのか分からない表情を浮かべていた。

こんな状況でさえ、クレセントは顔色一つ崩さない。フェイトは、それを不気味に思ってしまった。

「後々その存在が知られても構わないように、クレセントは計画の中枢にいたシャロム夫妻の子供として育てられた。そして、研究が打ち切られたとき、クレセントはそのままシャロム家に引き取られた」

「そして六年前。私はヴァンと会いました。その時のヴァンは私が妹など知る由もありません。私も、今更自分が妹だと名乗る気はあ

りませんでした」

クレセントが、初めて口を開いた。

全く同じ声のはずなのに、まるで別人の声のように聞こえてしまい、フェイトは手を頭から手を離れた。

「だが、俺は一人の男と出会い、全てを知った。絶望したよ。死んだと思っていた妹は生きていて、あの忌々しい研究者共の手の中いると思うと、いてもたってもいらなかった」

ヴァンの顔が痛苦に歪められる。

「俺は最初、クレセントさえ解放できればよかった。だが、そうもいかなかった」

「……」

「俺たちにとって掛け替えのないものが、あちらの手に落ちていた。それと研究者達が犯した実験の物的証拠を渡す代わりに、奴等が要求したのは――セフィラ」

ヴァンが後ろを振り返り、セフィラを見つめる。変わらない輝きを放つ銀の至宝は、ただ揺らめいているだけ。

フェイトは落とした剣を取った。ヴァンと、そしてクレセントが臨戦態勢に入っただのが感じ取れたからだ。

「つまり、セフィラを手に入れ、奴に渡すことで、初めて俺の望んだものの全てが手に入る」

剣の柄に手をかけ、ヴァンが姿勢を低くした。クレセントも腰から長さの異なる二本の剣を抜き、正眼に構える。

「そこを通してくれないか、アルベル？」

「あ？」

「クレセントはおまえにとっても妹になるんだ」

相手が普通の人間だったのなら、迷いも会っただろう。

だが、

「関係ねえよ。俺はここに戦いにきたんだ」

アルベルはスラリと刀を抜き、ヴァンの真正面に突きつけた。ヴァンは笑う。効果があるとは期待していなかったのだろう。

「一応聞くが……」

「僕も黙って通すわけにはいかない。今の話を聞いたのなら尚の事」  
「そうか。だが、セフィラは渡してもらおう」

ヴァンの体から、いまだかつて向けられたことのないほど強烈な殺気が放たれる。

並ぶクレセントは、殺気はおろか戦意すら感じられないが、フェイトはクレセントの二つ名を思い出し、身構えた。

『音無しの風』。殺気も、気配すら感じさせない彼女は、一体何を思い戦っているのか。

復讐のため？

フェイトはそうは思えなかった。

「おい、フェイト。俺はヴァンをやる。おまえはあの女だ」

「……おまえ、やっぱり気にしてるんじゃないか。まあ、そりゃ妹とはやりづらいよな。わかるわか——」

「黙れ、クソ虫」

眉間にピツタリと向けられた刃と殺気に、フェイトは両手を上げて頷く。

アルベルは舌打ちをして刀を下げると、小さく、耳を済ませていないと聞こえないような声で呟いた。

「殺すんじゃねえぞ」

「当たり前だろ。おまえこそ殺さないでくれよ」

「そんな余裕こいてられる奴じゃねえけどな」

刀を一度軽く振り、アルベルはヴァンを見る。

真紅の瞳が交差した瞬間、刃の打ち鳴らされる音がフェイトの鼓膜を叩いた。

そして、フェイトも一つ溜息を吐いて剣を上にも構える。同時に、刃と刃がぶつかる感触。フェイトは小さく笑った。

「甘いよ、クレセント」

フェイトの頭上で剣を振り下ろしたクレセントが、僅かに口元を上げた。

「あの研究を公に晒した所で、国が暴走するだけだぞ！」

フェイトが渾身の力で剣を振り下ろす。

「では、あの所業を見逃せと？」

クレセントはそれを半身になって避け、剣を振った。

それをバックステップでかわしたフェイトは、そのまま距離をとる。

「違う！ 罪は必ず償わせる！ だが、君たちは手順を踏まずにやろうとしている！」

「手順とは？」

「証拠を手に入れたところで、国家反逆罪の罪を被った君たちはどうやってこの事実を明らかにする？ 手当たり次第にばら撒くしかないだろう？」

「……そうですね。その方法もあります」

クレセントの手元から、数本のダガーが飛ぶ。だが、フェイトには当たらず、後ろの壁に突き刺さるだけだった。

「国内で暴動なんかが起こったら、それこそ他国に付け入る隙を与えるだけじゃないか！」

「その通りです」

「クレセント！」

フェイトは叫んだ。クレセントは一瞬悲しそうに眉を下げ、顔を伏せた。

「ですが、私にはどうしようもないのです」

「それはどうい——っ!？」

今度こそフェイトの眼前に投げられたダガーをフェイトは寸でこのころで避けた。

目の前にあるのは、いつものクレセント。無表情な翡翠の瞳が、フェイトを見つめていた。

「これ以上話すことはありません。いくらフェイト様といえど、私を傷つけないようになどと甘いことをお考えのようでは――死にますよ」

クレセントの手がフェイトに向く。

施術が来る。

そう感じ取ったフェイトが詠唱を済ませる前に駆け出そうとした時、

「ぐっ！」

背中に鋭い痛みが走った。手を伸ばせば、手にべったりとこびり付く赤。

鋭い刃で切り裂かれたような痛みが、背中に走った。

「どうして後ろから……まさか!？」

後ろを振り向く。最初にフェイトに当たらずに投げられたダガーが、淡い緑の光を放っている。

「そうか……武器に、施紋を」

施術は直接体に施紋を刻まなくても、行使することはできる。だが、術者との距離に威力が反比例するため、一般的には用いられていない。

実際にあの至近距離で放たれたというのに、傷はそこまで深くはないようだった。

しかし、この傷は大きい。

フェイトは顔を顰め、背中に力を入れて立ち上がった。

「参ったね……」

「やるじゃねえか! ヴァン!」

「伊達に訓練してきたわけではないさ」

フェイトとクレセントが居るところとは少し離れた場所。ガチガチと音を立てて刀と剣がぶつかり合っていた。

クレセントとフェイトが小技の出し合いだったの比べ、こちらは真っ向勝負。剣と刀の切り合いだった。

無論、セフィラを氣遣って派手な技が出せないのが一番の理由ではあるが。

「なあ、アルベル。おまえは……分かってくれないのか？」

罅迫り合いをしながら、ヴァンが言う。ヴァンは両手を使っているというのに、アルベルは片手だ。だが、それでもアルベルは一向に引かない。左手の義手でヴァンを刺す事も出来るというのに、それをしようとしなかった。

「ハ！ 生憎だが俺は興味ないからな！ 楽しけりゃそれでいいんだ、よ！！」

刀を振って、ヴァンの剣を振り払う。

「てめえもてめえだぜ、ヴァン。大事なもんがあるなら自分で奪い返せ。言いたい事があるなら、てめえの口で言え！」

「……」

「なに得体の知れない奴の言いなりになってんだよ？ てめえはそんな腑抜けた奴じゃねえだろ！」

そうアルベルが叫んだのとまさに同時だった。

セフィラ安置所の扉が開かれ、二つの人影が姿を現す。

「人質を取られているんだろう？ 君達の母親、実験番号017を」

コツコツと大理石を鳴らす靴音。

どこか悲しい表情を浮かべたシーハーツの天才と、朱色の髪を靡かせた女性が、そこにいた。

※

クレアはゆっくりと瞬きをした。

目をごしごしと擦り、もう一度それを見て、再び目を逸らす。

『あらあら、そんなに信じられない光景かしら？』

水が入ったカプセルの中から楽しい声が漏れる。

信じられない何もない。そこに居たのは、紛れもなくヒューマンの女性だ。水の中で生きていることはおろか、喋るなど到底不可能なはずである。

緑がかった銀の髪が水の中をゆらゆらと泳いでいる。緑がかった見えるのはこの光のせいであるから、本当の色は白に近い銀だろう。

「白に近い……銀？」

クレアははっとして女性を見つめた。

瞳こそ真紅だったが、白銀の髪にこの顔。そう、そっくりだったのだ。彼女に。

「あなたは……まさか」

『もしかして私を知ってるの？ まさかねえ』

女性が笑う。水泡がぼこりと生まれ、消えていった。

クレアは背筋をぴんと伸ばして、女性を見つめた。

「失礼ですが、あなたは聖王国シーハーツがご出身ですか？」

『あら、正解』

「そして、王家の血を引く第三の王女」

『……どうやら、あなたは事情に詳しそうですね』

女性の顔からふざけたものが一切消える。すっと細められた真紅の瞳は、畏怖さえ覚えるほどの深い紅。

同時に放たれる鋭い殺気にクレアはゴクリと喉を鳴らせると、今にも逃げ出しそうな震える足に鞭を打ってその場に縫いとめた。

暫くの沈黙。女性は急に笑い出した。

『ふ、あはははは！』

「え、あ……はい？」

『ふふふ。殺すつもりで睨んだのに逃げないなんて、大した子ね。』



あのグラオですらアルベルを盾にして逃げたというのに』

酷い話だ。

だが、これでクレアは確信した。

「お初お目にかかります。レイナ様。聖王国シーハーツがクリムゾンブレイドの片翼、クレア・ラーズバードと申します」

『ラーズバード……あの豪腕アドレーの娘、でいいのかしら？ それとも分家の方？』

「いえ、相違ありません」

クレアは首を横に振る。レイナは満足そうに頷いた。

『なるほど、あの方の血をよく受け継いでいるみたいね。あの方の噂と同じ、芯の強い瞳をしているわ』

「あ、ありがとうございます」

喜ぶべきか迷うところではあるがとりあえず素直に礼をいうクレア。

『それで、そのシーハーツの重鎮が何故こんな場所に？ ヴアレリアを捕らえに来たのかしら？』

「……」

『あ、逆に捕まっちゃったんだ』

ぐ、とクレアは押し黙る。本当のことを言われているので言い返すことも出来ない。

一つ咳払いをすると、レイナを見上げた。

「無礼を承知でお尋ねします。グラオ・ノックス卿から、あなたは亡くなったと聞かされたのですが」

『そうでしょうね。ヴァレリアが研究者達にそう流したのだから』

「何があったのか……お聞かせ願いたいと思います。それと、ご存知でしたらクレセントについても」

『……いいわ。何処から話せばいいかしらね……あなたは研究のことを知ってるみたいだから。その後からかしら』

「はい」

『ああ、その前にあなたの疑問に一つ答えましょうか。クレセント

は誰か、これはすぐに答えられるわ。あの子は……』

※

「セレンにルージュ？　どういうことだ？　ヴァンたちの母親は死んだんじゃない……」

フードを取り払ったセレンは、フェイトの質問には答えずに一度微笑むと、ヴァンとクレセントを交互に見た。

「ヴァン君、お姫様。やっと分かったよ。君たちがどうしてグリーテンに協力しているのか」

「グリーテン！？」

フェイトとルージュが目丸くし、ヴァンとクレセントが険しい表情を浮かべる。

フェイトは一瞬セレンの言う『お姫様』に頭を悩ませたが、クレセントのことだろうと理解した。

「セレン・ウォン。あなたは一体どこまで掴んでいるのですか？」

「そうだね。君たちの過去、君たちの取引相手。そして」

セレンがクレセントに微笑む。

「――君の正体」

クレセントが息を飲む。

「それを何処で知った？　俺たちの母親が生きていることもクレセントが俺たちの妹であることも、誰にも知られてないはずだ」

いつの間にかアルベルとの交戦を止めていたヴァンが、クレセントを庇うようにセレンの前に立ち塞がった。

ヴァンの後ろでは、クレセントが驚きを隠せない様子でセレンを見ていた。

「君たちの過去、お姫様の正体についてはきちんと調べたよ。母親と取引相手は勘だったけど……ビンゴだったみたいだね。クレアを裏切ってまで君が動く理由なんて、それくらいしか思いつかない」  
セレンはゆっくりとヴァンに近づく。

フェイトはそれを止めようとしたが、ルージュに手で制された。  
「グリーテンのほうは結構確信があったよ。セフィラを手にして尚且つ国内に混乱を招く。アーリグリフと平和条約を結んだ今、得をするとなればグリーテンくらい、なものだね？」

セレンはにっこりとした笑みをヴァンに向ける。

ヴァンは、流石はシーハーツの神童、と両手を上げた。

「その洞察力……感服する」

「セフィラという力を手にしたら、グリーテンはシーハーツに攻め込むつもりかもしれない。それでも君はいいの？」

冷たい瞳でセレンを見下ろしていたヴァンは、漸くその重たい口を開いた。

「心配ない。奴にセフィラを渡すつもりなど、毛頭ない」

「ヴァン？」

クレセントがヴァンを見上げる。ヴァンはクレセントの頭を撫でると、微かに笑った。

「奴は俺が殺す。大丈夫。おまえも母さんも、俺が守るから」

ヴァンはクレセントの頭から手を離すと、セレンに向き直った。

このとき、クレセントの瞳が鋭く細められたのには、ヴァンは気付かない。

「その為にも、セフィラが必要なんだ。これを渡して油断したところを殺す」

束の間の沈黙。それを破ったのは、驚くほど穏やかな声だった。  
ヴァンが、クレセントが、セレンが、ルージュが、アルベルが自らの耳を疑った。このような緊迫した空気の中、その声だけは、優しかった。

「陛下に申し出よう」

セレンとヴァンがフェイトに振り向く。

そこには、剣を鞘に納めたフェイトが、やはり穏やかな笑顔で立っていた。

「僕も協力するよ。だが、約束してくれ。セフィラを持ち出すのは陛下の許しを得てからということ。それと、その取引相手は殺さずに捕らえること。研究の証拠を無闇にばら撒くようなことはしないこと」

「ちよっと、フェイト本気!？」

ルージュがフェイトを振り返る。

「本気だよ、ルージュ。確かにヴァンたちのやったことは犯罪だ。でも、今僕等の敵は誰だい？　そこにいるヴァンとクレセントか？　違うだろう？」

その言葉は、驚くほどアツサリとルージュの中に浸透していった。そう、これが、ルージュの望んだことでもある。

「……そうね、違うわ」

ルージュも言い切る。その顔には、僅かな笑みすら浮かんでいた。やはり、クレアは正しかった。ヴァンは堕ちてはいなかったのだ。「ヴァン、君の取った方法は間違ってる。でも、一つ確かなことがある」

フェイトがセレンの横に立ち、ヴァンに手を差し出す。

「僕らは協力出来る。そうだろう？」

「……だが、俺は」

「あー、もうイチイチ細かい男ね！　いって言ってんだからいいじゃないの！　ま、後でクレアからとびきりきついお仕置きが待ってるけどね」

ルージュがヴァンの肩に手を回して、こめかみに拳を押し付ける。

「ルージュ……そうだな、クレアにも謝らないといけない」

ヴァンがフェイトの手をしっかりと握り、離す。

「よし。じゃあすぐにでも陛下の所に戻ろう」

「わっ、ちよっとフェイト」

フェイトがセレンの背中を押して歩き出す、ルージュ、アルベルもそれに倣った。

ヴァンはフェイトの背中に「ありがとう」と呟き、クレセントを振り返る。

が、

「さあ、俺たちも行こう。クレセン……」

脇腹に何かが深く食い込み、ヴァンはその場に膝をついた。

「やっぱり、裏切るつもりだったのですね。ヴァン」

冷徹な口調。ヴァンを見下ろす瞳もまた、冷え切っていた。

時間が経つにつれて焼けるように熱くなる傷口。ついに体を支えきれなくなったヴァンはその場に倒れこんだ。

その音に反応した面々が振り向き、表情を固まらせる。

「ヴァン!？」

「てめえ、どういうつもりだ!」

「……ち」

フェイトがヴァンに駆け寄り、アルベルが刀を抜き、セレンが悔しそうに顔を歪めた。

クレセントは剣についた血を払うと、セレンにその剣を向けた。

「セレン・ウォン。あなたも迂闊でしたね。私の“正体”を知っているのなら、こうなることも予想出来たでしょう?」

「懐柔されているとは思っていなかったよ。君は君の意思で動いていると思っていた」

「いいえ。私の意志です。ただ、ヴァンとは目的が違っただけで」  
坦々と進められる会話に、溜まりかねたルージュが食い込む。

「ちょ、ちょっとどういふことよ!？ クレセントの正体って、ヴァンやアルベルの妹ってことじゃないの!？」

「……このまま事が済むなら黙っていようと思っていた。出来るなら君の口から話して欲しかったからね。でも、そうもいかないみたいだ」

セレンの口調が厳しくなる。

真正面に剣を突きつけられているというのに、セレンは表情一つ崩さない。たじろいだのは、むしろクレセントのほうだった。

だが、それを決して表に出すようなことはしない。ここで焦ったら負けだ。

「いいかい、みんな。ここにいる彼女は、クレセント・ラ・シャロム——いや、第三の王女の娘本人じゃないんだ」

「やっぱりグリーテンのスパイってことか？」

フェイトはヴァンの横腹を彼の巻いていたマフラーで縛りながら言う。

「違う。本人じゃないけど本人。そう言ったほうが正しいのかもしれない」

「ちょ、ちよっとセレン。意味わかんないわよ」

ルージュが頭の上にハテナマークを浮かべて言う。

クレセントの剣を持つ手に力が入り、セレンの額を傷つけた。だが、セレンは一步も引かない。額から流れ、顎にまで伝わった血を拭き取る事もせずに口を開いた。

「フェイト、君なら分かるんじゃないのかな？ こんな技術シーハーツには存在しない。あるとすればグリーテンだ」

フェイトは体の芯が急激に冷えていくのが分かった。頭の隅に、何かが点滅している。

本人だけど、本人じゃない。瓜二つの姿。シーハーツでは確立されていない“技術”。

フェイトの時代ではとくに確立されているが、それは非人道的とされ人に用いることは今では禁止されている技術。

一人の人間から、同じ遺伝子を持つ新しい個体を造り出す、生命への冒瀆。神への反逆。

それは……。

「――クローンか……っ」

## Message

クローン。そういつてしまえば一言で片付けられるが、その種類は大きく二つに分けられる。

一つは植物クローン。これは遥か昔から生まれていた技術で、おそらくシーハーツでも技術としてあるだろう。挿し木と呼ばれるクローン技術がポピュラーな例である。

その植物のクローンに関しては、特に規制というものはない。問題はもう一つ。

動物のクローン。その中でも取り分けヒトクローンである。発表当初問題になっていた、ヒトクローンは寿命が極端に短いという欠点も解決されながらも、人道的理由で禁止されている。

クローンという自分とまるっきりそっくりな固体が出来ると思われがちであるが、実際はそうではない。

仮に自分のクローンを作ろうとした場合、核移植した細胞を仮親の子宮へと着床させ、通常の子供と同じように出産させるため、年齢に違いが出る。外見上は確かに一卵性双生児のように似てはいるが、指紋など細かいところは後天的な影響が出るものとされ、やはり全く同じということはない。

そして、クローン技術が最も反対されている理由。

それは、誰かの代わりとして、クローンを生み出すものがあるということ。

遺伝子が同じというだけで、クローンはその人ではない。性格も違えば、考えも違う。

だが、クローンを望んだ人は、そうは思っていないのだ。死んだ人の代わり、恋人の代わり。優秀な人間だから、それを量産する。クローンを一生命体として認識せず、まるで代わりのきく人形のように扱うことがしばしばだ。

それゆえ、銀河連邦法ではヒトクローンを禁止している。とはい



え、その技術が確立されている以上、完全になくなるということではない。

組織の重鎮のクローンが作られ、影武者として立てられる。暗殺者が確かに殺したはずなのに、次の日には堂々とテレビに出ていたという話は少なからずあった。

まるで使い捨ての道具である。誰かの遺伝子かた生まれたというだけで、一つの生命体として認められない。

人の業で生み出された悲しい生命体。それこそが、クローンなのである。

「馬鹿な……クローン技術がこんな未開惑星にあるはずが……」

困惑したフェイトの言葉に、セレンは鋭く目を細める。

フェイトが思わず口にした単語をしっかりと頭に入れ、フェイトを目だけで見た。

「クローン、っていうんだ。同一人物を作るなんてね。最初に研究資料を見たときは理解するのに時間がかかったよ」

「……」

「何か、申し開きはあるかい？ クレセントの複製人間さん」

セレンの威圧的な瞳を、クレセントは悲しげな瞳で見つめ、それからすぐに自嘲めいた笑みで彩った。

初めてみる表情。クレセントはセレンから剣を引くと、軽く跳躍して後ろへ下がった。

浅緑色の外套をバサリと脱ぎ捨て、剣を鞘に仕舞う。

そして、おもむろに肩の所で切り目が入った服の袖を、その切り目から一気に破り捨てた。布が千切れる音。誰もが、クレセントの行動を理解できなかった。

パサリと袖だった布が大理石に落ち、白く細い腕が露になる。

手首にはめられた紫の腕輪。肩の丁度服の切れ目からは見えない場所に刻まれた『??』と描かれた刺青。

クレセントは目にかかった長い前髪を払うと、紫の腕輪をヴァンの上へ投げ捨てた。

「あなたの仰る通りです、セレン・ウォン。私はクレセント・ラ・シャロムの、十三番目の複製人間です」

※

「クレセントが……複製人間？」

クレアは顔は首を傾げた。言葉の意味が理解できなかったのだ。

『そう。元々私を使う前から研究は行き詰っていてね。クレセントが生まれたときには、最早何の意味もないことは分かりきっていたの』

「……」

『そこに突如現れたのが、ヴァレリアの蠍。当時、まだ研究に携わっていたのは、僅か数人。その中にはシャロム夫妻も含まれていたけど、彼らは場所を提供しているというだけで、実験には非協力的だった。そしてヴァレリアは研究者たちにある技術を提供したわ』

「それが……その複製人間なのですか？」

『そう。複製人間っていうのは姿形が同じな固体。まあ、双子みたいなものね。ただし、人工的に生み出された生命体だけ』

人工的に生み出された生命体。クレアは必死で理解しようと頭を働かせるが、やはり常識を超えた技術。

そういった分野にはまるで知識のない素人には、到底理解できる問題ではなかった。

だからこそ、レイナも全てを伝えようとは思っていない。彼女自身、理解しきれていないのだから。

『そんなに難しく考えないで。簡単に言えば、一人の人間の体組織の一部を取って、それを人工的に女性に埋め込む。あとは普通に妊娠出産。そうすると、その組織を取った人と瓜二つの人が生まれる。私もよくは分らないの。研究者たちが話しているのを聞いていたくらいだから』

「――つまりは普通の人と変わらないのでは？」

レイナは一瞬目を丸くし、すぐに穏やかな笑みを浮かべた。

『貴女のような人ばかりなら……あの子も苦しまないですんだのかもしれないわ』

「はぁ」

『いいこと、クレアちゃん。例えば貴女の大切な人が亡くなってしまったとするわね。そしたら、貴女はどうする？』

「どうって……悲しみます。それから――」

クレアが途中で口を噤む。レイナの言わんとしていることが理解できたからだ。

「その人の代わりとして……複製人間が作られる。そういうことですか」

そう言うクレアの肩は、震えていた。レイナは悲しそうに笑った。『本当に、貴女は賢い子ね。それに、人の痛みを理解出来る子だわ。アドレー殿……直接お会いすることは出来なかったけれど、きっと素敵な方なのでしょうね。貴女のお母様も』

「え、ええ……人道とか仁義にかけては、人一倍……強くて」

尻すぼみになっていく言葉に、クレアは情けないと自分を責めた。頭の端のちらつく両親の笑い声に、はっきりと言い切ることが出来なかったのだ。

大きく溜息を吐き、頭をぶんぶんと振る。

「すみません。お話の続きを」

『ええ。その技術を知った研究者たちは沸き立ったわ。何せ全く同じ人間が作れる。つまり施力の高い者の複製を大量に作り出せば、それだけで最強の軍隊が完成する』

「シーハーツ最大の欠点である、施術士の少なさ……これも解決します」

『そう。そして、最初の実験体に使われたのが、王家の血筋を引き、高い施力を持った――クレセント』

クレアは首を捻った。額に手を当て、以前自らが作成した血統限界値の資料を思い出す。

「でも、クレセントの血統限界値は確か十六％じゃ……」

『生まれた当初、あの子の血統限界値は六十九％だったわ』

「ろ、ろくじゅ……」

クレアは思わず仰け反りそうになった。王家の血筋を引く者なら決して有り得ない数字ではないが、それでも驚くには十分な数字である。

現女王であり、アペリスの聖女でもあるロメリアですら、血統限界値は五十六％。

近年六十％を超えた施術士はお目にかかれて居ない。王家や貴族の中では。

『勿論、実際には存在しないはずの子、公にはされていないわ』

「確かに……王家の血を引く者なら有り得ない数字ではありません。ですが……」

『過去のデータから見れば、シーハーツ人とアーリグリフ人との混血は著しく施力が下がる傾向にある。ヴァンやアルベルがいい例ね。貴女が言いたいのはそれ？』

クレアは頷いた。そして、次にレイナの口から出るであろうことも予想がついた。

『血統限界値がある程度成長した後、後天的に下がる現象があるそうよ。最も、シーハーツじゃ全くとっていいほど知られてないけ

ど』

「ええ、知っています。以前クレセントが偽者の疑いをかけられた時、とある女性が調べました」

言うまでもない。マリアのことである。レイナは感心したように水の中で手を叩いた。

『へえ。そんな事考え付く子がいたのね』

「クレセントの事を、とても大切思っていました」

カプセルの中のレイナは啞然とし、それから嬉しそうに笑った。

『そう』

クレアはその穏やかな笑みを見つめながら、頭の隅では着々と整理がついていた。

今、全てのピースは揃い、パズルは完成したのだ。

クレセントの血統限界値が下がった理由。それはやはりマリアの予測通りだった。

そして、ヴァンを尾行する直前にセレンから伝えられたクレセントの空白の四年と急変の理由。やはり入れ替わりは行われていた。

しかし、それはグリーテンではなく、クレセントが師団入りする前の空白の四年。

クレセントの入れ替わり、血統限界値の相違。どちらかが間違い、どちらかが正しいと思いつ込んでいたのが失敗だった。

どっちも、正しかった。

そして、シャロム夫妻が殺害された理由も合点がいった。研究の中枢をなしていたシャロム家。

クレセントとヴァンにとっては、さぞや恨むべき相手だったことだろう。

そして……。

「クレセントやヴァンがグリーテンに協力する理由は……あなたの存在ですか？」

そうだとしたら、納得がいく。母を人質に取られ、仕方なしに協力している。

これは半ば確認のような質問。クレアの予想した答えは勿論、肯定。――そのはずだった。

『違うわ』

違った。

クレアは二の句が告げなかった。まさか違うと言われるとは思っても見なかったからだ。

困惑するクレアに、レイナは凜然とした口調で言った。

『ヴァンはおそらくそうでしょうね。でも、クレセントはきつと違うわ』

「それは……どういことですか？」

クレアがやっと搾り出した声で言うと、レイナは後ろを向いた。つられる様に、クレアもそちらに目を向ける。

『あれ、見えるかしら？』

「な――ッ」

暗闇の中、ぼんやりと見えたもの。クレアは思わず駆け出していた。

“それ”の傍により、呆然と見つめる。

「これは！」

『ヴァンもここまでは知らないわ。教えてあげたかったけど、私はヴァンと話をしたことすらないのよ。そればかりか、クレセントとも殆ど』

「どういこと、ですか？」

『ヴァンには一度だけ会ったことがある。ヴァレリアが私を生きていることを確認させるためにね。でも、会話は許されなかった。本物のクレセントは四歳くらいまでは一緒に居られただけど、それからすぐにあの子はシャロムに引き取られ、私はこの中へ入れられたわ』

「なぜ、このような場所に？」

クレアはゆっくりと“それ”から目を離すと、レイナの元へと戻る。レイナは内側から無機質なカプセルを撫でる。

『貴女は知らないと思うけど、これ生命維持装置って言ってね。無理な研究で既にぼろぼろだった私は、これに入ること生き永らえた。水の中でもちゃんと息できるし、何も食べなくても平気』

「えっと……」

『分からないわよね。私も驚いたもの。でも、受け入れるしかなかった。この冷たい容器の中に入れられ、暗いシャロムの地下に閉じ込められても、私は生き続けなきゃならなかった』

クレアの脳裏に、シャロム邸の地下空間にあったカプセルが過ぎった。

レイナが静かに瞳を閉じる。

『クレセントが、ヴァンが、アルベルが生きていたから。グラオも、きっと私には生きろと言うと思ったから』

「……」

『シャロムに引き取られてから、“クレセント”とは一切会わなかったわ。きっと、私は死んだことにされていたのでしょうね。幼かったものの、素直に受け入れたと思うわ』

うつすらと開く瞳。

『それからあの暗い世界で、私は生き続けた。いつか、成長したあの子たちに会える気がしたから』

真紅が滲んで見えるのは、彼女が水の中にいるからだろうか。

そう思ったクレアはすぐに気付いた。滲んでいたのは、自分の視界ほうだと。

『そして年月が過ぎて、私の元に訪れたのはクレセントだった』

言うまでもなく、クローンクレセントのほうである。

『彼女は言ったわ。“クレセント”は死んだ、と。研究の無理が祟ったのかしらね。十四歳だったらしいわ』

「そんな……」

『けど、ヴァレリアはこの事実を隠蔽した。新たなクレセントを送り込むことで』

「それが——今私達の前に居るクレセントなのですわ」

『ええ。確か“クレセント”が四歳の時に生まれたと聞いたから、今年で二十歳のはずよ』

道理で、年齢の割りに幼い外見だ、とクレアは思った。――それでもまだ幼すぎるが。

『クレセントは苦しんだでしょうね。何せ、居場所は“クレセント”のもので、彼女のものではなかった。――悲しい存在よ、複製人間というのは』

レイナは後ろを振り向く。

『そして、そんな彼女だからこそ、あれを憎み、それでも救おうとするのでしょね』

「……クレセントは……こんなものを一人で背負ってきたというのですか」

クレアの瞳から、一筋の涙が落ちる。胸が悲鳴をあげるほど痛かった。

『そう。ヴァンもクレセントが複製人間ということは知らない。私は彼女と話をすることは許されなかった。クレセントは……あの子はこの世に生を受けて二十年間、ずっと一人だったのよ』

「……そんな、ことって……」

『その上、あの子は“クレセント”が生きていた頃、ずっとグリーン本国でヴァレリアによる英才教育を受けさせられてきたわ。愛情など一切ない。見知らぬ土地で、一人傷ついてきた。それが、あの子から感情を奪うきっかけとなったのよ』

レイナの表情は、今にも泣きそうだった。クレアは顔を手で覆った。

『“クレセント”が死んだとき、ヴァレリアはクレセントを替え玉にすることを決めたわ』

「じゃあ、クレセントが人前に姿を現さなかった四年は……」

『“クレセント”という人格を植えつけられていた期間、でしょうね。ただ、感情の欠落だけは直せなかったみたいだけれど』

そんなの当たり前のことだけど、とレイナは吐き捨てる。



クレアも同意した。感情を奪った者が、再び感情を与えることなど出来はしないのだ。

『そして、四年の月日を経て再びクレセント・ラ・シャロムとして完成したあの子は、シーハーツ六師団へ送り込まれた。軍の動向を探るためにね』

「クレセントが特科に入りながら＜風＞を希望したのは、いざとなればグリーテンに入り込み、ヴァレリアと接触するためですか」

入団試験の際、クレセントがその期の試験生の中でトップの成績を取りエリートコースである特科へ入りながら、各師団への入団試験で＜光＞や＜闇＞を選ばずに＜風＞を選んだのは有名な話だった。『そのようね。一時起きたグリーテンの異常なまでの鎖国は、クレセントを戦争で死なせない為だったようだし。そんなこと、＜風＞に入っていないければ不可能だったでしょうから』

レイナは目を閉じ、水の中に力なく体を預けた。身長を軽く越す長い白銀の髪が、水の中で踊っていた。

クレアは瞳に浮かんだ涙を拭った。

そして、胸に手を当てた。自分は、何をすべきなのだろう、と。

クレセントを逃がしたのはヴァンだ。

ヴァンは、何を思ったのだろうか。――死んだと知らされていた母と妹が生きていたと知った時。

クレセントは、何を思っているのだろうか。――一つの命として生まれたのに、彼女に与えられた居場所はなかった。

母と兄を持ちながら、それを呼ぶことは許されない。“クレセント”の影に囚われ、どれほど苦しんだのか。

誰も、ヴァンやクレセントを責めることなど出来はしない。少なくともクレアには、彼らを咎める言葉などありはしなかった。

暫くの沈黙を破ったのは、レイナの驚くほど低い声だった。

『——と、こう言えば満足なのかしら？ ヴアレリア？』

「え？」

クレアは思わず顔を上に向ける。レイナの顔が真っ直ぐに上を向いていたからだ。

暗闇の中、目を凝らせば見えてくる。小さな黒い塊。蜘蛛のような外見をしたそれはまるで生き物のように蠢き、光る両の目でクレアとレイナを映した。

『全く、悪趣味よね。この子が脱走したの知っててわざわざ真実を知らせる時間を作るなんて』

『……ククク、そう言わないで頂たい。そちらのお嬢さんにとって  
は良い勉強となったでしょう』

何処からともなく響く、人の声。おそらくヴァレリアの蠍だろう。  
つまりはあの蜘蛛は機工兵。ずっと見張られていたのだ。

『そうね。でも、これからが本番よ。私はまだこの子に真実を話して  
いないんだから』

『……真実、とは？』

ヴァレリアの声から冗談が消える。

レイナはくるとクレアに向き直ると、

『……………』

「その言葉……………！」

『ふふ、やっぱり頭は良い子みたいね。クレアちゃん、心して聞いて。  
今までの話はクレセントとヴァレリアの話を総合的に纏めたもの。  
でも、真実は少し違うのよ』

『何を言っている！？』

ヴァレリアの声が焦りを含む。レイナの離した言語はヴァレリア  
には通じていないのだろう。

それも無理はない。とうの昔に滅んだ、古代シーフォート言語な  
のだから。

その言語は施術を行使する際の施紋にも深く関係してくるので、  
クレアも多少なりと理解している。それが、今幸いした。

『……………』

「……？」

『……………』

「！！」

レイナが打ち明けた真実。クレアの目が大きく見開かれ、褐色の瞳が悲しみに歪んだ。

『チークレア嬢、お遊びはここまでだ。貴女には一度部屋にお戻り願おう』

ヴァレリアの余裕のない声が響いたと同時に、部屋の扉が粉々に砕けた。

そこから顔を出すのは、人型の機工兵。手には鈍器や火器を持ち、出口を塞ぐように後から数体の機工兵が現れる。

『残念ね、ヴァレリア。お遊び気分でクレアちゃんをこの部屋に招いた貴方の失態よ』

『黙れ。死に底ないが』

『クレアちゃん』

「ええ。必ず伝えます。――そして、あなたも必ず助けに来ます」  
最後にレイナに深く頭を下げると、クレアは部屋の壁に立て掛けてあった1枚の絵を取り払った。

「さようなら、ヴァレリアの蠍卿。また、近いうちに会いましょう」  
『何！？』

そこから現れたのは、ぽっかりと空いた黒い穴。秘密の抜け道だった。

クレアは最後に一度だけレイナを振り返り、穴へ飛び込む。滑り台のようなそれは、ものの数秒でクレアを洋館の外へと送り出した。  
「……良かった。思ってたより少ないわ」

洋館の外には予想通り機工兵は居たが、大型機工兵が四体と、予想よりも遥かに少ない数だった。まさか抜け出されるとは思っていなかったのだろう。完全なヴァレリアの失態である。

クレアは腰に差した刀を抜くと、かたまって三体の機工兵に

向けて雷撃を放った。

二体が完全にショートし、一体の足がもげる。すかさず残りの一体にもダガーを投げつけると、クレアは走り出した。

肩越しに洋館を見る。懐かしい風景。

それは、小さな頃セレンとよく遊んだ秘密の洋館だった。

※

「クレセント、どうして君はグリーテンに従うんだ！ ヴァンがどんな想いで君を助けようとしていたか、君が分からないはずがないだろう！？」

フェイトの叫びが響く。

クレセントは、刻まれた刺青を強く握り、苦しそうに微笑んだ。

「……………」

細い、弱い声だった。きっとその場の誰も聞こえては居ない。その苦しげな表情も。——一番近くに居たフェイト以外は。

「クレセン、ト……」

ヴァンがクレセントを見上げる。苦痛に歪むヴァンの顔。クレセントはすぐに視線を逸らした。

そして、また冷淡な表情を顔に貼り付け、また一步下がる。

「ヴァン……色々と役に立ってくれました。これで私の目的を果たせそうです」

「アンタ、自分の目的の為にヴァンを利用したって言うの！？ アンタを必死で助けようとしたヴァンを！」

「その通りです。ヴァンはただの駒。私たちの計画の為に利用していたに過ぎません。ですが、可哀想な事はしました。本物のクレセントは——とうの昔に死んでいるというのに」

その一言に、ルージュの怒りが頂点に達する。激昂を露にしてダガーを構え、そのまま斬りかかろうとする。

が、

「セレン！ 止めるんじゃないわよ！ コイツだけは許せない！

アイツは……ヴァンはクレアを裏切ってまで！」

セレンが、静かにルージュのダガーを奪い上げた。

ルージュは怒っていて気付かないが、アルベルは眉間に皺を寄せ、その様子を凝視していた。

怒りに身を任せたルージュはさぞ力を籠めてダガーを握っていたことだろう。それをセレンはあっさりと奪い取ったのだ。

セレンはルージュを目で諭すと、ぽんと肩を押した。ルージュはそのままアルベルへと倒れこむ。無造作にそれを受け止めるアルベルがセレンを訝しげに見つめた。

「おい」

「抑えててもらえる？」

「セレン！ なんのつもりよ！」

ルージュは暴れる。その頭には、クレセントに対する憎しみしかないだろう。

セレンが、ルージュに振り向く。

「うるさいよ、ルージュ。怒りで我を見失うなんて、馬鹿のすることだ」

「……っ」

「……」

紫の瞳に、冷酷な蒼い光が宿った。ルージュも、アルベルですら言葉を失った。

セレンがクレセントの方を向くと、クレセントは頭を振った。

「あのままかかってきて頂ければ、脱出するのは容易だったのです

が」

おそらく怒りで剣の鈍ったルージュを人質に取り、脱出する算段だったのだろう。セレンは軽い笑みを浮かべた。

「残念でした。さ、大人しく投降する？ それとも――」

その言葉が終わる前に、クレセントはセフィラを手を取った。セレンは苦笑いを浮かべて肩を竦めた。

「それが答え、ね。でも」

フェイトがクレセントの前に立ちはだかる。

セレンの言葉になんとか落ち着きを取り戻したルージュ、そしてアルベルも各々の武器を構えた。

両の手を広げて、セレンは言う。

「この状況……まさか君一人で突破できるなんて思っていないよね？」

「はい。私一人では無理そうです」

言って、クレセントはおもむろにダガーを四方に投げつける。

「気をつけろ！ 施術がくる！」

予想通り、四方から風の刃がフェイト達に降りそそいだ。

フェイトは咄嗟にセレンとヴァンを抱き上げ、風の刃を避ける。

だが、それが致命的だった。

その隙にクレセントはフェイトの横をすり抜け、セフィラの安置所から飛び出した。そして、そのまま距離を取ろうと走り出すが、

「クレセント！」

息を切らせたネイビスとアゼルが、クレセントの前に立っていた。その後ろには、ルージュが引き連れてきた十数人の師団兵。

ネイビスはクレセントとその手の中にあるセフィラを交互に見つめ、表情を曇らせた。

「クレセント……おまえ、どうして」

クレセントは硬直するネイビスに袖の中に仕込んだ小刀を投げつけようと手を振り上げるが、

「ぐっ！」

胸に激しい痛みを感じ、その場に倒れこんだ。

「クレセント！」

「ネイビス！」

アゼルの静止の声もきかず、ネイビスはクレセントに駆け寄った。心臓を押さえ苦悶するクレセントの体を抱き起こそうとするが、

「！！」

長い袖から手の甲を這う様にして飛び出した短刀が、ネイビスの眼前に突きつけられた。息を乱したクレセントと、ネイビスの目が合う。

クレセントはどうすることも出来ずに困惑するネイビスを突き飛ばし、セフィラを拾った。

肩越しに後ろを見れば、フェイト達が武器を構えていた。

「観念するんだ」

「クレセントさん」

フェイトが近づく。アゼルも警戒しつつ足を進めた。

クレセントは両方から逃れるように横の壁へと下がり、背をつけた。

「クレセント、出来るなら君を傷つけない。だから」

大人しくしてくれ。

そうフェイトが言おうとした正にそのときだった。

「ぐあああああっ！」

フェイトの左手、セフィラ安置所とは反対の位置から誰かの悲鳴が聞こえた。

なにが起こったのか、確かめるまでもない。

漆黒の機体を持つ巨大な狼が、その口に一人の師団兵を咥えていたのである。数本の牙らしきものが刺さっているのだろうか、紅い鮮血がボタボタと大理石を汚した。

「き、機工兵！？」

「まさか——こんなにも堂々と……」

セレンが信じられないと頭を振った。

フェイトは初めて見るその禍々しさに、思わず後ずさる。

「た、助けてくれ！」

鋭い牙に挟まれた師団兵が叫ぶ。だが、助けにいかうとした兵士はいつも簡単にその大きな前足で薙ぎ払われてしまった。

フェイトが、ネイビスが巨大な機工兵に斬りかかろうとするが、

「――やめて」

澄んだ声が響き、フェイトとネイビスはその足を止めた。

振り返れば、いまだ苦しそうに胸を押さえるクレセントが、ふらつく足で機工兵を見ている。

目元は白銀の髪に隠され、見えない。

「離して」

その一言で、機工兵は口を下に向けた。力なく師団兵の身体が床に落下する。数人の施術士が駆け寄り、治療術を唱えた。

誰もがその光景を信じられない思いで見つめていた。

だからこそ、判断が遅れたのだろう。

クレセントは高く跳躍し、機工兵の背に飛び乗った。無論、片手にはセフィラを抱えて。

「しまった！」

「申し訳ありません……私には、為さねばならないことがあります」  
機工兵が駆ける。ネイビスが追おうとするが、とても追いつける速さではなかった。

「くそっ!!」

ネイビスが力任せに大理石を蹴る。その肩をアゼルが掴んだ。

「あれは人の足では追いつけない。一時撤退するんだ。怪我人を病院へ運ばないと……」

「ああ。分かってるよ……」

無事な者が怪我人に肩を貸し、ゆっくりと歩いていく。ヴァンはネイビスが担ぎ、急ぎ足に走り去っていった。

一人、また一人と去っていく中で、フェイトはなかなか動けずに居た。ただただ、クレセントの言葉と時折見せた苦しげな表情が、頭の中を駆け巡る。



「どうしたの？」

セレンが不思議そうにフェイトを見た。

フェイトはセレンを見ることはせず、開けっ放しの扉の向こうに目をやった。

「フェイト様は、残酷です」

「は？」

「あの時、僕がクレセントを問い詰めた時……確かにそう言ったんだ」

一瞬垣間見せた、クレセントの寂しげな表情。

「セレン」

「何？」

「クレセントは、本当はヴァンを助けたんじゃないのかな」

ずっと引つかかっていたのだ。あの口振り。クレセントらしくもなかった。

フェイトはクレセントが投げ捨てた腕輪を拾い、強く握り締めた。  
「まるで、ヴァンは騙されていたただだから悪くない。——そう言ってるみたいに聞こえたんだ」

「……」

「僕の思い過ごしかな……」

「……信じるのは、自由だよ」

「うん、ありがとう」

開け放たれた扉の向こう、主無き台座がぼつんと佇んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2798t/>

---

Star Ocean3 After Story

2011年9月27日03時15分発行